

清水山遺跡

昭和53年度 群馬県立渡良瀬養護学校
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

清水山遺跡 正 誤 表

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|------|------------|--------------------|--------------|
| P9 | 上から 5行目 | 土壙46基 | → 37基 |
| P47 | 下から 5行目 | Ⅱ区で39基計91基 | → Ⅱ区で37基計89基 |
| P81 | 下から11行目 | 述べた ^の 。 | → 述べたい。 |
| P116 | 凹石・多孔石計測表内 | 別図1 | → 81図1 |
| P130 | 下から11行目 | 5本柱 | → 6本柱 |

| | | |
|---------------------|------------------------|------------|
| 資料 98- J.4504 | (財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管 | 01-353 |
| | 平成10年 5月13日 | 326 (9) |

序

昭和54年度から養護学校の設置義務が決定したことに伴い東部地区では笠懸扇状地西の丘陵である新田郡笠懸村大字鹿字清水の地が選ばれ、建設に先行して、埋蔵文化財の発掘調査が行われることとなりました。

扇状地を挟んだ東には日本にも旧石器が存在する事を証明した岩宿遺跡のある琴平山があり国の史跡になって居ます。また西鹿田には縄文草創期の遺跡地もあり、旧石器の時代から付近には連綿と生活が続いていたことが考古学調査によって判明しつつあります。

本遺跡地は笠懸扇状地の要の位置にある鹿田山丘陵上に位置します。調査は昭和53年8月から12月まで実施し、整理事業は57年度に行いました。その結果、縄文時代、弥生時代、平安時代の複合遺跡地であることが判明しました。

発掘調査並びに整理事業実施にあたりご配慮を戴きました群馬県教育委員会並びに関係各位に感謝申し上げるとともに担当者を始めとする作業員一同の労をねぎらいます。

本書が群馬県の原始古代社会究明の資料として、広く県民の皆様に活用されますれば幸甚であります。

昭和60年3月

財団法人

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、群馬県立渡良瀬養護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 事業主体者 群馬県教育委員会
3. 調査主体者 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調査組織および調査期間は次のとおりである。
 - (1) 事務担当 小林起久治、白石保三郎、梅沢重昭、大沢秋良、松本浩一、細野雅男、神保侑史、近藤平志、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏
 - (2) 調査担当
 - ① 発掘担当 能登 健（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）
原 雅信（ 同 上 ）
藤巻幸男（ 同 上 ）
 - ② 整理担当 原 雅信
 - (3) 調査期間
 - ① 発 掘 昭和53年8月24日～昭和53年12月20日
 - ② 整 理 昭和57年4月1日～昭和60年3月4日
5. 調査地区 群馬県新田郡笠懸村大字鹿字清水2811他
6. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行2500分の1「桐生」（第1図）である。
7. 本書に掲載した遺構写真は各調査担当が、遺物写真は佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団写真室）が撮影した。
8. 出土遺物および遺構図面、写真の保管場所は、群馬県埋蔵文化財調査センターにある。
9. 発掘調査作業員は次の通りである。

石川忠三、松井りょう、斉藤泰子、加藤ふく、松村しずえ、松村いわ、中澤芳次、山田茂、奥野計恵、久保千代子、吉田英子、岩上開造、星野三郎、内藤富美子、奥野麻雄、内田 操、内田アキ子、武井きみ子、内田きく子、内田マサ子、神沢せん、並木京子、内田定子、内田正嘉、内田せい子、真下八重子、神沢美佐江、富田益江、内田三重子、中村京子、岡 葉子
10. 本書の作成および資料整理は次の者が行なった。

萩原弘子、藍田久美子、石井弘子、霜田恵子
11. 本書の編集は、原が担当した。
12. 本遺跡名は、笠懸村大字鹿字清水の丘陵上に存在するため、調査時点で清水山と呼称、そのまま遺跡名とした。

凡 例

- 1 遺構図の縮尺は60分の1で統一した。
- 2 遺構図中の方位は、磁北を表示している。
- 3 遺跡全体図は400分の1である。
- 4 遺物実測図の縮尺は次の通りである。

土器は4分の1（実測図）、3分の1（拓本図）とした。

石器は基本的に3分の1とした。

なお、各図中にはスケールを表示してある。

- 5 遺構図および遺物図中におけるスクリーントーンは次のことを示している。

 ローム層
  (土器断面)
  繊維土器

- 6 遺跡地名表に示した台帳Noは、「群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）」群馬県教育委員会（昭和46年）を使用している。
- 7 縄文土器の縄文についての表記は次のように略している。

$$\text{例 } L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\} \rightarrow LR, R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\} \rightarrow RL, R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \end{array} \right\} \rightarrow RL^3, L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right\} \rightarrow LRl^3$$

- 8 II区で検出された土壌について、19号土壌および20号土壌は欠番となっている。

目次

| | | |
|-----|---------------|-----|
| 序 | 言 | |
| 例 | 言 | |
| 凡 | 例 | |
| I | 調査に至る経緯 | 1 |
| II | 遺跡の立地と環境 | 2 |
| | 1. 遺跡の位置 | 2 |
| | 2. 周辺の遺跡 | 2 |
| III | 調査の概要 | 5 |
| | 1. 調査の方法 | 5 |
| | 2. 調査の経過 | 7 |
| IV | 検出された遺構と遺物 | 9 |
| | 1. 縄文時代の遺構と遺物 | 9 |
| | (1) 住居 | 9 |
| | (2) 土壌 | 47 |
| | a. I区の土壌 | 48 |
| | b. II区の土壌 | 64 |
| | (3) 方形竪穴遺構 | 81 |
| | (4) グリッド出土遺物 | 81 |
| | a. 土器 | 81 |
| | b. 獣面把手 | 108 |
| | c. 玦状耳飾 | 109 |
| | d. 石器 | 109 |
| | 2. 弥生時代の遺構と遺物 | 120 |
| | 3. 平安時代の遺構と遺物 | 124 |
| | 4. 風倒木痕 | 129 |
| V | 成果と問題点 | 130 |

挿 図 目 次

| | | | |
|--------|--------------|--------|--------------|
| 第 1 図 | 遺跡分布図 | 第 26 図 | II区 2号住居出土石器 |
| 第 2 図 | トレンチ配置図 | 第 27 図 | II区 3号住居平面図 |
| 第 3 図 | グリッド設定図 | 第 28 図 | II区 3号住居出土土器 |
| 第 4 図 | I区 1号住居平面図 | 第 29 図 | II区 3号住居出土土器 |
| 第 5 図 | I区 1号住居出土土器 | 第 30 図 | II区 3号住居出土土器 |
| 第 6 図 | I区 1号住居出土土器 | 第 31 図 | II区 3号住居出土土器 |
| 第 7 図 | I区 1号住居出土石器 | 第 32 図 | II区 3号住居出土土器 |
| 第 8 図 | I区 2号住居平面図 | 第 33 図 | II区 3号住居出土石器 |
| 第 9 図 | I区 2号住居出土土器 | 第 34 図 | I区土壌(1) |
| 第 10 図 | I区 2号住居出土土器 | 第 35 図 | I区土壌(2) |
| 第 11 図 | I区 2号住居出土土器 | 第 36 図 | I区土壌(3) |
| 第 12 図 | I区 2号住居出土土器 | 第 37 図 | I区土壌(4) |
| 第 13 図 | I区 2号住居出土土器 | 第 38 図 | I区土壌(5) |
| 第 14 図 | I区 2号住居出土石器 | 第 39 図 | I区土壌出土土器 |
| 第 15 図 | I区 2号住居出土石器 | 第 40 図 | I区土壌出土土器 |
| 第 16 図 | I区 2号住居出土石器 | 第 41 図 | I区土壌出土土器 |
| 第 17 図 | I区 3号住居平面図 | 第 42 図 | I区土壌出土土器 |
| 第 18 図 | I区 3号住居出土土器 | 第 43 図 | I区土壌出土土器 |
| 第 19 図 | I区 4号住居平面図 | 第 44 図 | I区土壌出土土器 |
| 第 20 図 | I区 4号住居出土土器 | 第 45 図 | I区土壌出土土器 |
| 第 21 図 | I区 4号住居出土土器 | 第 46 図 | II区土壌(1) |
| 第 22 図 | I区 4号住居出土土器 | 第 47 図 | II区土壌(2) |
| 第 23 図 | II区 2号住居平面図 | 第 48 図 | II区土壌(3) |
| 第 24 図 | II区 2号住居出土土器 | 第 49 図 | II区土壌(4) |
| 第 25 図 | II区 2号住居出土土器 | 第 50 図 | II区土壌出土土器 |

- | | | | |
|--------|-----------|--------|-----------------|
| 第 51 図 | II区土壙出土土器 | 第 76 図 | 第V群土器 |
| 第 52 図 | II区土壙出土土器 | 第 77 図 | 獸面把手 |
| 第 53 図 | II区土壙出土土器 | 第 78 図 | 玦状耳飾 |
| 第 54 図 | II区土壙出土土器 | 第 79 図 | 石鏃 |
| 第 55 図 | II区土壙出土土器 | 第 80 図 | 打製石器 |
| 第 56 図 | 方形竪穴遺構 | 第 81 図 | 凹石 |
| 第 57 図 | 第I群土器 | 第 82 図 | 凹石 |
| 第 58 図 | 第II群土器 | 第 83 図 | 凹石 |
| 第 59 図 | 第II群土器 | 第 84 図 | 凹石 |
| 第 60 図 | 第II群土器 | 第 85 図 | 凹石 |
| 第 61 図 | 第III群土器 | 第 86 図 | 多孔石 |
| 第 62 図 | 第III群土器 | 第 87 図 | 石皿 |
| 第 63 図 | 第III群土器 | 第 88 図 | 石皿 |
| 第 64 図 | 第III群土器 | 第 89 図 | I区弥生時代土壙実測 図 |
| 第 65 図 | 第III群土器 | 第 90 図 | 弥生時代土壙配置図 |
| 第 66 図 | 第III群土器 | 第 91 図 | 弥生土器 |
| 第 67 図 | 第III群土器 | 第 92 図 | II区1号住居平面図 |
| 第 68 図 | 第III群土器 | 第 93 図 | II区1号住居出土土器 |
| 第 69 図 | 第III群土器 | 第 94 図 | 風倒木痕 |
| 第 70 図 | 第III群土器 | 第 95 図 | 風倒木痕 |
| 第 71 図 | 第III群土器 | 第 96 図 | 風倒木痕 |
| 第 72 図 | 第III群土器 | 第 97 図 | 縄文時代前期住居平面 図 |
| 第 73 図 | 第III群土器 | | |
| 第 74 図 | 第IV群土器 | | |
| 第 75 図 | 第IV群土器 | | |

写真図版目次

- | | | | |
|--------|----------------------------------|--------|---|
| P L 1 | 遺跡遠景 調査風景 | P L 19 | II区29号土壙出土土器 |
| P L 2 | I区グリッド調査 II区グリッド調査 | P L 20 | 第I群土器 第II群土器 |
| P L 3 | I区1号住居遺物出土状態 同上住居埋設土器No.2出土状態 | P L 21 | 第III群第1類、第2類、第3類土器 |
| P L 4 | I区2号住居 同上住居埋設土器出土状態 | P L 22 | 第III群第4類、第5類土器 |
| P L 5 | I区3号住居 同上住居土層断面 | P L 23 | 第III群第6類土器 |
| P L 6 | I区4号住居 同上住居炉 | P L 24 | 第IV群土器 第V群土器 |
| P L 7 | II区2号住居 同上住居埋設土器出土状態 | P L 25 | 獸面把手・球状耳飾・石錐・石匙 打製石斧・磨製石斧・石鏃 弥生土器 |
| P L 8 | II区3号住居 同上住居炉 | P L 26 | 石皿・凹石・多孔石 |
| P L 9 | I区土壙 | P L 27 | 弥生時代土壙 |
| P L 10 | I区土壙 | P L 28 | II区1号住居 同上住居カマド |
| P L 11 | I区土壙 | P L 29 | II区1号住居出土土器 |
| P L 12 | I区土壙 | | |
| P L 13 | II区土壙 | | |
| P L 14 | II区土壙 | | |
| P L 15 | I区1号住居出土土器 | | |
| P L 16 | I区1号住居出土土器 I区2号住居出土土器 | | |
| P L 17 | I区2号住居出土土器 | | |
| P L 18 | I区2号住居出土土器 I区4号住居出土土器 | | |

I 調査に至る経緯

昭和54年度からの養護学校設置の義務化にともない、群馬県では東部・西部両養護学校の建設を決定した。東部地区については既設の「しろがね学園」の位置との関係から、交通事情も考慮して笠懸村が候補地として選定され、慎重協議の結果、新田郡笠懸村大字鹿字清水2811他の地点に昭和52年に至り決定した。

当該地区選定の過程において、建設予定敷地内に遺跡の存在することが確認され、この扱いについても県教育委員会文化財保護課を中心として協議を重ねた。その結果、遺跡にかかる部分を最少限にとどめるため、予定地内の北東部に敷地を決定した。

県教育委員会文化財保護課ではこれを受けて、昭和53年7月に遺跡の範囲確認を目的として予備調査を実施した。この調査の結果、予定敷地内に約13000㎡の範囲に遺跡がひろがることが明らかとなった。

この結果にもとづいて県教育委員会は同年7月に発足した財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を調査主体者として、記録保存を前提とした発掘調査を校舎部分を中心に実施することとした。

昭和53年8月24日調査に着手し、同年12月20日に発掘調査を終了した。なお調査の体制は次のとおりである。

- | | |
|--------|---|
| 1、調査主体 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 2、組織 | 調査担当者 能登 健（調査研究員） 原 雅信（ " ） 藤巻幸男（ " ） |
| 3、調査地区 | 新田郡笠懸村大字鹿字清水2811他 |
| 4、調査期間 | 昭和53年8月24日～12月20日 |
| 5、調査面積 | 4500㎡ |

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

大間々扇状地扇頂部から扇中部にかけ位置する笠懸村は、北部に鹿田山をはじめとする丘陵群が連なり、南部は欠水性台地である扇状地面が広がる。笠懸村は新田郡北端部にあたり、西に新里村、東は大間々町と接する。

鹿田山丘陵は八王子丘陵北西端にあたり、標高235m、比高80m以下の比較的なだらかな丘陵性地形を示す。

遺跡は鹿田山丘陵東北端にあたる清水山南麓に立地する。標高は190mで、傾斜は比較的急であり、最大7°前後の勾配をもっている。現況は山林および果樹園、桑園として利用されている。

2 周辺の遺跡

先土器時代

稲荷山および琴平山と連なる丘陵中央部の鞍部斜面に岩宿遺跡が存在する。戦後相沢忠洋により発見され、昭和24年に明治大学考古学研究室、昭和46年には東北大学考古学研究室により調査が実施されている。また、鹿田山丘陵では、稲荷山遺跡、和田遺跡においてポイント、ナイフ形石器等が検出されている。特に和田遺跡では、B・P層をはさむ上下で複数の文化層が確認されて石器等が検出されている。

縄文時代

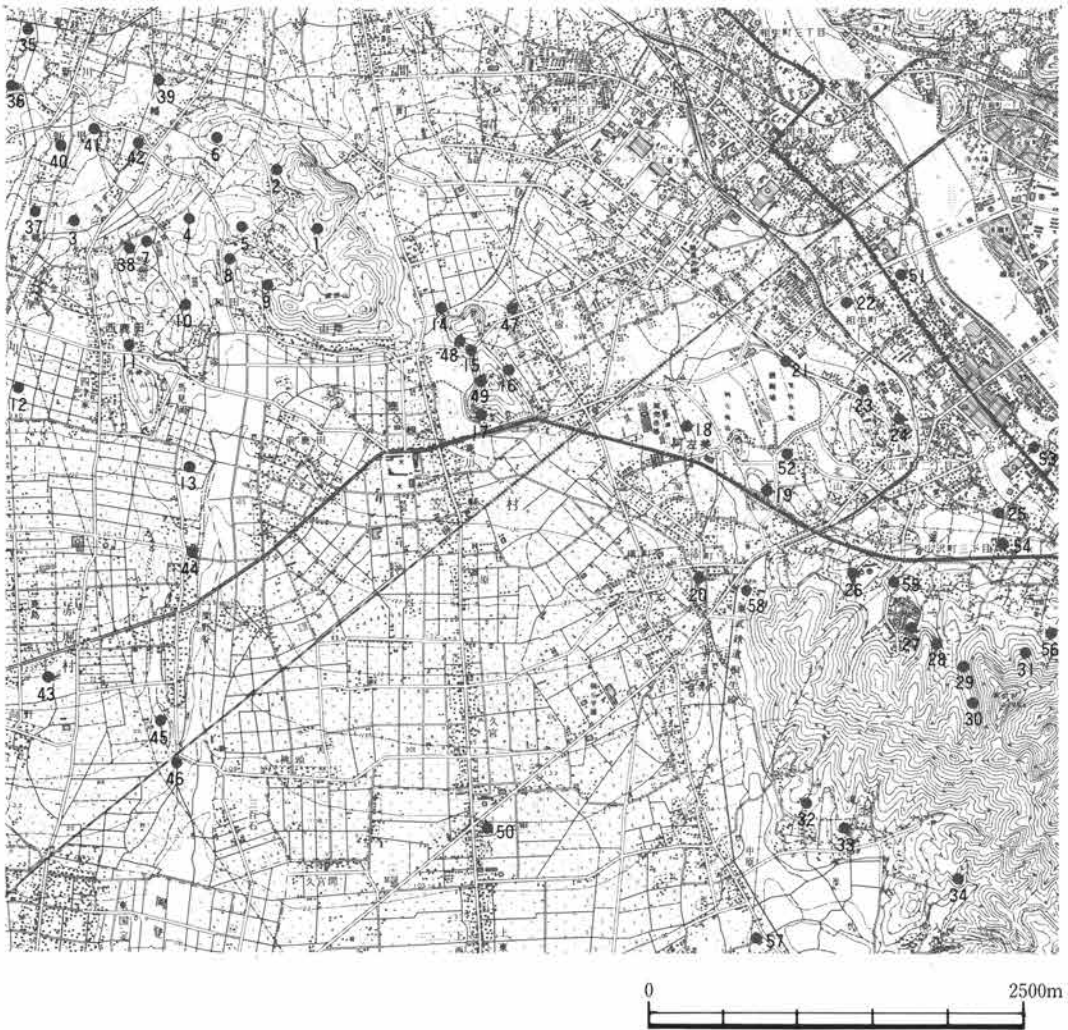
縄文時代の遺跡数は多く、特に鹿田山丘陵をはじめとする台地縁辺に確認されている。鹿田丘陵西側、早川の河岸段丘上には草創期の爪形土器を出土する中島遺跡（西鹿田遺跡）が存在する。鹿田山丘陵には清水山遺跡、稲荷山遺跡、神社裏遺跡など前期黒浜式期から諸磯a・b式期にわたる集落が調査されている。稲荷山遺跡は丘陵最北端に位置し、本遺跡から約800m北西にあたり、住居18軒、土壇80基以上が検出されている。また、東武鉄道桐生線阿左美駅付近には中期後半から後期にわたる阿左美遺跡が存在する。駅構内のプラットホーム拡張工事に伴う調査では敷石住居を含む住居2軒が検出されている。晩期については数が少ないものの早川の河岸段丘上に立地する西原南遺跡などで遺物の散布が認められている。

弥生時代

本遺跡の調査において土壇および土器類を検出している。神社裏遺跡では4軒、和田遺跡では2軒の住居が調査され、鹿の川遺跡においても遺物、遺構が検出されている。

古墳時代

「上毛古墳総覧」では11基が記載されている。調査では、天神山古墳群、長昌寺開山塚古墳等で6世紀代、和田遺跡、天神山古墳群で7世紀代の古墳が確認されている。しかし、この時代の集落については調査例は少なく、不明な部分が多い。



第1図 遺跡分布図

遺跡地名表

| No. | 遺跡名 | 台帳No | 所在地 | 時期 | 種別 |
|-----|--------|------|------------|--------------|-----|
| 1 | 清水山遺跡 | | 新田郡笠懸村鹿字清水 | | 集落 |
| 2 | 清水遺跡 | | 西鹿田字清水 | 黒浜、諸磯、加曾利E | 包蔵池 |
| 3 | 中島遺跡 | 3656 | 西鹿田字中島 | 爪形文黒浜、諸磯 | " |
| 4 | 向山遺跡 | 3659 | 西鹿田字峯 | 縄文早期、前期 | " |
| 5 | 清水西岡遺跡 | 3664 | 鹿字清水 | 縄文早期～後期、加曾利E | " |

II 遺跡の立地と環境

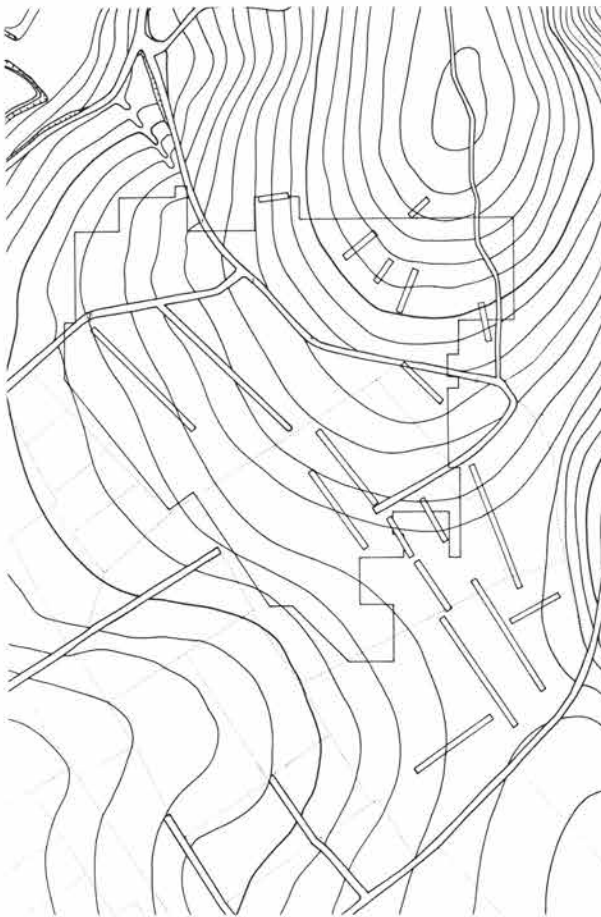
| No. | 遺跡名 | 台帳No. | 所在地 | 時期 | 種別 |
|-----|--------------|-------|--|---------------|---------|
| 6 | 稲荷山遺跡 | 3665 | 新田郡笠懸村西鹿田字稲荷山 ¹²³⁶⁻¹ ₋₁₂₃₅ | | 包蔵池 |
| 7 | 神社裏遺跡 | 3662 | " 西鹿田字向山 | 縄文、弥生 | 住居址 |
| 8 | 清水北口遺跡 | | " 鹿字北口 | 黒浜 | 包蔵池 |
| 9 | 清泉寺裏遺跡 | 3666 | " " | 縄文早期～後期 | " |
| 10 | 和田遺跡 | | " 西鹿田字和田 | 先土器～縄文前期弥生古墳 | " |
| 11 | 防外戸遺跡 | | " 西鹿田字防外戸 | 縄文前期 | " |
| 12 | 西原南遺跡 | 3657 | " 西鹿田字西原 | 早期～晩期 | 住居址 |
| 13 | 馬見岡遺跡 | 3661 | " 西鹿田字馬見岡 | 前期～後期 | 包蔵池 |
| 14 | 堀上遺跡 | | " 阿左美字堀上 | 中期～後期 | " |
| 15 | 岩宿遺跡 | 3649 | " 阿左美字沢田 | 先土器、縄文早期 | " |
| 16 | 三峯山遺跡 | 3653 | " 阿左美字岩宿 | 早期～晩期 | " |
| 17 | 寺山遺跡 | 3681 | " 阿左美字沢田 | 早期～晩期 | " |
| 18 | 谷端遺跡 | | " 阿左美字谷端 | 前期黒浜 | " |
| 19 | 北山遺跡 | 3651 | " 阿左美字仲 | 先土器、縄文早期～後期 | " |
| 20 | 阿左美遺跡 | 3654 | " " | 中期 | 敷石住居 |
| 21 | 阿左美沼北遺跡 | | " 阿左美字谷端 | 縄文中期～後期 | 包蔵池 |
| 22 | 足仲遺跡 | 725 | 桐生市相生町1丁目見如来堂 | 縄文中期～晩期 | 土器、石器 |
| 23 | 北遺跡 | 703 | 新田郡笠懸村阿左美字北 | 縄文 | 細石刃核 |
| 24 | 阿左美沼東方遺跡(仮称) | 704 | 桐生市広沢町2丁目3084番地 | 縄文 | 土師器片 |
| 25 | 中里遺跡 | | " 2丁目中里 | 縄文弥生、土師器 | 包蔵池 |
| 26 | 神明山遺跡 | 708 | " 3丁目宮ノ上 | 先土器、縄文、弥生 | " |
| 27 | 岡の上遺跡 | 710 | " 3丁目岡ノ上 | 先土器～土師期 | " |
| 28 | 古庭第1遺跡(仮称) | 712 | " 3丁目古庭甲4341他 | 前期中心に土師器片 | " |
| 29 | 古庭第2遺跡(仮称) | 711 | " 3丁目古庭甲3902他 | | 縄文土器土師器 |
| 30 | 一木遺跡 | | " 3丁目古庭3913他 | | " |
| 31 | 茶臼山北麓遺跡(仮称) | 714 | " 3丁目字寄居 | | 縄文、土師器 |
| 32 | つつじ山遺跡 | 3633 | 新田郡藪塚本町藪塚字台山 | 先土器、縄文 | 竪穴住居址 |
| 33 | 台東遺跡(仮称) | 3645 | " 字台東 | 前期 | 包蔵池 |
| 34 | 諏訪山遺跡 | 3635 | " 字滝ノ山入東 | 縄文 | " |
| 35 | 元宿遺跡 | 2324 | 勢多郡新里村大字新川字元宿1992 | 先土器 | 包蔵地 |
| 36 | 宮の下遺跡 | 2325 | " 字新宮1436、1435 | 縄文 | 住居跡 |
| 37 | 間野谷稲庵寺 | 3367 | 佐波郡赤堀村大字香林上1121、1122 | 縄文、古墳 | 住居跡 |
| 38 | 向山第3遺跡 | 3658 | 新田郡笠懸村西鹿田字和田1419-1他 | 縄文 | 包蔵地 |
| 39 | 八幡遺跡 | 2320 | 勢多郡新里村新川字八幡 | 縄文、古墳 | 集落址 |
| 40 | 磯沼南遺跡 | 2317 | " 新川字磯273他 | 縄文 | 住居址 |
| 41 | 大屋遺跡 | 2319 | " 新川字大屋 | 縄文、弥生、古墳 | 集落、住居址 |
| 42 | 東部遺跡 | 2316 | " 新川字前田 | 縄文 | " " |
| 43 | —— | 3355 | 佐波郡赤堀村大字鹿島1071、1072、1073 | 縄文、古墳 | 住居跡 |
| 44 | —— | 3364 | " 大字間野谷308、302 | " " | " |
| 45 | —— | 3362 | " 大字間野谷852 | 先土器 | 包蔵地 |
| 46 | —— | 3360 | " 大字間野谷二本松807 | " | " |
| 47 | 岩宿第2遺跡 | 3650 | 新田郡笠懸村大字阿左美2397-1 | " | " |
| 48 | 稲荷山遺跡 | 3655 | " 阿左美字沢田1783 | 縄文 | " |
| 49 | 寺山遺跡 | 3663 | " 阿左美字沢田1598-2、3 | " | " |
| 50 | —— | 3647 | 藪塚本町大字大原割次1107-1 | " | " |
| 51 | —— | 724 | 桐生市相生町1丁目見如来堂138 | 縄文、古墳 | " |
| 52 | 北山遺跡 | 3651 | 新田郡笠懸村阿左美字北3228～3232-1 | 縄文 | 包蔵地、集落跡 |
| 53 | 柿塚遺跡 | 756 | 桐生市広沢町1丁目藤生2785-1 | 古墳 | 墳墓 |
| 54 | 赤城神社前遺跡 | 717 | " 3丁目赤城 | 縄文、弥生、古墳奈良、平安 | 包蔵地、集落跡 |
| 55 | —— | 709 | " 3丁目岡ノ上3970 | 縄文、古墳 | 包蔵地 |
| 56 | 広沢町寄居遺跡 | 715 | " 3丁目坂本3519～3529-1 | 縄文、古墳、奈良、平安 | " |
| 57 | 岩崎遺跡 | 3634 | 新田郡藪塚本町大字藪塚3283 | 縄文 | " |
| 58 | 阿左美縄文文化住居跡 | 3652 | " 笠懸村阿左美字仲1035-7 | " | 住居跡 |

III 調査の概要

1 調査の方法

調査対象地は、丘陵の頂部に近く、現況では山林が大半を占めていた。調査前にすでに遺物散布が認められ縄文時代を主とした遺跡であることが確認された。

まず予備調査を実施し、土層状態、遺物および遺構のあり方等についての情報を得た。予備調査は試掘トレンチを地形に沿って設定し、建設用地全域にわたり行なった。予備調査により包含層から縄文時代前期を主とした遺物類が多数出土し、さらにその下のローム層上面において遺構が検出された。この結果、発掘調査について次のような方法をとることとした。調査区は大きくⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区に分割し、グリッドは1区画3×3mとする。まず包含層の調査から着手し、遺物類の検出および遺構の検出も行う。なお包含層の調査に際しては1グリッドにつき1×2.5mのトレンチ調査とする。グリッドの設定は、南北方向にアルファベット、東西方向に数字を配置し、各々北方向にA、B、C…、東方向に1、2、3…と進行する。なお、Ⅰ区～Ⅲ区についてグリッド基線は統一するが、アルファベット数字の配置は各区毎に異なる。検出された遺構の番号も各



第2図 トレンチ配置図

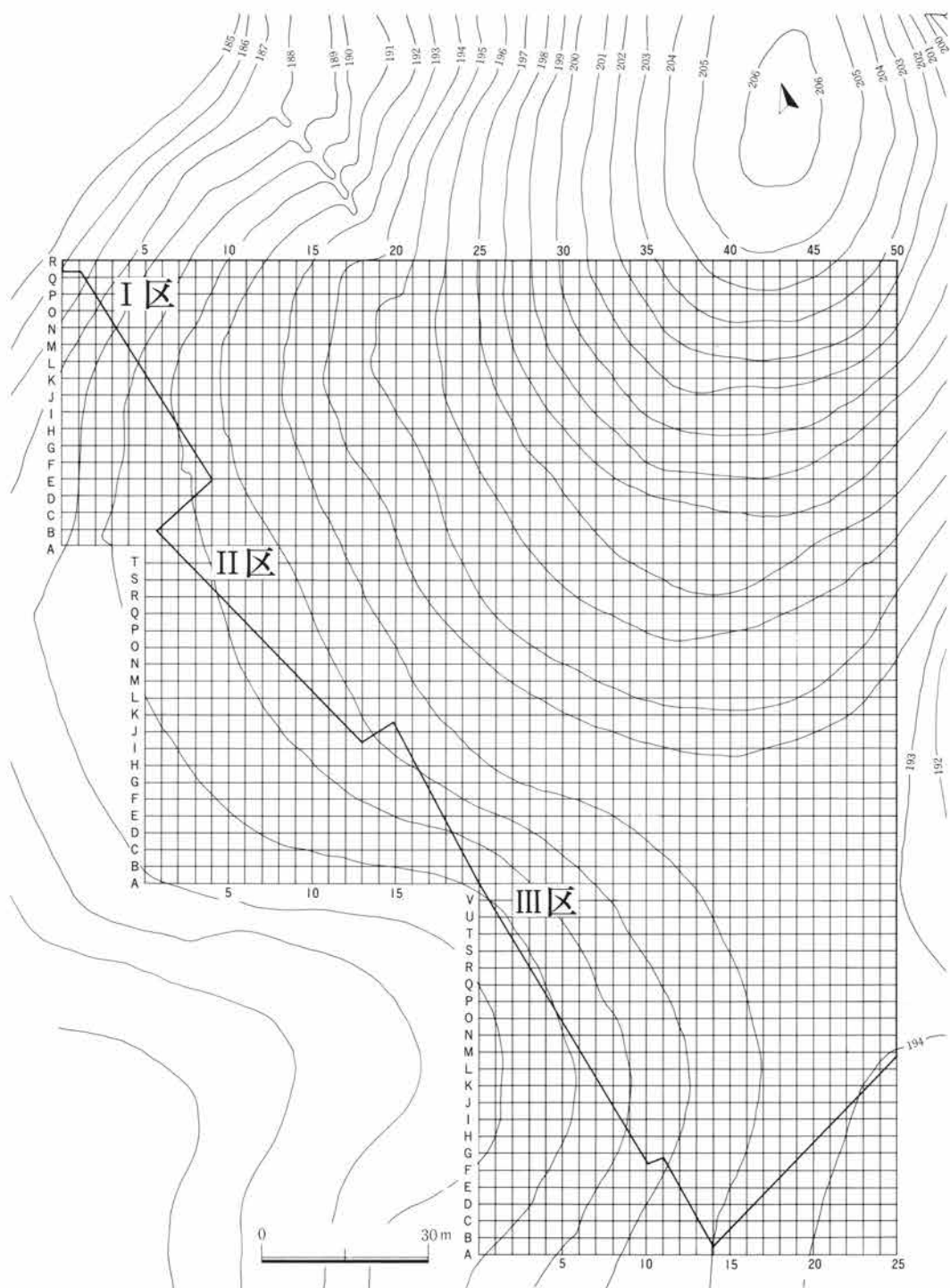
区毎の番号をつける。調査は工事工程との関連も考えあわせ、校舎部分にあたるⅠ区より開始する。

遺構の調査については、実測は断面図、平面図とも縮尺20分の1を基本とする。なお、住居の炉もしくはカマドについては縮尺10分の1とする。遺構写真は調査担当が適宜行うものとし、モノクロは6×4.5版プロニーサイズおよび35ミリ版、リバーサルは35ミリ版を各々使用する。

グリッド調査により包含層の調査を終了した部分は引き続き遺構確認を行う。さらにその後重機にて表土掘削を行い、調査対象範囲全面にわたり遺構検出、調査を実施する。

なお、グリッドの呼称は南東隅を原点とし、Ⅰ区A-1Gとする。

III 調査の概要



第3図 グリッド設定図

2 調査の経過

本格的な発掘調査は昭和53年9月4日より着手し、同年12月15日に現場作業は終了し、同20日までに全ての撤収等が完了した。

調査はI区から開始し、調査終了部分については随時建設工事が実施され、調査計画と工事工程の関係はかなり困難な局面もあった。

○調査日誌抄録

- 9月4日(月) 晴。調査事務所内整備。周辺整地、グリッド杭打ち等を行う。
- 6日(水) 晴。グリッド設定を行う。
- 7日(木) 晴。I区調査へ向け整地及び除草等を行う。
- 8日(金) 晴。I区グリッド調査開始。東側より着手する。
- 11日(月)～13日(水) 雨天のため発掘作業休止。
- 14日(水) 曇。I区グリッド調査。遺構検出作業を行う。
- 18日(月) 晴。I区グリッド調査。遺構検出作業、土壌等確認する。
- 19日(火) 晴。調査継続。遺物は諸磯a式およびb式土器が多数出土する。
- 20日(水) 晴。調査継続。本日までに土壌50基確認する。
- 22日(金) 晴。I区1号住居調査。土壌調査。グリッド調査継続。
- 25日(月) 晴。調査継続。
- 26日(火) 晴。調査継続。
- 27日(水) 晴。調査継続。
- 10月2日(月) 晴。I区1号住居埋設土器取り上げ。グリッド調査継続。
- 3日(火) 晴。調査継続。
- 9日(月) 晴。I区グリッド調査継続。遺物の出土に応じて拡張調査を行う。
- 12日(木) 晴。調査継続。
- 13日(金) 晴。I区2号住居調査。土壌調査。
- 16日(月) 晴。調査継続。調査終了部分について一部工事へ明け渡し。
- 17日(火) 晴。調査継続。
- 18日(水) 晴。調査継続。
- 19日(木) 晴。調査継続。
- 20日(金) 晴。調査継続。
- 23日(月) 晴。I区西側グリッド調査。
- 24日(火) 晴。調査継続。
- 25日(水) 晴。II区グリッド調査。
- 26日(木) 晴。II区グリッド調査。I区土壌実測図作成。
- 27日(金) 曇/雨。II区グリッド調査。I区土壌実測図作成。午後降雨のため室内作業。

III 調査の概要

- 30日（月） 晴。I区土壌実測図作成。II区グリッド調査。
- 31日（火） 晴。調査継続。
- 11月1日（水） 晴。調査継続。
- 2日（木） 晴／曇。調査継続。
- 6日（月） 晴。調査継続。
- 7日（火） 晴。調査継続。
- 8日（水） 晴。調査継続。
- 9日（木） 晴。II区1号住居調査。
- 10日（金） 晴。調査継続。
- 14日（火） 曇。調査継続。
- 15日（水） 曇／雨。調査継続。午後降雨。
- 16日（木） 晴。II区2号住居調査。
- 17日（金） 曇／雨。調査継続。午後降雨のため室内作業とする。
- 20日（月） 晴。調査継続。
- 21日（火） 晴。調査継続。
- 22日（水） 晴。調査継続。
- 24日（金） 晴。I区4号住居調査。
- 28日（火） 晴。調査継続、遺構検出作業。
- 29日（水） 晴。調査継続。
- 30日（木） 晴。調査継続。II区土壌調査。
- 2月1日（金） 晴。調査継続。 " 。
- 4日（月） 晴。調査継続。 " 。
- 5日（火） 晴。調査継続。 " 。
- 6日（水） 晴。I区土壌調査終了。II区3号住居調査。II区土壌調査。
- 7日（木） 晴。I区調査終了。II区調査継続。I区工事側へ明け渡し。
- 8日（金） 晴。調査継続。
- 11日（月） 晴。調査継続。
- 12日（火） 晴。調査継続。
- 13日（水） 晴。調査継続。
- 14日（木） 晴。II区土壌調査終了。
- 15日（金） 晴。調査継続。
- 16日（土） 晴。現場撤収。
- 18日（月） 晴。出土遺物洗浄。調査用器材撤収。
- 20日（水） 晴。調査用器材、遺物、図面等全物品を事業団本部へ引き上げ。調査完了。

IV 検出された遺構と遺物

今回の調査は、III章で述べたように調査範囲を便宜的にI区～III区に区分し実施している。検出された遺構および遺物は縄文時代前期を中心としたもので、I区では住居4軒（内1軒は縄文時代中期）土壙52基、II区では住居3軒（内1軒は平安時代）土壙46基、方形竪穴遺構1基が確認された。なお、風倒木痕がI区で4ヶ所、II区で3ヶ所、III区で1ヶ所検出されている。

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居

縄文時代の住居は計6軒確認された。住居相互の切り合いはなく比較的良好な状態で検出された。時期は前期が5軒、中期が1軒であり、各住居は南西斜面に構築され、ローム層上面において確認された。

I区1号住居（第4図）

位置 A・B-28・29グリッドに位置する。

平面形 長軸6.2m、短軸4.9mの長方形プランを呈するが、各コーナーは丸味をもち、また各辺もやや湾曲さみでふくらみをもつ。床面積は26.2㎡を測る。

壁 ほぼ垂直に立ち上る。壁高はローム面が西側へ傾斜しているため西壁部はその痕跡が確認できる程度であるが、北および東壁部は20cmである。

床 床は硬く良好でほぼ水平であるが、面はやや起伏をもっている。住居中央部は、本址が風倒木痕上に構築されていることからロームを主体とした貼り床になっている。

柱穴 計5本確認された。東側列に3本（Pit 2, 3, 4）、西側列に2本（Pit 1, 5）であるが、住居南壁中央部が攪乱をうけているため本来存在していると思われる西側列南端部の柱穴は不明である。東側列と西側列は平行関係にあり、規則的に配置されるが、両列の柱穴間は垂直に交差せず、柱穴全体の配置は平行四辺形状を呈している。なお、各柱穴間の距離は次のとおりである。

Pit 1—Pit 5・Pit 2—Pit 3 310cm、Pit 3—Pit 4 180cm、

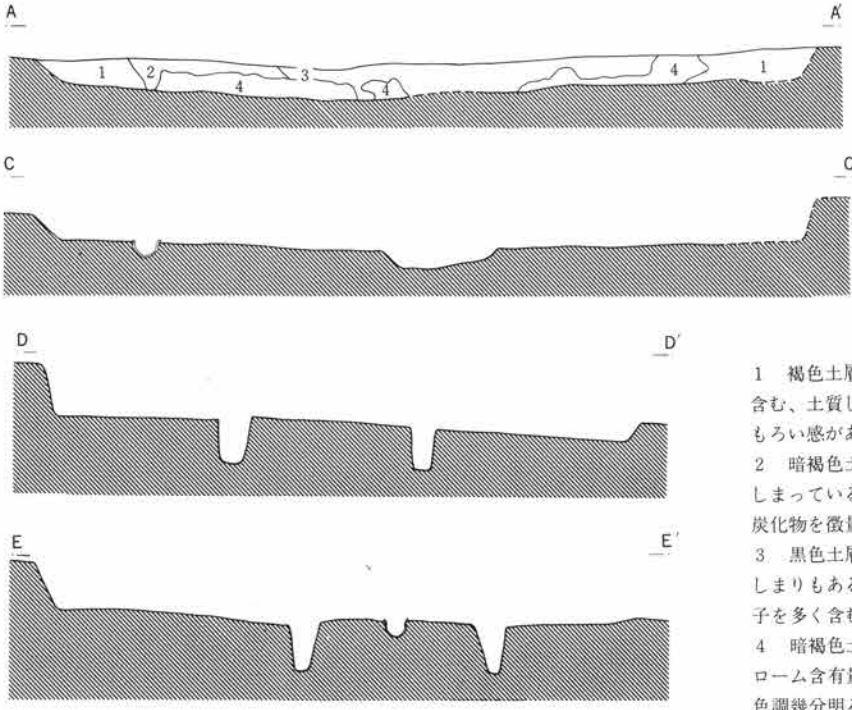
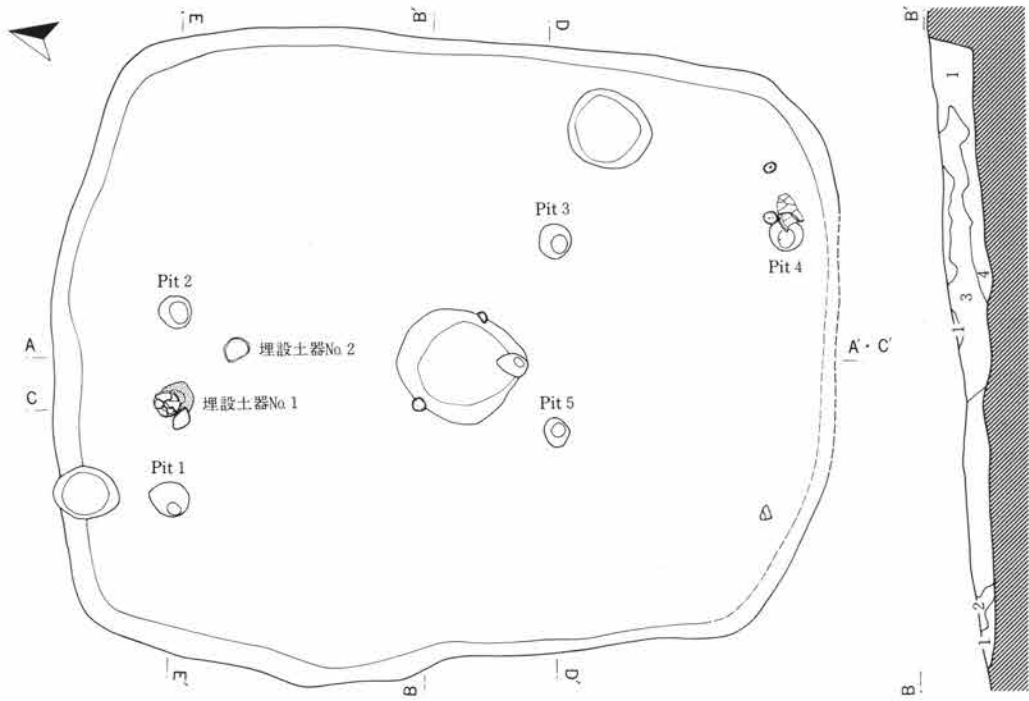
Pit 1—Pit 2・Pit 3—Pit 5 150cm。

炉 北側に偏在し、Pit 1—2を結ぶ直線上の中央部に位置する。炉は径30cm、深さ15cmの掘り方もち、その中に埋設土器No.1が設置される。埋設土器口縁部および掘り方縁辺は2次焼成により焼けている。また住居中央部に径95cm、深さ15cmの浅い皿状の掘り込みがあり、壁および底面とも焼けた痕跡は認められないものの埋土中に少量ながら焼土を含んでいる。

周溝 認められない。

その他 埋設土器No.1から南東方向約60cmの位置に埋設土器No.2（第5図1）が床面直下におい

IV 検出された遺構と遺物



- 1 褐色土層 ロームを多く含む、土質しまっているが、もろい感がある。
- 2 暗褐色土層 土質比較的しまっているが粘性乏しい、炭化物を微量含む。
- 3 黒色土層 若干粘性有ししまりもある。又、白色微粒子を多く含む。
- 4 暗褐色土層 2層に比しローム含有量が多く、その為色調幾分明るい、土質は2層と略同様であるが、ロームのブロックが少量含まれる。



第4図 I区1号住居平面図

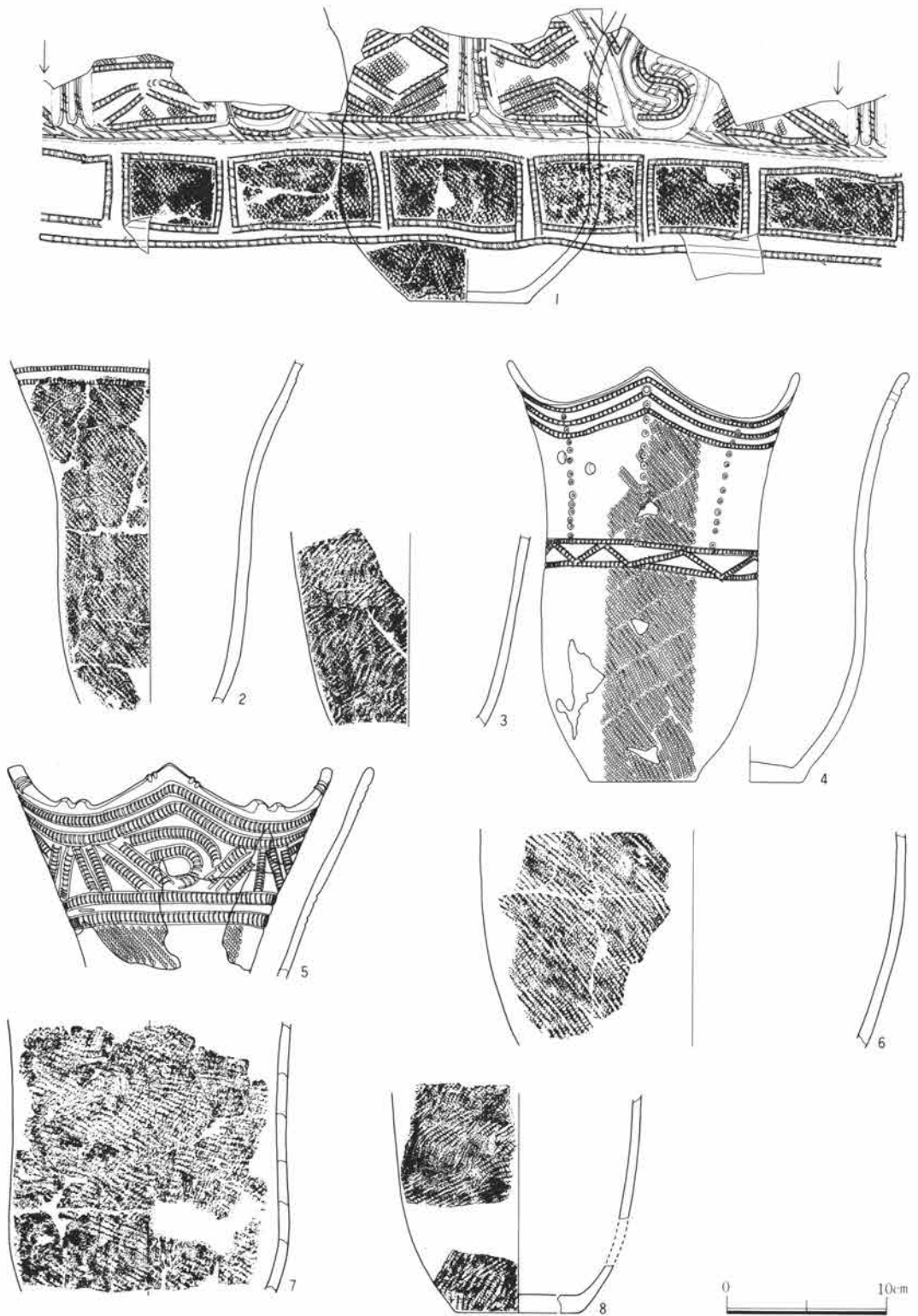
て検出された。この土器は口縁部および底部を欠損し、器面は2次焼成をうけ、また器内埋土中には焼土を混入している。

I区1号住居出土土器（第5図・第6図）

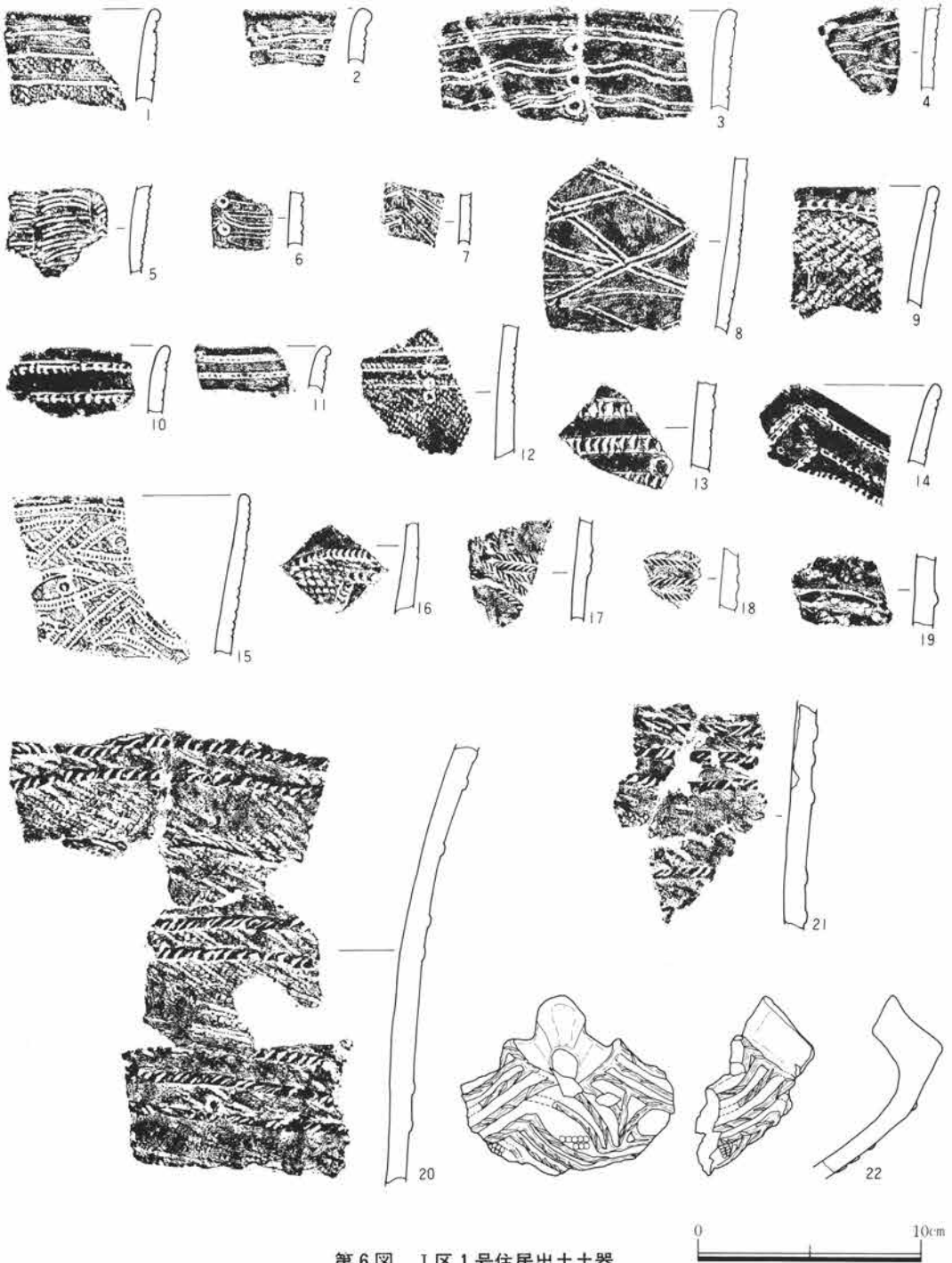
第5図1（埋設土器No.2）は、胴部が球状にふくらみ頸部はやや括れながら口縁部に向って外反する深鉢形土器である。口縁部は欠損する。文様は頸部に刻目をもつ隆線が巡り、口縁部に同様の隆線により区画文および曲線文が施され、この区画内に連続爪形文による鋸歯状文がくり返し施文され菱形の構成をとっている。また隆線文の両側に部分的に1指幅のナゾリが行なわれている。胴部には、連続爪形文による方形の区画文が6単位施され、各単位間は磨消縄文となっている。その下位には連続爪形文が1条巡り以下縄文となる。縄文はRL横位が施される。また器上半から口縁部にかけて二次焼成をうけている。同図2（埋設土器No.1）は、胴部から口縁部にかけて外反ぎみに開く深鉢形土器である。口縁部および底部は欠損する。文様は連続爪形文が2条巡る他、上部が欠損するため文様構成は不明である。縄文はRLR³横位が施される。同図3は、床に接して出土した深鉢形土器の胴部片である。器面にはRL横位が施される。施文は粗く条走向は不規則となっている。同図4は、Pit 4に接した床面から出土した波状口縁の深鉢形土器である。胴部の一部を欠損するがほぼ完形である。波状口縁は4単位であり、波頂部直下には円文が穿たれる。文様は口縁に沿って連続爪形文を3条巡らせ、胴部には連続爪形文により区画された磨消縄文帯に山形状連続爪形文を配し、その間に波頂部および波底部から円形竹管文を垂下させ、口縁部文様帯を構成する。縄文は器全面にRL横位が施されるが、連続爪形文の配される部分は磨消縄文となっている。縄文原体はよく撚られ、節も整然としているが施文方位がやや不整の部分がある。また結節回転も認められる。同図5は、覆土中より出土した波状口縁の深鉢形土器であり、胴部以下を欠損する。また波頂部両側には刻目もち、波底部には2個1単位の小突起が付される。口縁部文様帯は2条1単位の幅広の連続爪形文により表出され、連鎖状爪形文が構成される。以下はよく撚られた細かいRL横位が施される。同図6は、床に接して出土した胴部片である。器面にはRL横位が施される。原体、施文とも良好である。同図7は、床に接して出土した深鉢形土器の胴部である。器面にRL横位が施されるが施文はやや不整で条走向が不規則であり、また節も一定せず不安定である。同図8は、覆土中より出土した底部片である。LR横位が施されるが、施文はあまり良好ではなく、条走向は不整である。

第6図1、2は横走線文を施す口縁部片である。1は半截竹管による平行線文であるが、一方の線が強く施文され、もう一方の側が浅い施文となっている。縄文はRL横位が用いられる。3、4は半截竹管による波状文が施される。3はゆるやかな波状文が加えられ、円形竹管文列が縦位に配される。4は平行線によるやや不規則な波状文もしくは弧状文が施される。5～7は肋骨文を施すものである。5は3本1単位による櫛歯状工具による弧状文を組み合わせる。弧状文の幅は短い。6は半截竹管による平行線文が施され、横走および弧状文の組み合わせで肋骨文を構成する。また、文様の交差部には円形竹管文列を縦位に配する。7は半截竹管を使用し、斜行線

IV 検出された遺構と遺物



第5図 I区1号住居出土土器



第6図 I区1号住居出土土器

文より肋骨文を構成する。文様の交差部には平行線文を垂下させる。8は半截竹管による斜行線文を組み合わせ、やや不規則な格子状文を施す。9～16は連続爪形文により文様を施すものである。9は口縁部に沿って連続爪形文が1条巡り、以下LR³横位の縄文を施文する。10、13はやや

IV 検出された遺構と遺物



第7図 I区1号住居出土石器

幅広の連続爪形文である。11は口縁部に沿って連続爪形文が巡る。12は胴部片で、RL³横位の縄文の上に連続爪形文を施し、円形竹管列を配す。14は波状口縁に沿って連続爪形文が施される。15、16は木葉状入組文が施される。15はRL横位が器全面に施され、16は区画文内に縄文が認められる。15には区画文内に円形竹管文が付される。17～22は浮線文土器である。19以外はいずれも浮線文に刻目を施す。19、21にはRL横位の縄文が施文される。22は獣面把手であり、波状口縁のキャリパー状を呈する深鉢であろう。獣面は頭部については作出するが、目、口および鼻については省略されている。器面にはRL横位が施文され、その上に刻目をもつ浮線文が加えられる。第7図1は打製石斧であり、器体全面に調整加工を施す。2、3は凹石である。2は片面に、3は両面に集合打痕による凹穴が複数認められる。

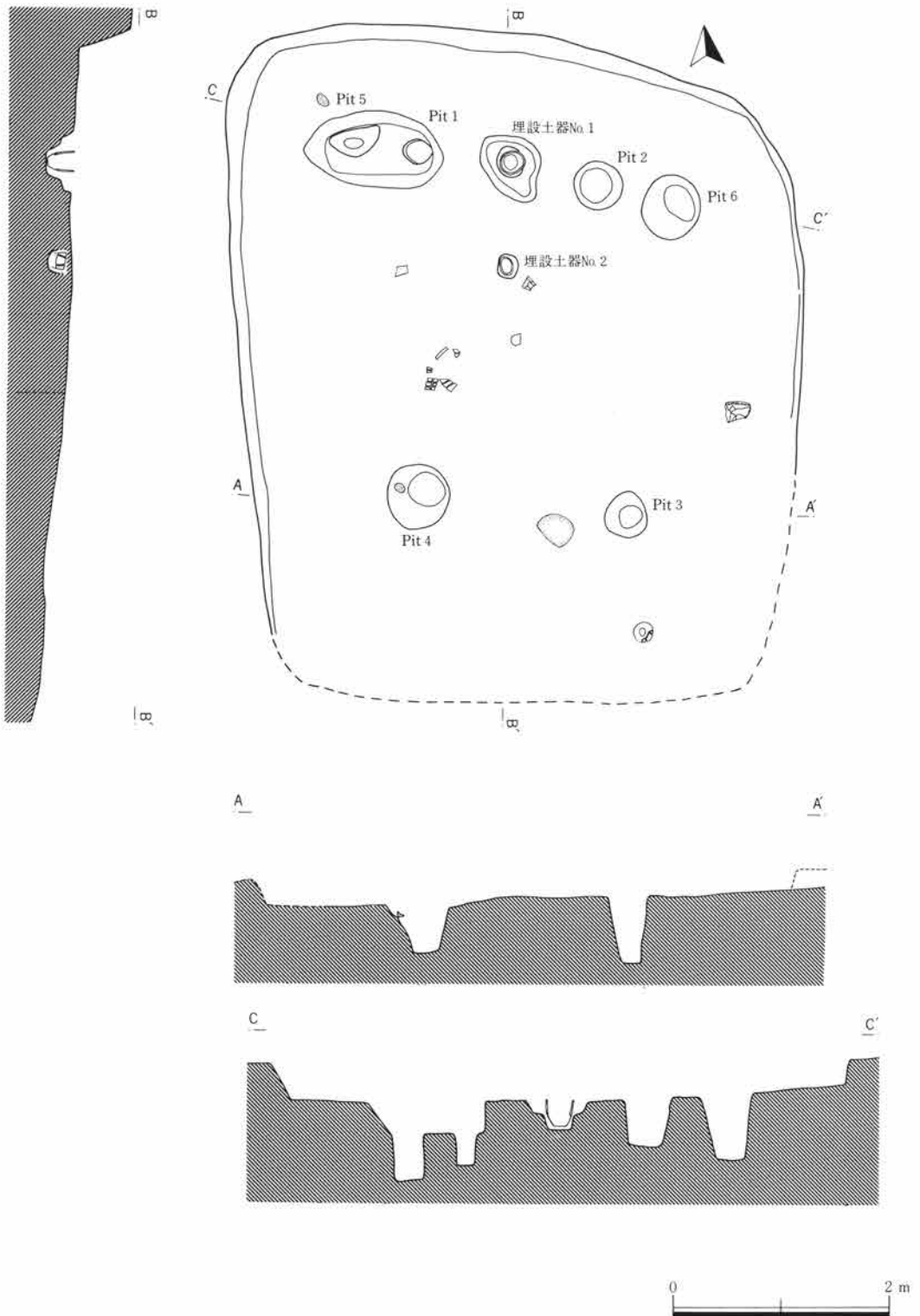
I区2号住居（第8図）

- 位置** 南西斜面に立地し、G・H・I—38・39・40グリッドに位置する。
- 平面形** 住居南半部（斜面下方部）が壁・床とも消失しているため、その詳細は知り得ないが、住居北半部の形状および柱穴、炉の配置等について1号住居と類似する点が認められ、このことから推定すると長軸6.6m、短軸5.2mを測る隅丸の長方形プランを呈すると考えられる。床面積は27.3㎡（推定値）である。
- 壁** 壁高は北壁部で35cmを測るが、南半部は上記の通り不明である。
- 床** 北半部では、ローム層中に構築された硬く良好な床面が認められたが、南半部では確認されなかった。
- 柱穴** 計6本確認された。各柱穴は規則的に配置されるが、炉の位置との関係からすると主柱穴はPit 1・2・3・4と考えられる。この柱穴を結ぶとPit 1—4とPit 2—3間は平行関係となるが、両者は垂直に交差せず全体の配置は平行四辺形を呈している。これはI区1号住居における柱穴の配置と類似し、なおかつ両者を照合すると全く同様の構造を示している。またPit 5、Pit 6は、Pit 1、Pit 2および炉と一直線上に並び、その間隔も規則的に配置されている。なお各柱穴間の距離は次のとおりである。
- Pit 1—Pit 2・Pit 3—Pit 4 170cm、Pit 2—Pit 3・Pit 1—Pit 4 310cm、Pit 1—Pit 5・Pit 2—Pit 6 55cm
- 炉** 住居北側に偏在し、Pit 1およびPit 2を結ぶ直線上の中央部に位置する。炉体には埋設土器No.1（第9図4）が設置される。掘り方は2段構造をとり、長径70cm、短径50cmの不整楕円形プランの掘り方底部に30cmの円形の掘り方がみられ、深さは25cmを測る。また埋設土器は、口縁部、底部とも欠損し、内部には焼土が含まれるとともに、掘り方壁面の一部も焼けた痕跡が認められる。
- 周溝** 認められない。
- その他** 炉（埋設土器No.1）から南へ80cmの位置に埋設土器No.2（第9図1）が床面下に設置されている。これは径20cm、深さ25cm（床面から）の掘り方をもち、その中に口縁部および底部を欠損する土器を設置した後、ロームにより床面を施している。

I区2号住居出土土器（第9図・第16図）

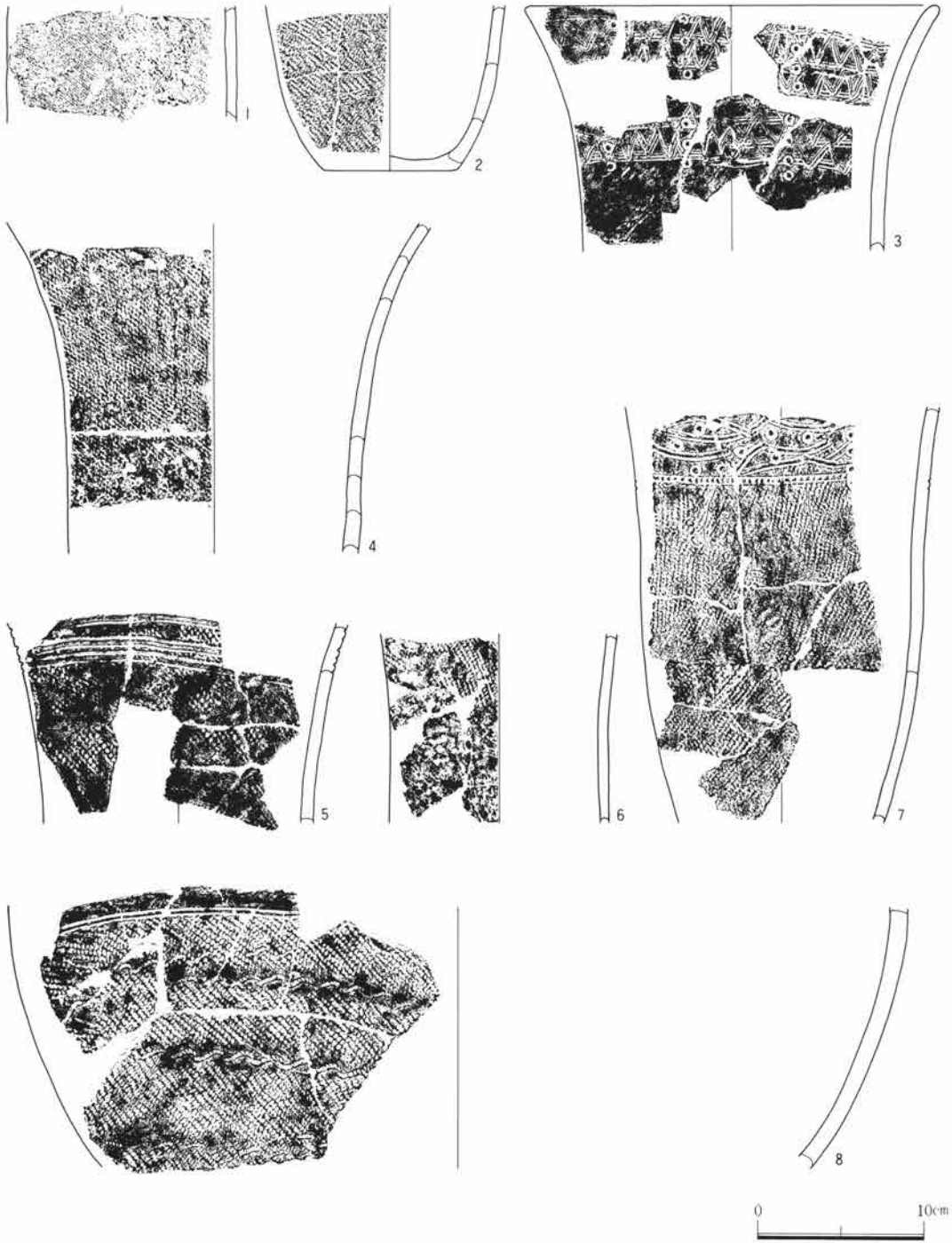
第9図1（埋設土器No.2）は、胴部のみで口縁部および胴下半を欠損する。器体は2次焼成を受け、器面には細緻なRL横位が施される。同図2は、覆土下部より出土した底部片である。器面には細緻なRLR³横位が施される。同図3は、口縁が外反ぎみに開く平縁の深鉢形土器であり、胴部以下を欠損する。口縁部に3本1単位の櫛歯状工具による横走線文および波状文がくり返し施され、円形竹管文が縦列し文様帯が構成される。縄文は認められない。同図4（埋設土器No.1）は、口縁部に向って外反ぎみに開く深鉢形土器であり、口縁部および底部を欠損する。器体は2次焼成を受け脆くなっている。器面にはRLR³横位が施される。縄文原体は細くよく撚られている

IV 検出された遺構と遺物



第8図 I区2号住居平面図

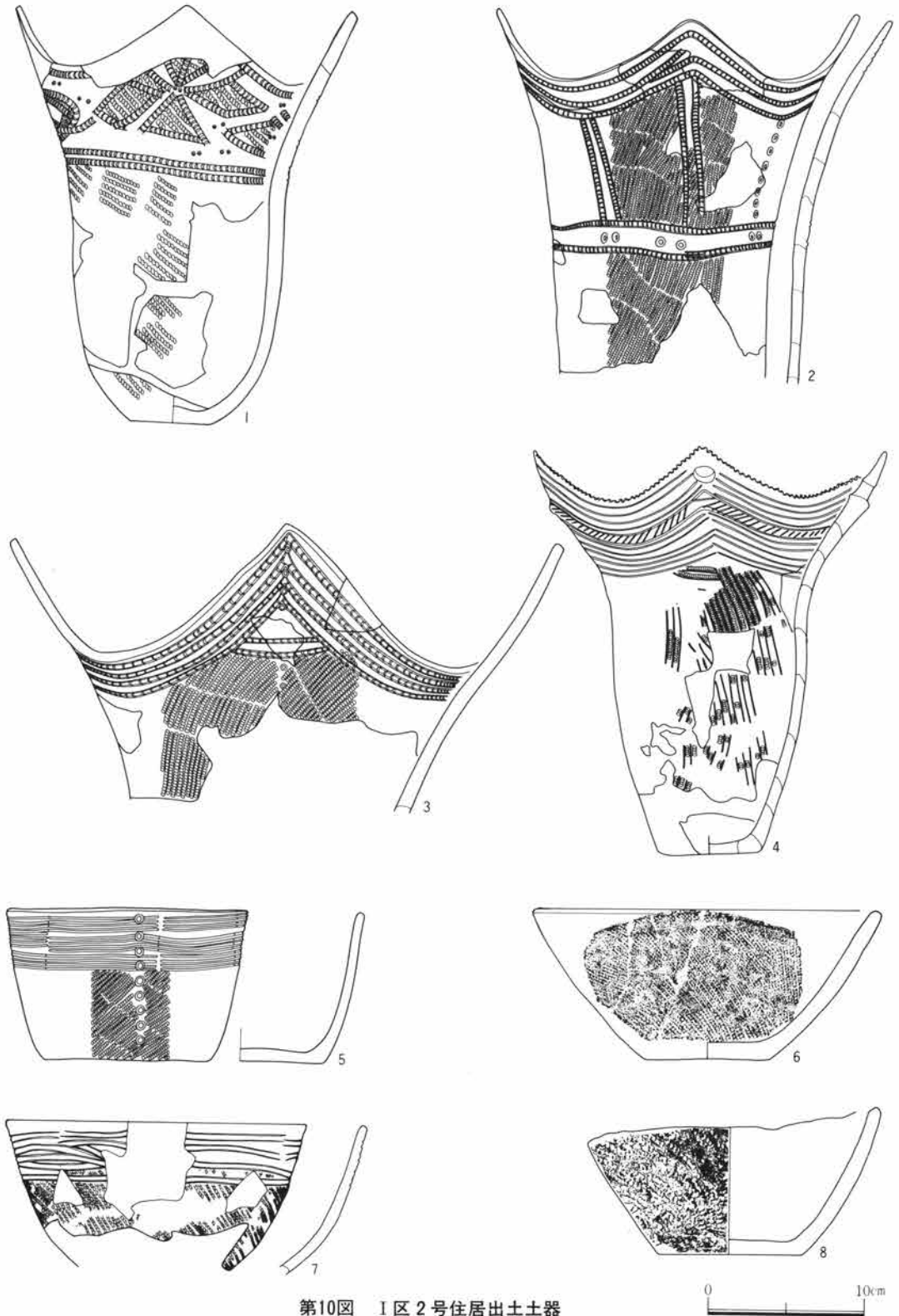
IV 検出された遺構と遺物



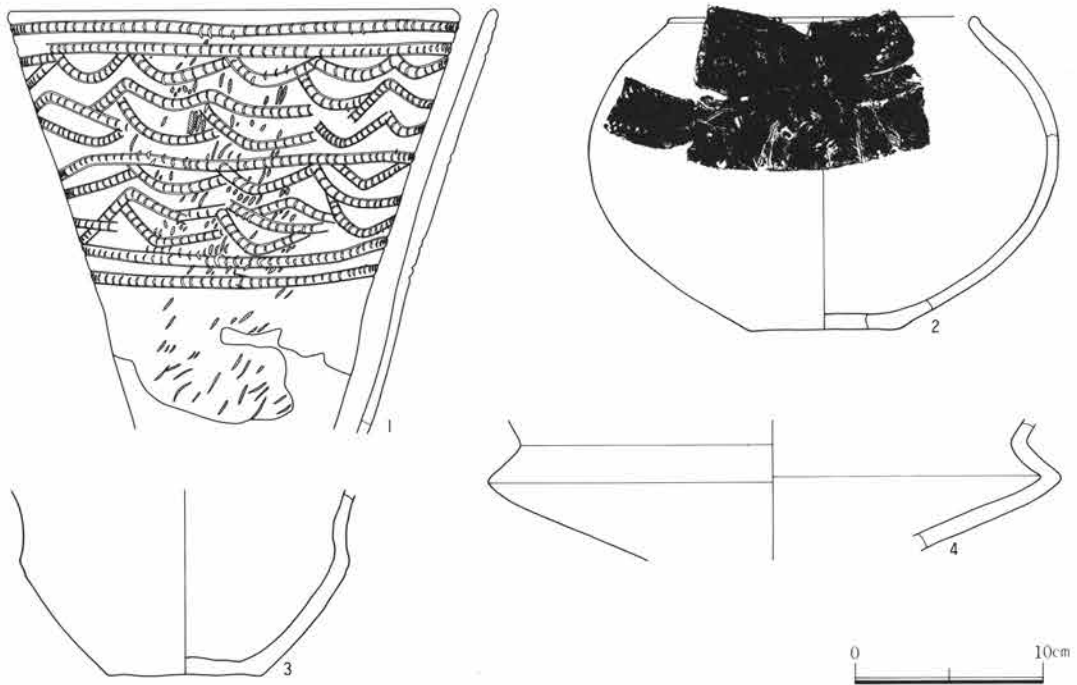
第9図 I区2号住居出土土器

が施文はあまり良くない。同図5は、覆土中より出土した深鉢形土器胴部分である。頸部には半截竹管によるやや幅広の横走線文を施す。この平行線文は口縁部側の1条が深く施文されている。

IV 検出された遺構と遺物



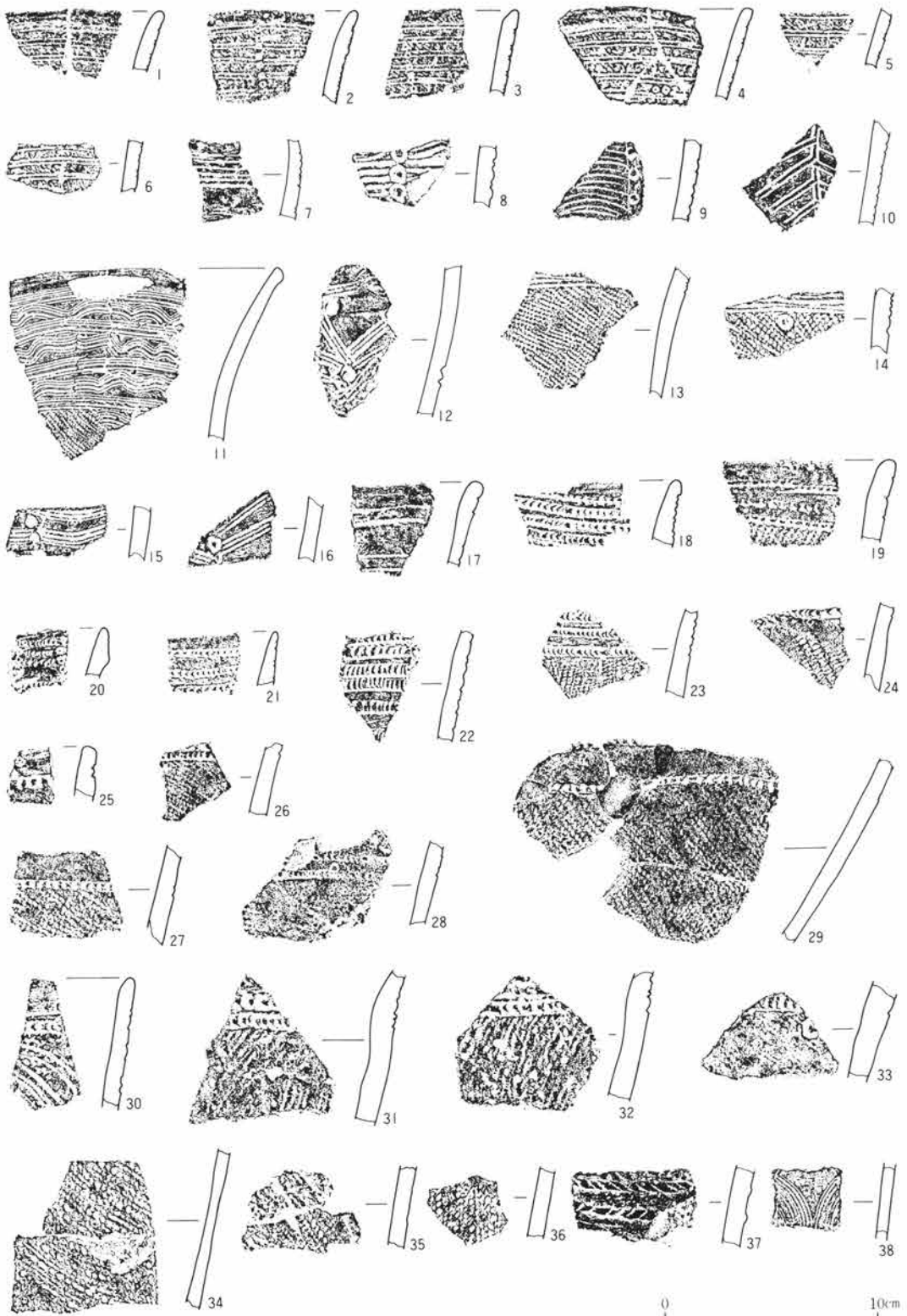
第10図 I区2号住居出土土器



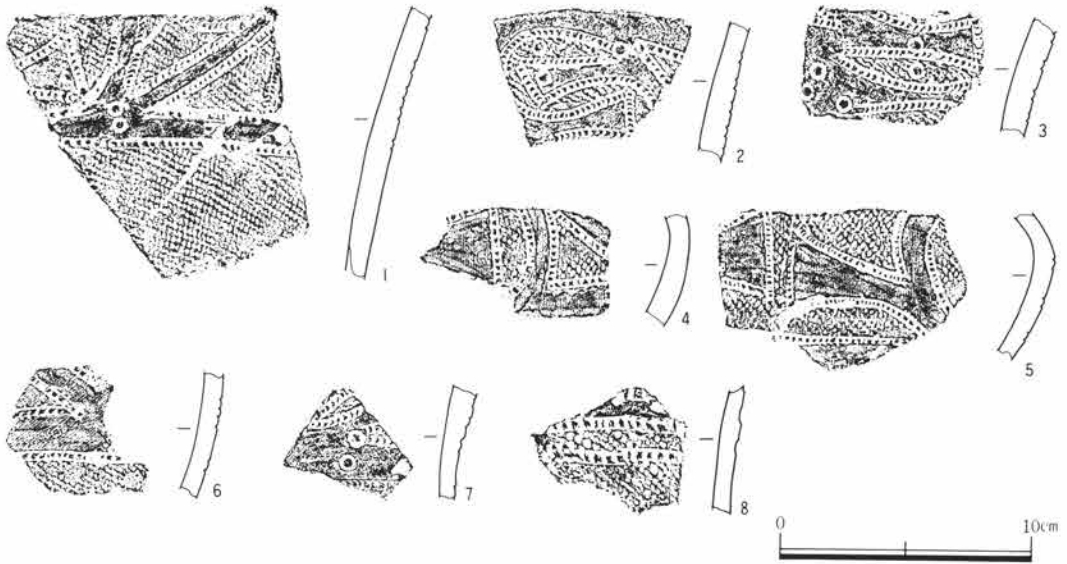
第11図 I区2号住居出土土器

器面にはRLR³横位が施される。同図6は、覆土中より出土した胴部片である。器面にはRLR³横位が施される。同図7は、覆土下部より出土したゆるやかなカーブをもって立ち上る深鉢形土器であり、口縁部および底部を欠損する。口縁部には半截竹管による木葉状入組文が施され、空白部分には円形竹管文が配される。頸部には連続爪形文が1条巡り同文様帯を画している。胴部にはLR³縄文が施されるが、施文方位は横位を基本とするがやや不規則であり斜位に近い部分も認められる。同図8は、覆土中より出土した大形の深鉢形土器胴部片である。器面にはRL横位が施されるが、原体および施文とも良好である。また1段Lによる結節回転もみられる。破片上部には横走る平行線文が巡るが、この上位は磨消縄文となっている。第10図1は、覆土下部より出土した深鉢形土器である。胴下半部にややふくらみをもち口縁部に向って外反ぎみに開く波状口縁を呈する。文様は連続爪形文を口縁に沿って1条および頸部に2条巡らせ、その間に同種爪形文により木葉状入組文が施される。またこれら爪形文による区画文外側は磨消縄文とし、この部分に2個1単位の円形竹管文が配される。縄文はRL横位であるが条間隔がやや開きみで施文も浅い。なお節は整然としているため原体はよく燃られているであろう。同図2は、覆土中より出土した波状口縁の深鉢形土器であり、底部を欠損する。文様は口縁に沿って3条、頸部に2条の連続爪形文を巡らせ、その間に口縁波頂部および波底部から2条1単位の連続爪形文および円形竹管文を垂下させ文様帯を構成している。また口縁部・頸部に巡る連続爪形文の部分は磨消縄文とし、頸部の爪形文間には垂下する文様に合わせ2個1単位の円形竹管文を施している。器面には

IV 検出された遺構と遺物



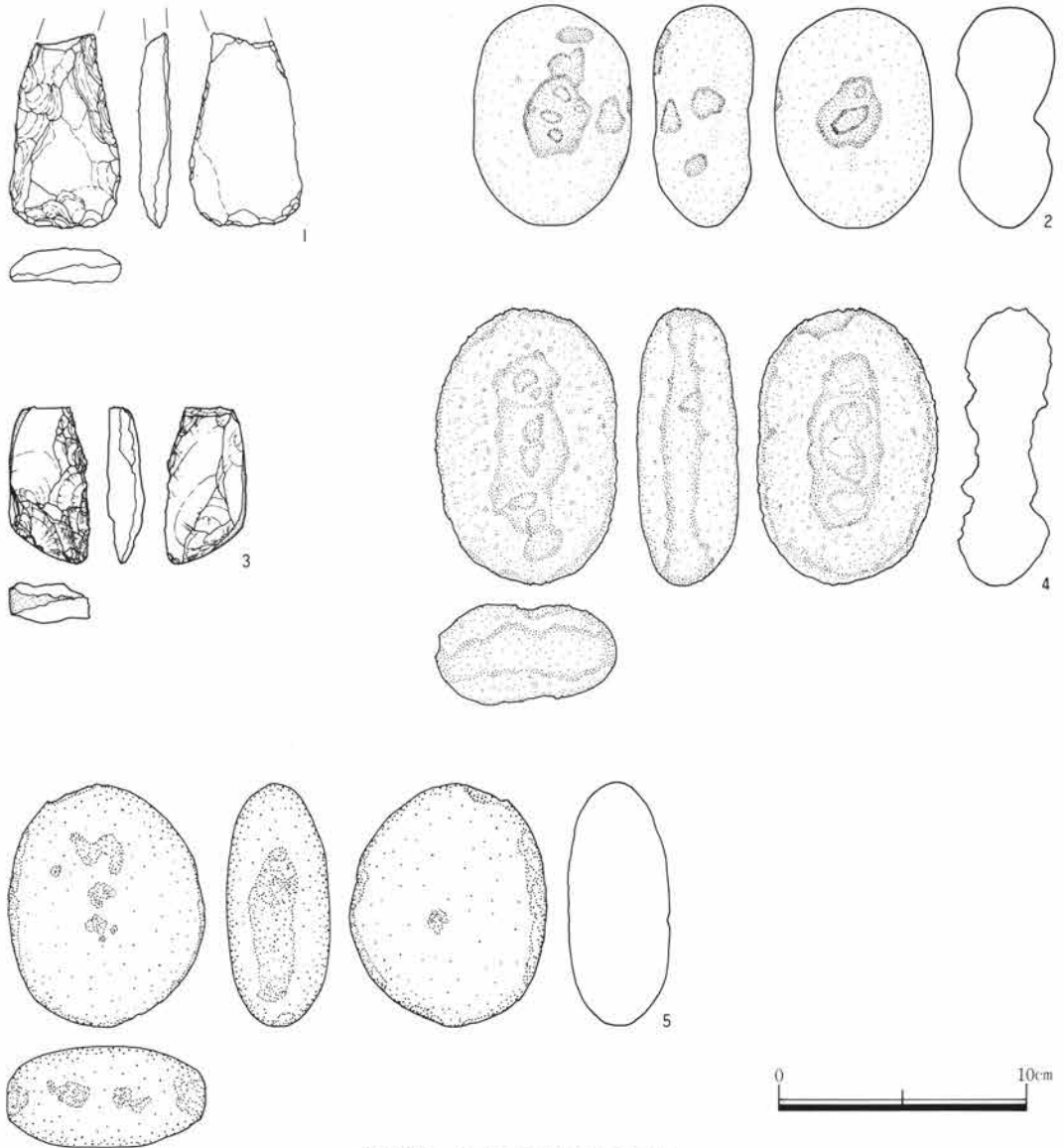
第12図 I区2号住居出土土器



第13図 I区2号住居出土土器

LRL³横位が施される。原体はよく撚られ施文も良好である。同図3は、覆土中より出土した大形の波状口縁の深鉢形土器である。胴部は欠損する。文様は口縁に沿って3条の連続爪形文が巡り、波頂部には爪形文間に円形竹管文を配している。また波状となる最下位の連続爪形文には2条の同種爪形文を横走させ三角形の区画とし、内側を磨消縄文としている。この波頂部延長線上のこの部分から円形竹管文が垂下する。器面にはLR横位が施される。原体はよく撚られ施文も良好である。同図4は、口縁部が外反する波状口縁の深鉢形土器である。口唇部には刻目が施され、波頂部直下には円文が穿たれる。また口縁部中央には刻目をもつ太い隆帯文が貼付され、その上位に半截竹管による平行線文が2条、下位には3条巡らされる。文様帯中には縄文は認められないが、胴部には軸繩Lにrを加えた付加条第2種が施される。同図5は、覆土下部より出土した完形の浅鉢形土器である。口径と底径の差が少なく、直線的に立ち上る。口縁部には半截竹管により横走線文が施され、縦位の円形竹管文が配される。横走線文は不整であり、部分的に節をもつ。文様帯中には縄文は認められないが、胴部にはLR横位が施される。同図6は、覆土中より出土した浅鉢形土器である。胴部にややふくらみを持ち、口縁が大きく開き、器面にはRLR³横位が施される。原体は細くよく撚られているが施文はあまり良くない。同図7は底部および口縁部を一部欠損する浅鉢形土器である。口縁部には半截竹管による粗雑な横走線文が施される。胴部にはRL横位が施されるが、文様帯中にも一部縄文が認められる。同図8は、覆土中より出土した浅鉢形土器である。口縁は整形が粗雑でありかなり起伏をもつ。器面にはRL横位が施されるが、浅く不明瞭であり条走向も乱れている。第11図1は、覆土中より出土した平縁の深鉢形土器である。口縁および頸部に各々2条の幅広の連続爪形文が巡り、その中央に同様の爪形文が1条施され、これを境として上下に連続爪形文による粗雑な弧状文が3条ずつ配される。縄文は器全面にL横位

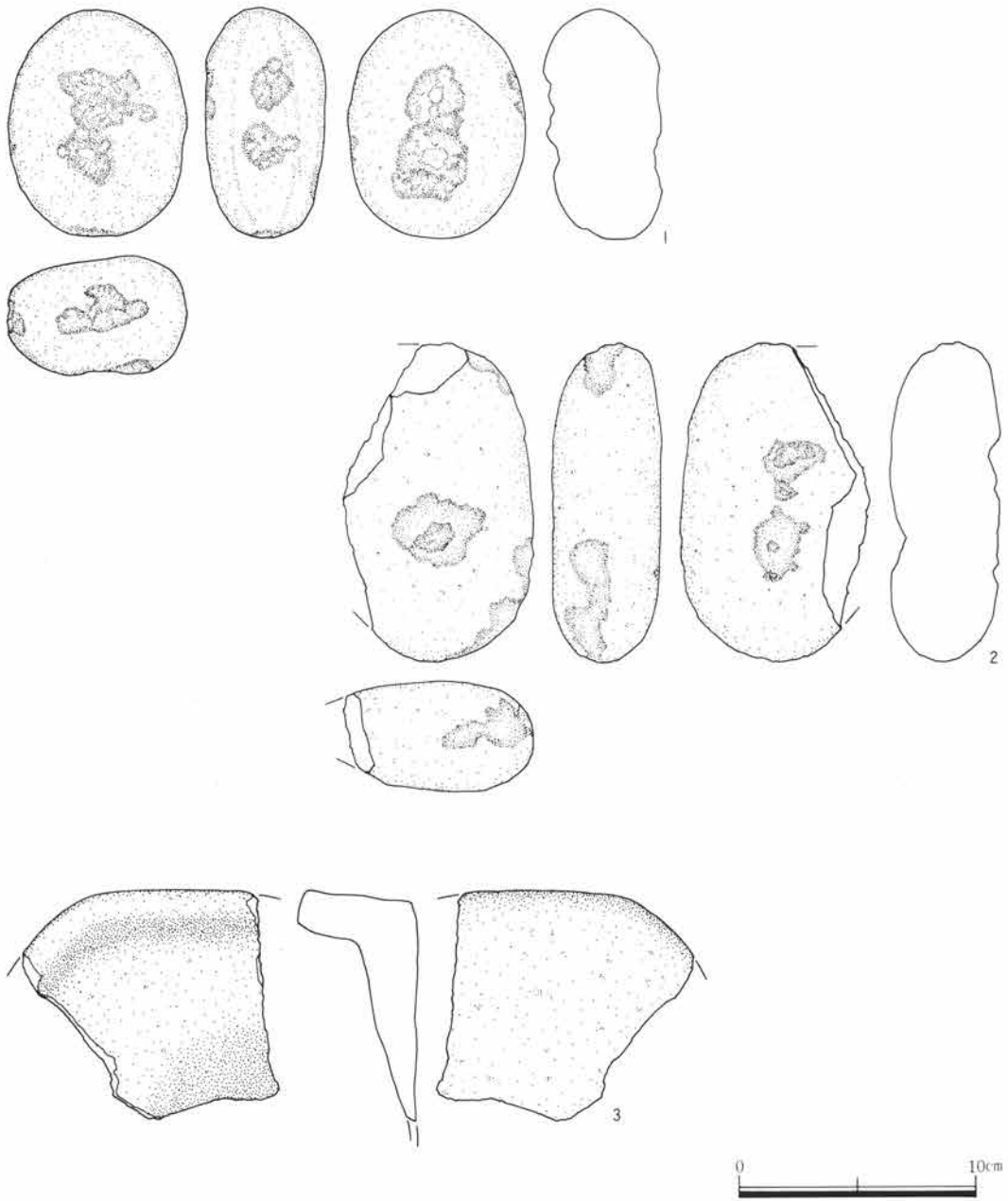
IV 検出された遺構と遺物



第14図 I区2号住居出土石器

が施されるが、施文は粗く不明瞭なものである。同図2は、胴部が球状にふくらむ浅鉢形土器の口縁部および底部片である。各々覆土中より出土した。器面には浅く不明瞭であるが、棒状工具による曲線状の文様が施される。また縄文も浅く不明瞭ながらRL横位が施されている。同図3は、胴部上半に段をもつ無文の浅鉢形土器である。同図4は、頸部がくの字状に屈曲する無文の浅鉢形土器である。器面は内外面ともよく整形されている。

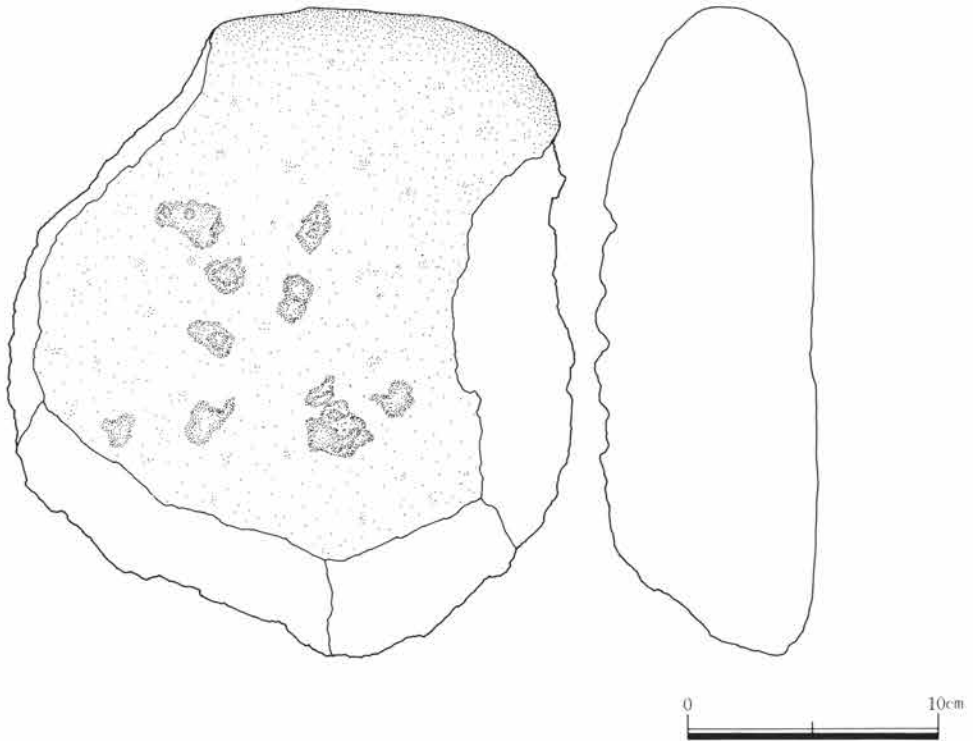
第12図1～7、17は半截竹管により幅の狭い平行線文が施される。1～4は口縁部、5～7は頸部であり単純な横走線文で文様帯が構成される。3、4、5にはRL横位の縄文が認められる。8～10は肋骨文構成をもつ。9は弧状の平行線文、10は斜行線文の組み合わせによる。8、9は



第15図 Ⅰ区2号住居出土石器

円形竹管文を垂下させる。11～16、38は櫛歯状工具により文様構成される。11は横走および波状文を交互に施文し口縁部文様帯とし、胴部にRL³横位の縄文を施す。12は山形状もしくは肋骨文状の構成をもち、棒状工具による円形文が配される。13、14は横走線文以下にRL³横位の縄文が施される。15、16は肋骨文構成がみられる。18～33は連続爪形文により文様帯を構成する。18～21、25は口縁部で横位の連続爪形文を施す。19は胴部にLR横位の縄文が認められる。18は波状口縁、

IV 検出された遺構と遺物



第16図 I区2号住居出土石器

他は平縁であろう。25は押し引き様の連続爪形文で、施文は他例に比し深い。22～24、26～29、31～33は胴部もしくは頸部片である。いずれも深鉢形土器であろうが、29については浅鉢形土器の可能性もある。23はRL³の縄文が認められるが、施文方位は斜位で条走向は縦走している。24、26、27、29、33はRL横位である。31、32は同一個体で、不明瞭であるがL横位の縄文が施されている。30は口縁部に連続爪形文を1条巡らせ、平行線文により肋骨文構成を施す口縁部片である。34～36は深鉢形土器胴部の縄文片である。34はRL³横位、35、36はRL横位が施される。

第13図1～8は木葉状入組文により文様帯を構成するものである。いずれも連続爪形文により表出され、入組文の区画外は磨消縄文となる。この磨消縄文部分には円形竹管文が配される。連続爪形文は平行線を伴い、幅が狭く施文もていねいである。縄文はRL³横位が施される。

第14図～第16図は住居出土の石器類である。第14図1は打製石斧、3はスクレイパーである。2、4、5、第15図1、2は凹石である。石材は安山岩を主とする。集合打痕による凹穴は両面に認められ、複数存在する。第15図3は石皿片である。縁辺部が直立する形態をもち、底面中央付近は磨耗し薄くなっている。第16図は大型の凹石（多孔石）である。縁辺部が欠損しているが残存長約25cm、厚さ9cmで、片面にのみ凹穴が多数認められる。

I区3号住居址(第17図)

位置 南西斜面に立地し、I・J-26・27グリッドに位置する。

平面形 1辺3.1mを測るやや不整な方形プランを呈する。各コーナーは丸味をもち、各辺もまた湾曲ぎみにふくらんでいる。床面積は9.82㎡を測る。

壁 ほぼ垂直に立ち上り、北西壁側は残存状態が悪いが、残存壁高は平均20cmを測る。

床 床はローム面に構築されるが、一般的に軟弱なものであり、硬く良好な面は検出されなかった。また面はやや起伏をもつと共に、南北方向はほぼ水平を保つものの北東から南西方向へかけては平均10°程度の傾斜をもっている。

柱穴 柱穴は計3本検出された。Pit 1～Pit 3は各2住居対角線上に配置され、支柱穴4本による構造を想定させるが、南東コーナー部にあたる柱穴は確認されなかった。各柱穴は、径30cm、深さ20～55cmを測る。

炉 確認されなかった。これは、住居中央部に51号および52号土壙が掘り込まれている関係もあろうが、住居内には焼土等の散布も認められていない。

周溝 認められない。

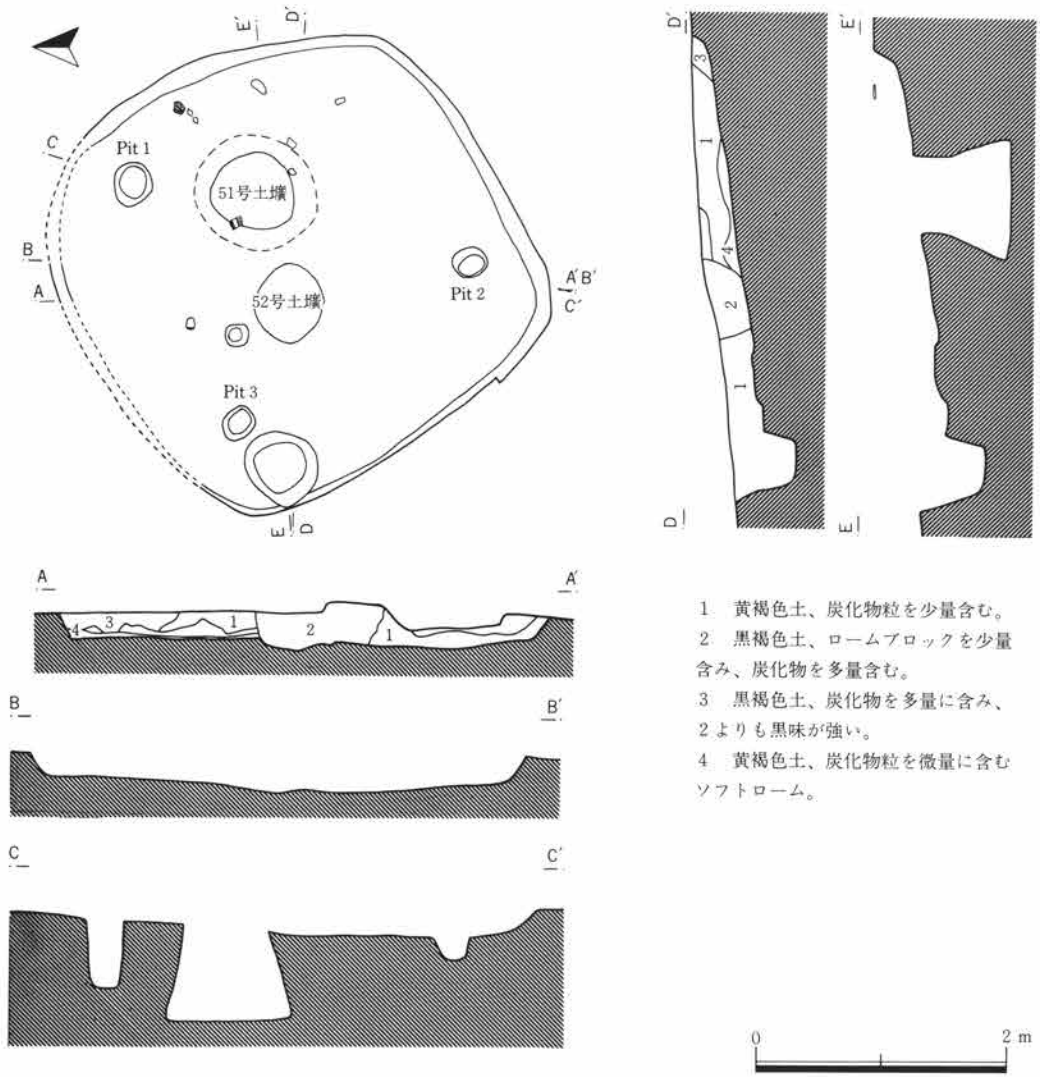
その他 遺物は縄文中期加増利E3式の土器および打製石斧を含む石器類が少数ながら出土していることから、本遺構もこの時期にあたると思われる。ここでは住居として報告したが、平面形、規模などの同時期の一般住居と比較すると異なる点が指摘される。また、床面の状態等も考慮した場合一般的な居住施設とは性格を異にすることが考えられるが、調査の中ではこのことについて積極的に特定できる内容は抽出されていない。

本住居は51号土壙、52号土壙と重複している。52号土壙は調査により住居を切って掘り込んでいることが確認されたが、51号土壙については時間的關係は不明である。なお、52号土壙からは加増利E3式土器(第45図)が出土している。

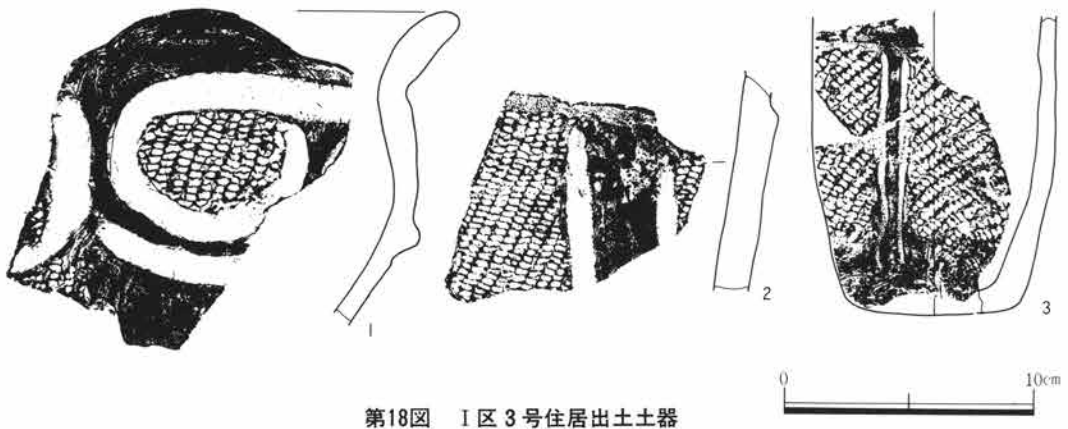
I区3号住居出土土器(第18図)

第18図1はキャリパー状を呈する深鉢形土器の口縁部で、口縁部上端は外反ぎみに開く。口縁は小さな波状となろう。太い曲線文で区画された内側にはRL縦位の縄文が施される。2は胴部片であり、太い懸垂文間は磨消縄文とする。縄文はRLr³が用いられ縦位施文とする。縄文原体はよく撚られ、施文も良好である。3は小型の深鉢形土器で、口縁部を欠損する。胴部はわずかにふくらみをもち、底面は平坦である。懸垂文間は磨消縄文とする。縄文はRLr³縦位が施される。原体、施文とも良好である。

IV 検出された遺構と遺物



第17図 I区3号住居平面図



第18図 I区3号住居出土土器

I区4号住居（第19図）

位置 西斜面に立地し、F・G・H-12・13グリッドに位置する。

平面形 長軸6.4m、短軸（北辺5.2m、南辺5.6m）を測りやや南側へ向って広がる梯形プランを呈し、各コーナーは丸味をもつ。また各辺もわずかにふくらみをもつ。床面積は35.0㎡を測る。

壁 傾斜面に位置するため、壁高は東・西・北壁部で45cm、南壁部で15cmを測る。

床 ローム層中に構築され面はほぼ水平である。特に住居中央部を中心とした範囲（Pit 8、Pit11、Pit13、Pit16で囲まれる部分）は硬く良好な床面が検出された。

柱 穴 計18本確認された。各柱穴は規則的に配置され、長方形に配置されるPit 1～Pit 5と、その回りに巡るPit 8～Pit16という2つのまとまりが認められる。Pit 1～Pit 5は各々垂直に交差するもののPit 4およびPit 5に直交する西側コーナーの柱穴が不明であり、その存在は確定できないがほぼ同様の規模をもつII区2号住居址と比較してみると本住居についてはPit 4を含めた6本柱の配置であることが推定される。またPit 8～Pit16も規則的に配置され、特に各コーナー部には他Pitに比べやや規模の大きいものが配置されている。その間に径30～40cm、深さ20cm前後のPitがならぶ。加えてPit 8および16間には、48号土壙が掘り込まれ壊されているが、一部に焼けている部分が残っており、炉の存在が考えられる。Pit 6、7は北壁に接して確認されたが、その配置からみてPit 8、16に接続するように考えられる。

炉 炉の配置は柱穴の構成と密接な関係をもち、規則的に設定される。Pit 1、2を結ぶ直線上中央部に径30cm、深さ10cmの掘り方をもつ炉が設定され、内部には埋設土器が設置してある。この土器は口縁部および胴部の大半を欠損しており、残存状態は悪い。またPit 8、16の中央部にも炉の存在が推定される。この部分には48号土壙が掘り込まれているためその詳細を確認し得ないが、やや壁が焼けている部分が認められ、これについて炉掘り方の一部が残存したものであろうと観察された。

周 溝 壁に沿って幅15cm前後、深さ8cmの周溝が巡る。北西コーナー付近は攪乱を受けているため不明であるが、ほぼ全周するものと推定される。壁柱穴は認められない。

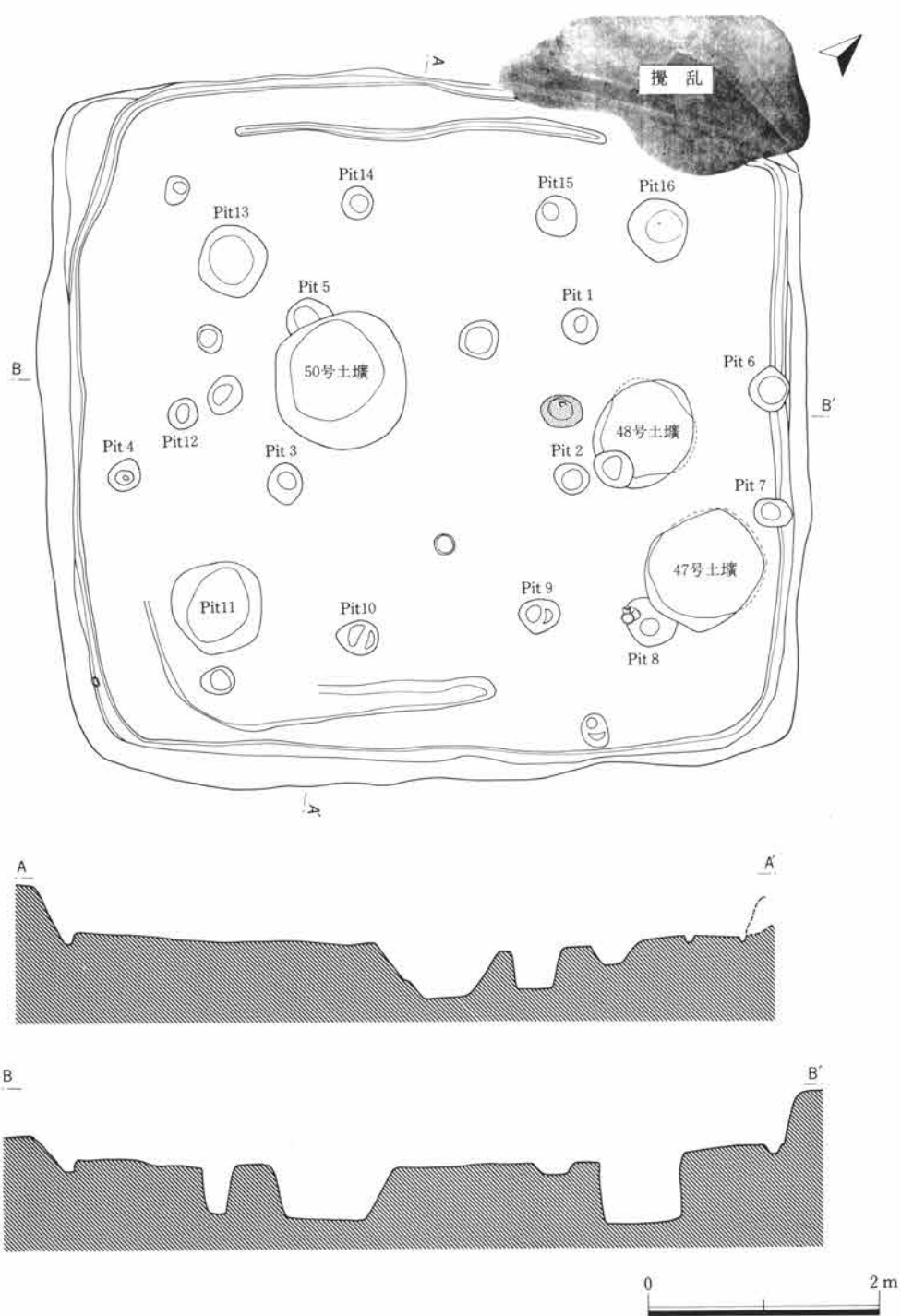
その他 住居内には47号・48号・49号土壙が検出されたが、これらの土壙はいずれも住居を切って掘り込まれており、本址に伴うものではない。

遺 物 埋設土器（第20図1）の他、浅鉢形土器（第20図7）が床面に接して出土している。その他は住居覆土中から検出されたものである。

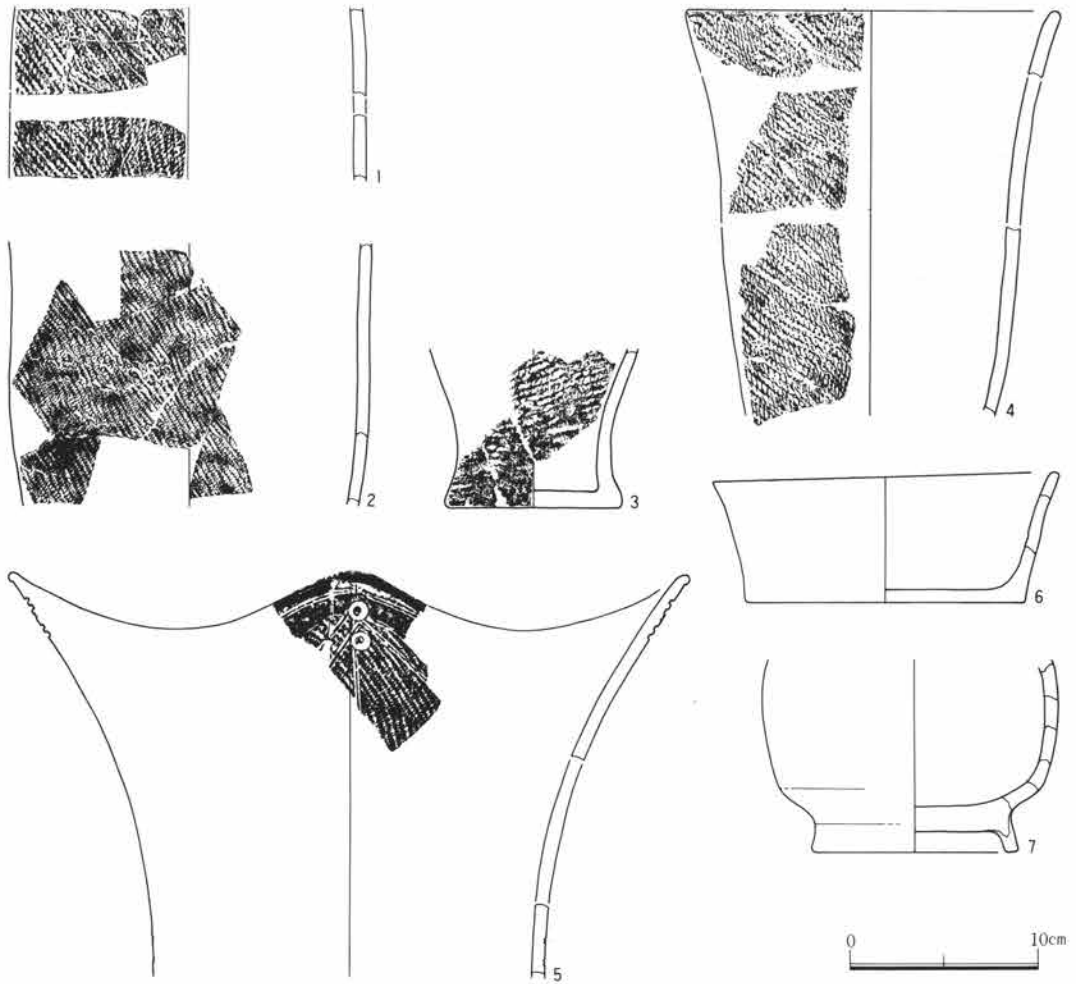
I区4号住居出土土器（第20図～第22図）

第20図1（埋設土器）は、深鉢形土器の胴部分で、2次焼成をうけている。器面にはRL横位が施される。同図2は、覆土下部より出土した胴部分であり、器面にはRL横位が施され、結節回転も認められる。同図3は、覆土中より出土したやや張り出し気味の底部である。器面にはL横位が

IV 検出された遺構と遺物



第19図 I区4号住居平面図

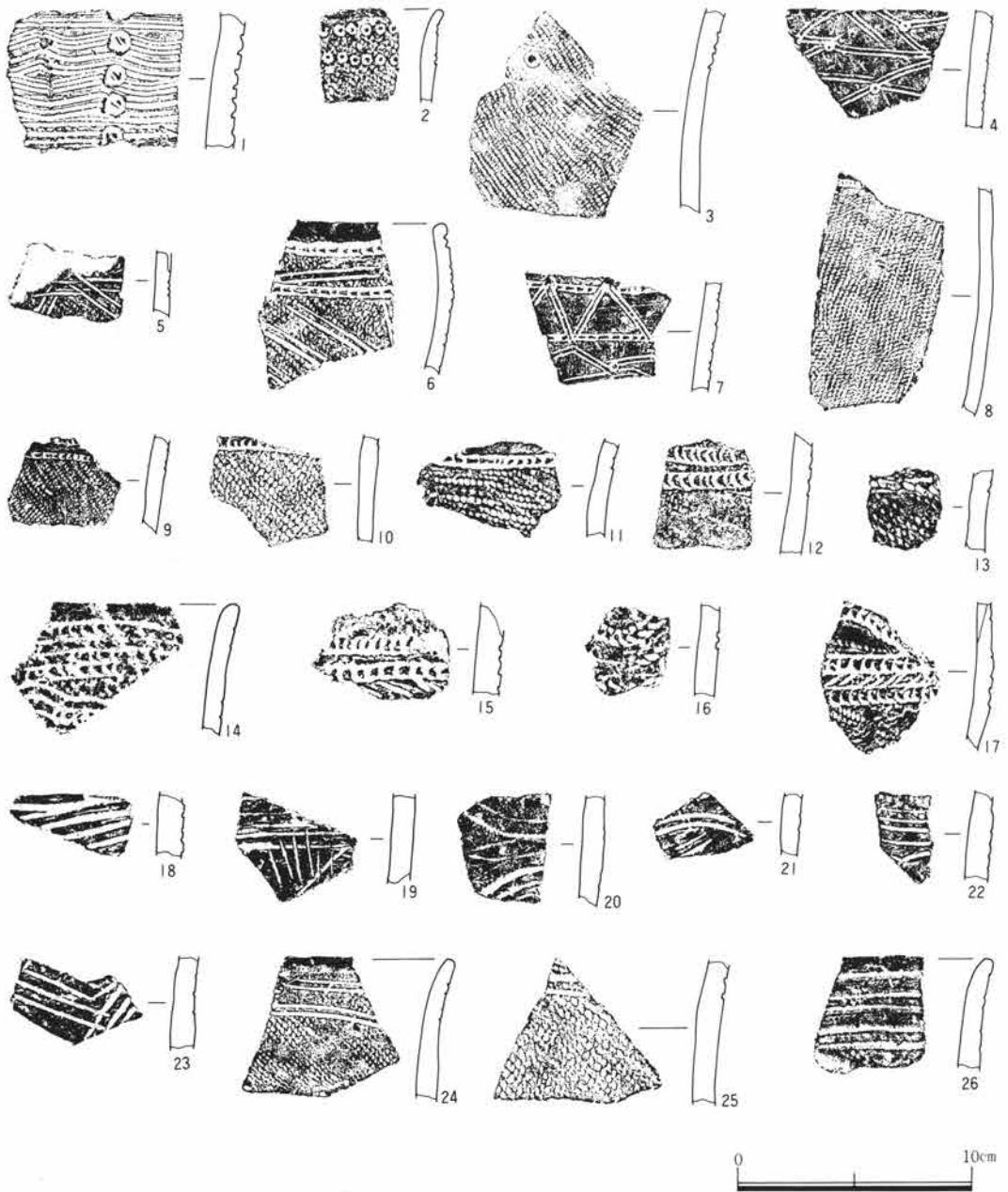


第20図 I区4号住居出土土器

施される。原体には粗い繊維が用いられ、また施文も粗く条走向は不規則である。同図4は、口縁部が外反する平縁の深鉢形土器である。器面にはRL横位が施される。原体はかなり硬質の繊維が用いられ、よく撚られているが節の傾斜が大きい。同図5は、口縁部が外反する波状口縁の深鉢形土器である。口縁には平行線文により区画された無文帯（磨消縄文）が巡り、波頂部から垂下する平行線文を中心に肋骨文が構成され、交点には円形竹管文が配される。縄文はRL横位が施される。原体は細くよく撚られているが、繊維束が均一でないため節がやや不整となっている。同図6は無文の浅鉢形土器である。口径と底径の差が少なく、底面は平坦である。器内外面とも整形は良好である。同図7も無文の浅鉢形土器であり、口縁部は欠損する。胴部はやや湾曲ぎみで、底部には高台状を呈する。器内外面とも整形は良好である。

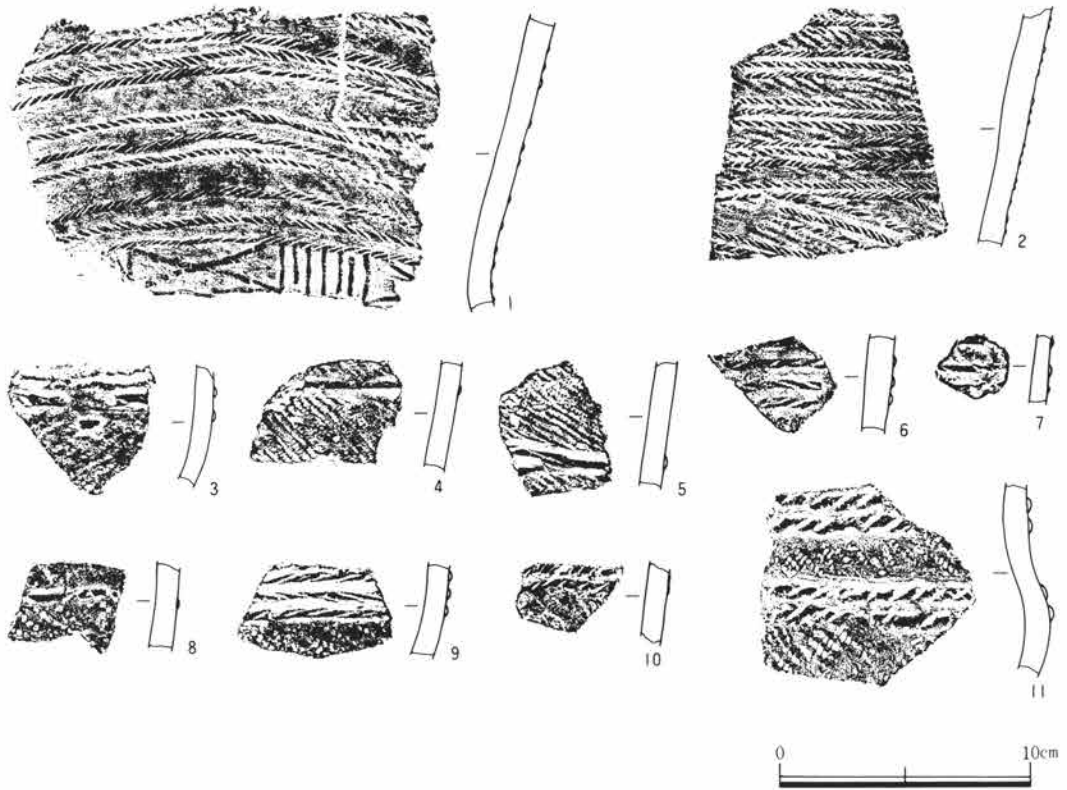
第21図、第22図は住居覆土中より出土した土器類である。第21図1、2は口縁部片である。1

IV 検出された遺構と遺物



第21図 I区4号住居出土土器

は櫛歯状工具による小波状文を重畳させ、その上に円形竹管文列を垂下させる。2は口唇部がわずかに外反し、横位の円形竹管文列を2条巡らせる。縄文はRL横位が施される。3は胴部片でRL³横位の縄文が施され、同形竹管文が認められる。4、5、7は半截竹管による平行線で山形状、格子状文を施す。平行線文の交点には円形竹管文が配される。いずれも接合部は欠くものの同一個体とみられる。縄文は認められない。6は内湾ぎみに立ち上る口縁部である。口縁に沿って連続爪形文を2条巡らせ、以下平行線文による斜行線文が加えられ、肋骨文を構成するものとみら



第22図 I区4号住居出土土器

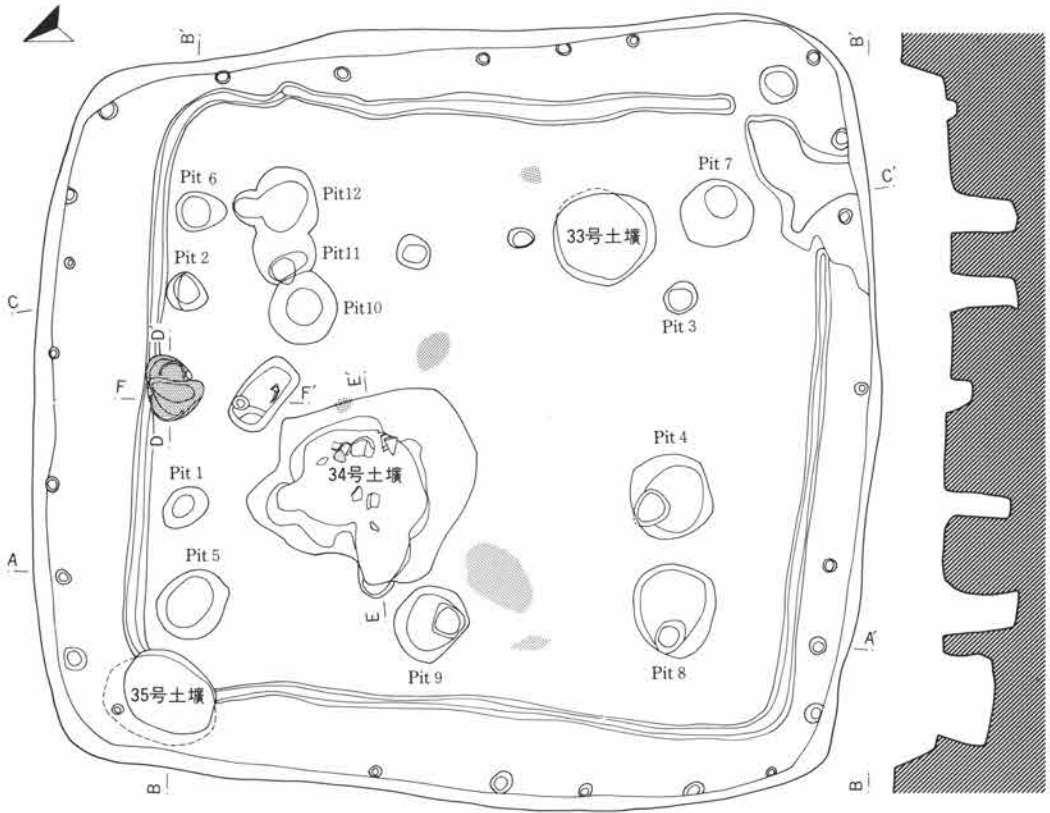
れる。縄文はRL横位が施される。8～13は横位の連続爪形文が巡る胴部片である。8はRL³の縄文を用い縦位施文する。9、10はRL³横位、11～13はRL横位の縄文が各々施される。14～17も連続爪形文により文様を加えられるが、8～13の連続爪形文に比べ、やや幅広である。15、17は連続爪形文間に刻目が施される。17にはRL横位の縄文が認められる。18～26は平行線文による文様構成をもつ。18～23は斜行および弧状の平行線文が加えられ、平行線は幅広で、施文も深い。24、25は幅狭平行線文が施される。いずれもRL³横位の縄文が加えられる。

第22図1～11は浮線文土器である。1、2、9の浮線文は細く、偏平で比較的接して加えられる。浮線文上には矢羽根状の鋭い刻目が施される。3～5、11はやや太目の浮線文で、浮線文上に施される刻目も丸みをもつ。浮線文下にはRL横位の縄文が認められる。

IV 検出された遺構と遺物

II区2号住居（第23図）

- 位置** 南斜面に立地し、S・T-23・24・25グリッドに位置する。
- 平面形** 長軸6.3m、北辺5.5m、南辺6mを測り、やや南側に向って広がる梯形プランを呈する。各コーナーは丸味をもち、各辺についてもやや湾曲ぎみにふくらみをもっている。床面積は36.4㎡を測る。
- 壁** ほぼ垂直に立ち上るが、傾斜面に位置するため壁高は北壁部で50cm、南壁部で30cmを測る。
- 床** 床面はほぼ水平であり、住居中央部（Pit 5～Pit 8で囲まれる部分）を中心として硬く良好な床面が検出された。
- 柱 穴** 計13本のPitが検出された。特にPit 1～Pit 8は規則的に配置され、各柱穴は垂直に交差する。Pit 1～Pit 4は、主柱4本により構成され、Pit 1—Pit 2・Pit 3—Pit 4間は1.6m、Pit 2—Pit 3、Pit 1—Pit 4間は4mの規模をもつ。
Pit 5～Pit 8は、Pit 1—Pit 2およびPit 3—Pit 4を結ぶ延長線上外側に各々配置されるためPit 5—Pit 6・Pit 7—Pit 8間は3.1mとなるが、長軸にあたる柱間距離および方位についてはほとんど一致している。この他、壁に沿って径10cm前後、深さ5cm前後の小Pitが25本巡り壁柱穴を構成する。
- 炉** Pit 1およびPit 5とPit 2およびPit 6を結ぶ直線上中央部に設けられ、炉内には埋設土器が設置されるなどI区1号・2号・4号住居およびII区3号住居における炉に共通するが、そのあり方に相違が認められ、特異な様相を呈する。本住居の炉からは埋設土器No.1（第24図1）および埋設土器No.2（第24図2）の2個体の土器が検出された。両者は各々掘り方に沿って設置され、接する部分は欠くものの原位置を保っていると考えられる。しかし、掘り方平面形および断面の状態、さらに埋設土器のあり方をみると、両者は時期を異にして構築されたことが理解される。まず径40cm前後（推定値）、深さ30cmの掘り方内に埋設土器No.1が設置され炉とした後、これに東接して径40cm前後（推定値）、深さ25cmの規模をもつ掘り方が掘り込まれ埋設土器No.2が設置されたことが観察される。さらに後者の炉が設置される際には、埋設土器No.1は除去されず接する部分は壊されるものの残存し、最終的に今回検出されたような形態をとったものと判断される。なお掘り方縁辺はやや焼けているとともに、埋設土器内には焼土が混入している。また、床面には焼土の散布が数ヶ所認められる。
- 周 溝** 壁から40cm～70cm内側に幅10cm～15cm、深さ5cm～10cmの周溝が住居平面形に相似して巡るが、南東コーナー部は途切れている。また、周溝北辺中央では、上記の炉と接している。
- その他** 炉を主軸とした垂直線上南側25cmの位置には、長径65cm、短径35cm、深さ30cmの楕円形プランの掘り込みが検出され、その内には残存状態は極めて悪いが埋設されていたと考



第23図 II区2号住居平面図

IV 検出された遺構と遺物

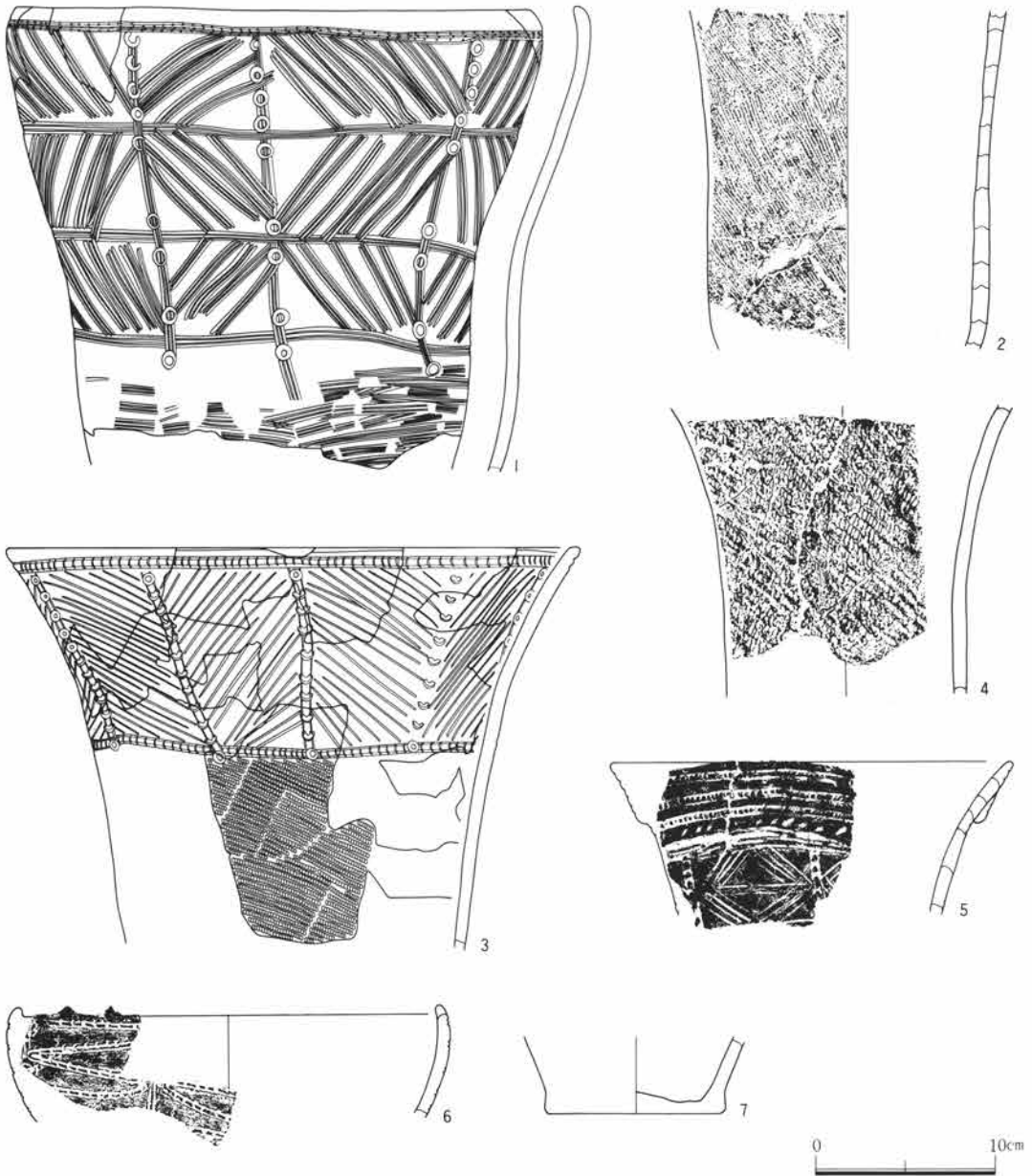
えられる土器の一部が出土している。この部分にはとくに火熱を受けて焼けた痕跡もしくは焼土の散布は認められない。住居南壁南東コーナー寄りには、一部掘り残しによる硬くしまった段状の高まりがみられる。その範囲は周溝の途切れる部分と一致しており、高さは床面レベルから10cmを測る。また壁に接する部分はほぼ垂直に立ち上るか、床面に接する側は17°の傾斜をもっている。住居内には33号・34号・35号土壌が存在するが、いずれもこの住居に伴うものではなく、住居床面を切って掘り込まれている。

遺物 前述した埋設土器の他は、覆土内より出土したものである。

II区2号住居出土遺物（第24図～第26図）

第24図1（埋設土器No.1）は、頸部がやや外反ぎみに立ち上り、口縁がわずかに内湾する水平口縁の深鉢形土器である。底部は欠損する。胎土中に繊維を含むが、器内外面とも整形は良好で繊維はあまり器外へ露出しない。口縁には幅の狭い無文帯をもち、文様は3本1単位の櫛歯状工具により施される。横位の櫛歯文で文様帯を3段に区画し、各段には斜行櫛歯文を組み合わせ肋骨文状の文様を施すことにより、全体的には菱形状の文様構成をもつ。また、口縁から垂下する縦位の櫛歯文上には円形文が付される。なお、口縁部直下の横位櫛歯文は結節平行線文としている。胴部には同様の工具による不規則な横位の櫛歯文が加えられ、縄文はみられない。同図2（埋設土器No.2）は、口縁部および底部を欠損する深鉢形土器である。胎土中には繊維は含まない。器面にはRL横位の縄文が施される他に文様はみられない。縄文原体は細くよく撚られている。同図3は、住居覆土下部より出土した水平口縁の深鉢形土器で、胴下半部を欠損する。口縁に沿って1条、頸部に1条の連続爪形文を巡らせ、その間にやや粗雑な平行線文による斜行線文が施され肋骨文が構成される。斜行線文の交差する部分には基本的に平行線文が垂下するが、省かれる部分も認められる。また、この部分には円形竹管文を下方向から強く押しあて、その角度により円形文もしくは爪形文列が配される。縄文は口縁部文様帯にはみられず、胴部にRL³横位が施される。同図4は、口縁に向かって外反ぎみに開く深鉢形土器の胴部である。器面にはRL³横位が施される。縄文原体はよく撚られるものの施文はあまり良くない。同図5は、水平口縁の深鉢形土器である。胴部以下は欠損する。口縁部には隆帯文が付着され、折り返し口縁状に肥厚する。この隆帯文上には刻目が施され、その上部には口縁に沿って連続爪形文が3条巡る。隆帯文直下には平行線文が巡り、ここから連続爪形文を垂下させ、この連続爪形文間に平行線文、斜行線文を組み合わせることにより三角形状もしくは菱形状の文様が構成される。縄文は認められない。同図6は、口縁部が内湾ぎみに立ち上る水平口縁の口縁部である。おそらく深鉢形を呈するものとみられる。口縁上には山形状の小突起が付される。文様は口縁に沿って連続爪形文が1条巡り、垂下する平行線文間に連続爪形文による肋骨文状の弧線文が施される。縄文はみられない。同図7は、底部であり縄文、文様とも認められない。底部下端は張り出しぎみで、底面は平坦である。

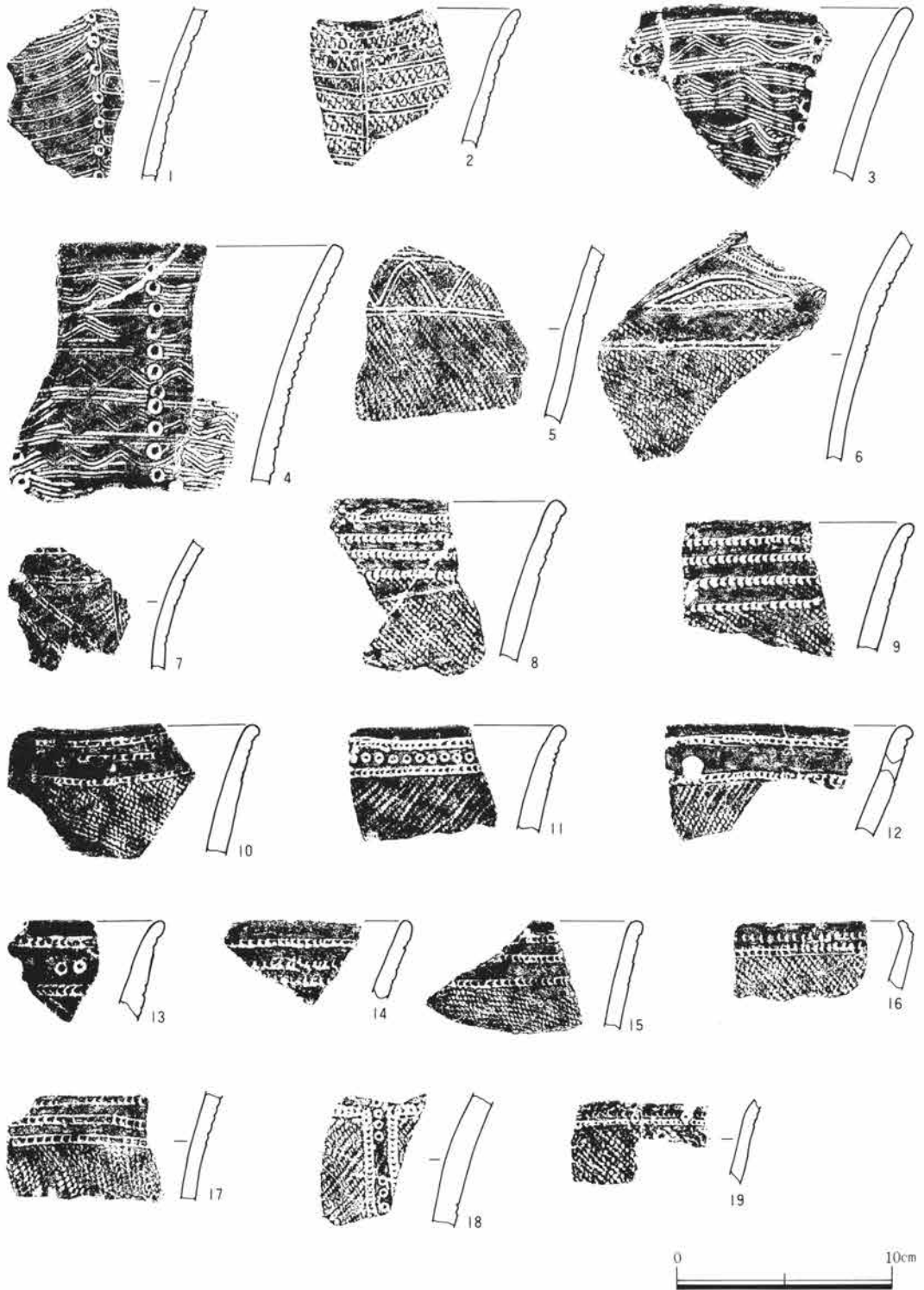
第25図1・2は平行線文により肋骨文が施される。1は胴部片で垂下する平行線文上には円形文が配される。また肋骨文は弧線状に湾曲させた平行線文により表出するもので、第24図6の手



第24図 II区2号住居出土土器

法に類似している。縄文はみられない。2は波状口縁を呈し、口縁に沿って連続爪形文が2条巡る。縄文はRL横位が施される。同図3・4は櫛歯文により文様構成される口縁部片である。いずれも4本1単位の櫛歯状工具が用いられ、横走線文と波状文が交互に施され、その上に円形文が縦位に配される。縄文は3にRL横位が一部観察されるが、4は認められない。同図5は横走する平行線文の区画内に波状平行線文が施され、縄文はRL横位が用いられる。同図6は木葉状の区画文が施されるが、この区画文には平行線文によるものと連続爪形文によるものが認められる。ま

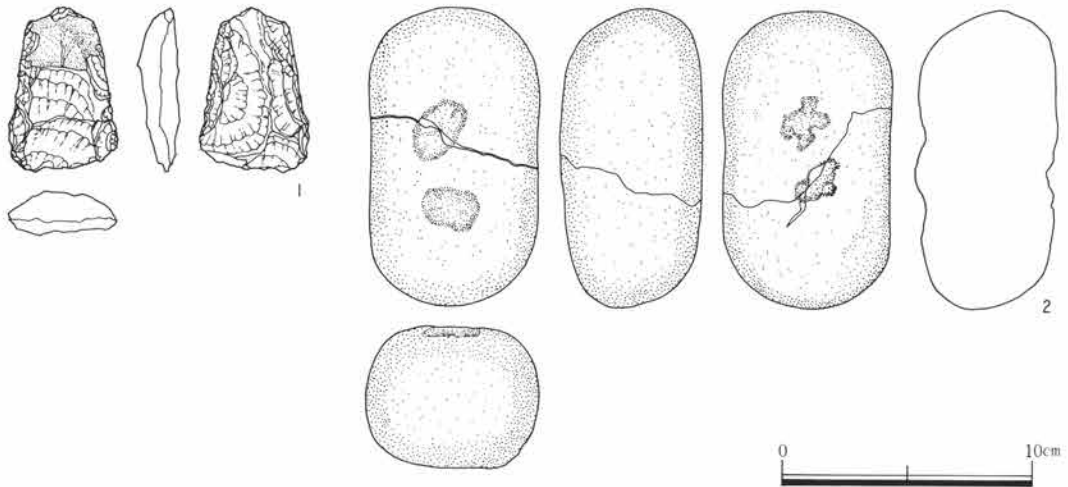
IV 検出された遺構と遺物



第25図 II区2号住居出土土器

た区画文外側は不十分ながら磨消縄文としている。この文様帯は横走る平行線文により画されている。縄文はRL³横位である。同図7は横引する連続爪形文により肋骨文が構成される。縄文は不明瞭であるがLR横位が観察される。同図8～18は横走る連続爪形文が施されるものである。8、9は水平口縁であり、口縁に沿って連続爪形文が4条巡り、この爪形文帯以下にはRL³横位の縄文が施される。10はゆるやかな波状口縁を呈し、平行線を施した後やや粗雑な連続爪形文が配される。以下RL³横位の縄文となる。11は口縁に沿って連続爪形文を2条巡らせ、その間に円形文が接して施される。縄文はLR¹横位である。12には補修孔がみられ、連続爪形文帯以下にはLR³横位の縄文が施される。13はやや粗雑な連続爪形文間に円形文が施される。15は口縁に沿って連続爪形文が3条巡り、以下RL³横位の縄文が施される。16は口縁部先端が内傾しこの部分に連続爪形文を2条接して施し、以下RL³横位の縄文となる。17はRL³横位が施されるが、施文方位は斜位に近く条は縦走する。18は連続爪形文による区画外が磨消縄文となり、この磨消部に円形文が配される。縄文はLR¹横位であり、接合関係はないが11と同一個体とみられる。19は幅の狭い連続爪形文がみられ、以下RL横位の縄文となる。

第26図は住居出土の石器である。1は打製石斧、2は凹石である。2の凹石は両面に集合打痕による凹穴が複数認められる。



第26図 II区2号住居出土石器

Ⅳ 検出された遺構と遺物

Ⅱ区3号住居（第27図）

位置 西斜面に立地し、J・K-17・18グリッドに位置する。

平面形 住居西半部は調査区外のため未調査であり平面形、規模等確定し得ない。北東辺は4.5mを測り、コーナーはやや丸味をもち、各辺も湾曲気味にふくらむ隅丸方形プランを呈する。

壁 床面から45°程度の角度をもって立ち上り、残存壁高は平均20cmを測る。

床 住居西側へ向ってやや傾斜する。また住居縁辺部はわずかに高まる硬質な面が存在する。

柱穴 計12本のPitが検出された。住居西側部分が不明であるため、柱穴の配置について確定し得ない点があるが、規則的な配置が看取されると共に、2種類の柱穴構成が考えられる。Pit 2、Pit 3、Pit 7は垂直に交差し、掘り方もしっかりしており1つの構成をもつと考えられるが南西コーナーにあたる柱穴は調査区外となり不明である。柱間距離はPit 2—Pit 3が1.5m、Pit 2—Pit 7が3.2mを測る。またPit 2およびPit 3を結ぶ延長線上には各々40cm程度の間隔をもってPit 1およびPit 3が配置される。両者とも深さ50cmを測りしっかりした掘り方をもつが、各々に対応すべき柱穴は住居西側（調査区外）に存在することが考えられ、確定できない。このような柱穴の配置は規模は異なるがⅡ区2号住居のあり方に類似している。Pit 8・10・11・12は壁に沿って位置するが、その規模および配置からみて北東壁の内側に巡る周溝および小Pitに連続するものと考えられる。

炉 住居北側に偏在しPit 1～Pit 4を結ぶ直線上中央部やや外側に設定される。掘り方は径35cm、深さ25cmの規模をもち、炉内には口縁部および胴下半部を欠損する埋設土器（第28図1）が設置される。その際、埋設土器下部には、褐色土（ローム）が貼り付けられるように、埋められている。掘り方周辺には焼土が散布し、炉内にはブロック状の焼土が多量に含まれている。

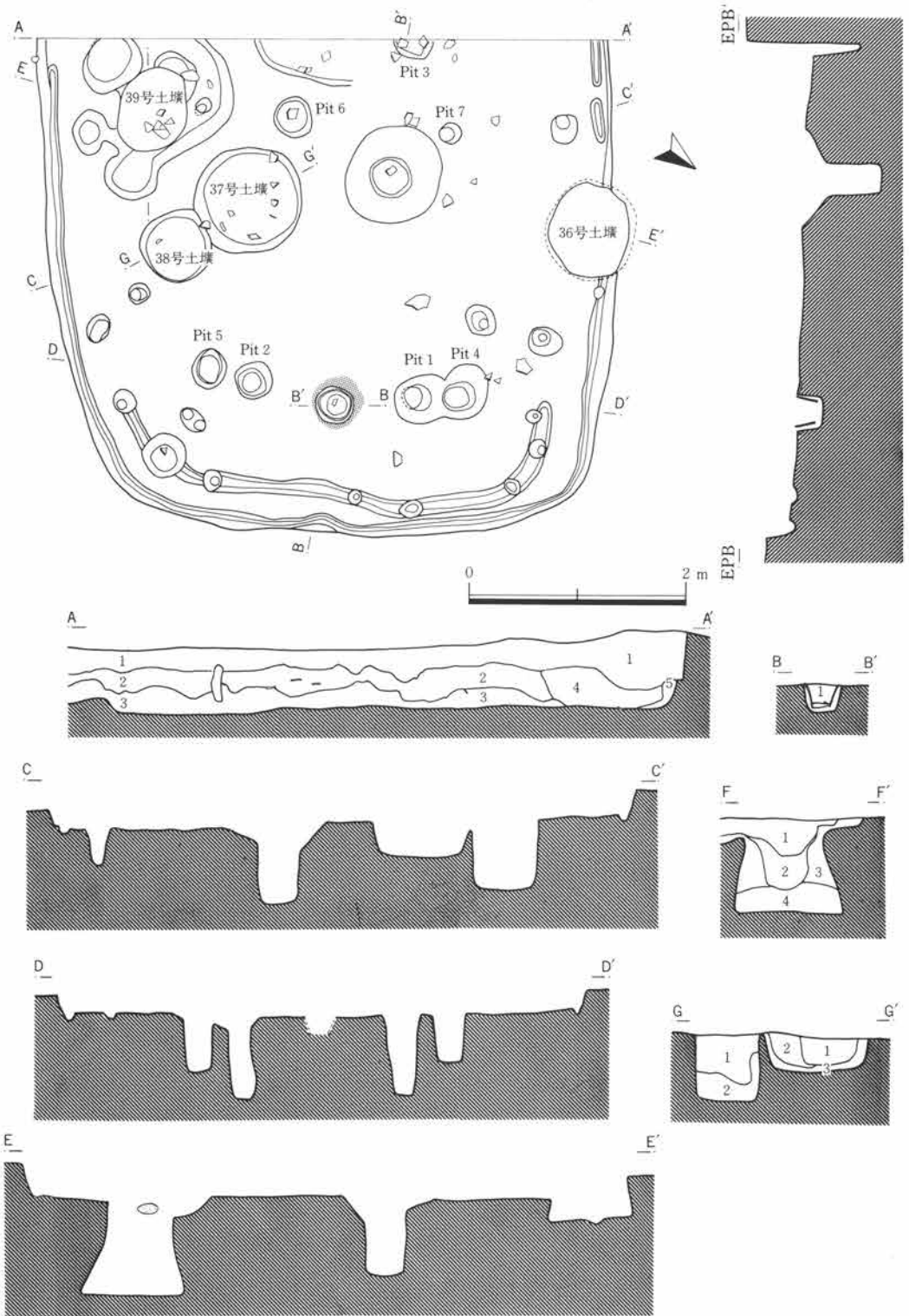
周溝 2本検出された。1本は壁に沿って巡る幅7cm、深さ5cmのもので、一部途切れる部分がある。もう1本は、この周溝の内側に巡るもので住居コーナーを両端とした範囲に掘り込まれ、幅14cm、深さ5cmの規模をもち周溝内には8個の小Pitがみられる。また、この周溝および小Pitは周溝が認められなくなるが、先述したようにPit 8・10・11・12に連続するように考えられる。

その他 住居内には36号・37号・38号・39号土壌が検出されたが、いずれも床面を切って掘り込まれている。

遺物 炉に設置される埋設土器の他、覆土中より多くの土器類が出土している。

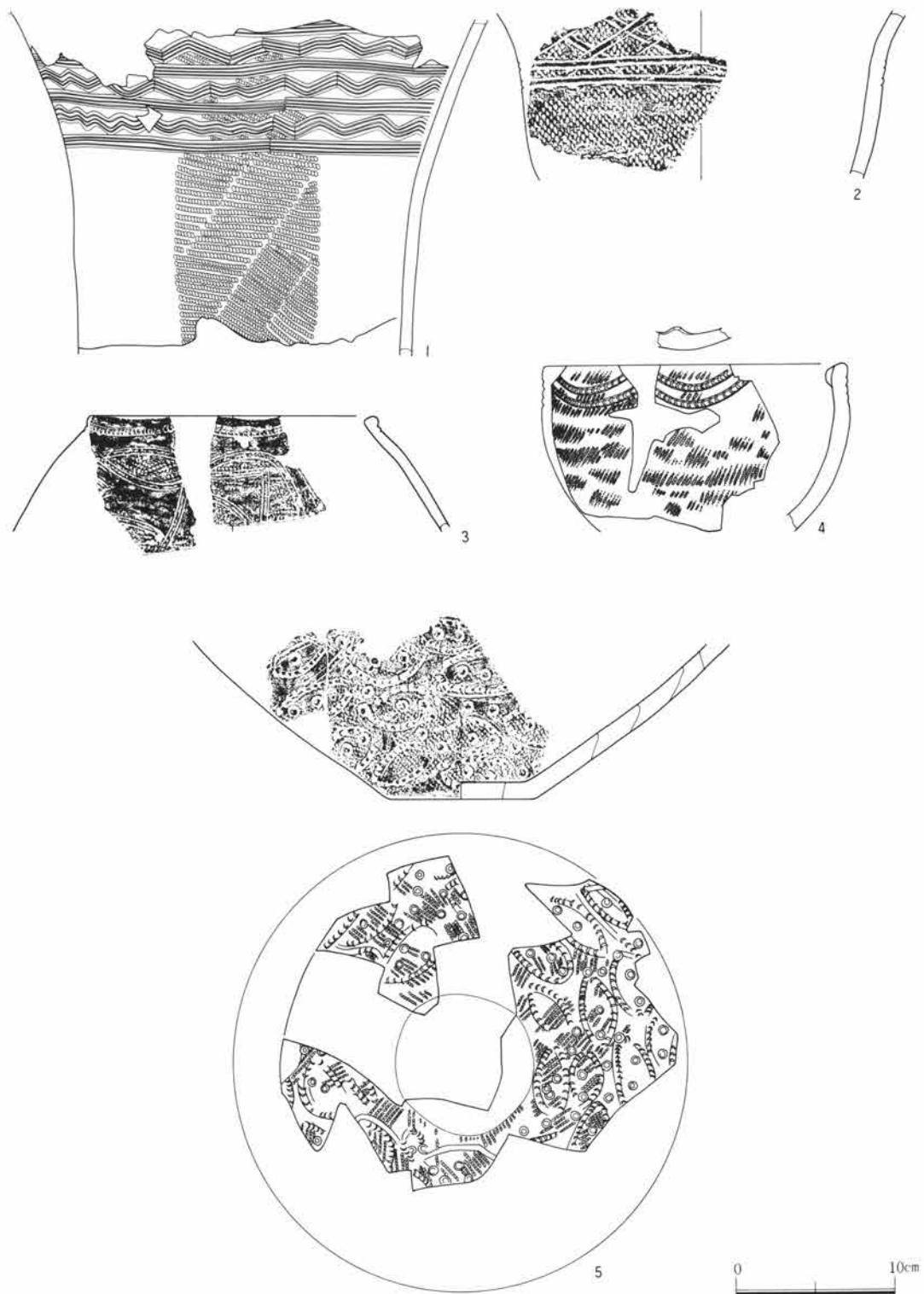
Ⅱ区3号住居土層（第27図）

- A-A' 1 黒色土 耕作土を主とする層。 2 ロームを混入する軟弱な層。 3 暗褐色土 ロームブロックを含む。
4 暗褐色土 ロームの他炭化物、焼土を多く含む。 5 ロームを多く混入する。壁崩落土。
- B-B' 1 黄褐色土 焼土を多量に含む。 2 ロームを主とした埋め土。
- F-F' 1 黒色土 軟弱。 2 黒褐色土 ローム粒混入。 3 黄褐色土 ローム粒混入。 4 褐色土 ローム含。
- G-G' 1 黒色土 パミスを含むしまりのある層。 2 黄褐色土 やや軟弱。 3 暗褐色土 ロームブロック混入。



第27図 II区3号住居平面図

IV 検出された遺構と遺物



第28図 II区3号住居出土土器



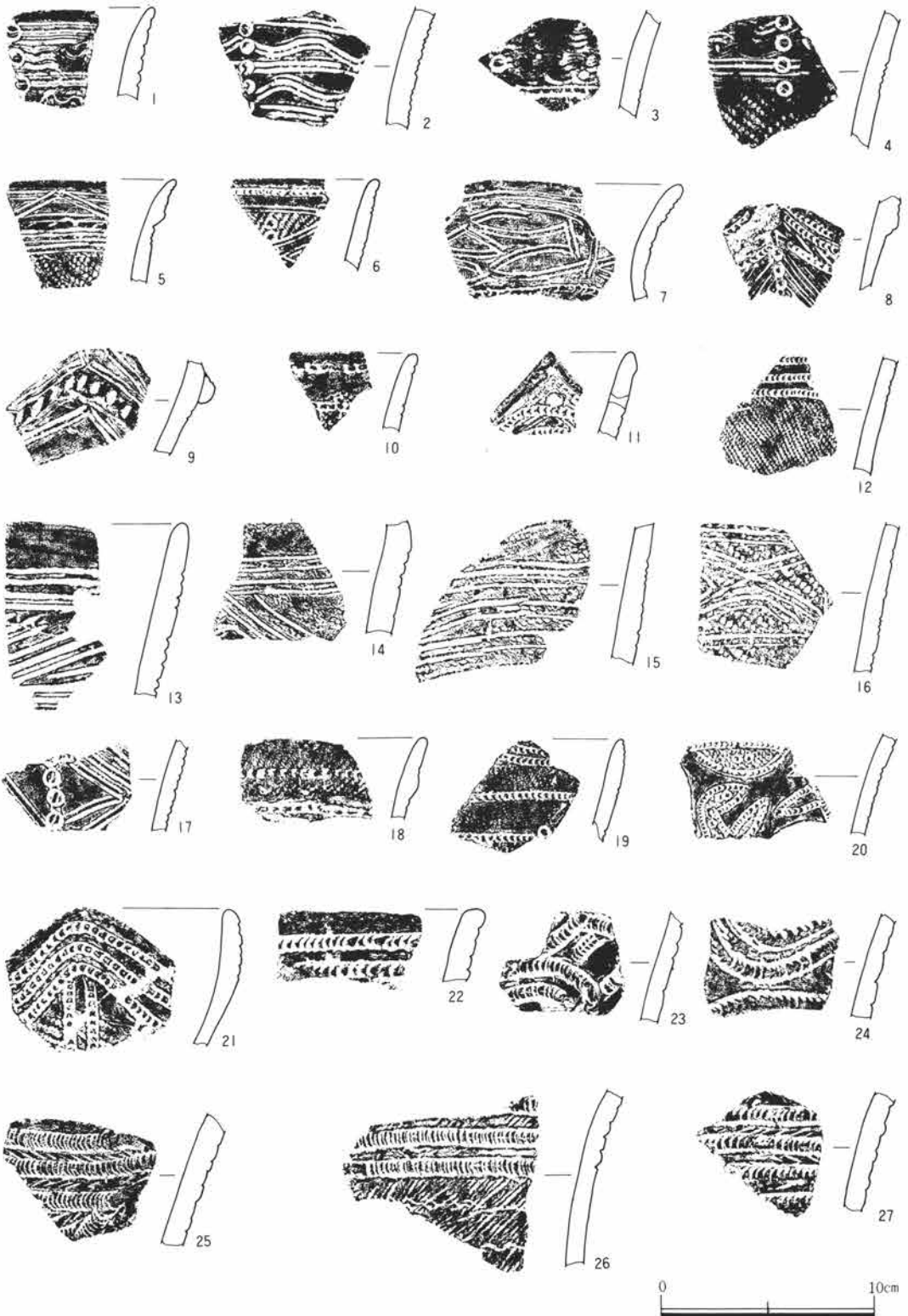
第29図 II区3号住居出土土器

II区3号住居出土遺物（第28図～第33図）

第28図1は炉内埋設土器である。口縁部が外反ぎみに開く深鉢形土器で、口縁および胴下半部を欠損する。器面は2次的に火熱を受けている。文様は4本1単位の櫛歯状工具により横走および山形状文が交互に施され文様帯を構成する。山形状文は、波頂部および波底部で一担止めながら施文する部分が波状文となる部分も認められやや不規則である。器全面にRL横位の縄文が施されるが、口縁部文様帯については櫛歯文の施文により大部分がかき消されている。縄文原体はよく撚られ、施文も良好である。同図2は深鉢形土器頸部片である。器面にRL³横位の縄文を施した後、半截竹管による平行線文が加えられる。文様帯は斜行線文の組み合わせによる格子状文構成をとり、頸部に横位の平行線文が2条巡る。この平行線文はやや幅狭であるが明瞭に施文され、平行線文間は平滑になり、縄文もかき消されている。縄文は原体、施文とも良好である。同図3は口縁部片である。胴部が球状にふくらみ、口縁部が内湾する浅鉢形を呈すると思われる。口縁部に沿って連続爪形文を1条巡らせ、半截竹管による平行線文で弧状入組文を施す。入組文区画の内側にはRLの縄文が加えられる。施文方位は不規則であり、条走向も一定していない。区画外側はよく整形され、縄文はみられない。器内面もていねいに整形されている。同図4は大型の浅鉢形土器であり、口縁部を欠損する。底部は小さく、胴部は外反ぎみに大きく開く。連続爪形文による木葉文もしくは木葉状入組文が施される。連続爪形文は間隔がやや粗く、省かれる部分もみられる。木葉文の区画内には2個1組とした円形竹管文が配される。器面にはRL横位の縄文が施されるが、施文はやや粗く、さらに文様施文に伴いかき消されるためより不明瞭なものとなっている。

第29図1は深鉢形土器の口縁部片である。口縁部が外反ぎみに開き、平縁を呈する。口縁および頸部に半截竹管による押し引き様の連続爪形文が巡る。幅広の平行線文により山形状の文様構成をもつ。施文は深く、平行線もやや太い。縄文は認められない。同図2は深鉢形土器の口縁部片である。口縁は平縁であるが、小突起が付される。文様は幅広の平行線文により横走、斜行線文および弧状文が施される。縄文は器全面に施されるが、極めて不明瞭である。LR横位が用いられていると観察される。同図3は深鉢形土器で、図上復原したものである。頸部に低い稜をもち、口縁部は外反ぎみにわずかに開く。平縁を呈するが小突起が付される。底部は端部が多少張り出し、底面は平坦である。底部、胴部および頸部に2本ずつ浮線文を巡らせ、口縁部には弧状に浮線文を施す。浮線文上にはやや太めの刻目が加えられ、さらに浮線文以外の器全面に円形竹管文が多数施文される。器面には縄文も認められ、RLが用いられるが、浮線文および円形竹管文によりほとんどがかき消されている。同図4は波状口縁の深鉢形土器である。ふくらみをもつ胴部から頸部で一旦括れ、口縁部は外反ぎみに開き上端部でわずかに内湾する。文様は半截竹管により加えられ、細い平行線文を帯状に数段施す。縄文は器全面に認められ、LR¹横位が施される。同図5は浮線文土器の底部である。底面は平坦で、端部はやや張り出しぎみとなる。浮線文は細く、刻目等は加えられていない。浮線文下には縄文が認められるが、0段多条のLR横位とみられる。

IV 検出された遺構と遺物



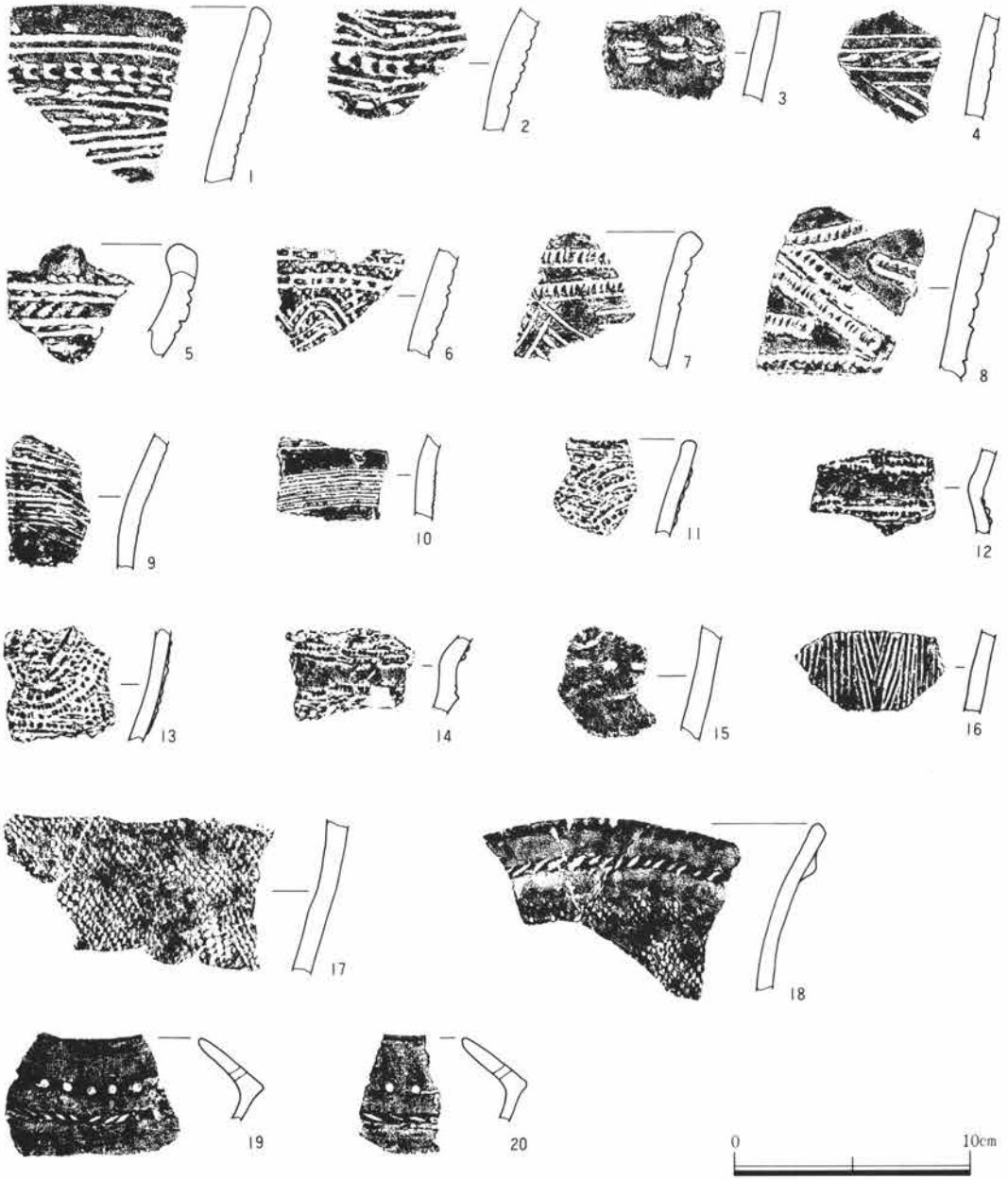
第30図 II区3号住居出土土器

IV 検出された遺構と遺物

第30図1～4は櫛歯状工具により文様を施すものである。1は横走線文と小波状文が施され、2～4には横走線文および波状文が施文される。いずれの土器も縦位の円形竹管文列が配される。4は胴部にRL横位の縄文が認められる。同図5は平縁の口縁部片で、口唇部が肥厚している。幅狭の横位平行線文を数条施し、その上に平行線文による斜行線文が加えられ口縁部文様帯を構成する。胴部にはRL横位の縄文が施文される。6は口縁部に沿って連続爪形文が1条巡り、弧状の平行線文の組み合わせによる肋骨文状のモチーフが認められ、円形竹管文も配される。縄文はLR横位である。7は大きく外反する口縁部で、平行線文により木葉状入組文が構成される。8は波状口縁を呈し、波頂部を欠損する。波頂部から平行線文および円形竹管文列を垂下させ、その両側に斜行線文を施し、肋骨文を構成する。また口縁上部は肥厚し、この部分には連続爪形文が加えられる。9は波状口縁を呈するが、波頂部を欠損する。口縁部下には刻目をもつ隆帯文が巡り、この隆帯文の両側には幅狭の平行線文が施される。10は連続爪形文が2条口縁に沿って巡る。連続爪形文間は無文となるが、以下は縄文が施される。11は波状口縁部である。口唇部はやや尖りぎみで、外側に稜をもつ。弧状の連続爪形文が認められるが、文様構成は不明である。波頂部には円形文が穿たれる。12は横位の連続爪形文帯以下の胴部にRL³横位が施文される。13～16は幅広平行線文により文様が施されるものである。いずれも横走、斜行および弧状の平行線文の組み合わせにより文様帯が構成される。15、16にはRL横位の縄文が施される。17は幅狭平行線文により菱形状構成がみられる。垂下する円形竹管文は接して加えられる。18は口縁部下に低い隆帯状の稜をもち、その両側に連続爪形文が巡る。縄文はLR横位が施文される。19は連続爪形文、円形竹管文が施され、縄文はRL横位である。20は連続爪形文により木葉状入組文が施され、入組文区画内にはRL横位の縄文および円形竹管文が配される。区画文外は磨消縄文としている。21～27はやや幅の広い連続爪形文により文様を施すものである。21は内湾ぎみの口縁部で波状口縁を呈する。25、27は連続爪形文間に刻目を施す。21、24にはRL横位、26はL横位の縄文が認められる。

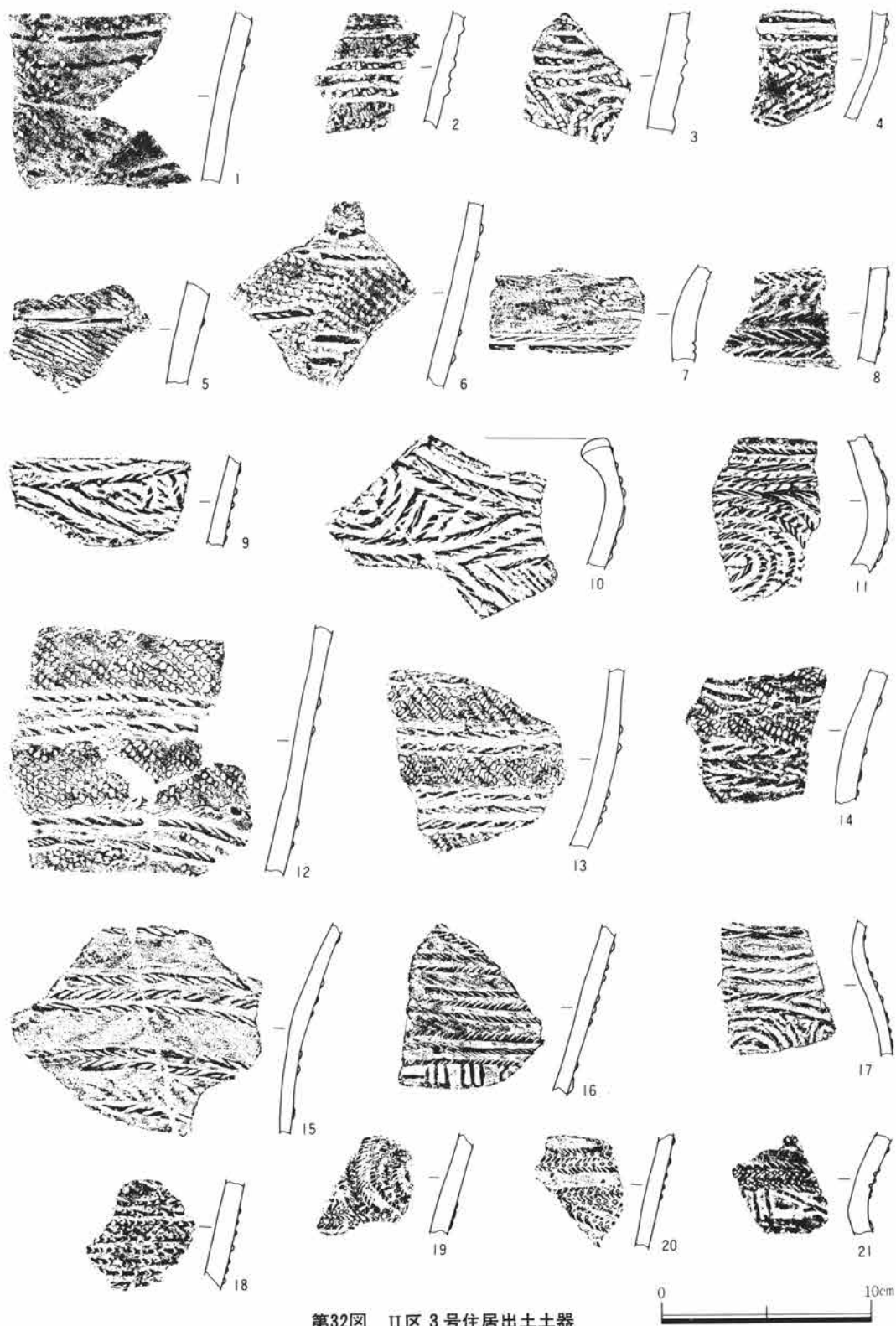
第31図1・2は平行線文に、押引きする連続爪形文を施し、2には刺突文も認められる。1は口縁部、2は胴部であり、同一個体とみられる。3は平行刺突文が施される。4は幅広平行線文が施され、刻目状の刺突が加えられる。5は第29図2に類似し、同一個体と考えられる。6は幅広の平行線文による波状文と連続爪形文が施され、RL横位の縄文が認められる。7は口縁部に沿って2条連続爪形文が巡り、以下幅広平行線文による弧状文が施される。8は連続爪形文により文様構成される。連続爪形文は幅広で、施文も深い。9、10は細い平行線文により横位の条線文が施される。11～14は浮線文が施される。浮線文は細く、いずれも刻目をもつ。16は縦位の集合条線が施され、矢羽根状の構成をもつとみられる。17はRL³横位の縄文が施される。18は口縁部下に1条刻目をもつ隆線が付される。以下はRL横位の縄文となる。19、20は有孔の浅鉢形土器の口縁部であり、同一個体とみられる。口縁部がくの字状に内折し、この部分に小孔が穿たれる。屈曲部には稜をもち、この部分に刻目を施す。器内外面とも整形は良好である。

IV 検出された遺構と遺物

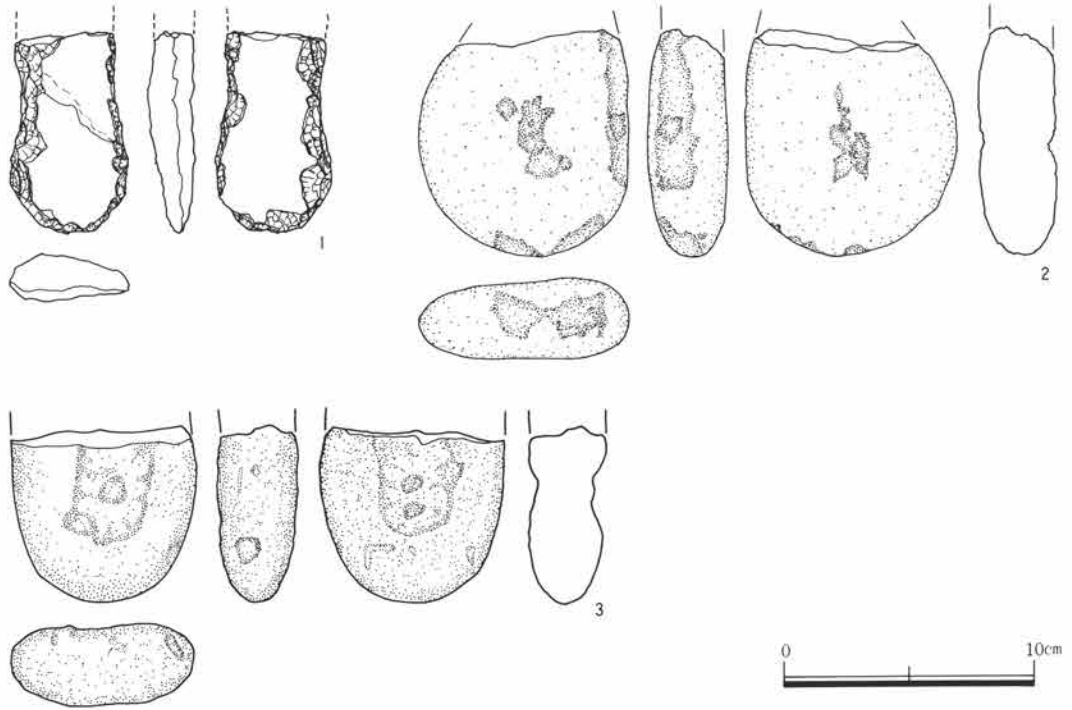


第31図 II区 3号住居出土土器

IV 検出された遺構と遺物



第32図 II区3号住居出土土器



第33図 II区3号住居出土石器

第32図1～21は浮線文土器である。1～4は浮線文上に縄文が施される。いずれもRLが用いられている。5～21は浮線文上に刻目を施す。18は連続爪形文状の刻目が加えられている。16は横走る浮線文上には矢羽根状の刻目をもつが、梯子状浮線文の縦位の浮線文上には刻目が加えられず無文となっている。19～21は細く偏平な浮線文が付され、浮線文間には細い棒状工具による刺突が加えられている。

第33図1は打製石斧で、基部を欠損する。2、3は凹石であるが、両者とも欠損品である。いずれも両面に複数の凹穴が認められる。

(2) 土 壌

今回の調査により、I区で52基、II区で39基計91基の土壌が検出された。分布状態は、調査区西側にあたる南西斜面に全体の60%近くが集中し、その他についてはI区3号住居およびII区2号住居周辺にまとまったあり方を示している。また土壌の形態は、梯形断面を呈するもの、壁がオーバーハングしフラスコ状を呈するものの2者が大半を占めるが、幅が狭く深度も深い長円形プランを呈するいわゆる陥穴状の土壌も2基存在する。各土壌の時期は、共伴遺物の存否により

Ⅳ 検出された遺構と遺物

確実に決定し得るものの多くないが、概ね縄文時代前期（内2基は中期）に属すると考えられる。

a. I区の土壌（第34図～第38図）

1号土壌（第34図）

J-37グリッドに位置する。口径185cm×110cmの楕円形プランを呈し、深さは20cmを測る。

1号土壌出土土器（第39図1）

土壌底面に接して検出された。丸底の底部から開きぎみに立ち上がり、胴部に1段稜をもち頸部がくの字状に内折し口縁部は直立する。口縁部直下には小孔が11個巡る。無文である。

2号土壌（34図）

D-35・36グリッドに位置する。口径180cm×140cmの楕円形プランを呈し、深さは45cmを測る。

2号土壌出土土器（第41図1、2）

接合関係はないが、同一個体とも思われる。幅広の連続爪形文を横走させ、その間の隆帯状に残る部分に刻目を施す。

3号土壌（第34図）

B-36グリッドに位置する。口径100cmの円形プランを呈し、深さは30cmを測る。

3号土壌出土土器（第41図3）

深鉢口縁部片。口唇部が若干肥厚し、3本1単位の櫛歯状工具により平行線文、波状文が施される。縄文はRL横位。

4号土壌（34図）

C-35グリッドに位置する。西側を5号土壌により切られている。口径85cm、底径110cmの円形プランを呈するフラスコ状土壌である。深さは90cmを測る。

4号土壌出土土器（第39図2）

頸部がわずかに括れ、口縁部が外反ぎみに開く平縁の深鉢形土器である。底部は欠損する。器全面にRL横位が施される。原体はよく撚られるが、施文がやや乱れ条走向に不整な部分がある。

5号土壌（第34図）

4号土壌を切って掘り込まれている。口径85cm、深さ30cmを測る。

5号土壌出土土器（第41図4、5）

4は、口縁が内傾する深鉢の口縁部片。くの字状に内傾する口縁の稜に連続爪形文が施される。縄文はRL横位。部分的に結節回転文もみられる。5は、波状口縁の口縁部片。口縁に沿って平行線文により文様帯が構成される。縄文はRL横位。

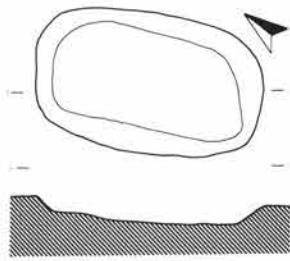
6号土壌（第34図）

A-35グリッドに位置する。口径110cm、深さ55cmを測る。東壁がオーバーハングする。

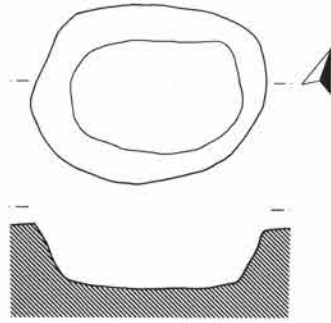
7号土壌（第34図）

B-34グリッドに位置する。口径130cm、底径140cmの円形プランを呈するフラスコ状土壌であ

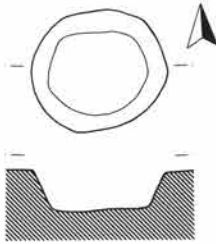
IV 検出された遺構と遺物



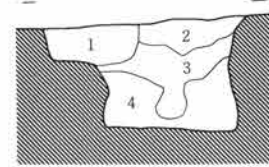
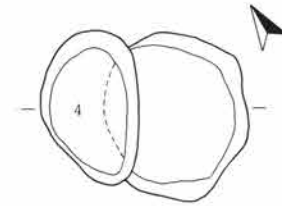
1号土壌



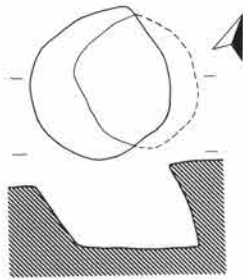
2号土壌



3号土壌

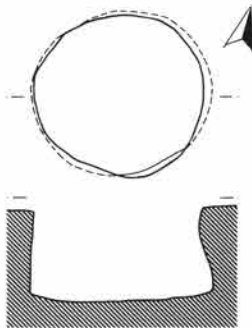


4・5号土壌

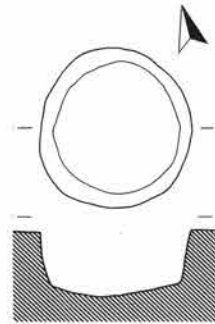


6号土壌

- 1 黒褐色土層 褐色土ブロックを含み、硬くしまった層
- 2 黄褐色土層
- 3 黒褐色土層 炭化物も多く含む。
- 4 褐色土層



7号土壌



8号土壌

第34図 I 区 土 壌 (1)



Ⅳ 検出された遺構と遺物

る。深さは70cmを測り、底面中央部がわずかにくぼんでいる。

7号土壇出土土器（第39図3、4、5、第41図6、第43図1、2、3、4）

第39図3は、口縁部が外反ぎみに開く平縁の深鉢形土器である。器全面にRLR³横位が施される。原体は非常に細くよく撚られ、部分的に結節回転がみられる。同図4は、口縁部が外反ぎみに開く平縁の深鉢形土器である。縄文はRLR³横位が施される。同図5は、深鉢形土器の底部片である。器面にRL横位が施される。第41図6は、胎土中に少量繊維が含まれる。波状口縁を呈し口縁に沿って2条連続爪形文が巡り、半截竹管による平行線文で肋骨文が施される。縄文はRL横位である。第43図1は、胎土中に繊維を含み、口縁部が外反する波状口縁の深鉢形土器である。口縁に沿って2条平行線文を巡らせその間を磨消縄文としている。また波頂部直下には小突起を付着させ、この部分および波底部から円形竹管文列を胴部中央の2条の平行線文により区画された磨消縄文帯まで垂下させる。縄文はRLr³横位が施される。器表裏面ともよく整形され、含まれる繊維はあまり露出しない。同図2は、胎土中に繊維を含む波状口縁部片である。口縁に沿って3条結節的な連続爪形文を巡らせ、その間を粗い磨消縄文としている。また口縁直下から円形竹管文を垂下させる。縄文は、RLRr⁴横位が施されるが、施文方位は不整であり条走向に乱れがある。原体はよく撚られている。また結節回転が1条横走する。器表裏面ともよく整形され、含まれる繊維はあまり露出しない。同図3は、繊維を含む波状口縁部片である。口唇部に粗い刻目を施し、口縁直下には無文帯が巡る。器面にはRLr³およびLRr³横位による粗い羽状縄文が施される。器表裏ともよく整形され、含まれる繊維はあまり露出しない。同図4は、胎土中に繊維を含む胴部破片である。縄文は付加条第1種(RL+0段、LR+0段)が用いられ各々横位に施し菱形状の構成となる。またopenendが1条横走する。

8号土壇（第34図）

B-33グリッドに位置する。口径125cm、深さ50cmを測る。底面はやや起伏がある。

9号土壇（第1図）

A-33グリッドに位置する。口径140cm、深さ36cmを測る。

10号土壇（第35図）

E-31グリッドに位置する。口径80cm、深さ40cmを測る。

11号土壇（第35図）

F-31グリッドに位置する。口径120cm、底径130cmの円形プランを呈するフラスコ状土壇である。東壁の一部は垂直に立ち上る。

12号土壇（第35図）

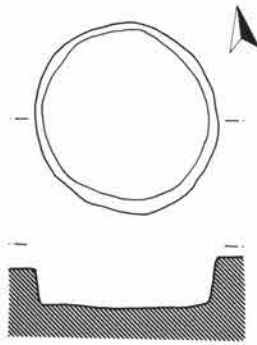
G-27グリッドに位置する。大半を13号土壇により壊されているため、規模は不明である。

13号土壇（第35図）

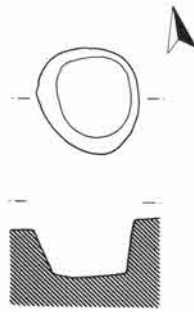
12号土壇を切って掘り込まれている。口径160cm、深さ50cmを測る。

14号土壇（第35図）

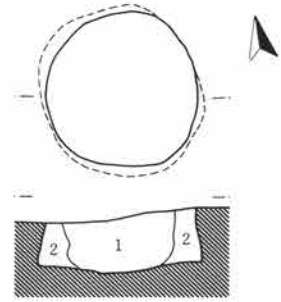
IV 検出された遺構と遺物



9号土壌

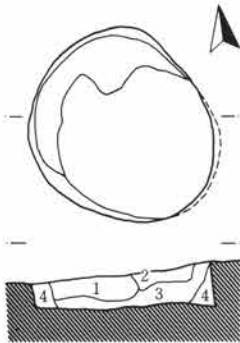


10号土壌

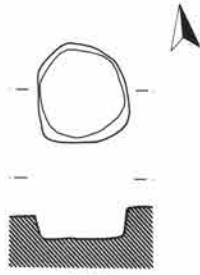


11号土壌

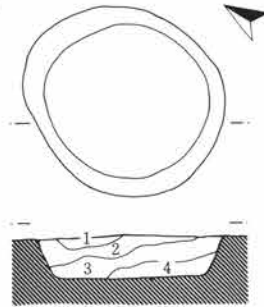
1. 黒褐色土層 軟弱な褐色土が混入する硬くしまった層。
2. 黄褐色土層 ソフトロームおよびハードロームの混入する層。



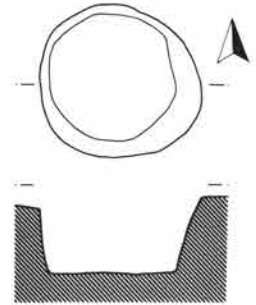
12・13号土壌



14号土壌



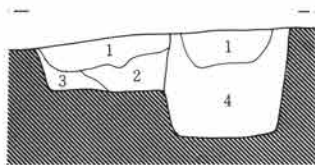
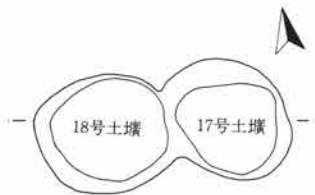
15号土壌



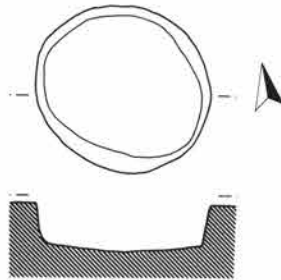
16号土壌

1 褐色土層 ロームを多量に含む。
2 暗褐色土層 ロームブロックを含みしまりあり。
3 褐色土層 ロームを少量含み、しまりに乏しい層。
4 灰褐色土層 2と類似するが色調がやや灰色がる。

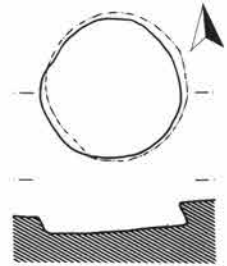
1 暗褐色土層 焼土、炭化物を含む。
2 暗褐色土層 炭化物を含む。
3 暗褐色土層 ローム粒、炭化物を含む。
4 褐色土層 ロームを多く混入する。



17・18号土壌



19号土壌



20号土壌

1 黒褐色土層 炭化物、ロームブロックを含み硬くしまっている。
2 褐色土層 炭化物を含む。
3 黄褐色土層 ロームブロックを含み、やわらかい。
4 褐色土層 炭化物、焼土粒を含む。

第35図 I 区 土 壌 (2)



IV 検出された遺構と遺物

G-26グリッドに位置する。口径70cm、深さ20cmを測る小規模な土壌である。

15号土壌 (第35図)

H-26グリッドに位置する。口径160cm、深さ34cmを測る。

16号土壌 (第35図・第44図1～3、9)

L-27グリッドに位置する。口径125cm×100cmの楕円形プランを呈し、深さは50cmを測る。

16号土壌出土土器 (第41図7・第44図1～3、9)

半截竹による平行線文で粗雑な波状文が施され、円形文を縦位に配する。縄文はみられない。第44図1、2、3は深鉢形土器胴部である。RL縦位の縄文が施され、懸垂文間は磨消縄文とする。8は底部で、縦位の条線文が施される。1～3、8は中期加曽利E3式に比定される。

17号土壌 (第35図)

L・M-26グリッドに位置する。西壁は18号土壌に切られる。口径104cm、深さ83cmを測る。

17号土壌出土土器 (第41図10、11)

10は胴部破片、11は口縁部片である。共にRL横位が施される。口は半截竹管により肋骨文、山形文を組み合わせた文様構成をもつ。又、交点に円形文を施す。

18号土壌 (第35図)

17号土壌を切って掘り込まれている。口径94cm、深さ40cmを測る。

19号土壌 (第35図)

M-25・26グリッドに位置する。口径135cm、深さ32cmを測る。

19号土壌出土土器 (第41図8・第44図4～8)

波状貝殻文が施される。小片のため全体の文様構成は不明であるが、浮島2式に比定される。第44図4は口縁部にふくらみをもち、上部が外反する。口縁外反部は無文帯となり、楕円区画文内にはRL³が施文される。5は蕨状沈線文が加えられる。6は懸垂文間を磨消縄文とし、RL縦位の縄文部には曲線文を垂下させる。7は条線文が施される。8はRLR縦位の複節縄文が施される。4～8は中期加曽利E3式に比定される。

20号土壌 (第35図)

E・F-25グリッドに位置する。口径108cm、底径116cm、深さ17cmのフラスコ状土壌である。

21号土壌 (第36図)

C-28グリッドに位置する。口径90cm、底径100cm、深さ38cmを測る円形プランを呈するフラスコ状土壌である。

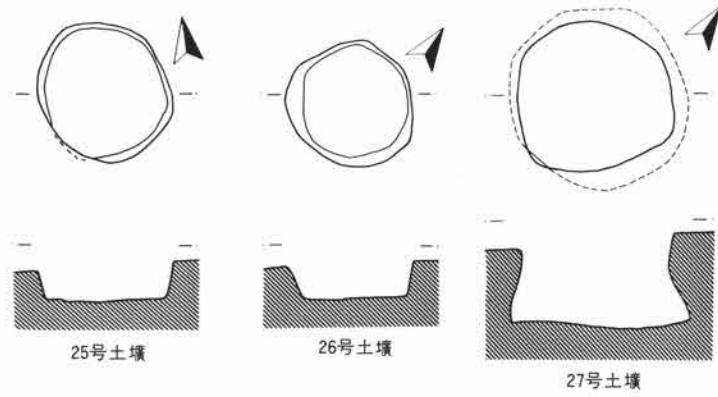
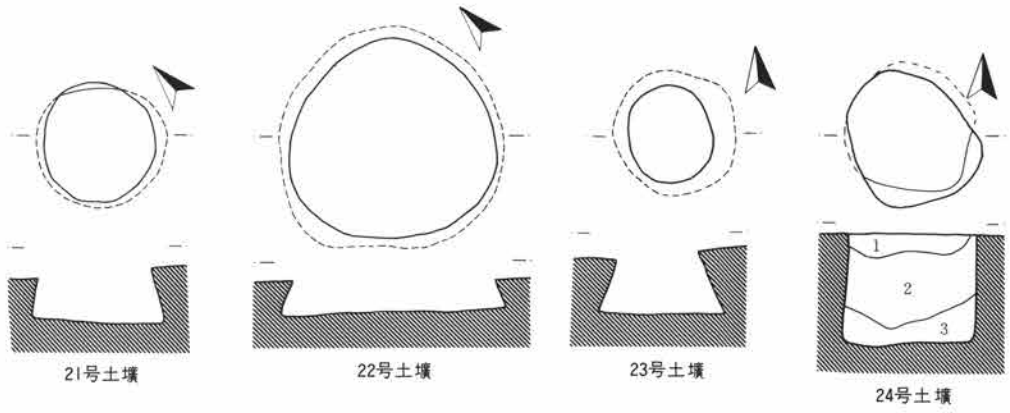
22号土壌 (第36図)

21号土壌に接する。口径160cm、底径179cm、深さ26cmを測るフラスコ状土壌である。

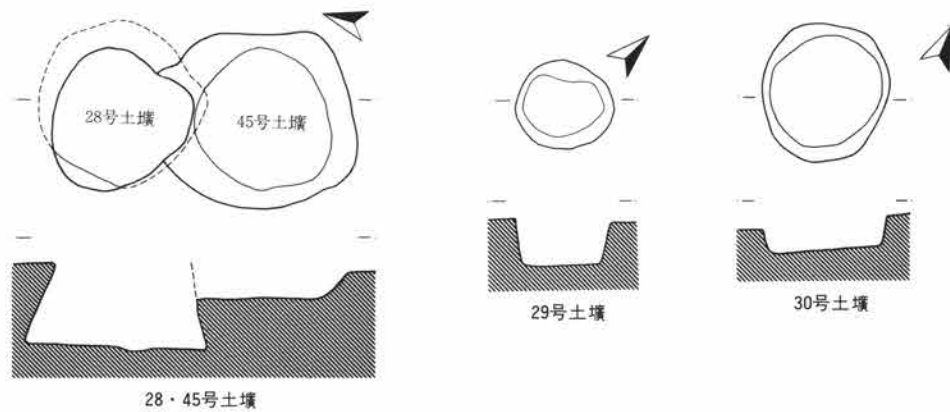
23号土壌 (第36図)

C-33グリッドに位置する。口径73cm、底径100cmを測る円形プランのフラスコ状土壌である。

23号土壌出土土器 (第41図9)



- 1 暗褐色土層 ロームを含みや粘性をもつ。
- 2 黒色土層 ロームブロックを含み、硬くしまっている。
- 3 褐色土層 ロームを多く含み、やや粘性をもつ。



第36図 I 区 土 壌 (3)



Ⅳ 検出された遺構と遺物

連続爪形文および平行線文により文様構成を行う。縄文は文様によって消失しているが、RL横位が施されている。

24号土壌（第36図）

F・G-18グリッドに位置する。口径100cmの不整円形を呈し、深さは84cmを測る。

25号土壌（第36図）

G-16グリッドに位置する。口径107cm、深さ29cmを測り、北壁の一部がやや抉れ込んでいる。

26号土壌（第36図）

G-15グリッドに位置する。口径100cm、深さ26cmを測り、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。

27号土壌（第36図）

F・G-15グリッドに位置する。口径120cm、底径145cm、深さ63cmのフラスコ状土壌である。

28号土壌（第36図）

I-14グリッドに位置し、45号土壌を切って掘り込まれている。口径115cm、底径135cmのフラスコ状土壌であり、深さは64cmを測る。

28号土壌出土土器（第39図6、8、第41図13）

第39図6は、口縁部が外反ぎみに開く深鉢形土器である。器面にはLR横位が施される。同図8は、頸部がやや括れる深鉢形土器である。口縁部および胴下半部は欠損する。器面にはRL横位が施される。なお原体はよく撚られている。第41図13は、3本1単位の櫛歯状工具と半截竹管の2種類の工具により有節線文が施される。この文様の上部には半截竹管による弧線文の一部がみられ、下部には不規則な横走線文が施される。縄文はRL横位が部分的に認められる。

29号土壌（第36図）

D-10グリッドに位置する。口径78cmの不整円形の小規模な土壌である。深さは34cmを測る。

29号土壌出土土器（第41図14、15、16、17）

14は突起の付く口縁部片で、半截竹管による平行線文、山形文が施されまた円形文が縦位に配される。15、16は1段Lの結節回転が施される。16、17はRL横位である。

30号土壌（第36図）

D-16グリッドに位置する。口径100cm、深さ10cmを測る円形プランを呈する土壌である。

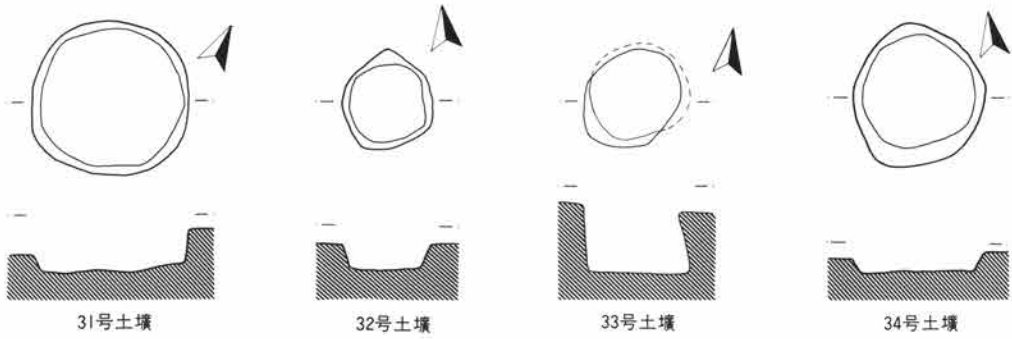
30号土壌出土土器（第39図7、第41図18、19）

第39図7は、口縁部が内湾する波状口縁の深鉢形土器である。口縁に沿って平行縄文が巡り、横走線文、縦走線文および斜行線文により三角状もしくは菱形状の文様が構成される。また横走線文と縦走線文の交差部にはX字状の曲線文が施される。文様は細い竹管により表出されるが、施文は粗い。縄文はみられない。第41図18は、連続爪形文間に刻目を施し、縄文はRL横位である。同図19は、鋭角的な刻目をもつ浮線文を施し、縄文はRL横位である。

31号土壌（第37図）

C・D-16グリッドに位置する。口径120cmの円形プランを呈し、深さは20cmを測る。

IV 検出された遺構と遺物

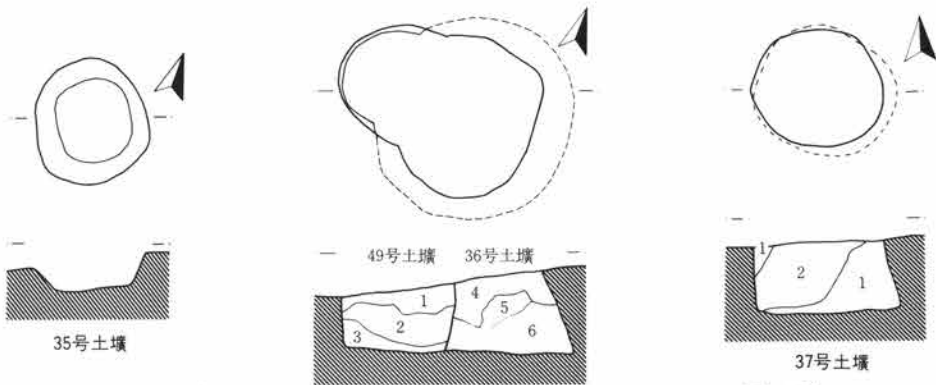


31号土坑

32号土坑

33号土坑

34号土坑



35号土坑

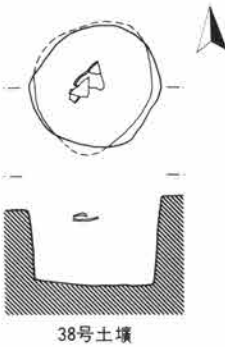
49号土坑 36号土坑

37号土坑

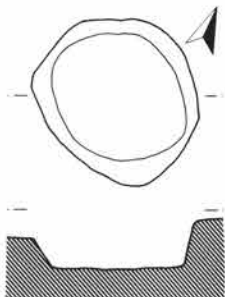
49・36号土坑

- 1 黒褐色土層 ソフトロームをブロック状に含む。
- 2 黒色土層 ソフトロームをブロック状に含む、炭化物を多く含む。
- 3 黒色土層 ロームを多量に含む。
- 4 黒褐色土層 ロームブロックを含む。
- 5 黒褐色土層 ロームブロックを多量に含む。
- 6 黒褐色土層 ロームブロック（ハード）を含む。

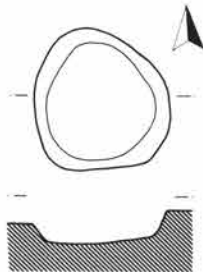
- 1 褐色土層 ロームブロックを多く含む、壁面崩壊がある。
- 2 褐色土層 1より硬く、ロームブロックを含む。



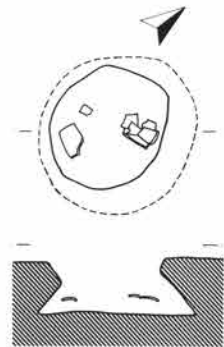
38号土坑



39号土坑



40号土坑



41号土坑

第37図 I 区土坑 (4)



IV 検出された遺構と遺物

32号土壌 (第37図)

B-17グリッドに位置する。口径75cmの不整形円形を呈し、深さは20cmを測る。

33号土壌 (第37図)

A-13グリッドに位置する。口径74cmの不整形円形を呈し、底径は80cm、深さは50cmを測る。

34号土壌 (第37図)

D-13グリッドに位置する。口径110cm、深さ12cmを測る円形プランを呈する土壌である。

35号土壌 (第37図)

C-10・11グリッドに位置する。口径95cmの不整形円形を呈し、深さ20cmを測る。

36号土壌 (第37図)

B-12グリッドに位置する。西壁部は49号土壌により切られている。口径125cm、底径165cm、深さ65cmのフラスコ状土壌である。

36号土壌出土土器 (第41図21)

浮線文上に縄文が施される。器面に縄文を施した後に浮線文を貼り付け、その上に器面に用いたものと同様のRL横位を付す。浮線文は縄文施文により低くつぶれ、よく貼り付いている。またLの結節回転がみられる。

37号土壌 (第37図)

B-13グリッドに位置する。口径100cm、深さ56cmを測り、底径は112cmである。

37号土壌出土土器 (第41図22)

口唇部は平坦で外側に面をもち、この部分に条線文が施される。口縁部には三角形の刺突文列が加えられる。

38号土壌 (第37図)

B-14グリッドに位置する。口径100cmの不整形円形を呈し、深さは63cmを測る。

38号土壌出土土器 (第40図1、2)

第41図1は、深鉢形土器の胴部片である。器面にRL横位を施した後に矢羽根状の刻目をもつ浮線文が横走する。同図2は、丸味をもつ胴部から頸部がすばまる器形を呈する。巾5mmの平行線文による横走線文、格子状文が施され文様帯が構成される。器面にはRL横位が施される。

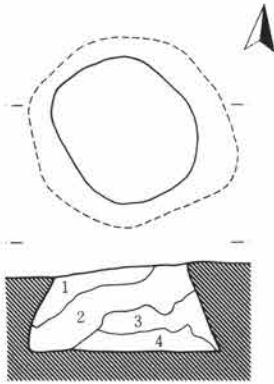
39号土壌 (第37図)

F-14グリッドに位置する。口径130cmの不整形円形を呈し、深さは27cmを測る。

39号土壌出土土器 (第40図3、第42図1、2、6)

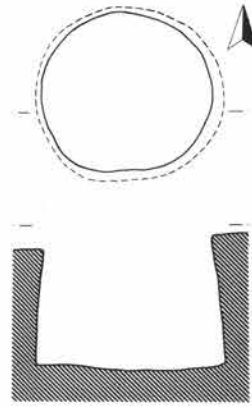
第40図3は、口縁部が内湾し、4単位のゆるやかな波状口縁を呈する。文様は巾4mmの平行線文により曲線文、弧線文が施され文様帯が構成される。また部分的に平行線文間に爪形文がみられる。縄文はゆるい原体により浅く施されるため不明瞭であるが、口縁部以下全面にLR横位が施文される。第42図1は、平縁の口縁部片で、巾4mmの平行線文、弧線文により文様構成される。同図2は、刻目をもつ浮線文により横走状、弧線状、曲線状の複雑な文様が施される。浮線文上の

IV 検出された遺構と遺物

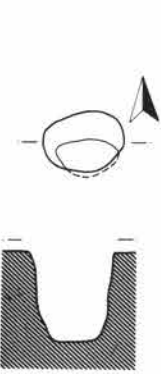


42号土壌

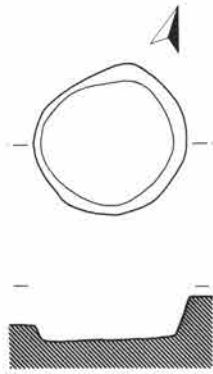
- 1 暗褐色土層 ロームブロックを含む、硬くしまっている。
- 2 暗褐色土層 炭化物、ロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土層 ロームブロックを含む、土質やや軟弱である。
- 4 暗褐色土層 炭化物を少量含む。



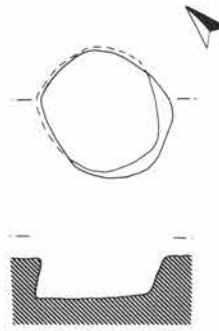
43号土壌



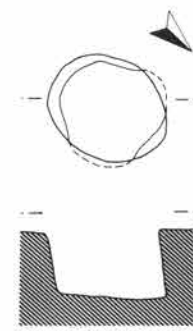
44号土壌



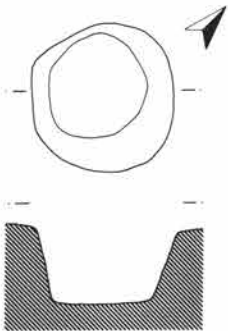
46号土壌



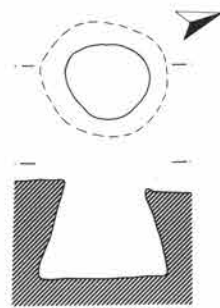
47号土壌



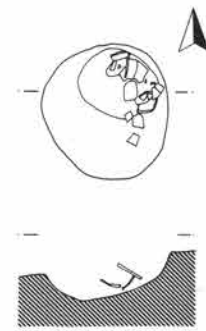
48号土壌



50号土壌



51号土壌

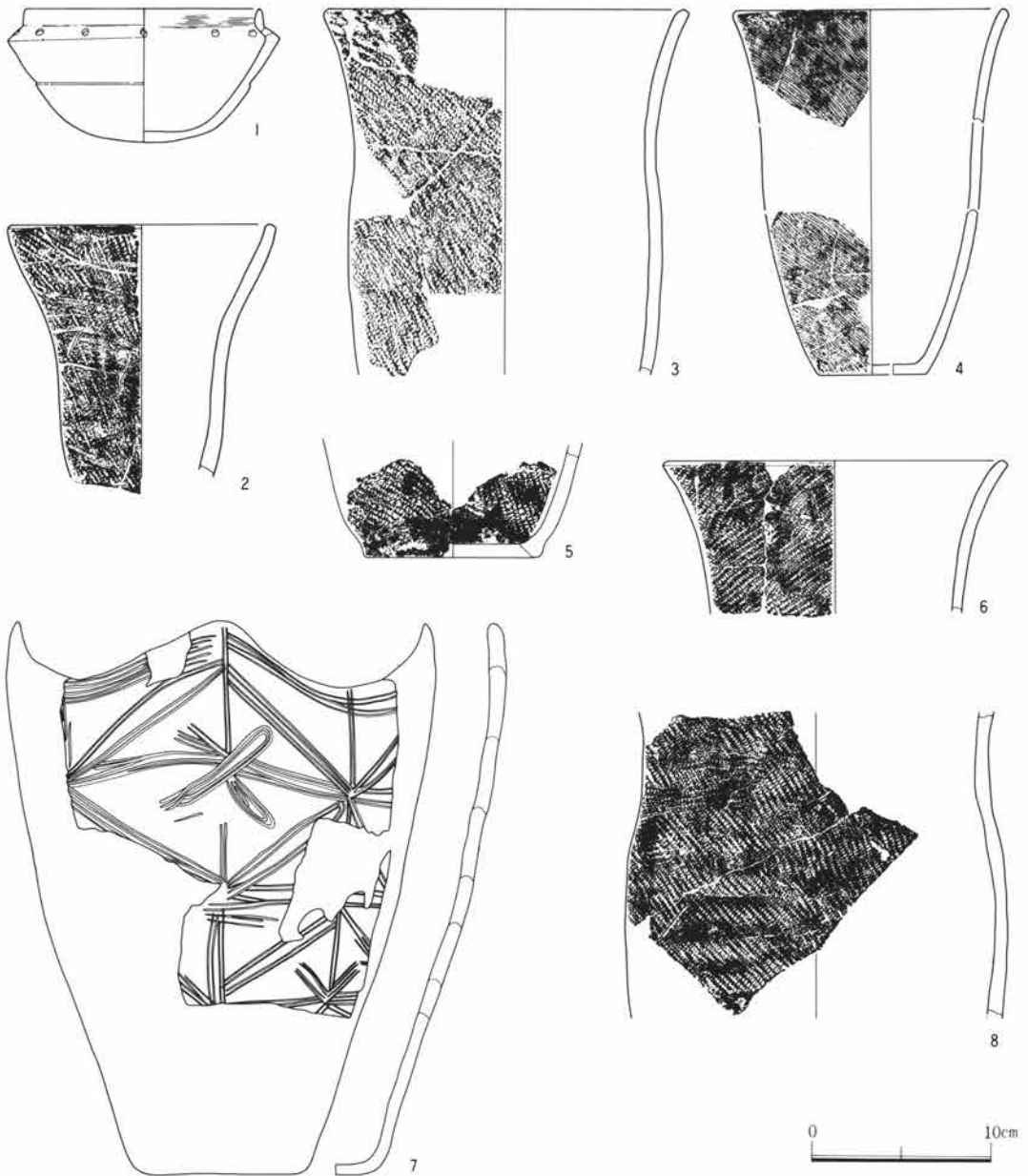


52号土壌

第38図 I 区 土 壌 (5)



IV 検出された遺構と遺物



第39図 I区土壌出土土器

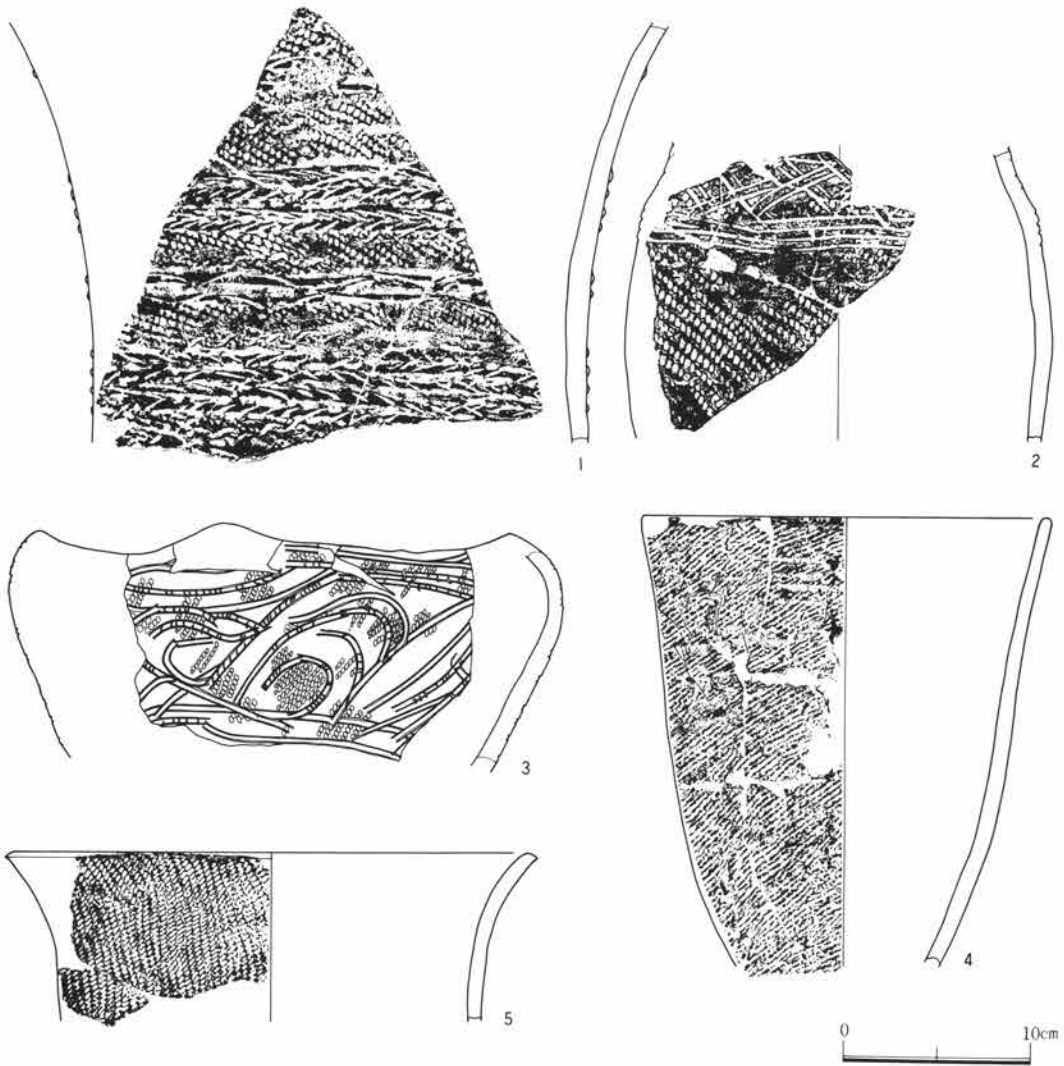
刻目は細い棒状工具により付される。器面にはRL横位が施される。同図6は、波状貝殻文の施される胴部片である。

40号土壌（第37図）

E-14グリッドに位置する。口径110cmの不整形円形を呈し、深さは20cmを測る。

40号土壌出土土器（第42図3）

刻目をもつ浮線文により横走状、弧線状、縦走状の文様構成がとられる。浮線文上の刻目は細



第40図 I区土壙出土土器

い棒状工具により付される。器面にはRL横位が施される。

41号土壙 (第37図)

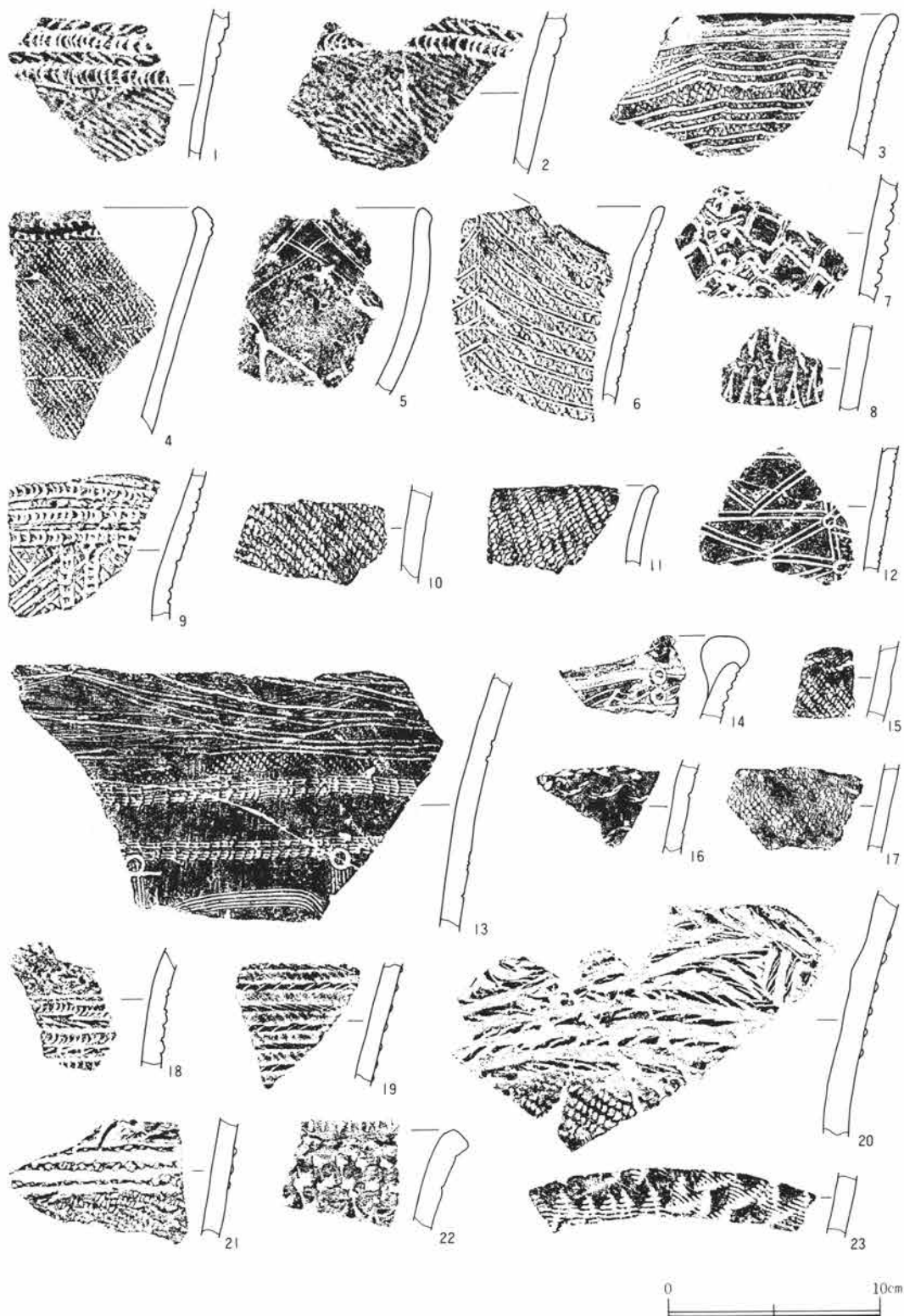
F-14グリッドに位置する。口径95cm、底径125cm、深さ41cmを測るフラスコ状土壙である。

41号土壙出土土器 (第40図4、第42図4)

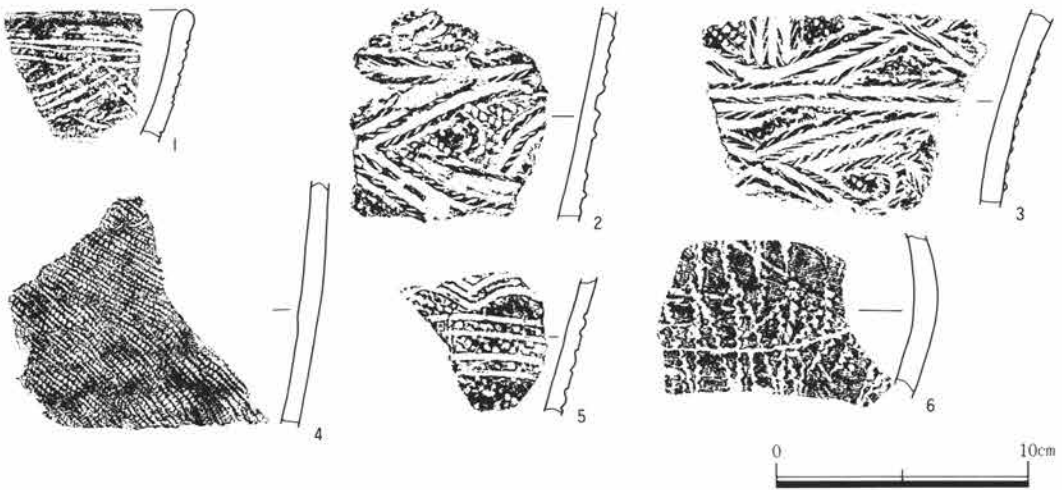
第40図4は、胴部から口縁部にかけて開きぎみに立ち上がる平縁の深鉢形土器である。底部は欠損する。器面にはL横位が施され、また縄文施文の際に黒浜式土器にみられるような原体の移動に伴って残る粘土の盛り上がり部分が部分的に認められる。原体はよく撚られ丁寧に施文されている。第42図4は、胴部片で、RL³横位が施され部分的にLの結節回転がみられる。

42号土壙 (第38図)

IV 検出された遺構と遺物



第41図 I区土壇出土土器



第42図 I区土壌出土土器

G・H-17グリッドに位置する。口径115cm、底径155cm、深さ65cmを測るフラスコ状土壌である。

43号土壌（第38図）

H-11グリッドに位置する。口径135cm、底径150cm、深さ95cmを測るフラスコ状土壌である。

43号土壌出土土器（第42図、5）

半截竹管により巾6mmの平行線文、波状文が施される。器面にはRL横位が施される。

44号土壌（第38図）

G-18グリッドに位置し、24号土壌に接する。口径63cm、45cmの不整円形を呈し、深さ67cmを測る。

44号土壌出土土器（第40図5）

口縁部が外反ぎみに開く平縁の深鉢形土器である。縄文はRLであるが、施文方位は一定せず横位もしくは斜位となっている。

45号土壌（第36図）

I-14・15グリッドに位置し、28号土壌に切られる。口径135cm、深さ23cmを測る。

46号土壌（第38図）

A-20グリッドに位置する。口径120cmの円形プランを呈し、深さ22cmを測る。

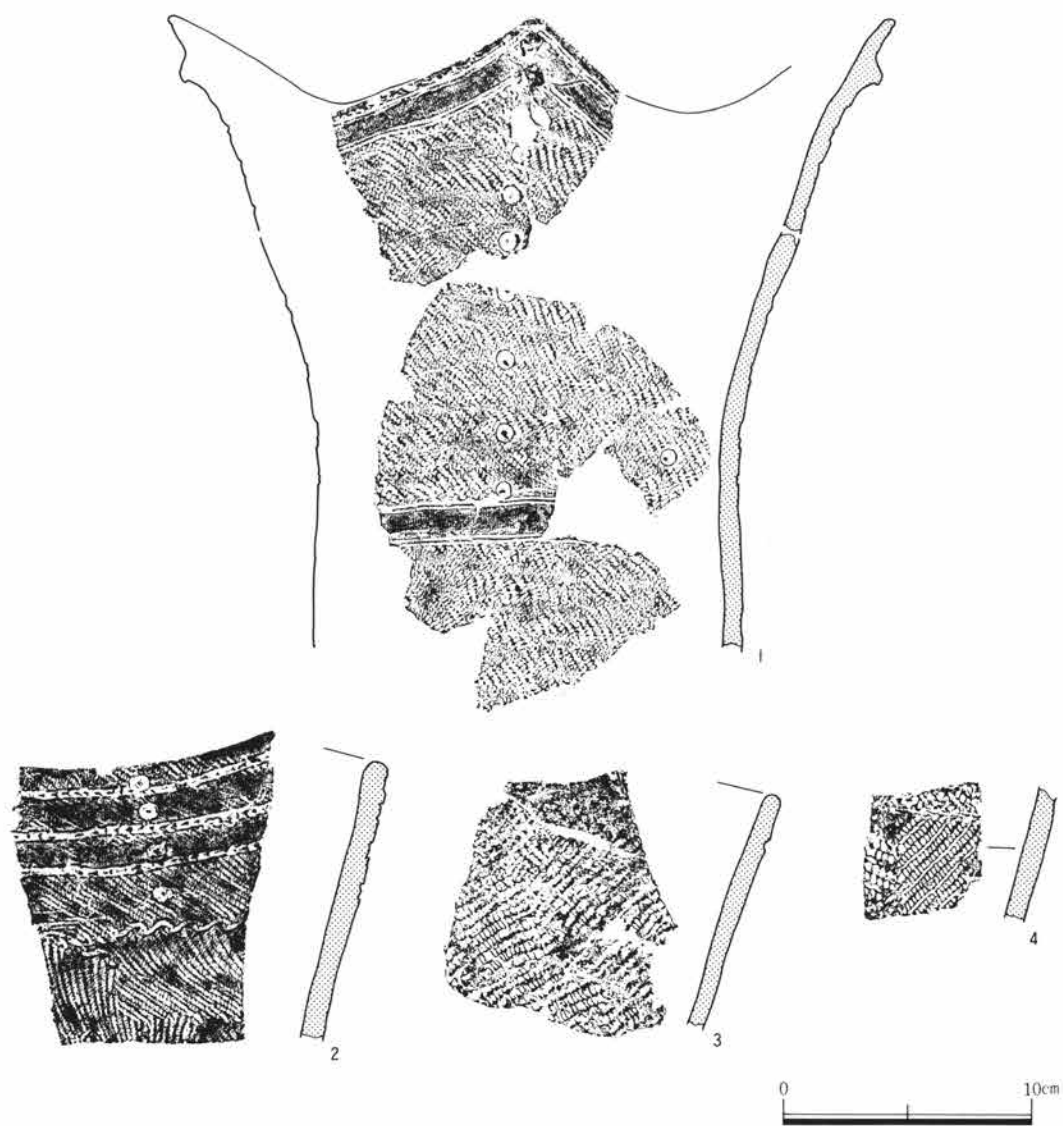
47号土壌（第38図）

H-13グリッドに位置し、4号住居を切って掘り込まれる。口径100cm、深さ35cmを測り、北壁部はややえぐれ込んでいる。

48号土壌（第38図）

47号土壌に面接し、4号住居を切って掘り込まれる。口径90cm、深さ55cmを測る不整円形を呈

IV 検出された遺構と遺物



第43図 I区土壇出土土器

する。北壁部はややえぐれ込んでいる。

49号土壇（第37図）

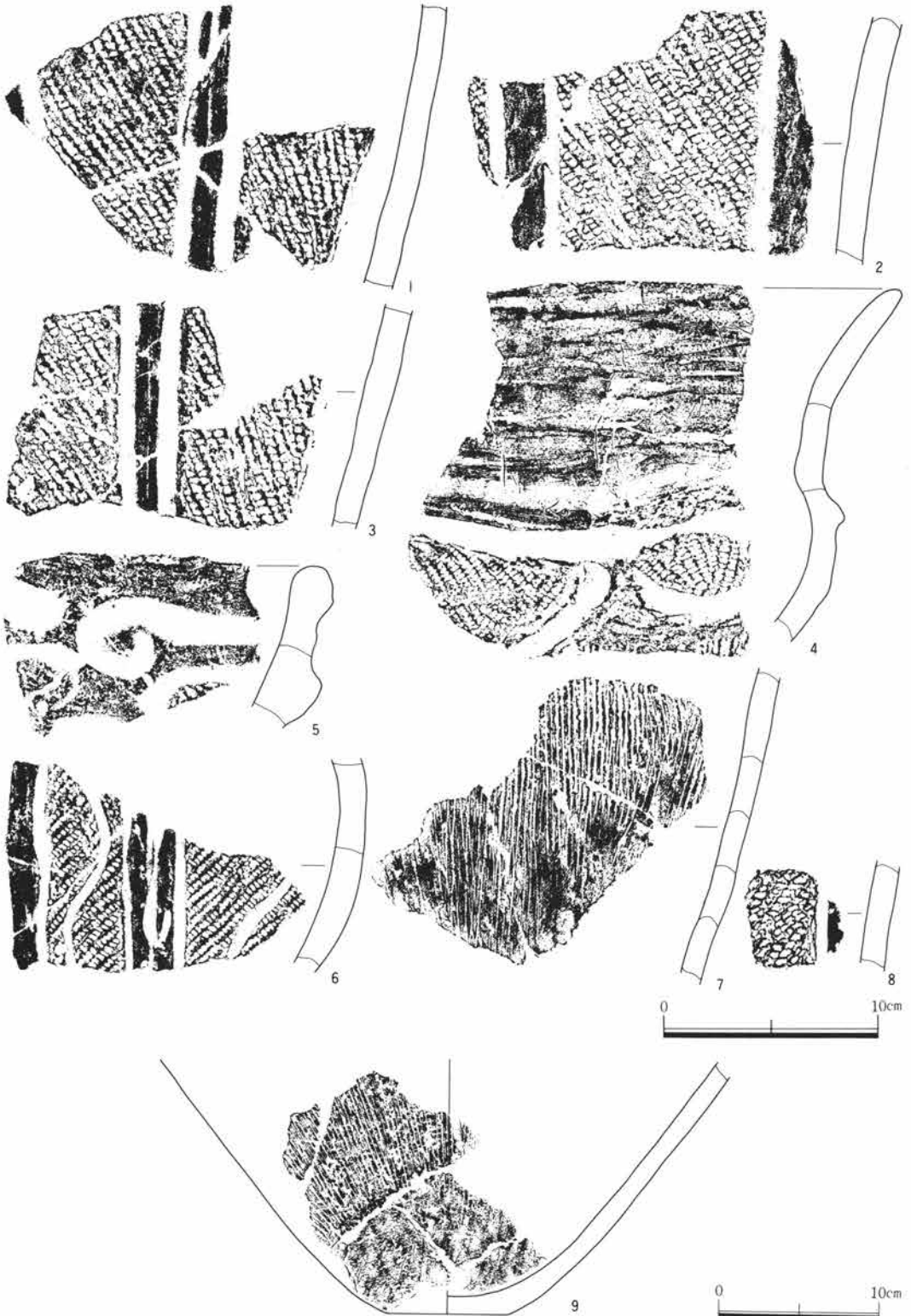
36号土壇を切って掘り込まれる。口径90cm、深さ50cmを測る円形の土壇である。

49号土壇出土土器（第41図23）

波状貝殻文が施される。波状文は振幅が小さく、深く明瞭である。

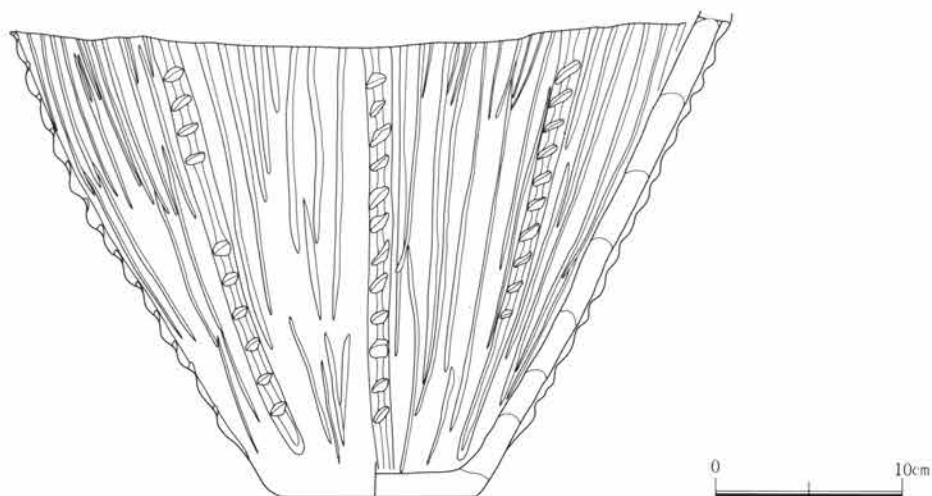
50号土壇（第38図）

G-12グリッドに位置し、4号住居を切って掘り込んでいる。口径120cm、深さ65cmを測る。



第44図 I区土壌出土土器

IV 検出された遺構と遺物



第45図 I区土壌出土土器

51号土壌 (第38図)

J-27グリッドに位置する。3号住居と重複するが新旧関係は不明である。口径70cm、底径100cmのフラスコ状土壌である。深さは80cmを測る。

52号土壌 (第38図)

J-26グリッドに位置し、3号住居を切って掘り込まれる。径100cm、深さ30cmを測り、覆土は炭化物を多量に含む黒褐色土層である。遺物は土器底部がつぶれたような形で一括出土している。

52号土壌出土土器 (第45図)

深鉢形土器の底部であり、胴上半部および口縁部は欠損する。器面に粗い条線文を施した後、刻目をもつ太い隆線を底部まで垂下させる。縄文は認められない。

b. II区の土壌 (第46図～第49図)

1号土壌 (第46図)

S・T-36・37グリッドに位置する。長径277cm、短径90cmの楕円形プランを呈し、深さは70cmを測る。底面は平坦であるが、南端部に口径84cm×36cm、深さ21cmの小ピットが存在する。

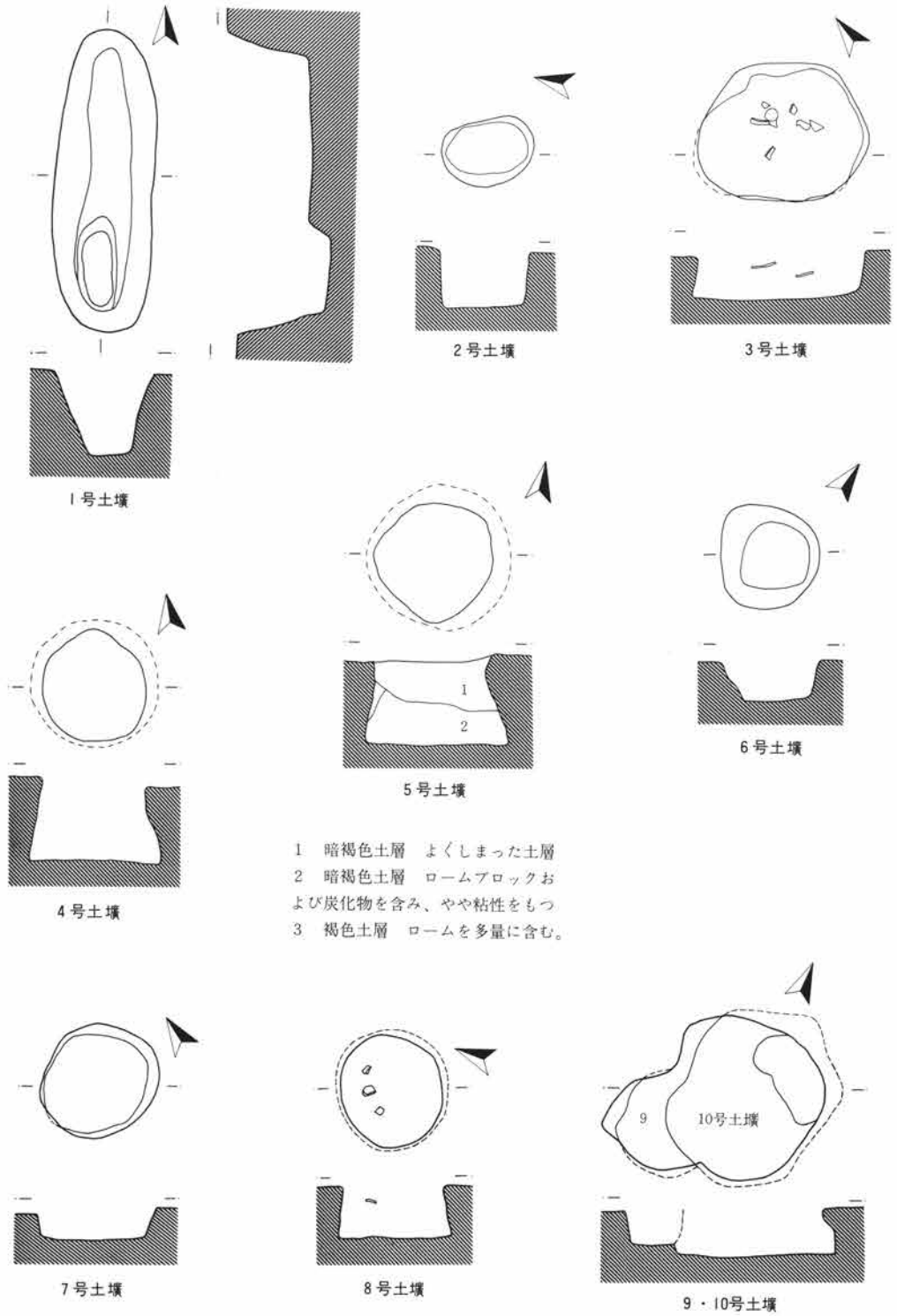
2号土壌 (第46図)

T-26グリッドに位置する。長径80cm、短径60cmの楕円形プランを呈し、深さは50cmを測る。

2号土壌出土土器 (第50図1)

頸部がやや括れ、口縁は外反ぎみに開く平縁の深鉢形土器である。口縁に2条、頸部に5条の中6mmの連続爪形文が巡り、その間に同種爪形文により弧線を施し口縁部文様帯を構成する。また口唇部には細かい刻目が施される。縄文は胴部にRL横位が施されるが、口縁部文様帯にはみられない。

IV 検出された遺構と遺物



第46図 II 区 土 壌 (1)

IV 検出された遺構と遺物

3号土壇（第46図）

Q・R-15グリッドに位置する。長径150cm、短径120cmの不整楕円形プランを呈し、深さは40cmを測る。

3号土壇出土土器（第50図2・3、第53図1～11）

第50図2は、口縁部が外反ぎみに立ち上がる深鉢形土器である。口縁部および胴部下半は欠損する。文様は半截竹管による平行線文、斜行線文および弧線文が施され文様帯が構成される。縄文は胴部を中心にRL横位が施されるが、口縁部文様帯にも一部認められる。同図3は、くの字状に屈曲する胴部から湾曲ぎみに外反する口縁部に続く大型の浅鉢形土器である。口縁部上端には面をもち、この部分には波状の隆線文が施され、また小孔が穿たれる。口縁部および胴屈曲部には刻目が施される。その他文様、縄文等は見られない。第53図1は、連続爪形文間の隆帯の部分に細い棒状工具による刻目を施す。同図2は、横走る粗雑な連続爪形文を施す口縁部片。同図3は、細かい連続爪形文間に太い刻目を施す。4は粗雑な平行線文がみられ、5・8・9は浮線文土器である。8は内湾する口縁部片で口唇部には刻目が施される。いずれも浮線文上には細い棒状工具による刻目をもち、5・9にはRL横位が施される。6・7・10・11はRL横位の縄文片である。

4号土壇（第46図）

Q-15グリッドに位置する。口径98cm、底径114cmのフラスコ状土壇である。深さ70cmを測る。

4号土壇出土土器（第53図12～15）

12は、3本1単位の櫛歯状工具による横走線文および波状文の施される口縁部片。13は、連続爪形文および横位の円形竹管文が施され、またRL³横位がみられる。14・15は、細い棒状工具による刻目をもち浮線文土器であり、14にはRL横位、15にはLR、RLを用いた結束第1種による羽状線文が施される。

5号土壇（第46図）

D-15グリッドに位置する。口径107cm、底径128cmのフラスコ状土壇である。深さは75cmを測る。

5号土壇出土土器（第53図17～28）

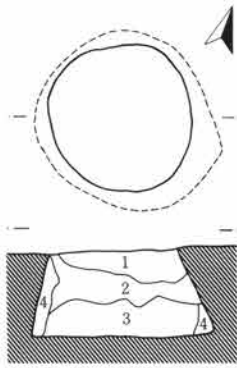
17は半截竹管により波状文が施される。18・19は、粗い連続爪形が施される。20～23は、連続爪形文間に刻目をもちものである。20・23は円形竹管文も付される。24～26は浮線文土器である。26は曲線状の構成をとる。25はRL横位がみられる。27はRL・LR各々横位による羽状縄文もしくは菱形状縄文が施される。28は、RL横位の施される縄文片である。

6号土壇（第46図）

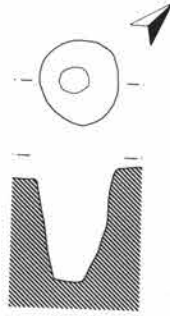
O-14グリッドに位置する。口径90cm、深さ34cmを測る。西壁部は耕作による攪乱を受けている。

6号土壇出土土器（第53図29～34）

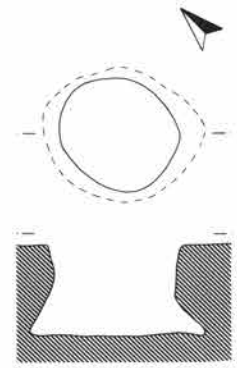
IV 検出された遺構と遺物



11号土坑

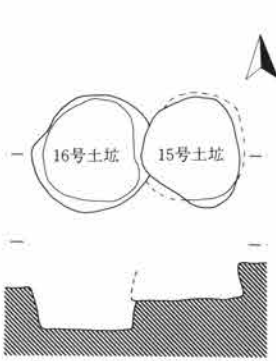


12号土坑

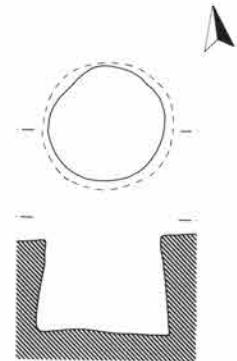


13号土坑

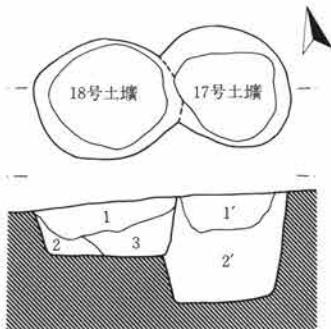
- 1 黒褐色土層 小さなロームブロを含む硬くしまった層。
- 2 黄褐色土層 タマゴ大のロームブロックを含むやわらかい層。
- 3 黄褐色土層 やわらかな層。
- 4 壁面崩壊 ロームブロックを含む。



15・16号土坑

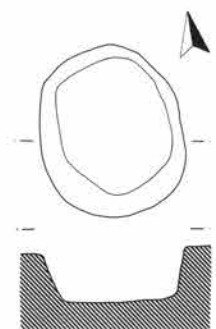


14号土坑



17・18号土坑

- 1 黒褐色土層 炭化物、ロームブロックを含み硬くしまっている。
- 2 褐色土層 炭化物粒を含む。
- 3 黄褐色土層 ソフトロームブロックを含み、軟弱。
- 1' 黒褐色土層 炭化物を含み、硬くしまっている。
- 2' 褐色土層 炭化物、焼土粒を含む。



21号土坑



第47図 II 区 土 坑 (2)

IV 検出された遺構と遺物

29は、横走する連続爪形文が施され、縄文はRL³横位が用いられる。30～32は粗雑な平行線文が施される。縄文は、30・31がRL横位、32はLR横位であるがいずれも原体、施文とも粗い。

7号土壌（第46図）

0-16グリッドに位置する。口径100cm、深さ24cmを測る。

7号土壌出土土器（第54図1・2・4）

1は、隆帯文をもつ口縁部片。2・4は横走する連続爪形文が施される。2は円形竹管文がみられRL横位が施される。4はRL³横位である。

8号土壌（第46図）

N・0-17グリッドに位置する。口径95cm、底径106cmのフラスコ状土壌であり、深さは45cmを測る。

8号土壌出土土器（第54図3・4～8）

3は、粗雑な横走線文、弧線文が施される口縁部片。5・6は、RL横位が施される。7は、櫛歯状工具による横走線文および縦位の円形竹管文が施される。8は、3本1単位の櫛歯状工具による横走線文と半截竹管による波状文および縦位の円形竹管文により文様帯が構成される。胴部にはRL³横位が施される。

9号土壌（第46図）

M・N-16グリッドに位置し、10号土壌を切って掘り込まれる。口径82cm、深さ30cmを測るが南壁の一部はオーバーハングする。

10号土壌（第46図）

西壁を9号土壌により切られる。口径147cm、深さ32cmを測る不整円形の土壌である。

10号土壌出土土器（第54図9～11）

9は、4本1単位の櫛歯状工具による横走線文および縦位の円形竹管文が施される口縁部片。10は、3本1単位の櫛歯状工具による斜行線文（肋骨文の一部）および縦位の円形竹管文が施される。11は、横走する連続爪形文による口縁部片である。

11号土壌（第47図）

Q-12・13グリッドに位置する。口径116cm、底径145cmのフラスコ状土壌を呈し、深さは67cmを測る。

11号土壌出土土器（第54図12～14）

12は、3本1単位の櫛歯状工具により波状文が施される。13・14は、半截竹管による浅く不明瞭な横走線文およびコンパス文が施される。

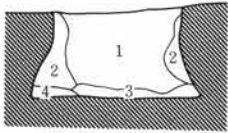
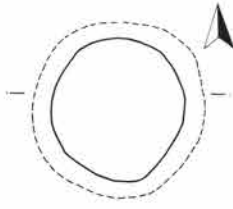
12号土壌（第47図）

S-19グリッドに位置する。口径65cm、深さ80cmを測る小型の土壌である。

13号土壌（第47図）

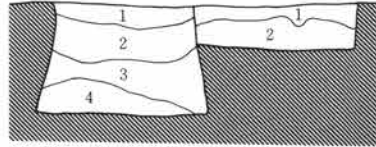
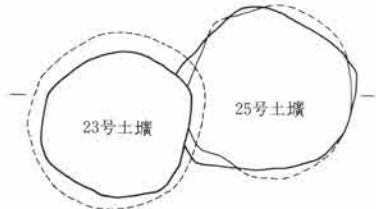
R-16グリッドに位置する。口径115cm、底径130cmのフラスコ状土壌を呈し、深さは70cmを測

IV 検出された遺構と遺物



22号土壌

- 1 黒褐色土層 ロームブロックを少量含み、やや硬い。
- 2 壁面崩壊 ロームブロックを含む。
- 3 褐色土層 ロームを多く含む。
- 4 黒褐色土層

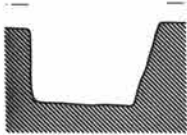
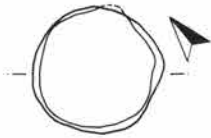


23・25号土壌

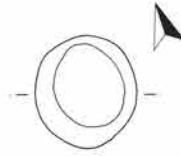
- 23号土壌
- 1 暗褐色土層 炭化物を含む。
 - 2 暗褐色土層 ローム粒、炭化物を含み硬くしまっている。
 - 3 暗褐色土層 ロームブロックを多く含む他、炭化物も少量みられる。
 - 4 暗褐色土層 ロームを全体的に含みやや粘性をもつ。

25号土壌

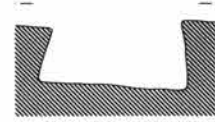
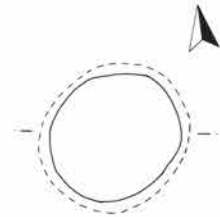
- 1 暗褐色土層 炭化物を含む。
- 2 褐色土層 ロームブロックを含む、硬くしまっている。



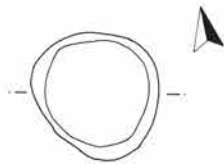
24号土壌



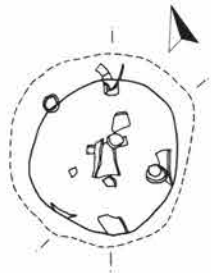
26号土壌



27号土壌



28号土壌



29号土壌

- 1 黒褐色土層 ローム粒子を含み硬くしまっている。
- 2 黒褐色土層 炭化物を含み、やわらかい。
- 3 黄褐色土層 ロームブロックを含み、やわらかい。
- 4 黒褐色土層 焼土粒を含む。

第48図 II区土壌(3)



Ⅳ 検出された遺構と遺物

る。

13号土壇出土土器（第54図15・16）

15は、連続爪形文および縦位の円形竹管文が施され、縄文はRL³横位が用いられる。16は、連続爪形文および半截竹管による斜行線文が施され、縄文はRL³横位が用いられる。

14号土壇（第47図）

R-18グリッドに位置する。口径90cm、底径100cmのフラスコ状土壇を呈し、深さは72cmを測る。また、覆土から土製の球状耳飾（第78図3）が出土している。

15号土壇（第47図）

R-19グリッドに位置する。16号土壇を切って掘り込まれる。口径95cm、深さ40cmを測り、北壁の一部がオーバーハングする。

16号土壇（第47図）

西壁部は15号土壇により切られる。口径80cm、底径85cmを測りやや不規則なフラスコ状土壇を呈する。深さは26cmである。

17号土壇（第47図）

P-21グリッドに位置し、西壁部は18号土壇により切られている。口径100cm、底径125cmのフラスコ状土壇を呈し、深さは80cmを測る。

18号土壇（第47図）

17号土壇に東接する。口径100cm、底径115cmのフラスコ状土壇を呈し、深さは55cmを測る。

21号土壇（第47図）

K・L-22グリッドに位置する。口径135cm×112cmの楕円形プランを呈し、深さは42cmを測る。また底面はやや起伏をもつ。

22号土壇（第48図）

L-20・21グリッドに位置する。口径110cm、底径138cmのフラスコ状土壇を呈し、深さは67cmを測る。

22号土壇出土土器（第54図17・18）

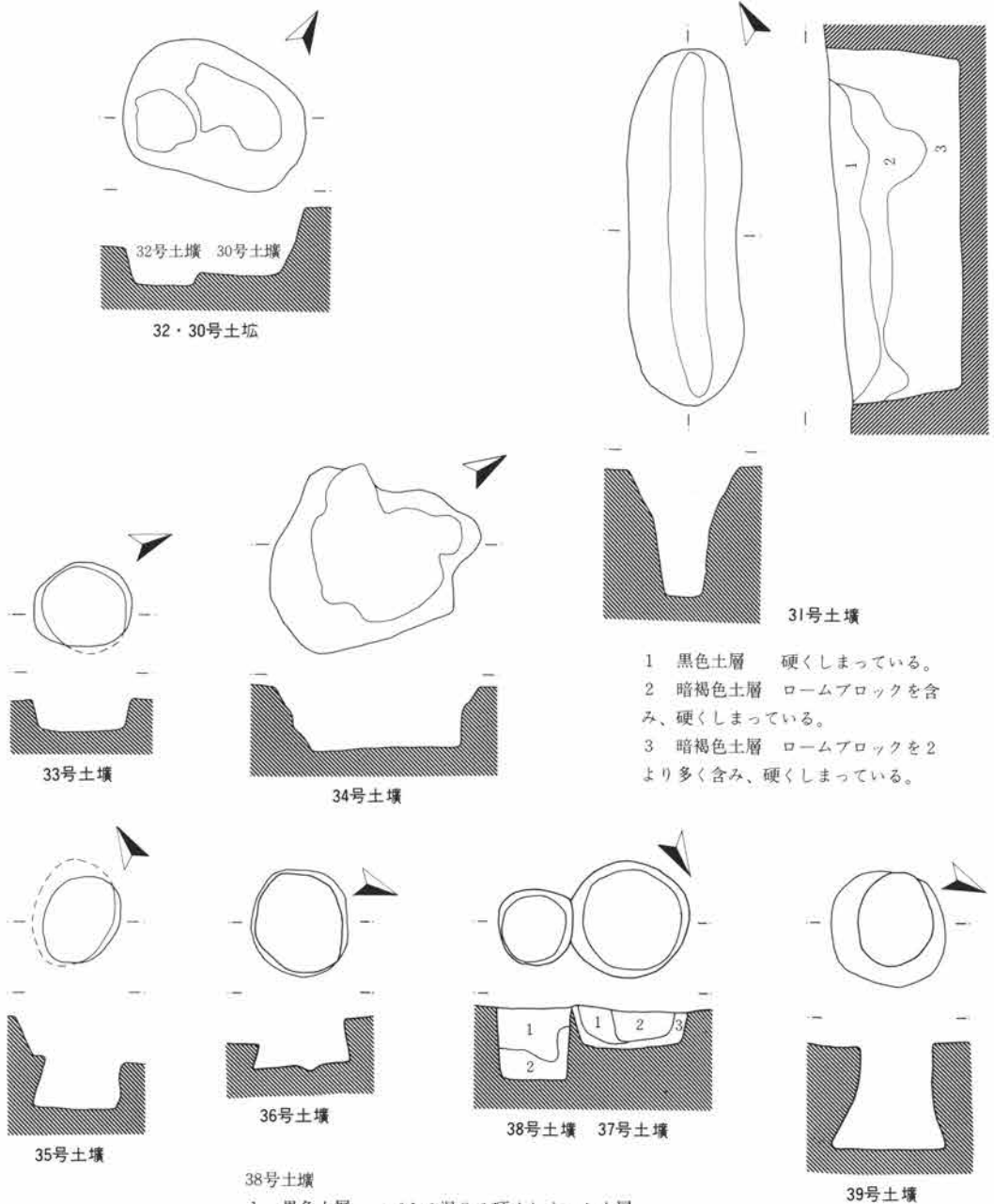
17は、半截竹管による平行線文および斜行線文が施され、縄文はRL³横位が用いられ、施文方位は斜位に近く条が縦走している。18は、RL・LRを用い結束第一種による羽状縄文が施される。

23号土壇（第48図）

L-20グリッドに位置し、25号土壇を切って掘り込まれる。口径117cm、底径140cmのフラスコ状土壇を呈し、深さは85cmを測る。

23号土壇出土土器（第52図2、第54図19～26）

第52図2は、口縁部に向って外反ぎみに開く深鉢形土器である。口縁部および胴下半は欠損する。半截竹管により左下りの斜行線文および縦走線文が施され、その間に縦位の円形竹管文が配される。縄文はRL³横位である。



第49図 II 区 土壇 (4)

IV 検出された遺構と遺物

19は、外反する口縁部片で、半截竹管による横走線文および波状文が交互に数段にわたって施されるとともに縦位の円形竹管文が配され文様帯が構成される。20は、櫛歯状工具により19と同様の文様構成がとられる。21は、連続爪形文および櫛歯状工具による肋骨文が施され、縦位の円形竹管文が配される。22は、20と同一個体であろう。23は、不規則な斜行線文および縦位の爪形文が施される。24は、横走する連続爪形文を施す口縁部片。25は、山形の小突起をもつ口縁部片で横走および弧状の連続爪形文により文様が施され円形竹管文もみられる。26は、外反ぎみに開く口縁部に山形の小突起が付され、器面には縄文が施される。条走行が不規則な部分もあるが、結束第一種（RL・LR）による羽状縄文が施され、全体的には菱形状の構成となる。

24号土壌（第48図）

L・M-19グリッドに位置する。口径100cm、深さ61cmを測る円形プランを呈すが、底面は不整形円形となっている。

24号土壌出土土器（第52図1・3、第54図・27～32）

第52図1は、器上半部を欠損する浮線文土器である。浮線文上には矢羽根状の刻目を全体的に施すが、胴部下半に巡る一条には波状の刻目が施される。器面にはRL横位が施されると共に、結節回転もみられる。同図3は、頸部がわずかに括れ、口縁に向って開きぎみに立ち上る波状口縁の深鉢形土器である。口縁上部および胴下半部は欠損する。口縁に沿って半截竹管による平行線文およびコンパス文状の小波状文が巡り、その下位には大形の山形状文が施され口縁部文様帯を構成する。胴部には半截竹管による刺突文状の平行沈線文が施される。縄文は施されない。第54図27・28は、幅6mmの平行線により、横走線文および弧線文が施される。縄文は27がLR横位、28がRL横位である。29は、連続爪形文間に刻目をもつ口縁部片。30は、刻目をもつ浮線文を施す口縁部片。31は、幅4mmの平行線により横走線文および弧線文が施される。32は、RL、LRを各々横位に施し羽状縄文が構成され、その上にLによる結節回転がみられる。

25号土壌（第48図）

L-20グリッドに位置し、西壁部は23号土壌に切られる。口径130cm、深さ34cmを測り底部は部分的にオーバーハングし不整形円形を呈す。

26号土壌（第48図）

N-18・19グリッドに位置する。口径85cm、深さ29cmを測る。

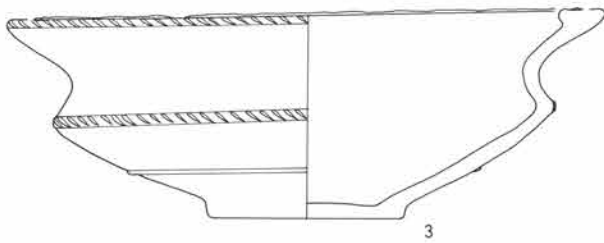
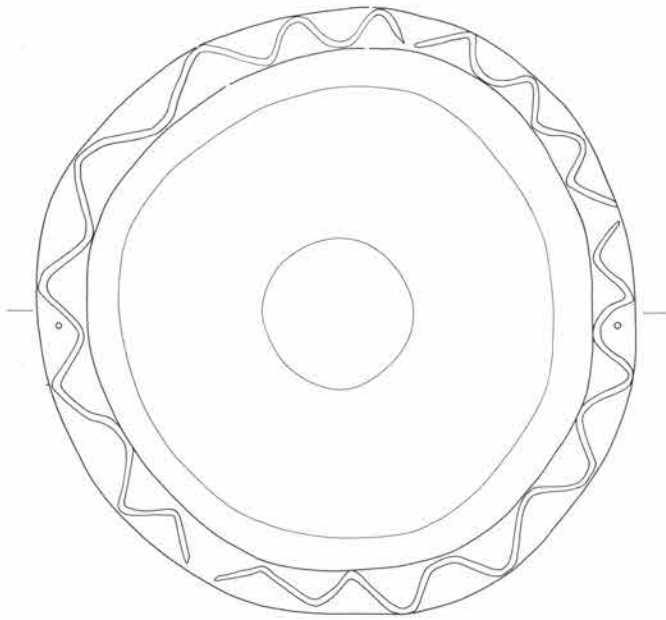
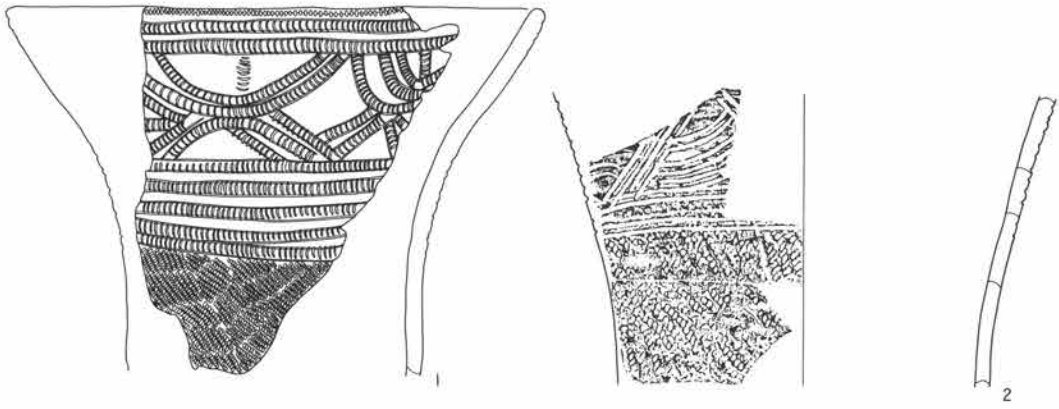
26号土壌出土土器（第55図1～4）

1は、巾4mmの平行線により横走線文および弧線文が施される波状口縁を呈する口縁部片。2は、竹管外側を用いたD字形連続爪形文が横走し、巾5mmの平行線により弧線文が施される。器面には粗いRL横位がみられる。3は、連続爪形文が横走し、胴部にはRL横位が施される。4は、連続爪形文により横走、弧状等の文様が施される。

27号土壌（第48図）

L-18グリッドに位置し、28号土壌に東接する。口径105cm、底径118cmのフラスコ状土壌を呈し

IV 検出された遺構と遺物



第50図 II区土壌出土土器

IV 検出された遺構と遺物

深さは45cmを測る。

27号土壇出土土器（第55図5-10）

5は、横走する連続爪形文が施される口縁部片であるが、爪形文が左開きになっている珍しい例である。6は、半截竹管により弧線文が施され、粗いRL横位がみられる。7-9は、浮線文土器である。7・8は、浮線文上に鋭角的な刻目が施され、9には縄文が施される。10は、波状貝殻文の施されるものである。

28号土壇（第48図）

L-18グリッドに位置する。口径100cm、深さ24cmを測る円形プランを呈する土壇である。

28号土壇出土土器（第55図11・12・15・18-20・22）

11・15は、半截竹管による巾3mmの横走線文が施される。12は、横走線文、斜行線文の施される口縁部片。18・20・22は、浮線文土器である。いずれも浮線文上には細い棒状工具による刻目が施される。また18は口唇部に刻目を持ち、22にはボタン状貼付文が付される。19は横走する連続爪形文が施され、縄文は一部に結束第1種が認められ羽状縄文が施されていると思われる。

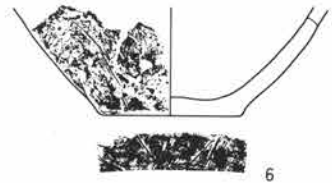
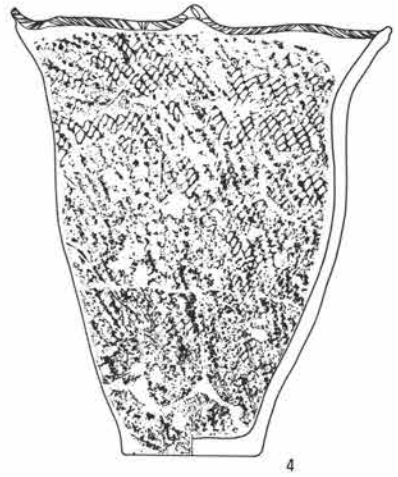
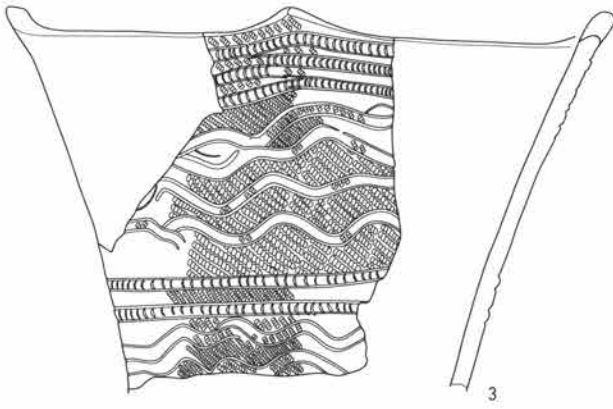
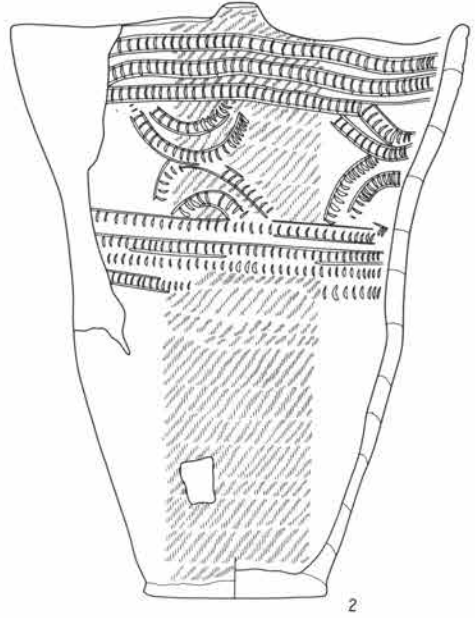
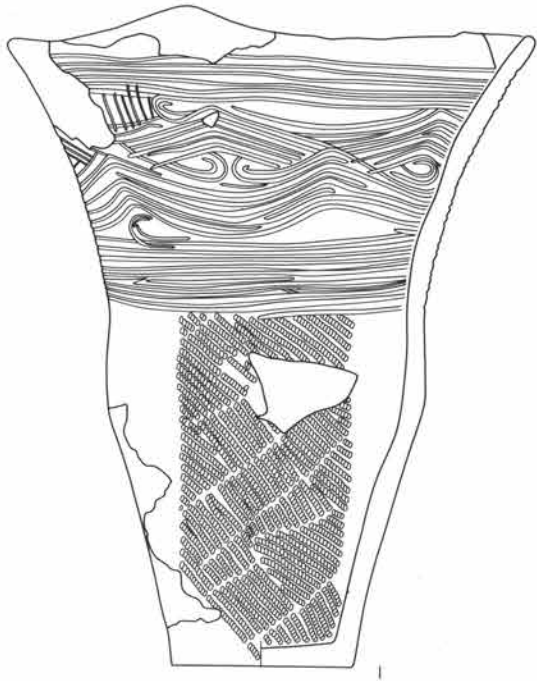
29号土壇（第48図）

K-20グリッドに位置する。口径120cm、底径155cmのフラスコ状土壇で、深さは70cmを測る。遺物は第53図に示す土器が出土したが、これらは土壇下部もしくは底面に接して検出されている。

29号土壇出土土器（第51図1-6、55図13・14・16・17・21・23・24）

第53図1は、やや張りをもった胴部から口縁にかけ外反ぎみに開きゆるやかな波状口縁を呈する深鉢形土器である。口縁部に半截竹管による横走線文および山形状文を重畳させた菱形状文により文様帯が構成される。また菱形状文内の無文部には蕨手状沈線文が施される。文様帯以下にはRL横位が施される。縄文は節が整っておりよく燃られた原体を用いて施文している。同図2は、頸部がやや括れ、口縁部は外反ぎみに開く深鉢形土器で、口縁部に梯形の小突起が4単位付される。口縁部および頸部に巾8mmの連続爪形文が3条巡り、その間に同種爪形文による弧線文が施され文様帯が構成される。縄文は器全面にL横位が施文される。同図3は、口縁部が外反ぎみに開き、4単位の小突起状の波状口縁を呈する。胴下半は欠損する。文様は、口縁部に沿って3条、頸部に2条連続爪形文が巡り、その間に平行線による粗い波状文が施される。また頸部に巡る連続爪形文の下位にも同様の波状文が施される。縄文はRL横位が全面施文される。同図4は、山形状の小突起が4単位付される波状口縁の深鉢形土器である。口唇部には刻目が施され、器面は粗いRL横位の縄文となる。第56図13は、櫛歯状工具による横走線文および波状文が施される。14は、横走線文、斜行線文が施され口唇部には半截竹管による爪形文がみられる。16は、横走する連続爪形文が2条みられ、以下は櫛歯状工具による波状文が施される。17は、連続爪形文が施され、縄文はL横位である。21・23・24は、浮線文土器である。21は、口縁が内湾し口唇部にはボタン状の貼付文が付される。23は、浮線文上に波状の刻目をもつ。23・24には器面にLR横位が施される。

IV 検出された遺構と遺物



第51図 II区土壌出土土器

IV 検出された遺構と遺物

30号土壌（第49図）

M-17・18グリッドに位置する。長径150cmを測るやや不整の楕円形プランを呈し、深さは50cmである。西側は32号土壌により切られている。

30号土壌出土土器（第55図25～27）

25は、巾3mmの平行線による横走線文間に鋸歯状文が施され、縦位の円形竹管文が配される。器面の縄文はRL³横位である。26は、口縁部がやや内湾ぎみに立ち上る波状口縁部片。横走する連続爪形文が施される。27は、RL横位が施される口縁部片である。

31号土壌（第49図）

K-24グリッドに位置する。長径300cm、短径95cmの楕円形プランを呈し、深さは110cmを測る。1号土壌と同様の形態をとり、長軸方向は等高線にはほぼ直交している。底面は平坦であり、Pit等は認められない。底部の巾は30cmでありかなり狭いものとなっている。

32号土壌（第49図）

30号土壌を切って掘り込んでいる。口径105cmの不整楕円形プランを呈し、掘り方も不規則である。深さは55cmである。

33号土壌（第49図）

S-35グリッドに位置し、2号住居を切って掘り込んでいる。口径85cm、深さ30cmを測り東壁の一部はオーバーハングする。

33号土壌出土土器（第55図28・29）

28は、RLr³横位が施され、Lを用いた結節回転が横走する。29は、付加条第1種が施される。軸縄はLR、付加条はLである。

34号土壌（第49図）

S-34グリッドに位置し、2号住居を切って掘り込んでいる。不整円形を呈し、最大径は190cm、深さは50cmを測る。

34号土壌出土土器（第55図31）

櫛歯状工具による横走線文および波状文が施され、縦位の円形竹管文が配される。器面にはRL³横位が施される。

35号土壌（第49図）

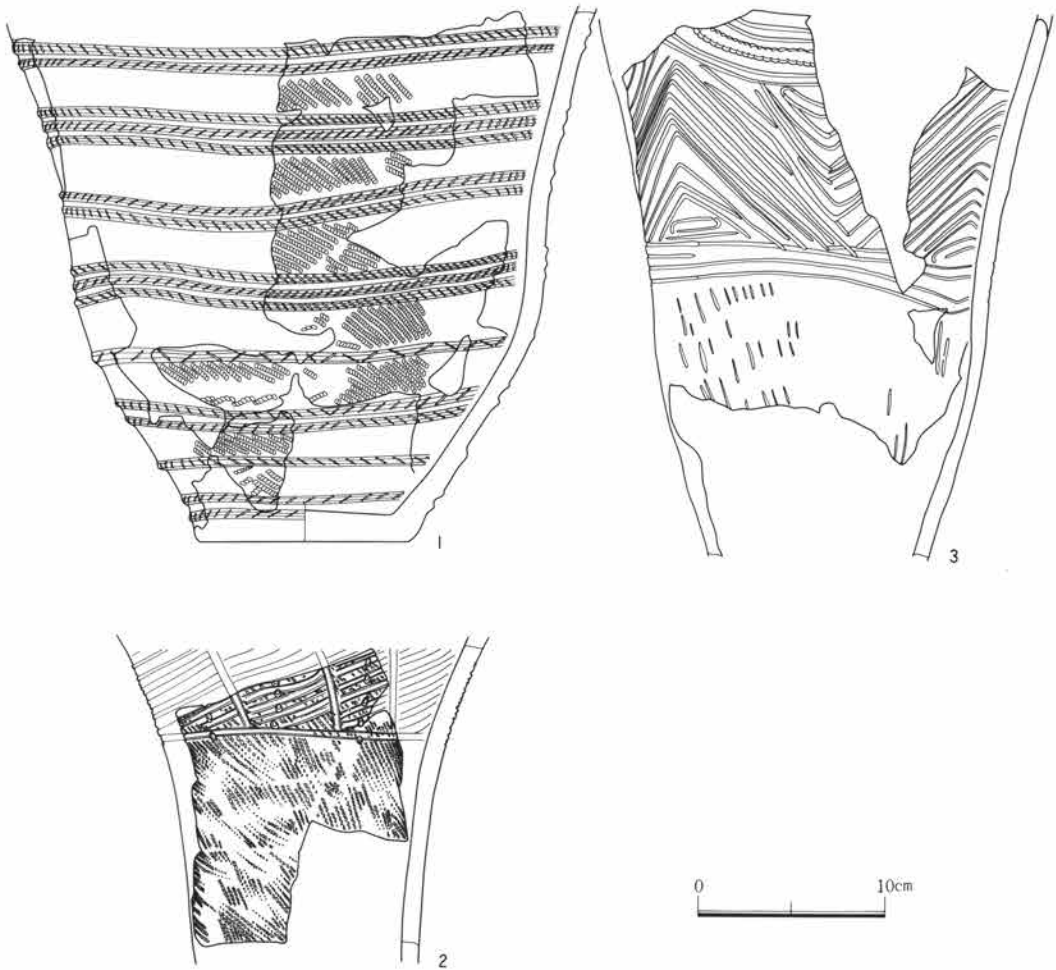
T-33グリッドに位置する。口径70cm、底径90cmを測り、西壁部はオーバーハングする。深さは45cmを測る。

35号土壌出土土器（第55図30）

小波状を呈する口縁部である。器面に貝殻腹縁を施し、口縁直下に楕円形の刺突文を加える。刺突文は深く、器面に対し左方向から施される。

36号土壌（第49図）

L-17グリッドに位置し、3号住居を切って掘り込まれる。口径85×75cm、底径90×85cmのフラ



第52図 II区土壌出土土器

スコ状土壌であり、深さは40cmを測る。底面中央はやや窪んでいる。

37号土壌 (第49図)

J-17グリッドに位置し、3号住居を切って掘り込まれるとともに、東壁部を38号土壌に切られる。口径100cm、深さ30cmの円形プランの土壌である。

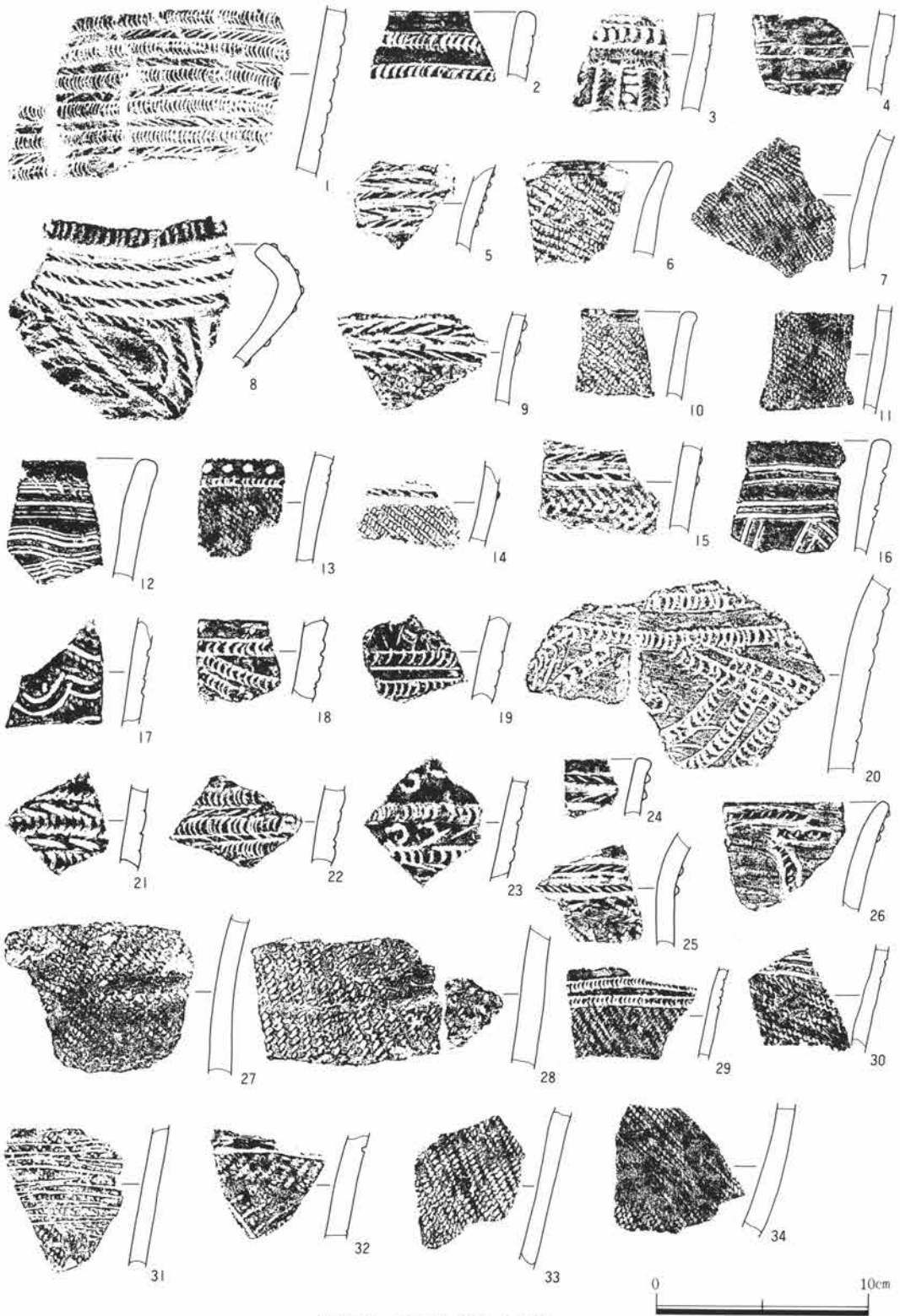
38号土壌 (第49図)

J-18グリッドに位置し、3号住居を切って掘り込まれる。口径65cm、深さ60cmの円形プランの土壌である。

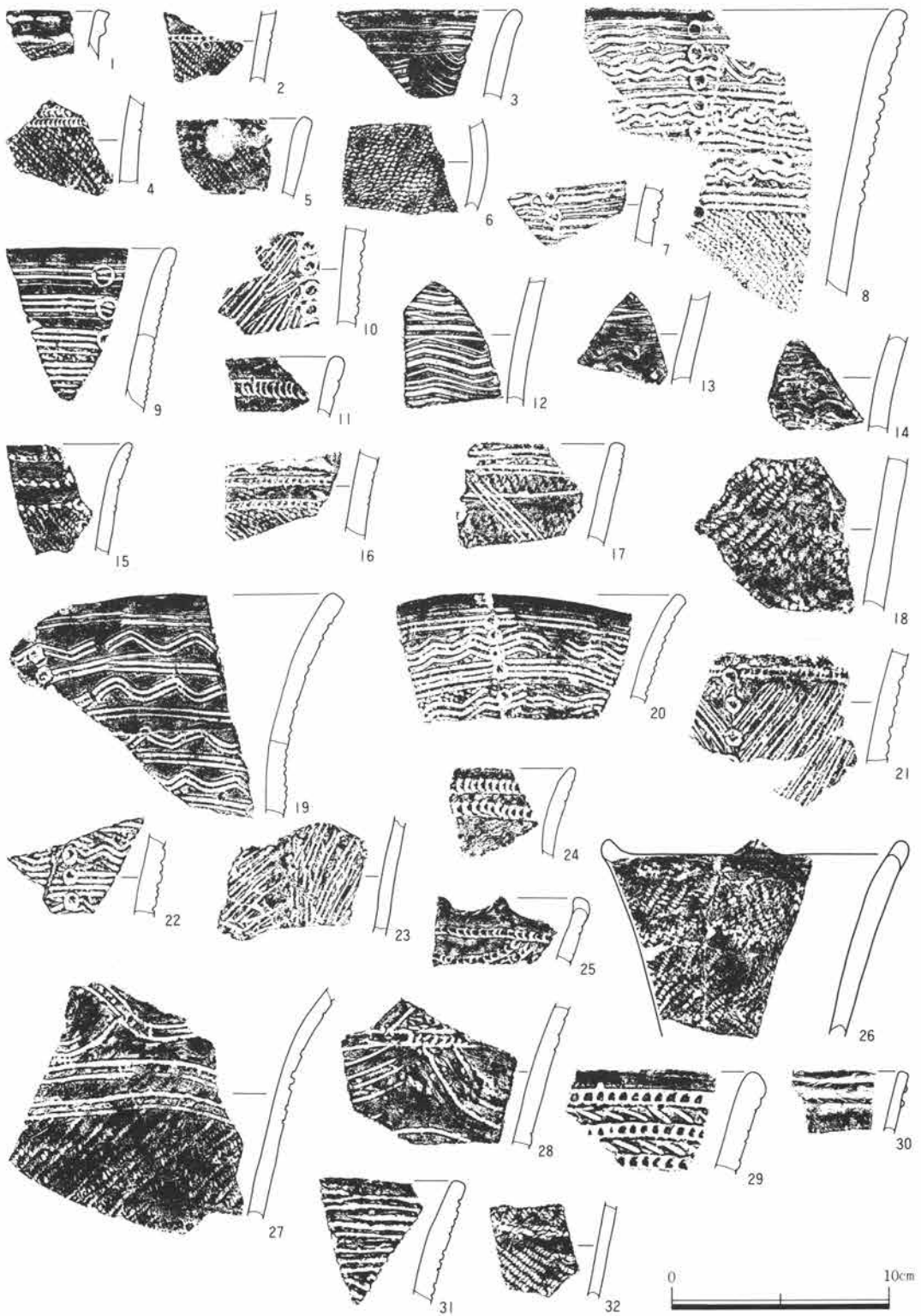
39号土壌 (第49図)

J-17グリッドに位置し、3号住居を切って掘り込まれる。口径80×65cm、底径100cmのフラスコ状土壌であり、深さは85cmを測る。

IV 検出された遺構と遺物

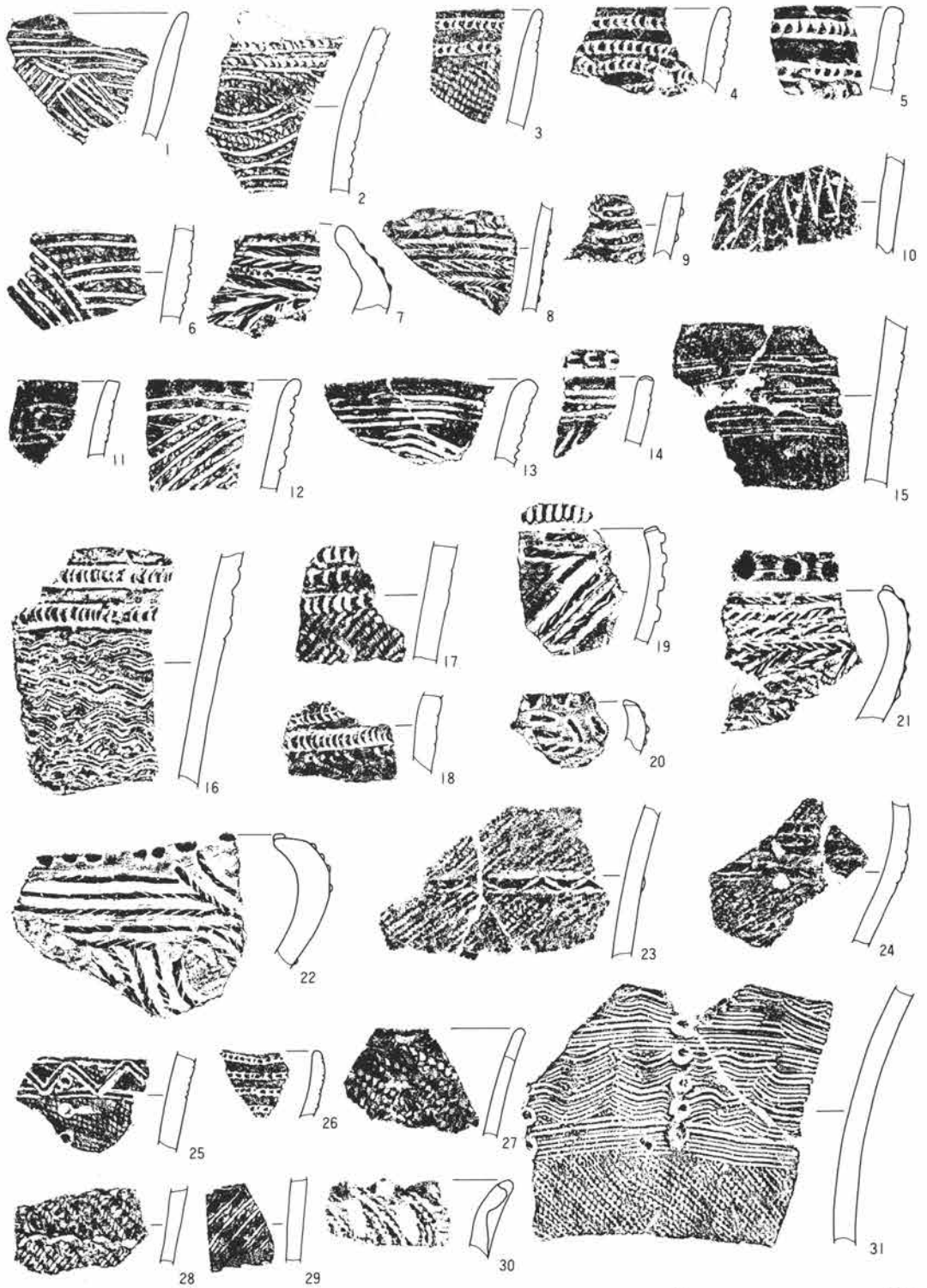


第53図 II区土壌出土土器



第54図 II区土壌出土土器

IV 検出された遺構と遺物

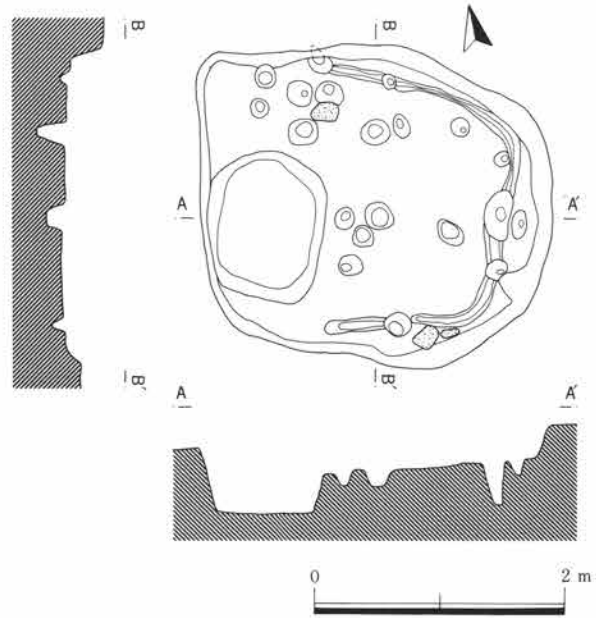


第55図 II区土壌出土土器

(3) 方形竪穴遺構 (第56図)

II区南西斜面にあたるI-24・25グリッドに位置する。平面形は長辺260cm、短辺220cm中のやや不整な隅丸方形を呈している。底面はほぼ水平であるが面は多少起伏があり、また踏み固めたように硬く良好なものである。

Pitは不規則なあり方を示し計20個検出された。口径は平均20cm内外を測り、深さは8cm～35cmと幅がある。本址東半部には壁に沿って巾10cm、深さ8cmの周溝が存在する。また西壁に接して径95×115cm、深さ40cmの土壌が検出されたが、土層状態の観察では重複関係は認められず、本址に伴うものと判断される。遺物の出土量は極めて少なく、土器はRL³横位による縄文片1点の他、底面に接して石皿片1点(No.1)、磔2個(No.2・3)が検出されたのみである。



第56図 方形竪穴遺構

(4) グリッド出土遺物

a. 土器

調査によって得られた縄文土器は早期から中期にわたるが、量的には本遺跡の主体となる前期に属する土器が大半を占めている。以下の土器類はグリッド調査を中心として出土したものであり、次の5群に大別しその概要を述べた⁽¹⁾。第I群早期、第II群前期中葉(繊維土器)、第III群前期後半(諸磯a・b式土器)、第IV群前期後半(浮島式土器)、第V群中期、に分類する。

第I群土器 (第57図)

本遺跡の主体は縄文時代前期に求められるが、ここに分類した土器はそれ以前のものを一括している。出土量も少なく本時期に伴う遺構も認められない。なお図示していないが、撚糸文系土器が3点出土している。

第1類 押型文土器 (第57図1～9)

全て山形押型文であり他の押型文は出土していない。いずれ胴部破片であろうが1～6は横位、7～9は縦位の施文がみられる。また2は帯状施文が認められ、原体の幅は1.5mm、ヤマ刻みでありその間隔は3mmとなっている。

IV 検出された遺構と遺物

第2類 沈線文系土器 (第57図10~15)

10は口唇部が丸味をもつ口縁部片で、横走る平行線文間に斜行沈線を矢羽根状に施し文様帯を構成する。12も同様の形態をもつ口縁部片であるが、横位のあさい沈線文が施される。11・15は縦走および斜行沈線文が施され、さらに11には沈線文に沿って刺突文も加えられる。13は横走沈線文とともにやや粗い格子目状沈線文が施され、14は横走、斜行沈線文により文様構成される。沈線文は1・11・15が細く、12~14についてはやや太い。本類は三戸式土器に該当しよう。

第II土器 (第58図~第60図)

土器胎土中に植物性繊維を含有するものを一括する。

第1類 半截竹管による平行線文を主に文様構成するもの。

a種 横走線文 (第58図1~5)

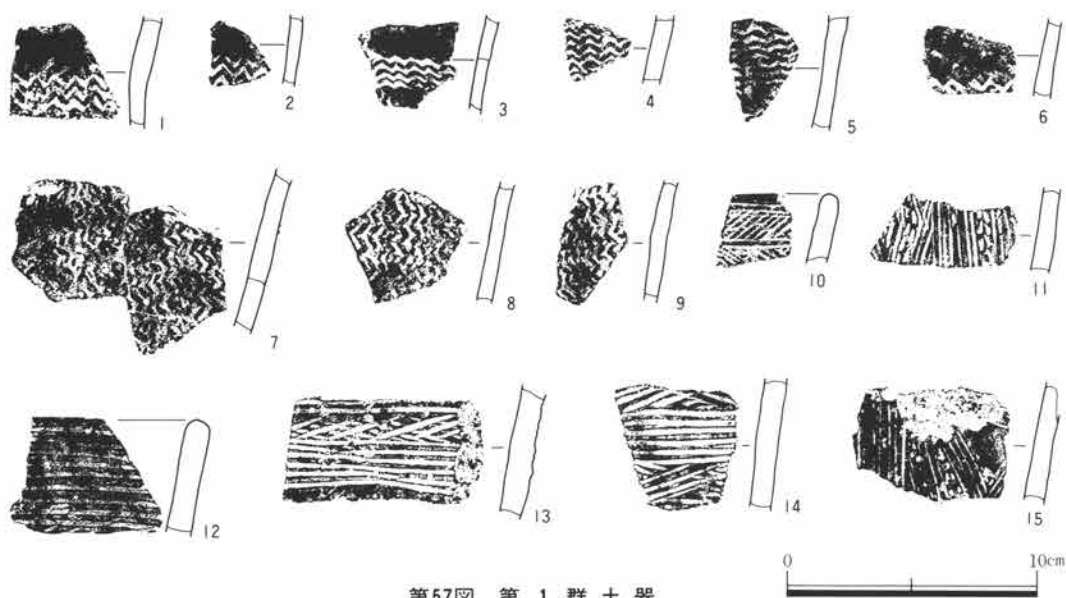
1~3は内湾ぎみに立ち上る口縁部片である。2には縄文が認められるが施文は粗く極めて不明瞭である。原体はLが用いられ施文方位は斜位に近く、表出される条は口縁に直交している。1・3には縄文はみられない。4の平行線文はやや粗雑で走向に乱れがある。縄文はLR、RLを各々に横位に施し菱形状縄文を構成する。5には $L < \frac{R}{R}$ が施される。

b種 コンパス文 (第58図6)

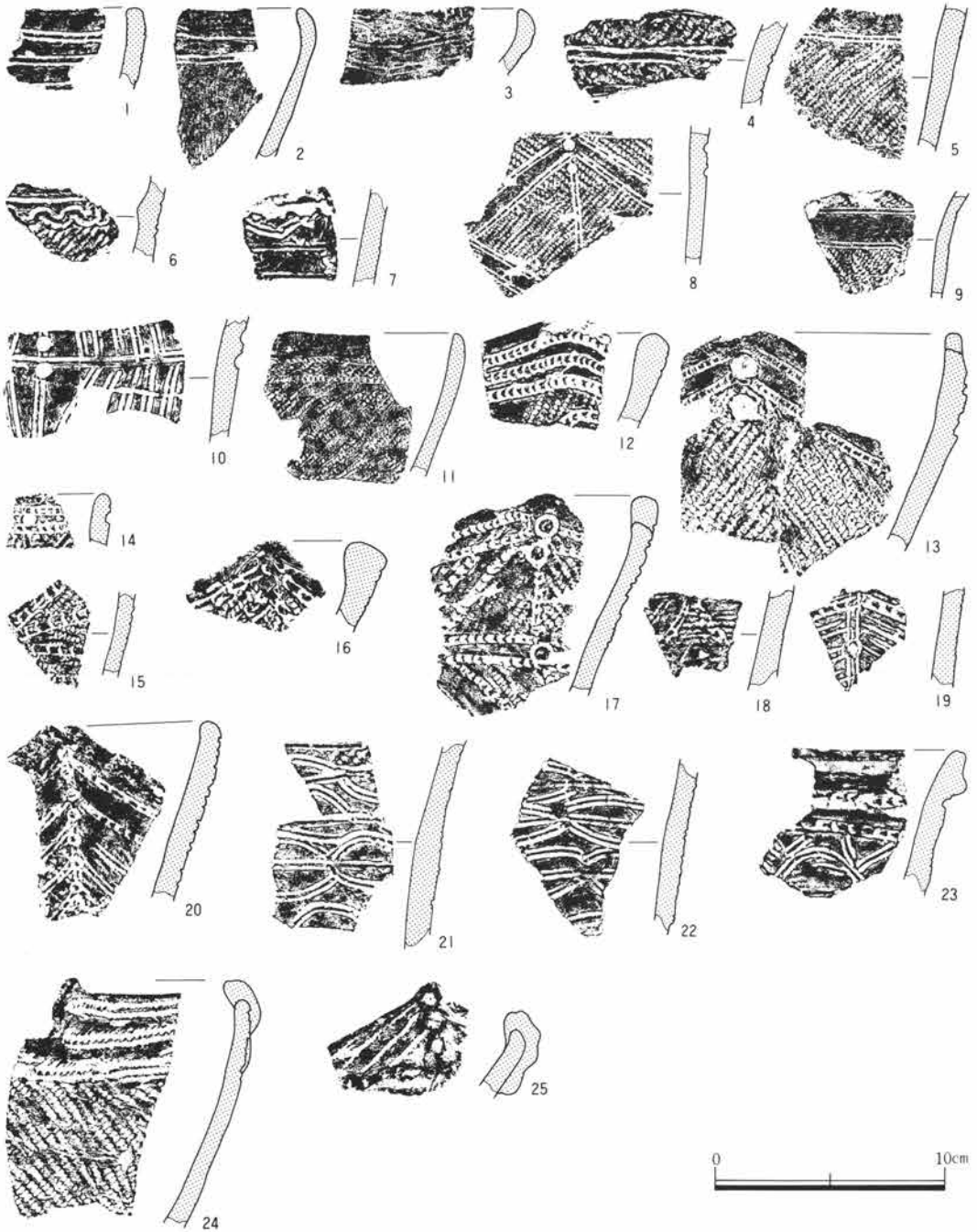
施文原点を交互にずらすことによって得られる文様であるが、6にみられるコンパス文は施文もしっかりしており乱れがない。器面にはL横位が施される。

c種 鋸歯状文 (第58図7)

横走線文とともに平行線文による鋸歯状文が施されるものである。縄文は粗く不明瞭であるがRL横位が施される。



第57図 第1群土器

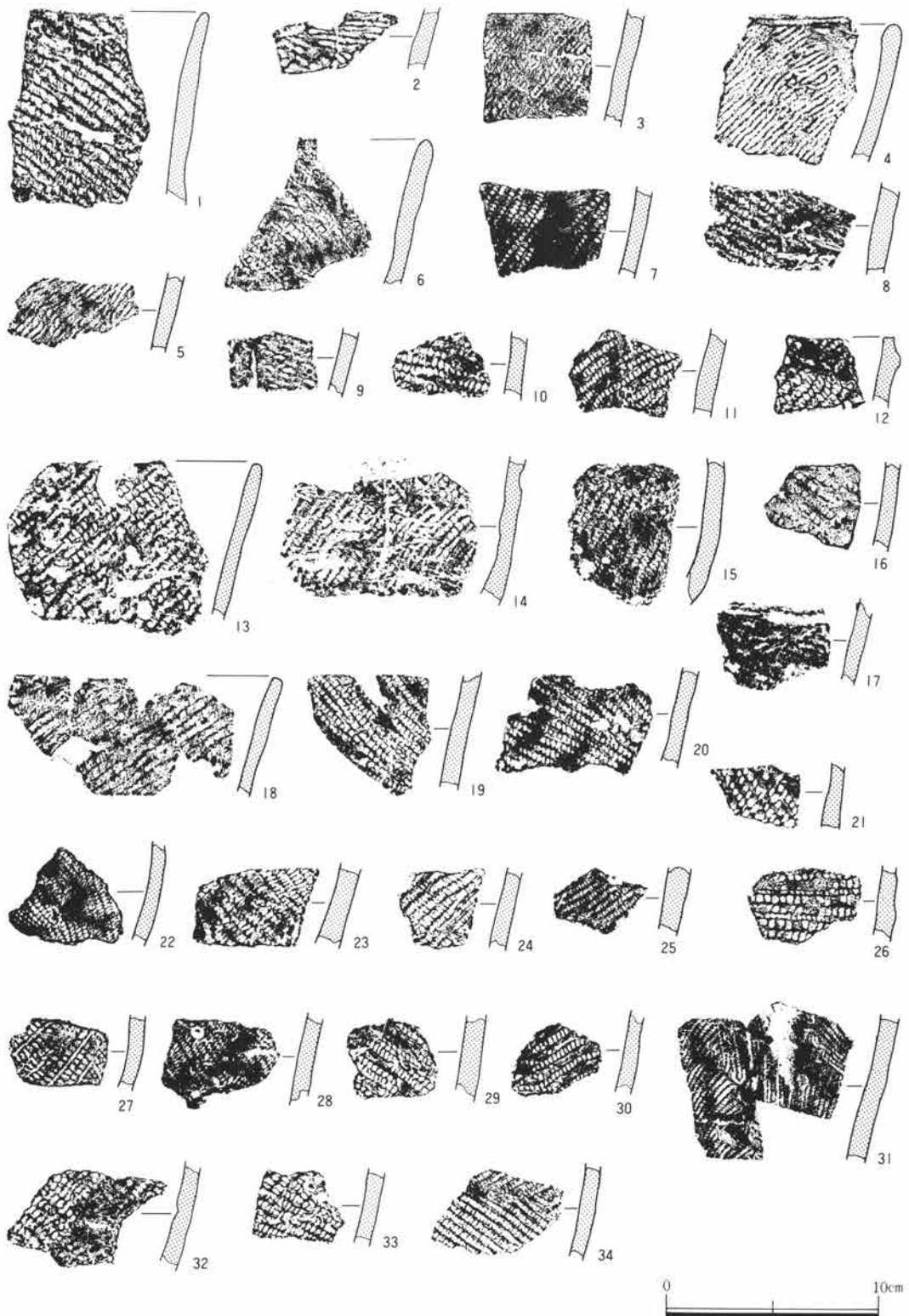


第58図 第II群土器

d種 斜行線文 (第58図8~10)

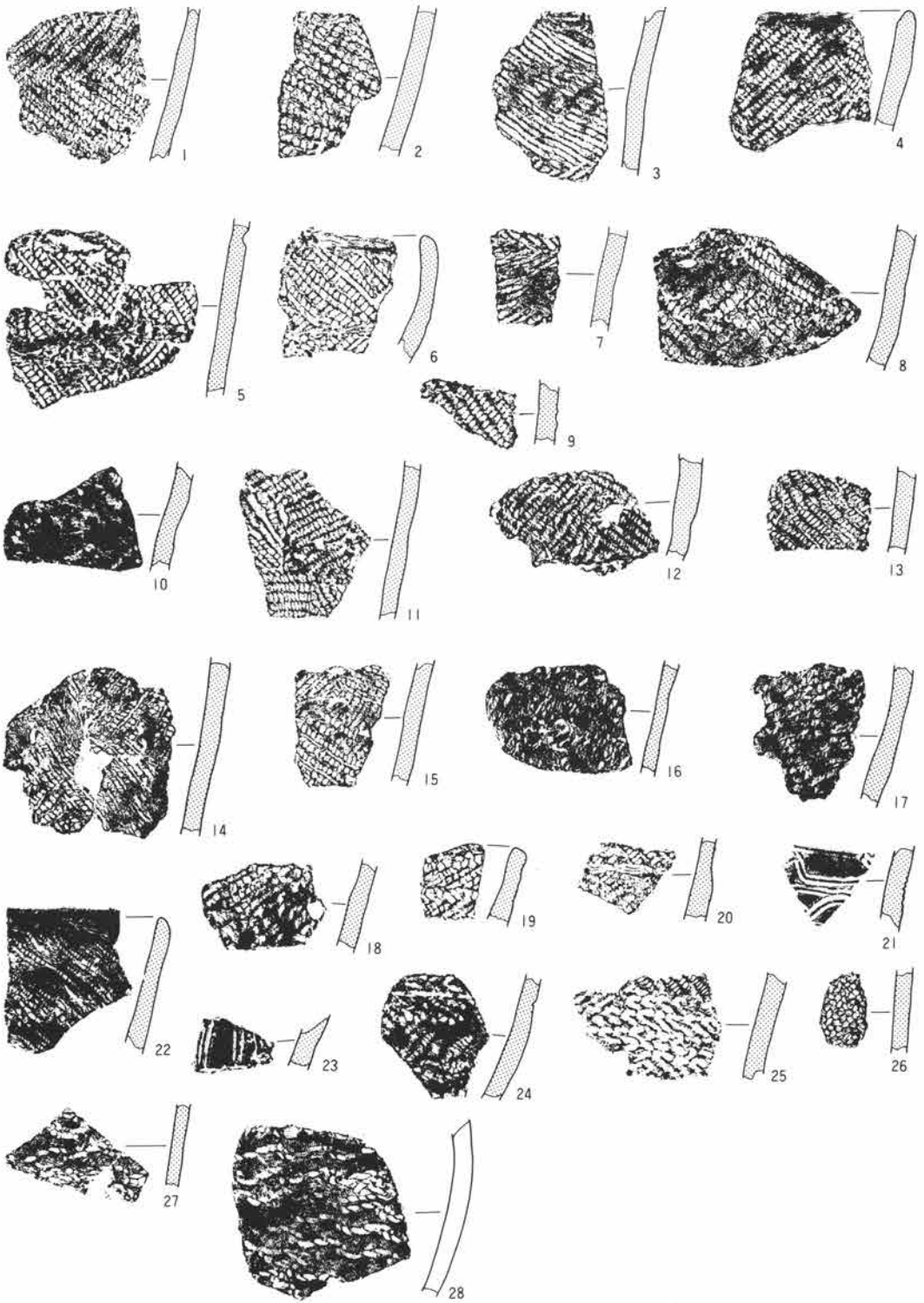
8は結節平行線文により対角線文の文様構成がとられ、交点には円形文が配される。また器面にはRL r³、LR l³横位による羽状縄文が施されるが、平行線文間は磨消縄文となっている。9も平行線文間が磨消縄文となり、縄文はRL r³が施される。8と類似点が多く接合関係はないも

IV 検出された遺構と遺物



第59図 第II群土器

IV 検出された遺構と遺物



第60図 第II群土器

IV 検出された遺構と遺物

のの同一個体と考えられる。10は横走する平行線文をはさんで斜行線文が施され、さらに縦走する平行線文との交点に円形文が配される。文様構成としては肋骨文状のモチーフがとられるものと考えられる。縄文は認められない。

e種 木葉文（第58図21～23、第61図21）

21・22は横走線文および弧線文を組み合わせることで木葉文を構成している。縄文は施されない。23は口縁部片であり、貼付による横位の隆帯文をもつ。隆帯文直下には連続爪形文が2条巡り、その下位に弧状の平行線文による木葉文状のモチーフを主とした文様を施す。なお、第60図21は第58図21と同一個体である。

第2類 連続爪形文により文様構成するもの

a種 横走する連続爪形文（第58図11～14・16・19）

口縁に沿って連続爪形文を施すものである。11・14は水平口縁、12・13・16は波状口縁を呈する。13・14には連続爪形文間に円形文が配される。縄文は11・12がLR横位、13・16がLR、RL横位による菱形状縄文が構成される。

b種 横走および斜行する連続爪形文により構成するもの（第58図15・17～20）

17は横走する連続爪形文間に対角線状の連続爪形文を施し文構帯を構成し、爪形文の交点には円形竹管文が配される。縄文はRL横位である。19は平行線文と組み合わせ肋骨文を構成し、縦位の平行線文上には円形竹管文が配される。20も肋骨文を構成するが施文は粗雑で、平行線文間に爪形文を施す部分と施さない部分がある。縦位の平行線文上には円形管文が配される。

第3類 隆帯文（第58図24・25）

貼付による隆帯文は口縁波状部に付され小突起をなす。両者とも内湾ぎみに立ち上る波状口縁を呈する。24は連続爪形文を3条巡らせ口縁部文様帯を構成し、以下RL横位の縄文となる。25は隆帯文上に円形の押圧文が施され、この隆帯を中心とした斜行線文により文様構成される。

第4類 縄文片を一括する。原体により次の種別がある。

a種 1段無節縄文（第59図1～5・7・17、第60図16～18）

第59図1・2・17がR、3～5・7・第60図16～18がLであり横位に施す。

b種 2段単節縄文（第59図6～16・19～21）

6・8・10・16・19・20・21がRL、7・9・11・12～15がLRであり横位に施す。

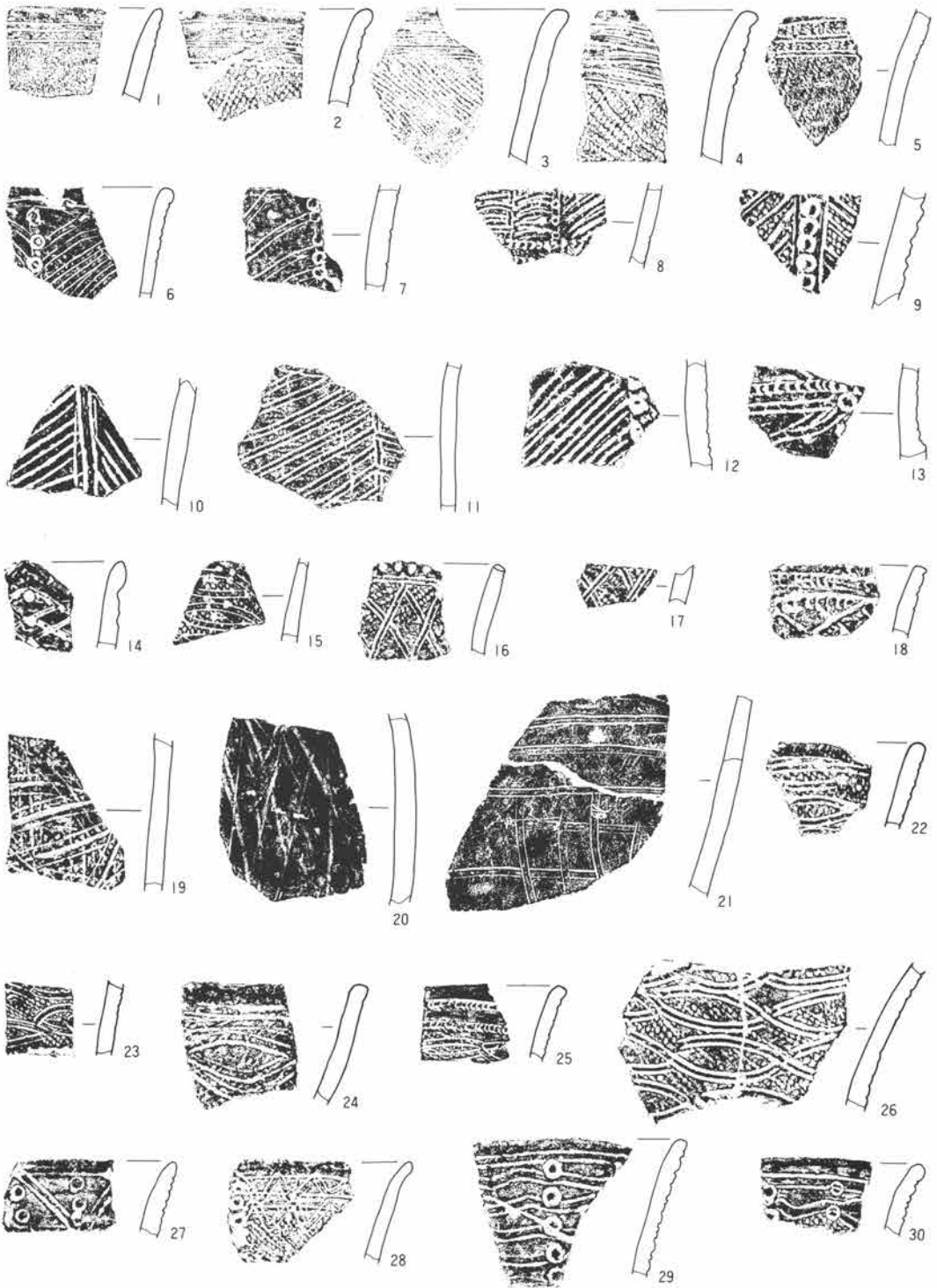
c種 0段多条2段単節縄文（第59図22～25・28・31、第60図9・22）

第59図22・23・28・第60図9・22がRLr³、第59図24・25がLRl³である。31はRLr³であるが施文方位が不規則であり、縦位施文もみられる。

e種 羽状、菱形状縄文（第59図32～34、第60図1～4・5～8・10～15）

撚走向の異なる2種類の原体を用い施すものでその組み合わせは次のとおりである。RL—LR（第59図32、第60図1・2・4・8）、RLr³—LRl³（第59図33・34、第60図11～13）、R—L（第60図3・7・10）、付加条第1種（第60図5・6・15）、RL—L（第60図14）等がある。60

IV 検出された遺構と遺物



第61図 第三群土器

IV 検出された遺構と遺物

図11には縄文横位施文の際生じる粘土の盛り上りが明瞭に認められる。

e種 結束第1種 (第60図24)

$RLr^3 \cdot LRl^3$ を結束第1種としている羽状縄文である。

f種 付加条 (第59図26～30、第60図27・28)

第59図27～29は付加条第1種、30は第2種が用いられている。第60図27・28は付加された条が規則的に波状となるもので名久井文明氏により摘出された芦野遺跡例と同種のものである。

g種 ループ縄文 (第60図19・25)

19は口縁部片で、間隔をおいて LRl^3 のループが施される。25は RLr^3 のループが4段にわたり施される胴部片である。

h種 組紐 (第60図26)

1点のみ検出された。0段条4本による丸組紐の横位縄文である。

第III群土器 (第61図～第73図)

前期後半諸磯a・b式に該当する一群である。次の7類に分類される。

第1類 幅の狭い平行線文により文様構成されるものを一括する。

a種 横走線文 (第61図1～5)

平行線文が口縁に沿って単純に横走するものである。2・4には縦位の円形竹管文列が配される。縄文は1・4が RL 、2・5が LR^3 、3が RL^3 が各々横位に施される。

b種 肋骨文 (第61図6～13、第72図2・3)

縦位の平行線文に斜行もしくは弧線文を組み合わせ肋骨文構成をとるものである。6～8・13は弧線が用いられるが、施文はやや粗雑である。縦位の平行線文上には円形竹管文が配される。9～12は斜行線文により構成されるが、11以外は施文がやや粗く、10・12は斜行線文の間隔が狭く集合条線文を呈する。縄文は9が RL 、11が R を横位に施す。他については施文されない。第72図2は口唇部に連続的な刻目が施され、細かな山形状を呈している。口縁には連続爪形文が2条巡り、以下縦位の平行線文および弧線文により肋骨文が施される。また平行線文上には円形竹管文列が配される。縄文はない。3は口径と底径の差の少ない浅鉢形土器である。口縁は水平でやや内湾ぎみに立ち上る。器全面にやや粗雑な肋骨文が施される。やはり縄文は認められない。

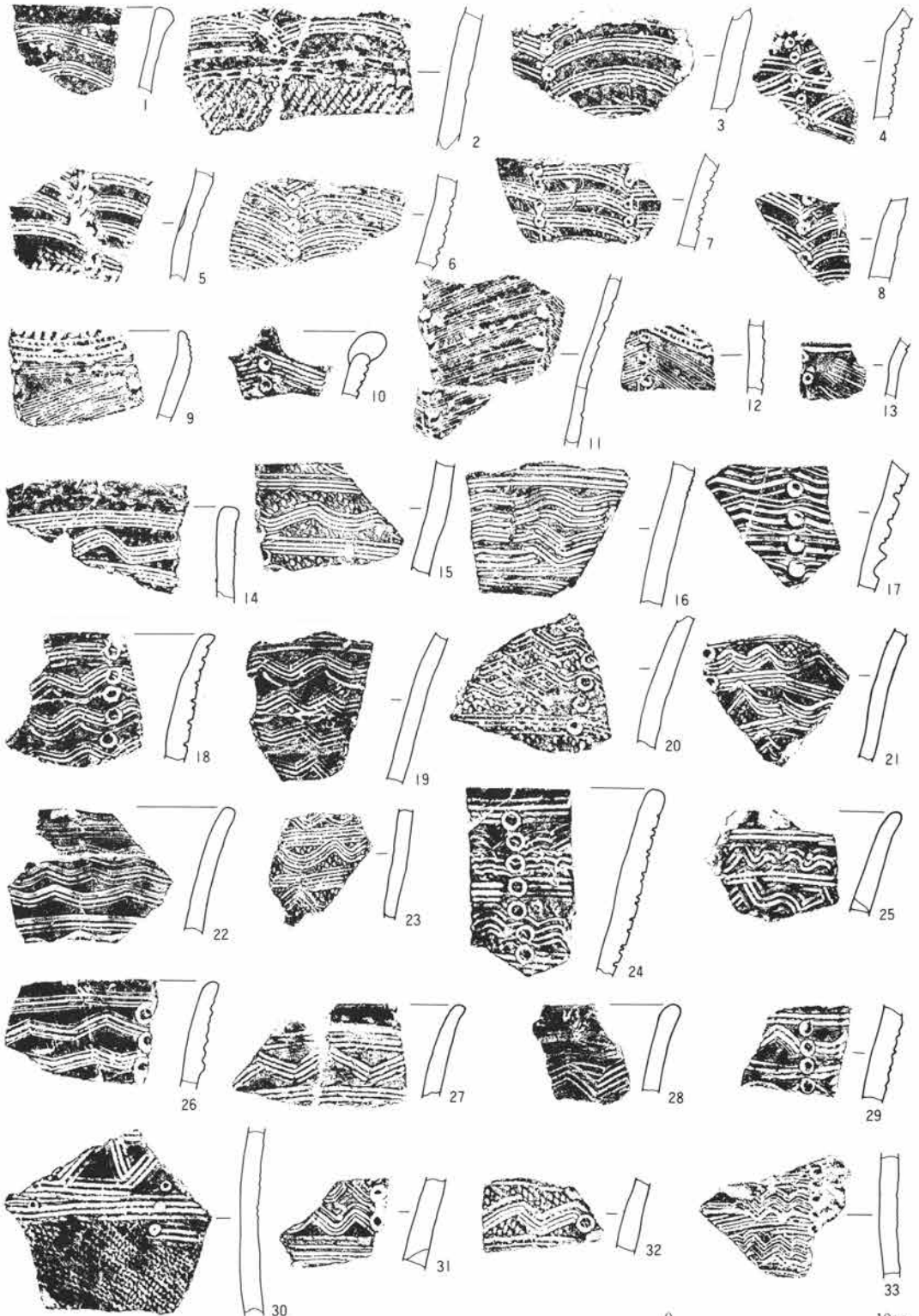
c種 木葉文 (第61図15・22～26)

弧線文の組み合わせにより木葉状構成をとるものである。22・24は口縁に沿って平行線文を巡らせ、その下に木葉文が施される。25は連続爪形文を2条巡らせその間を磨消縄文としている。26は弧線文が連続的に施され、さらにそれを交差させることにより木葉状の文様を構成するものである。縄文は15・22・23・25・26が RL^3 横位、24は不明瞭であるが L 横位が施される。

d種 格子文 (第61図14・16～21)

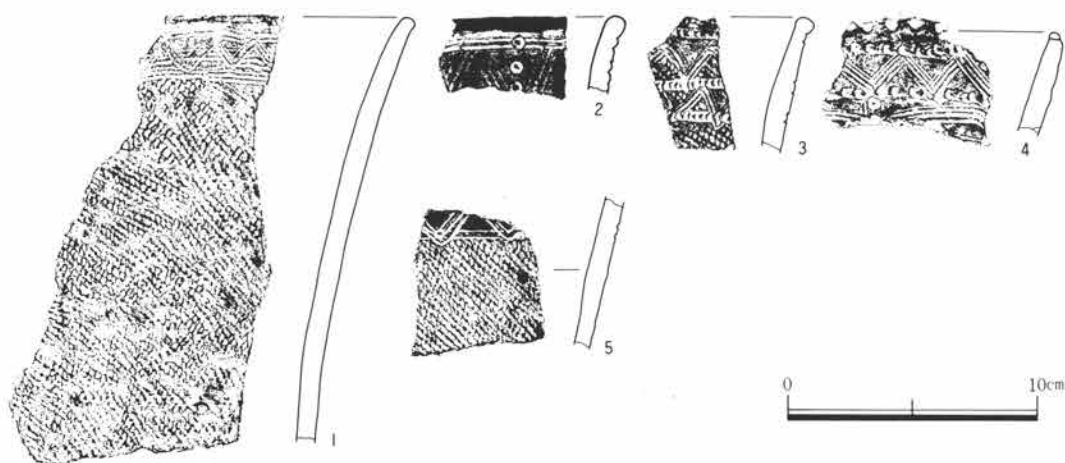
斜行線文を交差させ格子目状の文様を表出するものである。14は波状口縁の波頂部にあたり、格子文上に円形文を配し、一部に爪形文がみられる。16は水平口縁を呈し、口唇部上に円形の刻

IV 検出された遺構と遺物



第62図 第三群土器

IV 検出された遺構と遺物



第63図 第Ⅲ群土器

目が施される17は16と同一個体である。19～21は粗く不規則な格子文が施される。なお18・20は平行線文が用いられず単一沈線文によるものである。縄文は16・17にRL横位が施される。

e種 波状文（第61図28～30）

波状平行線文によるものを一括する。29・30は振幅が少なくゆるやかな波状文を形成する。縄文は文様施文の際かき消されて不明瞭であるが両者ともRL横位が認められる。28は3条の横走平行線文上に波長が短く振幅もやや大きめの波状文が2段施される。縄文はRL³横位である。いずれも縦位の円形竹管文が配されている。

f種 斜行線文（第61図27）

斜行線文を交互に施し山形状の文様を構成する。また平行線文による区画内には円形竹管文が配される。縄文は施されない。

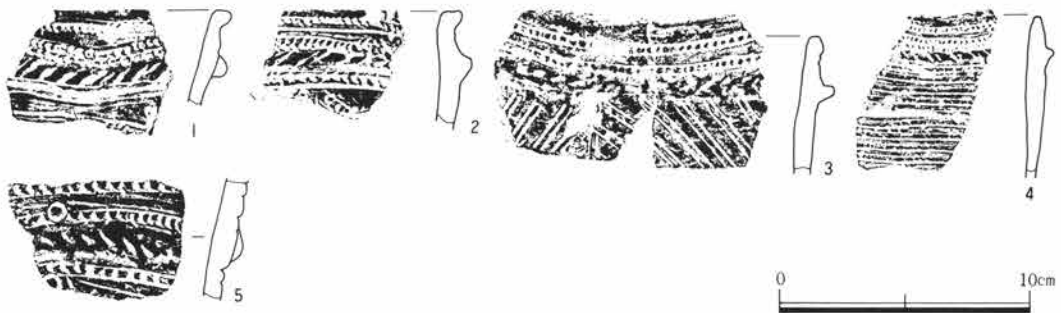
第2類 櫛歯状工具により文様構成されるものを一括する。

a種 肋骨文（第62図1～13）

第1類b種と共通する文様構成をもち、弧状（1～8）、斜行（9～13）の櫛歯文により表出される。縦位の平行線文は櫛歯文を施す際消されてしまうが、この部分には肋骨文施文後に円形文が配される。口縁は水平口縁（1）と波状口縁（9・12）を呈するものがある。4は弧状の櫛歯文を組み合せ木葉状の肋骨文を構成する。9は口唇部に深い刻目を施し、10には波頂部に突起状の貼付文が付されている。櫛歯の数は、3本（4）、4本（1～3・5～8）、5本以上（9～13）があり、また櫛歯原体もやや太いもの（1～8・10）と細く密接するもの（9・11～13）がある。

b種 波状文（第62図14～29・31～33、第63図1・3・5）

櫛歯文を連続的に波状に施すことにより表出されるものを一括する。この中には振幅が狭く、波長の長いもの（14～17・22）、振幅が大きく、波長の短いもの（18・21・23～25・28・29・31～33、第63図1・3・5）波状文が直線的で波頂（底）部で一担止めぎみに施文し、山形状の構成



第64図 第Ⅲ群土器

となるもの（第62図26・27）がある。第62図14・15・21・23・25・29は横走櫛歯文と波状文が交互にくり返され、15にはRL横位が施される。16・17は波状文が接して施され重畳する。さらに17には櫛歯が太く沈刻も深目である。櫛歯数は、20・25・28・29、第63図1---3・5が3本でこれ以外は4本である。第63図1は水平口縁を呈する深鉢形土器であり、口縁部に横走櫛歯文を施した後、波状文を1段めぐらせる。器面にはRL³横位が施される。同図3は、連続爪形文と波状文を交互施文するもので、器面にはRL³横位が施される。同図5は文様帯以下のみにRL³横位が施される。

c種 斜行櫛歯文（第62図30、第63図2・4）

斜行する櫛歯文を組み合わせ、山形状の文様を構成するもので、第1類f種と共通する。第62図30は横走櫛歯文および縦位の円形竹管文列が組み合わされ、胴部にはRL³横位が施される。63図2も同様の文様構成をもつ口縁部片であり、縄文はRL横位が施される。4は口唇部に円形の刻目をもち、連続爪形文間に山形状の文様が構成される。さらにその下位には円形竹管文と共に弧状の櫛歯文がみられる。この弧状文様については破片のためその構成が不明であるが、肋骨文状のモチーフをとるように見える。縄文はRL横位が施される。

第3類 隆帯文をもつものを一括する。

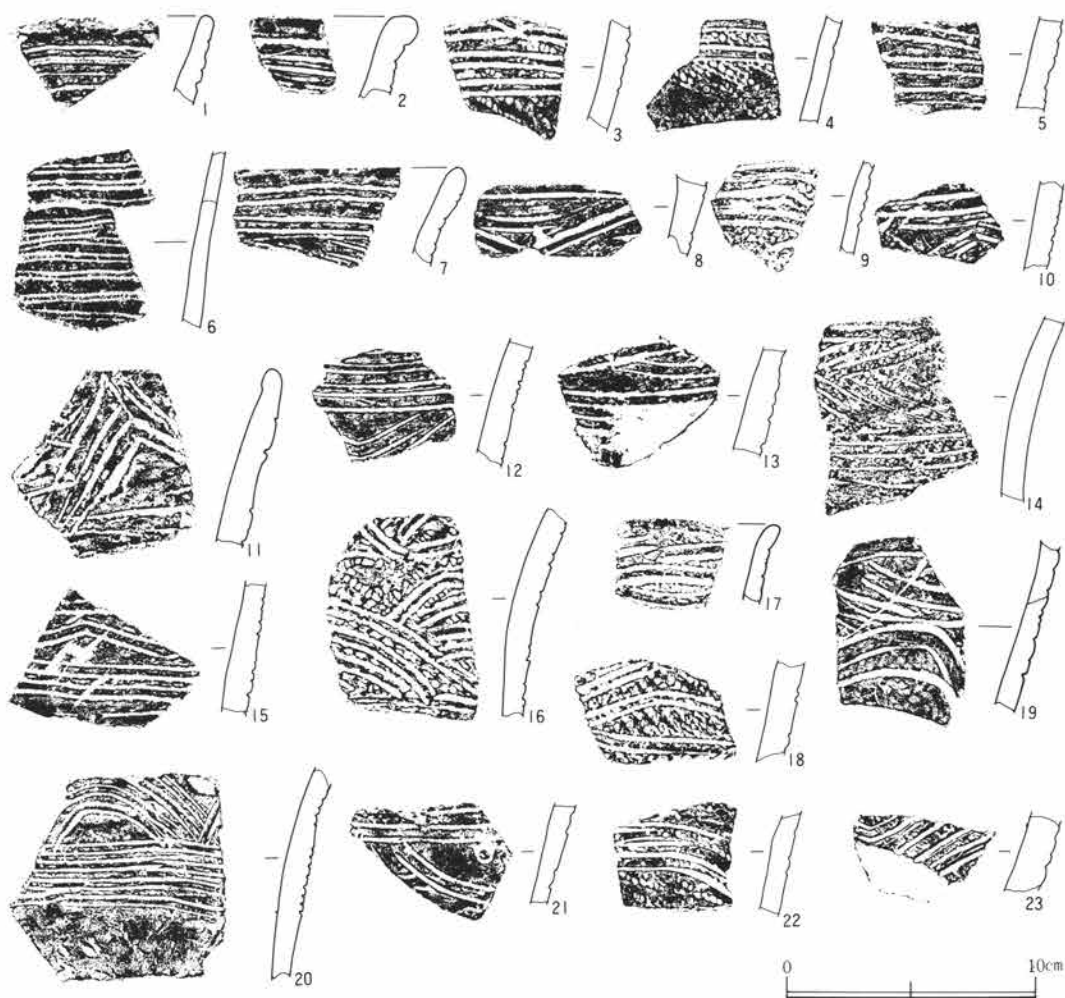
a種 附着隆帯文（第64図1～5）

粘土紐を貼付するもので、いずれも隆帯文上には刻目が施される。1・2は口唇部が外側にやや突出し、隆帯文を付した後連続爪形文を施している。下位の文様構成は不明である。3は波状口縁を呈し、隆帯文下には平行線文による肋骨文が表出される。4もゆるやかな波状口縁を呈し、隆帯文下には横走線文が連続的に施される。5は隆帯文をはさんで連続爪形文が巡り、円形竹管文も認められる。

b種 折り返し口縁の隆帯文（第72図1）

外反ぎみに開く深鉢形土器であり、底部は欠損する。隆帯文状の折り返し口縁上には小突起状が付される。器面にはRL横位が施される。原体はよく撚られているものの施文は粗く、条走向は不規則となっている。その他文様はみられない。

IV 検出された遺構と遺物



第65図 第Ⅲ群土器

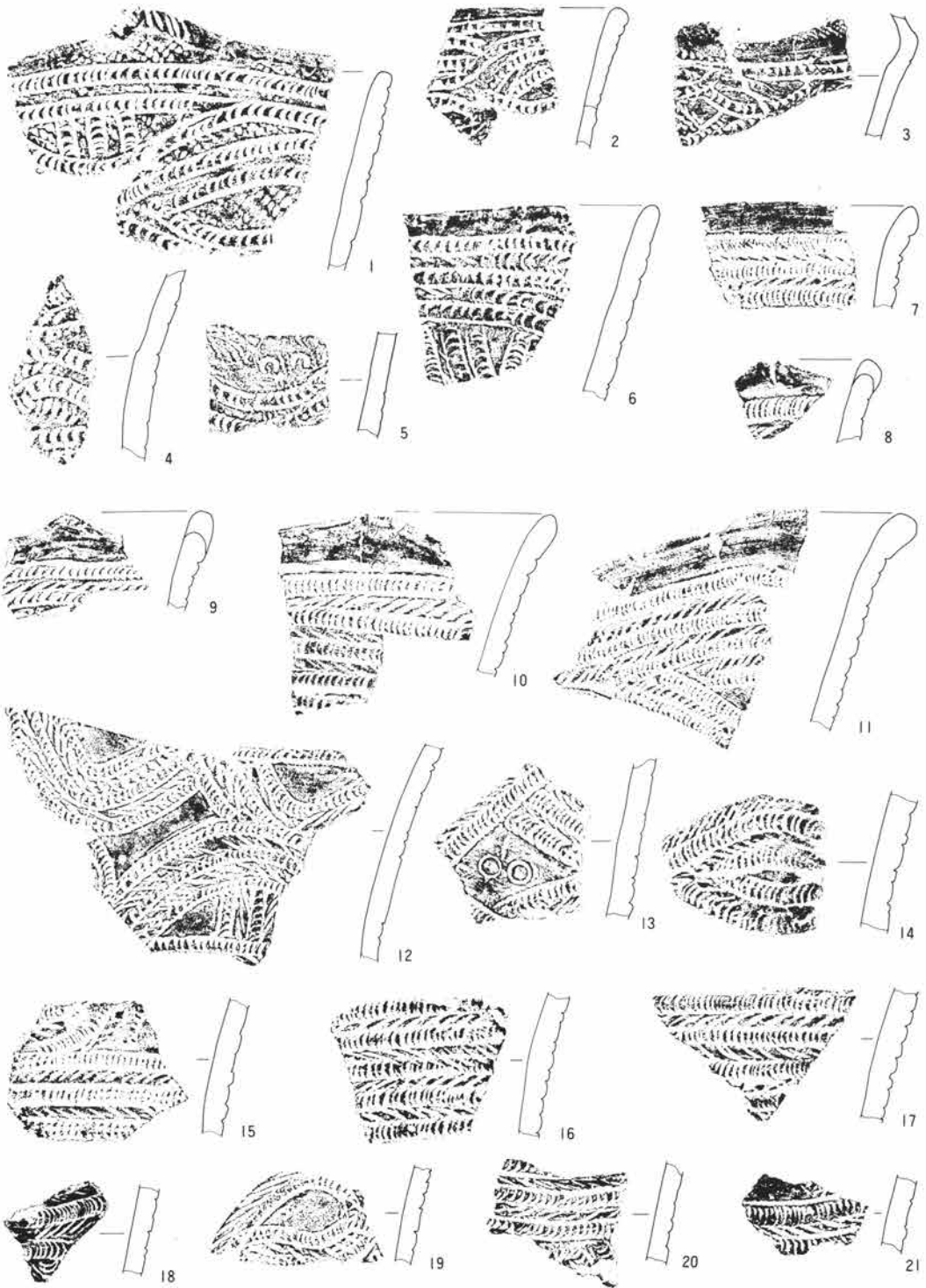
第4類 幅広の平行線文により文様構成されるものを一括する。

a種 横走線文 (第65図1~7)

平行線文が口縁に沿って単純に横走するものである。平行線文の沈刻は深く、明瞭である。縄文は3・4に認められ各々RL横位が施される。施文はやや粗い。

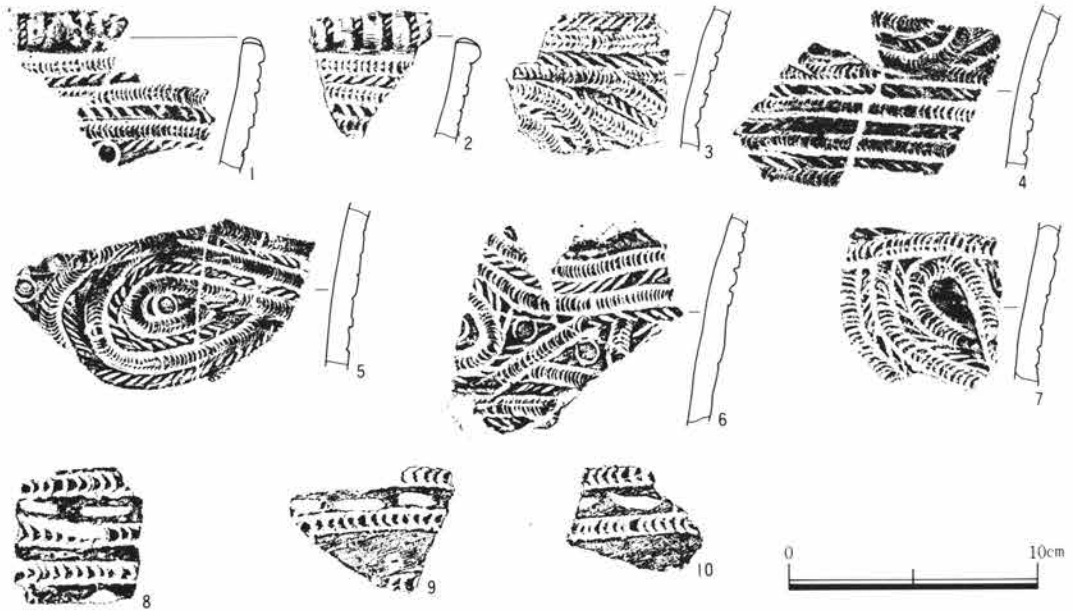
b種 斜行線文 (第65図8~11・13~15)

横走線文に斜行線文を組み合わせて三角形状、山形状もしくは矢羽根状の文様構成を行うものである。やはり平行線文の沈刻が深く、表出される文様は粗雑な感をうけるが一方力強いものとなっている。器面には縄文が施されるが文様施文の際大半がかき消されるようであり、不明瞭である。9・14にはRL横位が観察される。



第66図 第III群土器

IV 検出された遺構と遺物



第67図 第Ⅲ群土器

c種 弧線文（第65図12・16～23、第72図5、第73図1）

弧状の平行線文と横走線文を組み合わせ文様帯を構成するものである。弧線文は重畳して加えられ、やや複雑なモチーフとなる。第62図17・18には木葉文状の組み合わせがみられる。器面には縄文が施され、16はRL・LR各々横位による羽状縄文が加えられる他、17～20・22にはRL横位が用いられる。いずれも施文はやや粗く不明瞭なものが多い。21には円形竹管が配される。第72図5は水平口縁の深鉢形土器であり、口縁および頸部に連続爪形文が2条づつ巡り、その間に弧線文が施され文様帯が構成される。縄文は器全面にRL横位が施される。施文は浅くかつ不明瞭である。第73図1は口縁部がくの字状に内湾し、4単位の小突起状の波状口縁を呈する深鉢形土器であり、胴下半は欠損する。口縁部文様帯は横走線文、弧線文により構成され、この部分には縄文は認められない。しかし現存する胴部に不明瞭ながら左傾する条が観察されることから以下は縄文が施されるのであろう。なおこの原体については残存部が少なく特定できない。

5類 連続爪形文により文様構成するものを一括する。

a種 横走る連続爪形文

口縁に沿って連続爪形文が単純に横走るものである。また、表出技法において次のものが含まれる。（なお、ここでは適当な資料がないため住居出土土器により例示するものとする。）平行線を引きつつ一定間隔をもって爪形文を加えることにより、結節的な技法をとるもの。第6図11、第21図6・7などが該当する。次に平行線を引いた後、その上に爪形文を加えるもの。第6図10・12・14などがこれにあたり最も一般的な連続爪形文である。半截竹管をやや内側に傾け竹管外側から内側へ向け横引きしながら爪形文を加えるもので類例は少ないが第25図7が該当しよ

う。

b種 連鎖状爪形文（第66図1～6）

表出される爪形文は幅広であり、技法的には平行線を引いた後に爪形文を加えるものである。文様は、爪形文が横走、縦走および曲線状に施され複雑な構成となっている。1は波状口縁を呈し、口唇上に刻目が施される。5には円形竹管文が配される。縄文は1・5にRL横位、4にLR横位が施される。

c種 刻目をもつ連鎖状爪形文（第66図7～21、第67図1～7）

連続爪形文間に刻目を施すものである。文様構成は上記b種と共通するが、表出される爪形文は本種の間隔が密であり、概して施文も良好である。このため連続爪形文にはさまれる部分は隆線状に盛り上げる傾向をもち文様効果を一層あげている。この傾向は第67図1～7に著しい。縄文は器面がこれらの文様で充填されるため施されないようであり認められない。第66図13、第67図5・6には爪形文間の無文部に円形竹管文が配される。口縁部は山形状の小突起をもつもの（第66図8・9）、ゆるやかな波状を呈するもの（第66図10・11）、刻目をもつ浮線文状貼付文を施すもの（第67図1・2）がある。

d種 D字形爪形文をもつもの（第67図8～10）

半截竹管などの施文具の外表面を器面に押しつけD字形の爪形文を表出するものである。ここに図示したものはこのD字形爪形文がやや長めであり形がくずれているが、やはり本種に属すものと思われる。いずれも横走連続爪形文間に加えられる。縄文は認められない。

第6類 浮線文土器（第68図～第70図）

器面に細い粘土紐を貼り付けることにより文様を構成するものである。浮線文上には、縄文を施すもの、刻目を施すもの、何も施されないものの3種が認められる。

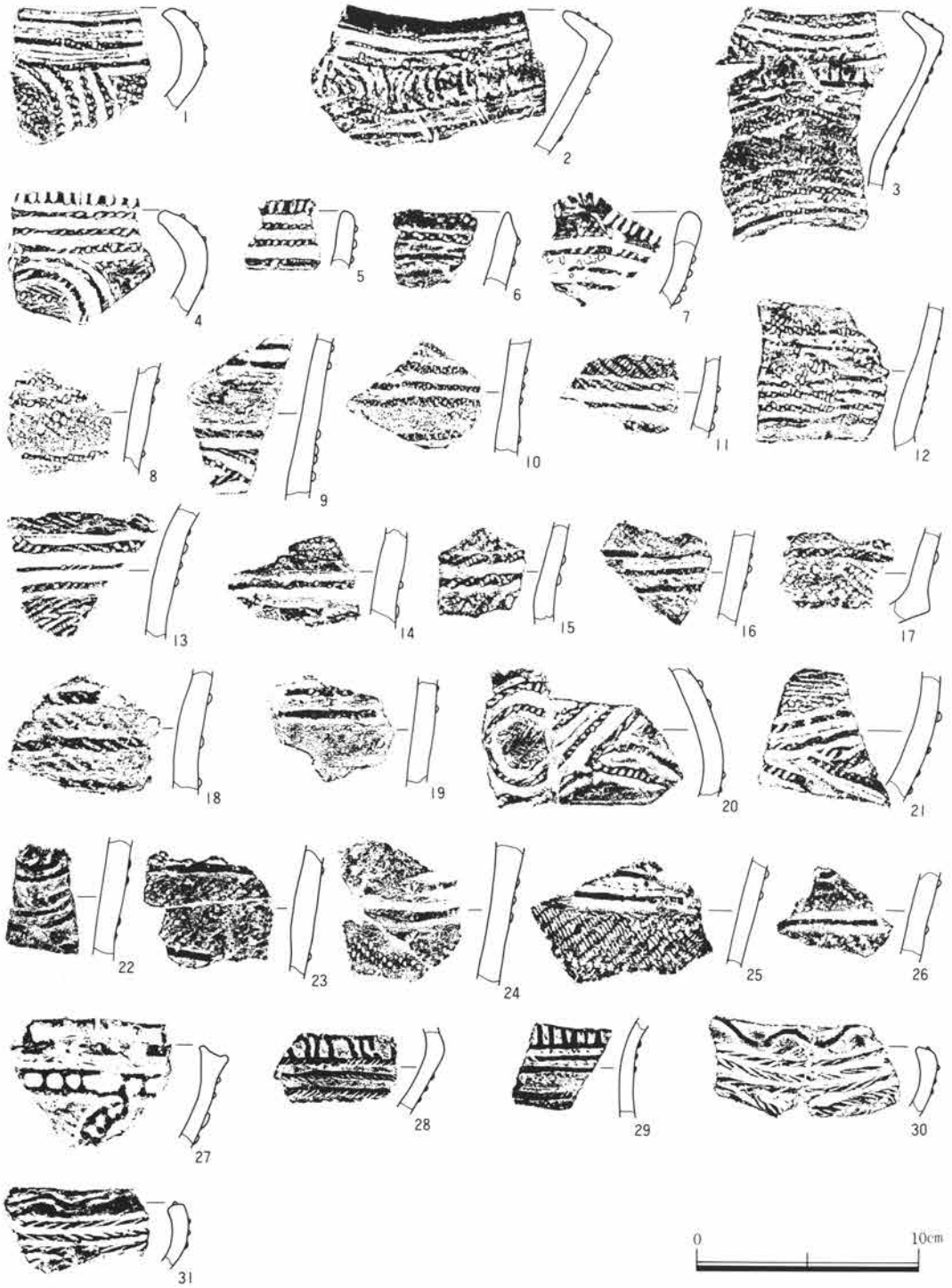
a種 浮線文上に縄文を施すもの（第68図1～21、第73図2）

口縁部を中心として横走、縦走および曲線状の浮線文が施され文様帯を構成（第68図1～4・20）し、胴部には横走する浮線文が数条加えられる（第68図8～16・18・19）。器形は口縁が内湾するもの（1・4）、くの字状を呈するもの（2・3）、外反ぎみに立ち上るもの（6・7）がある。また4・5・7には口唇上に刻目が施される。この種の浮線文は縄文が加えられることにより総じて扁平となる。施文は通常器面に縄文を施した後浮線文が加えられ、その上に縄文施文となるが、器面に縄文を施さず、浮線文上のみ縄文を加えるもの（10・19）もある。縄文は1～3・5～10・12・14・16・18・19がRL横位、4はRL-LRを結束第1種とした羽状縄文、11がRLr³横位、13・17がRL-LRを各々横位による羽状縄文、15がLR横位が施される。第73図2は、キャリパー状を呈する深鉢形土器で、口縁部を中心に渦巻状のモチーフが構成され、胴部には横走する浮線文が加えられる。縄文はRL横位であり浮線文間には結節回転もみられる。

b種 浮線文上に何も施されないもの（第68図22～27）

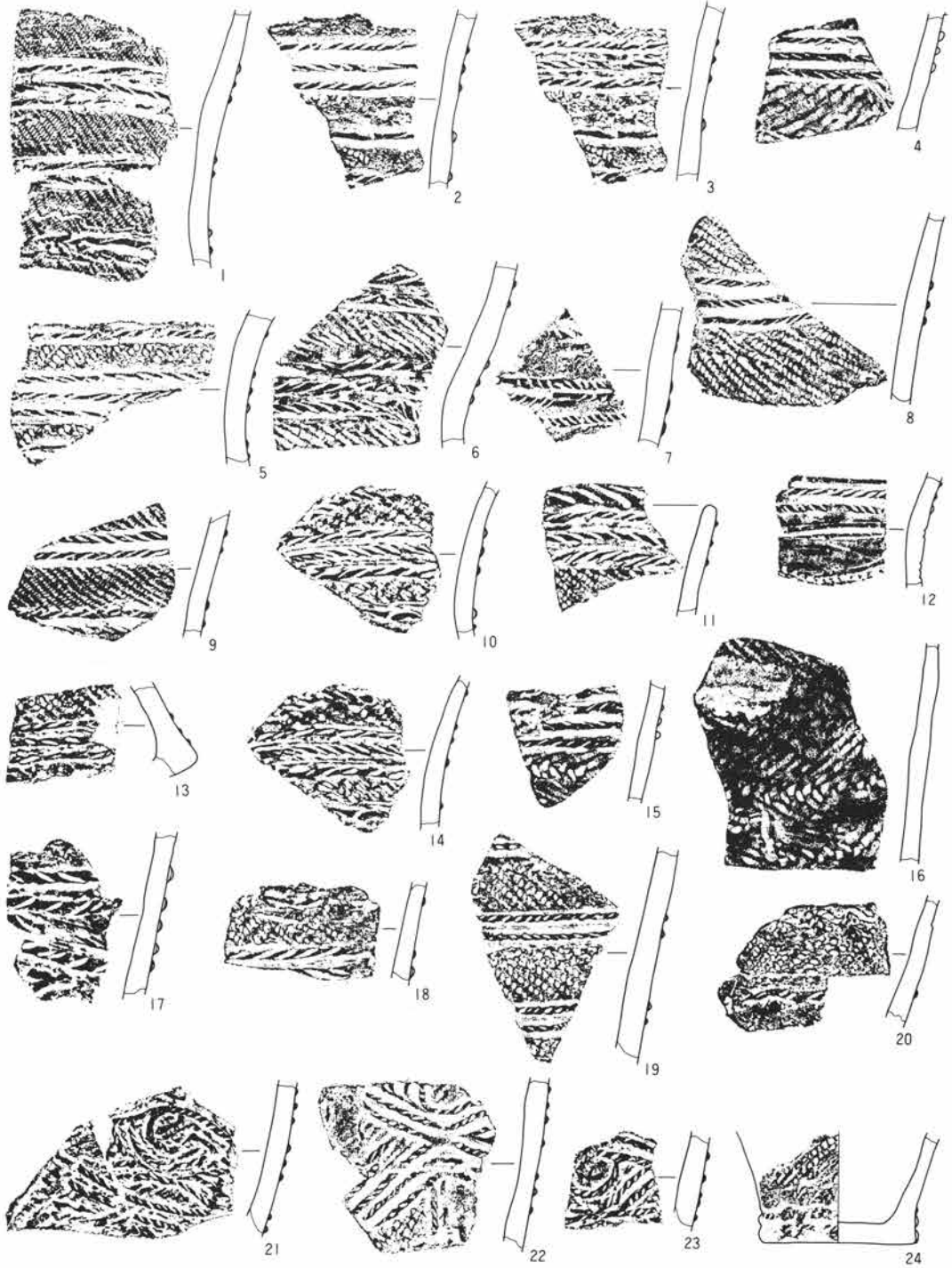
浮線上に縄文、刻目とも施されないものである。器面には23がLR横位、24・26がRL横位、

IV 検出された遺構と遺物



第68図 第三群土器

IV 検出された遺構と遺物



第69図 第三群土器

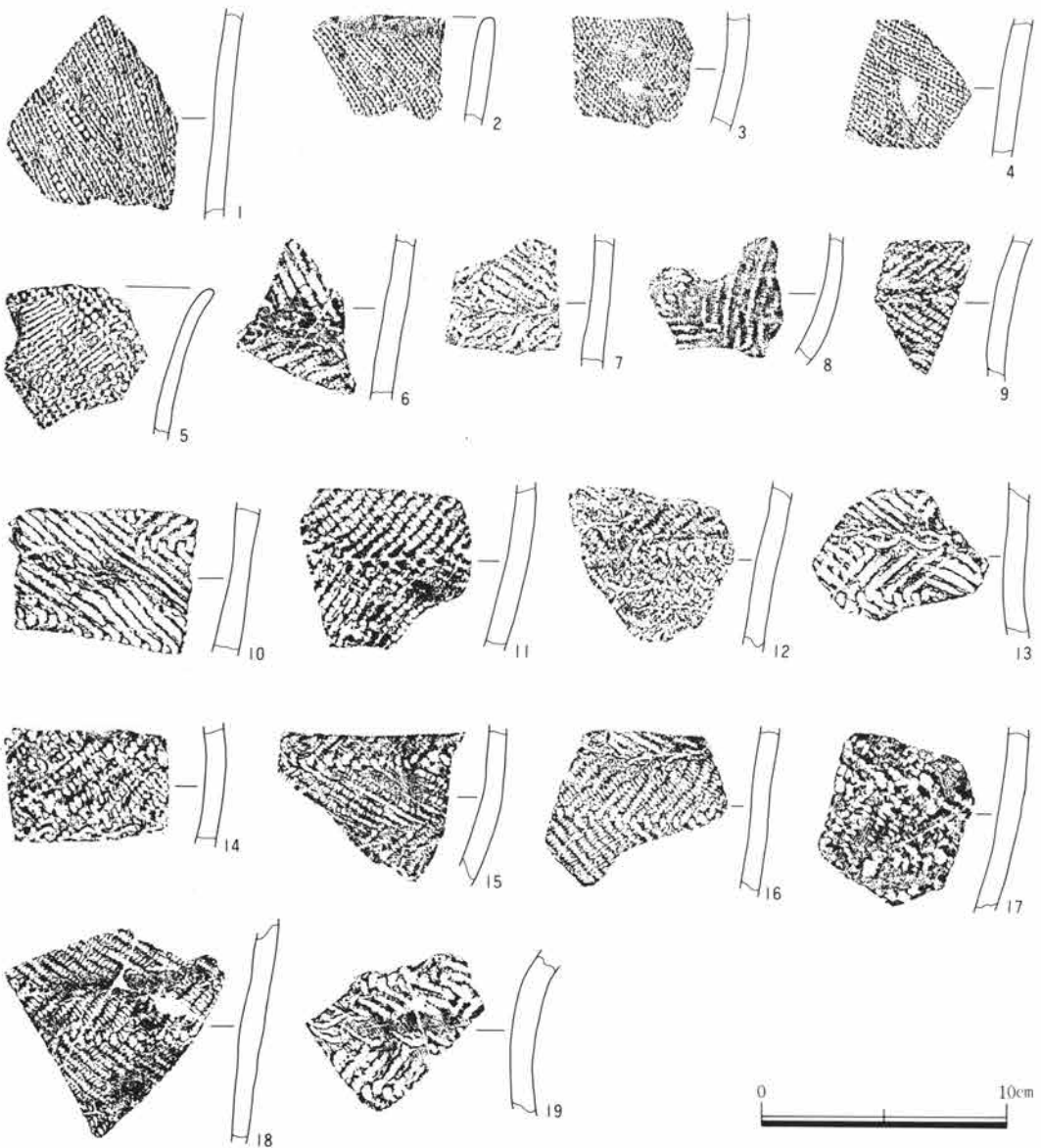
IV 検出された遺構と遺物



第70図 第三群土器

25がR1³横位が施される。27は口唇部に凹面をもつもので、器面には籠目状の浮線文が施される。

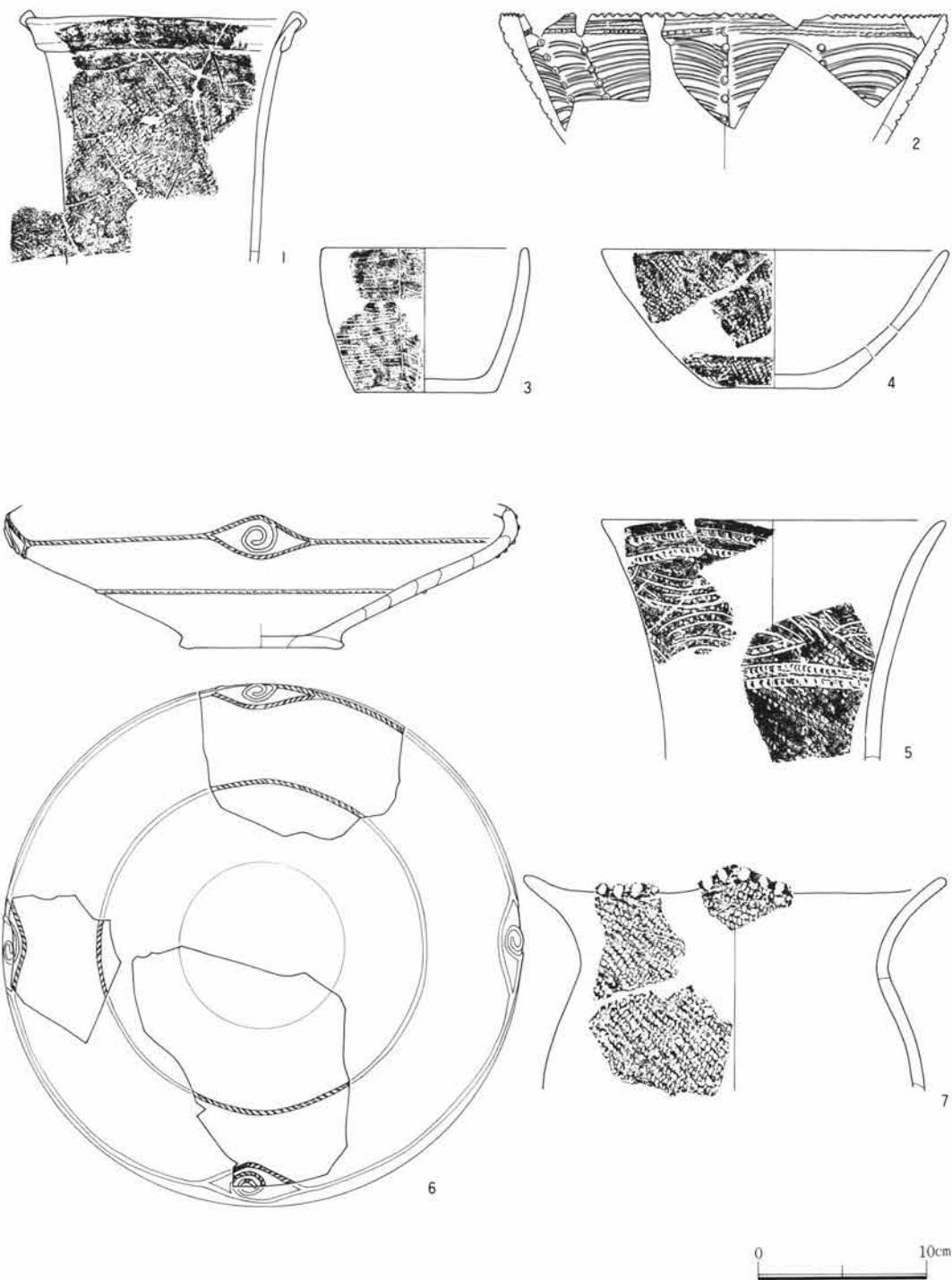
c種 浮線文上に斜位の刻目を施すもの（第68図28～31、第69図6～24、第70図1～29、第72図6、第73図3）



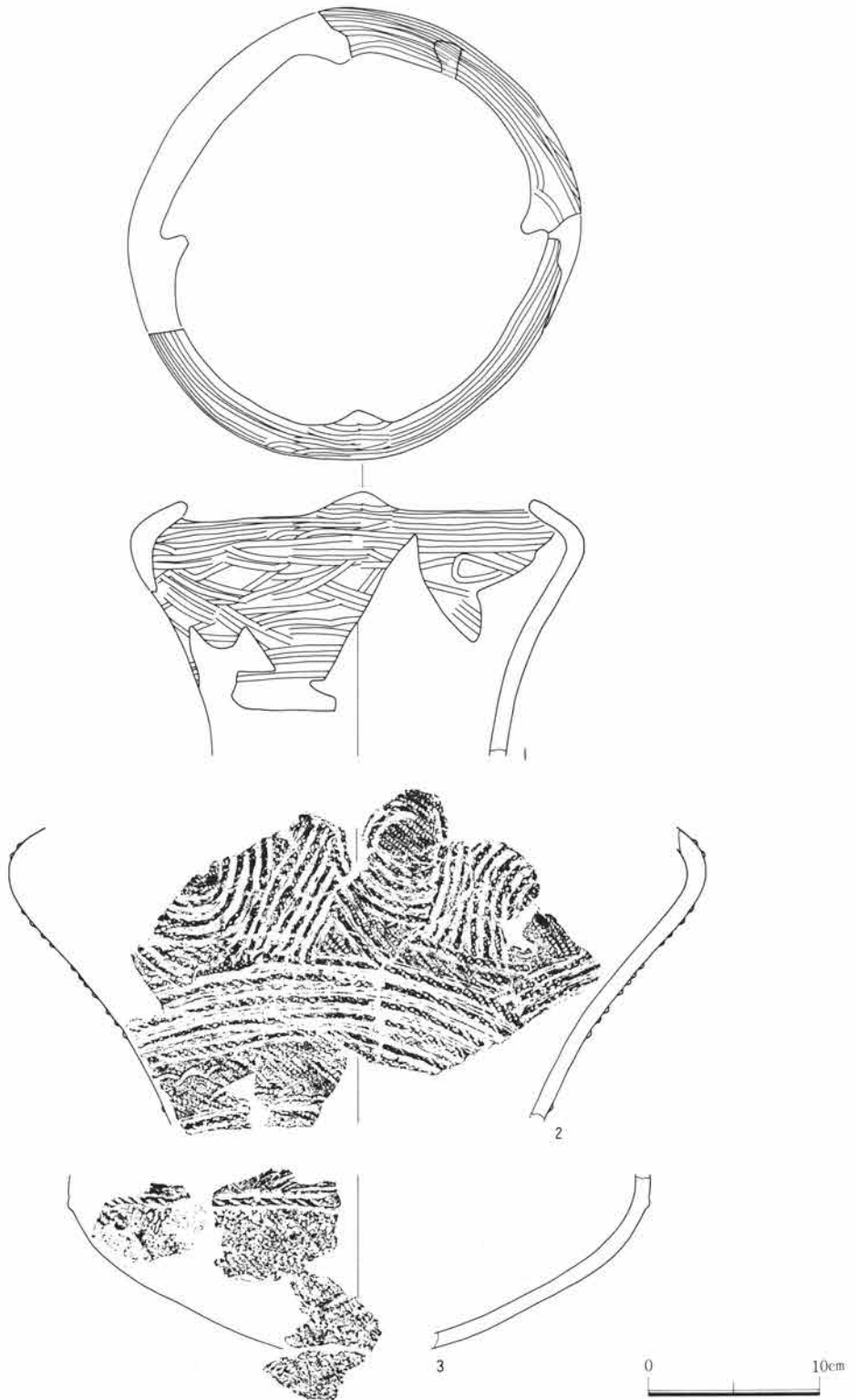
第71図 第Ⅲ群土器

刻目は浮線文毎に傾斜をかえ矢羽根状を呈する。また浮線文についてみると、丸味をもちやや太目のもの（第69図）と、扁平で細目のもの（第70図）があり、さらに施される刻目も前者については丸味があり、後者は細く鋭いものが用いられる傾向がある。第68図28～31は刻目をもつ浮線文と無文の籠目状および波状の浮線文が施される。第69図1～10・12・20は横走する浮線文が数条施される胴部片である。16は浮線文が剥落するがL-Rの結束第1種による羽状縄文が施される。結束第1種は15にも認められる。11は口縁部片であり、口唇部に刻目が施される。21～23は

IV 検出された遺構と遺物



第72図 第Ⅲ群土器



第73図 第Ⅲ群土器

IV 検出された遺構と遺物

曲線状のモチーフをもつもので口縁部付近であろう。24は底部片であり、底部最下部にも浮線文が施される。器面には縄文が施されるが、原体、施文共良好なものが多い。第69図2・3・10・11・13・17・19はRL横位、1・6・8・9はRLr³横位、5・22・24はLR横位が施される。また羽状縄文は前述した結束第1種によるもの他、4がL-R、14がRLr³-LRl³、18・20・21がRL-LR各々横位によるものがある。第70図1・2はくの字状に屈曲する口縁部片である。縄文は1・2・5・6・8・9・11・13・16~19がRL横位、10がRLr³横位、3・20がLR横位である。21~27は浮線文間に小さな円形刺突文が施されるもので、28・29は円形竹管文が配される例である。第72図6、第73図3は浮線文の施される浅鉢形土器である。6は口縁部を欠損するが、胴上部には横走る浮線文により菱形状区画を4単位設け、その内側に渦巻状浮線文(無文)を施す。さらに胴下部にも一条浮線文を巡らせる。縄文は施されない。3は胴部片で、器面にはRL横位が施され、やや太目の浮線文を一条巡すものである。

第7類 縄文片を一括する(第71図、第72図4・7)

縄文のみの土器片は多数出土しているが、当然この中にはこれまで述べてきた各種文様が施される土器の破片が含まれるであろう。ここでは特徴的な縄文を中心にとりあげそのバラエティーをみることにする。なおその他の破片についてはあわせて表示しておきたい。

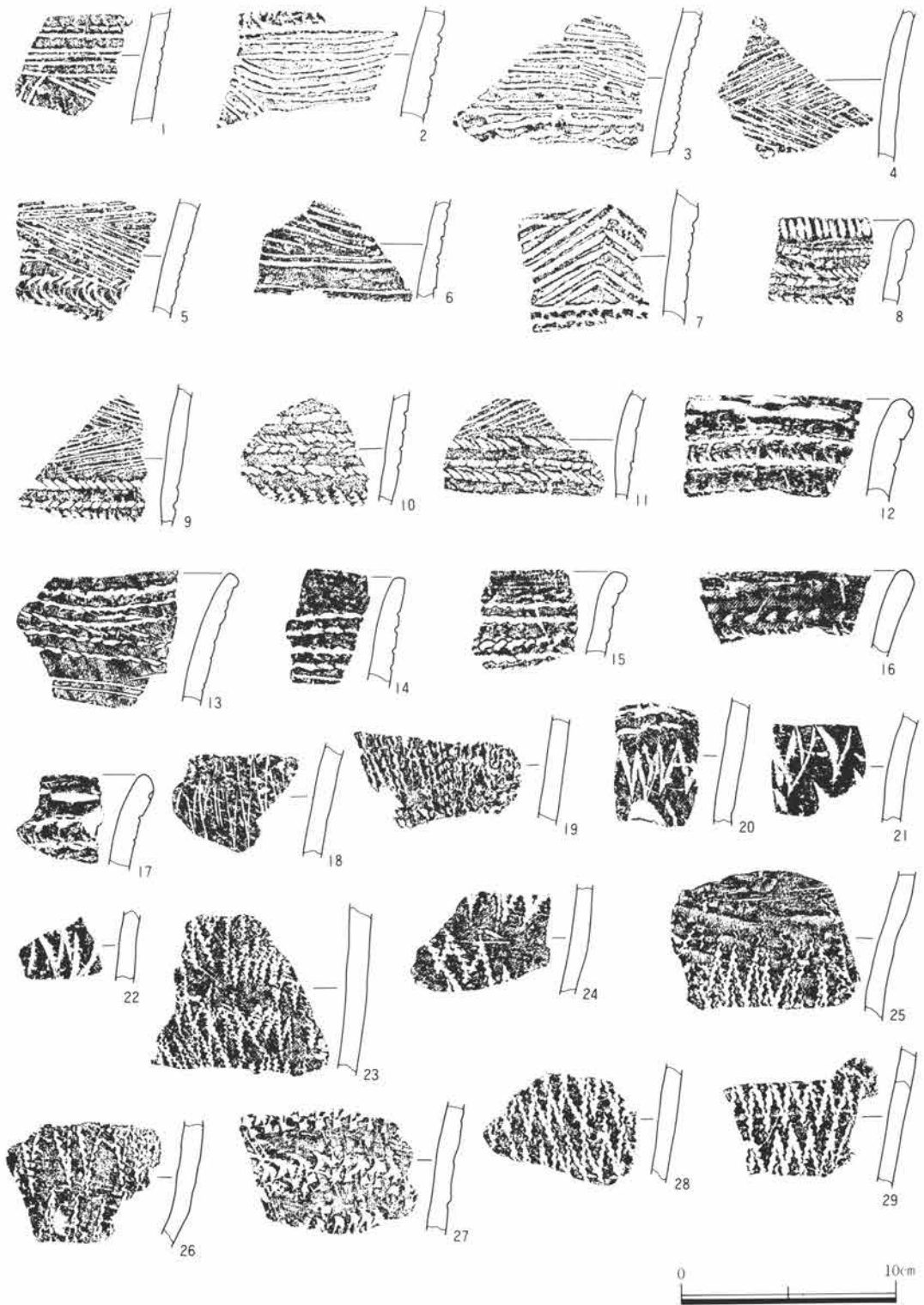
1~4は1段多条の単節縄文である。1はRL⁴、2~4はRL³であり施文方位は横位である。5~9・11は結束にならない羽状縄文であり、その組み合わせは次のとおりである。5はRL-L 6はL-R、7・11はRL-LR、8・9はRLr³-LRl³で各々横位に施す。10・12~19は結束第1種による羽状縄文である。10・13はL-R、12・14・15はRLr³-LRl³、16・18はRLr⁴-LRl⁴、17・19はRL-LRとなる。

第72図4は浅鉢形土器であり、器全面にRL横位が施される。施文は良好ではなく、横位を基本とするものの条走向に不規則な部分がある。7は括れた頸部から大きく外反ぎみに開く深鉢形土器で、胴下半部を欠損する。ゆるやかな4単位の波状口縁を呈し、口唇部に円形の刻目が施される。器全面にRL横位が施される。

縄文片のみの出土傾向は次のとおりである。いずれも胎土中に繊維を含まず、前述した第III群土器に該当するものである。また撚りの基本は1段においてある。

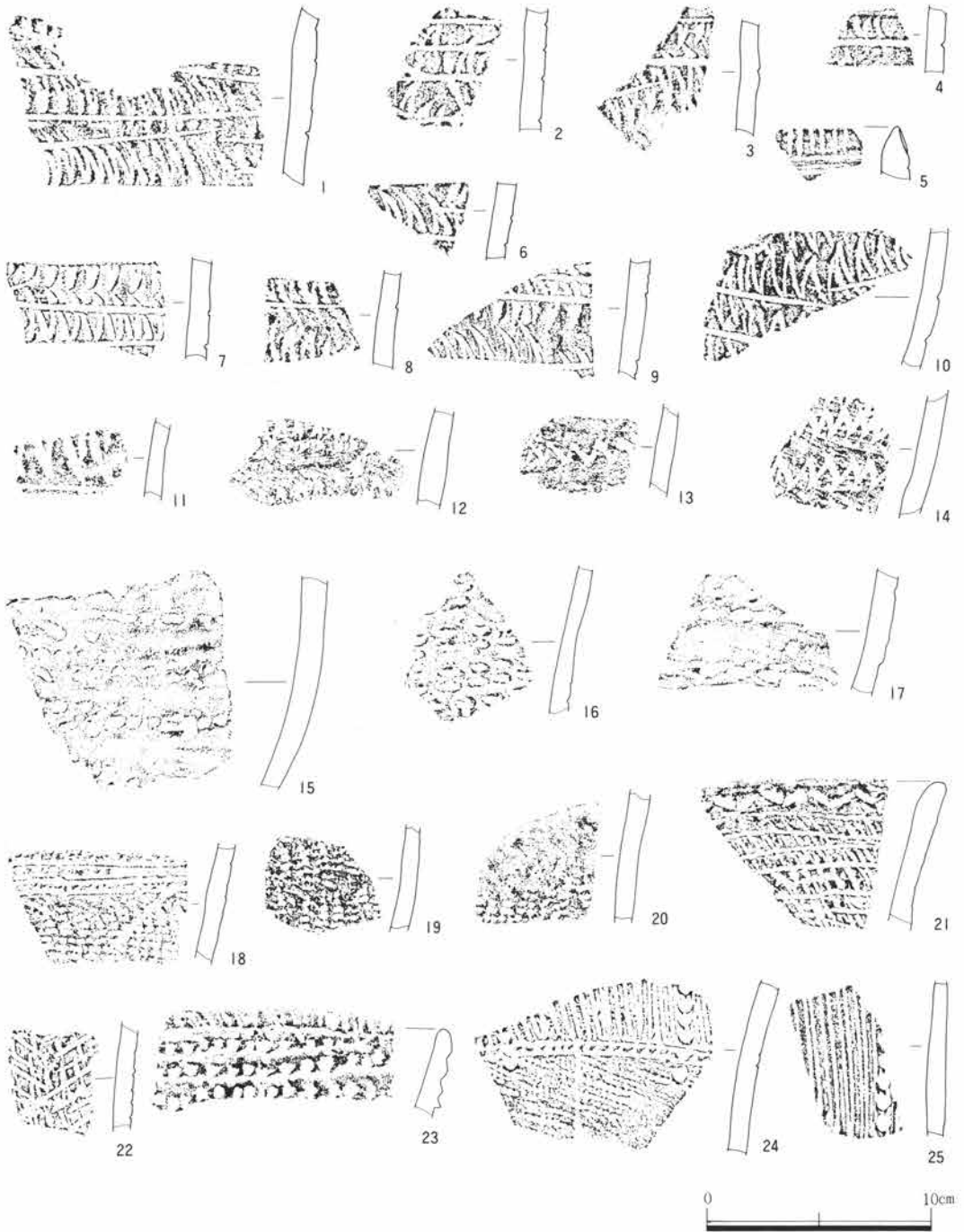
| 種別 基本撚 | 1段 | 2段 | 1段3条 | 0段3条 | 0段4条 | 直前段反 | 附加条(軸) | 羽状 | | 計 |
|-----------|-----|------|------|------|------|------|--------|----|-----|------|
| | | | | | | | | 結束 | 結束無 | |
| L | 115 | 2220 | 643 | 257 | 9 | 7 | 28 | 41 | 19 | 3339 |
| R | 11 | 106 | 31 | 76 | 4 | — | 2 | | | 290 |

IV 検出された遺構と遺物



第74図 第IV群土器

IV 検出された遺構と遺物



第75図 第IV群土器

第IV群土器（第74図・第75図）

本群は前期後半浮島式土器に属するものを一括する。

第1類 平行線文により文様構成するもの（第74図1～7、第75図24・25）

横走、斜行および弧状の平行線文により構成するものである。1～3・6・7の平行線文はやや太目で、4は細目である。この4は第2類b種5と同一個体と考えられる。いずれも地文（縄文）は施されない。第75図24・25は縦走する平行線文が接して施され条線文状となり、その上に刺突文列が配される。また24には連続爪形文が1条巡り、以下胴部にはR L横位が施される。

第2類 変形爪形文（第74図5・8～17）

施文がやや粗いもの（a種）とより明瞭なもの（b種）がある。

a種（第74図12～17）

口は口唇部に太く不規則な沈線文が施され、その下位に不明瞭な爪形文が一条巡る。13～16は爪形文の両端が深く刻まれたものである。17は12と同一個体である。いずれも地文（縄文）は施されない。

b種（第74図5・8～11）

8は口唇上に短い縦位の刻目が施される。5・9・11は斜行する平行線文と組み合わせられ、10には波状貝殻文が認められる。a種同様地文は施されない。

第3類 波状貝殻文の施されるもの（第74図18～29、第75図1～14）

表出される貝殻文により次の2種に区分される。

a種（第74図18～29）

貝殻腹縁により支点を交互にずらせ施すものであるが、表出される波状文は不規則で、施文もやや浅いものである。

b種（第75図1～14）

波状文がa種に比べ明瞭であり、さらにその上に横走線文が施されるものを本種とした。5は口唇部が尖りぎみであり、その外面には刻目が施される。

第4類 平行刺突文土器（第75図15～17）

いずれも胴部片であり、横位の粗雑な平行刺突文が施される。15・17は間隔をもつが、16は接して加えられる。その他文様はみられない。

第5類 貝殻背圧痕をもつもの（第75図18～20）

貝殻背圧痕文を地文とするものである。10には幅狭の連続爪形が2条巡す。19・20は圧痕文のみ認められる。

第6類 沈線文の施されるもの（第75図21・22）

単一線文により横走線文（21）、斜行線文（22）が施される。21の口縁上端には太い沈線による山形状文が施される。22は斜行線文の傾斜をかえ矢羽根状（肋骨文状）の文様が構成される。両者とも地文に粗い撚糸文が認められる。

IV 検出された遺構と遺物

第7類 三角文土器 (第75図23)

口唇上端に刻目が施され、器面には輪積み痕が残り、この部分に三角文が施される。

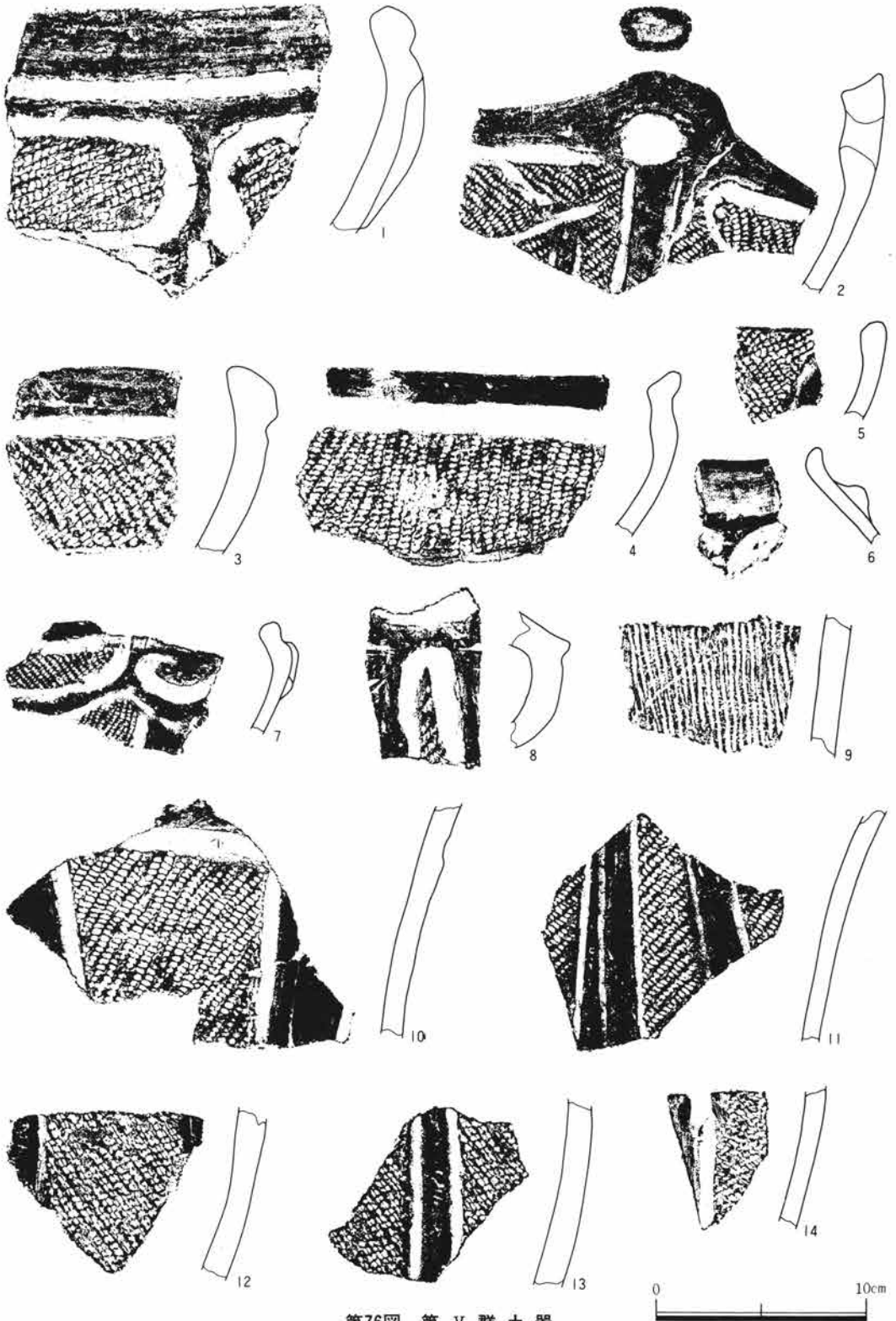
第V群土器 (第76図)

本群は中期後半加曾利E式土器を一括する。

1は内湾ぎみに立ち上る口縁部片で、文様は楕円形の区画文が施される。区画文内の縄文はLR横位である。2は波状口縁を呈し、波頂部口唇上に凹面をもつ。口縁部文様帯は楕円形の区画文および円形文により構成される。縄文はRLr³であるが、口縁部を中心として横位に、以下縦位に施す。3は楕円形の区画文の一部であろうか。RLr³横位が施される。4はRLr³が施されるが施文方位は斜位に近く条は縦走している。5も口縁部片であり、区画文の一部がみられる。縄文は口縁にLR横位、以下縦位に施す。6は壺形土器の口縁部片であろう。7は楕円形の区画文およびワラビ状文により文様構成され、縄文はRLr³が用いられ、口縁部上半では横位、以下縦位に施す。8は楕円区画文内にLR横位が施される。9は条線文の施される胴部片である。10~14は懸垂文間を磨消縄文とする胴部片であり、10・11はRLr³、12・13はLRL、14はLRLRが各々縦位に施される。

細別型式は、1~3・7・9・12~14が加曾利E3式、4~6・8・10・11が同4式に属する。

IV 検出された遺構と遺物

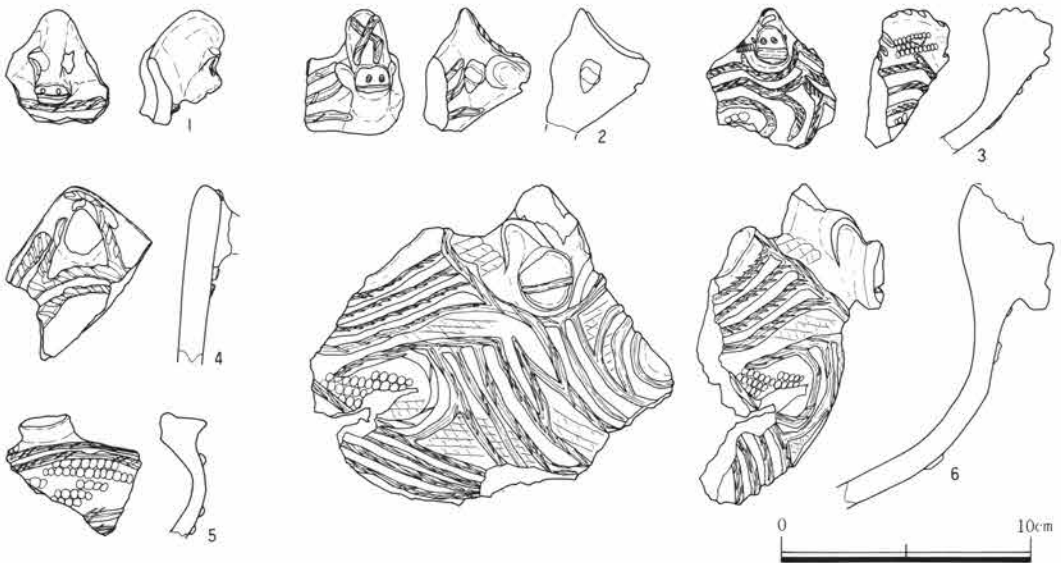


第76図 第V群土器

IV 検出された遺構と遺物

b. 獣面把手 (第77図)

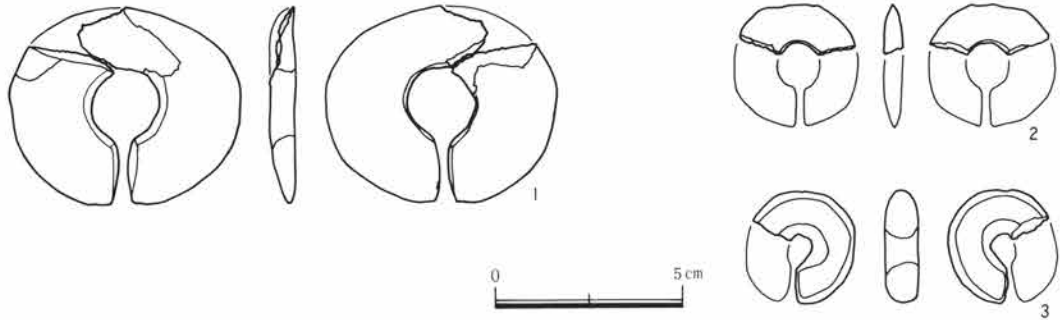
1は、くの字状に屈曲する口縁部に付される。頭部は山形状に大きく隆起し頂部は丸味をもつ。獣面は、径2mm程度の細い棒状工具により耳・目・口・鼻孔が施されるが、他文様はみられない。また獣面把手直下には、刻目をもつ浮線文が認められる。色調は褐色を呈し、胎土中には1~2mmの砂礫を多く含む。2は、頂部がやや尖りぎみに立ち上り頭部から鼻部にかけて湾曲ぎみに連続しこの頭部の平坦面上には刻目をもつ浮線文を2条交差させ貼付する。獣面は、口・鼻孔および耳が表現されるが目については省略されている。施文は径2mm程度の細い棒状工具により行なわれる。また器面には浮線文がみられるが、これは把手部を施した後に貼付されたものである。色調は褐色を呈し、胎土中には1~2mmの砂礫を多く含む。3は、内湾ぎみに立ち上る口縁部に付される。頭部は山形状を呈し器体波状口縁と一体となる。口縁および頭部上には刻目が施される。獣面は、目・鼻孔・口が表現される。また器面には粗い縄文が認められるが、これは把手の成形後施されたもので、その後に目等の表現が行なわれている。さらにこの把手を中心として、刻目をもつ浮線文が施される。色調は褐色を呈し、胎土中には砂礫を含む。4は、波状口縁の波頂部に付されるが、この部分が破損しているため詳細は不明であるが、簡略化された獣面把手と考えられる。5は、波状口縁の波頂部上に円形の突起が付され、4同様、獣面把手の簡略化されたものと考えられる。6は、内湾する口縁部に付される。頭部は山形状に隆起するが、頂部は欠損する。獣面は、口・耳が表現されるが、目および鼻孔は施されない。器面には縄文を施した後に刻目をもつ浮線文が貼付される。縄文はRLが用いられるが、浅く不明瞭であり施文方位も不規則である。色調は褐色を呈し、胎土中に1~2mmの砂礫を多く含む。



第77図 獣面把手

c. 球状耳飾 (第78図)

球状耳飾は3点出土している。1、2は滑石製、3は土製で、いずれも欠損品である。1は扁平であるが、一方の面がやや丸みを持ち、他一面が平坦に整形されている。体部中央で折損し、接合面はほとんど失なわれている。2は脚部を欠損し、断面形は扁平な楕円形を呈する。3は一方の脚部を欠損し、断面形は肉厚の楕円形を呈する。胎土に雲母を含み、色調は黒褐色を呈する。1はI区G36グリッド、2はI区2号住居、3はII区14号土壌より検出された。



第78図 球状耳飾

d. 石器

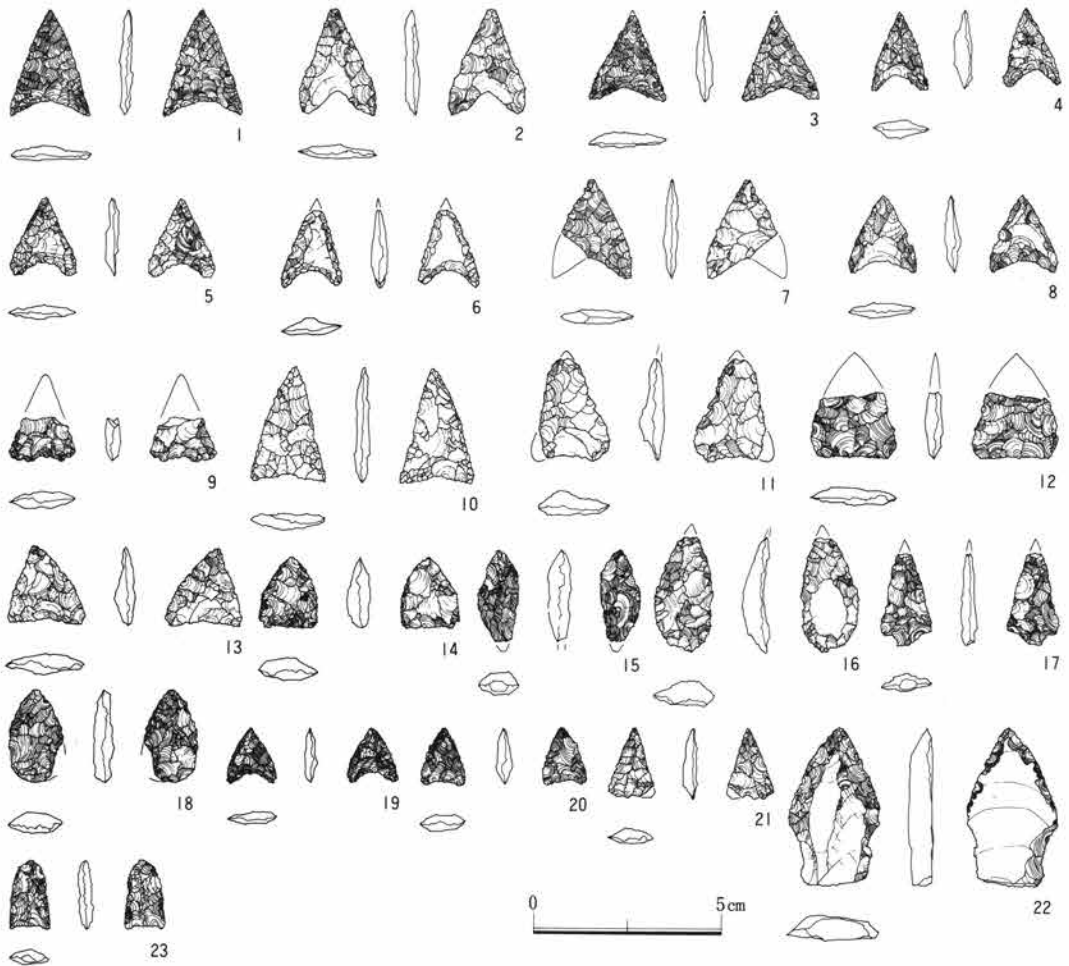
石鏃は19点出土している。形態は基部に抉りの入る無茎鏃が大半を占めるが、抉りの入らない三角鏃状の無茎鏃および有茎鏃も数点認められる。石質はチャートが主体で、その他に黒曜石、頁

石鏃計測表

| 番号 | 出土位置 | 計測値〔長・幅・厚・重〕 | | | | 石質 |
|----|--------|--------------|--------|------|------|------|
| 1 | I区G37 | 2.8 | 2.1 | 0.35 | 1.01 | チャート |
| 2 | I区 | 2.79 | 2.02 | 0.36 | 1.33 | 頁岩 |
| 3 | I区 | 2.28 | 2.05 | 0.41 | 0.98 | チャート |
| 4 | I区J39 | 2.06 | 1.5 | 0.46 | 0.71 | 黒曜石 |
| 5 | I区F38 | 2.05 | 1.75 | 0.34 | 0.64 | 頁岩 |
| 6 | II区 | (2.35) | 1.62 | 0.42 | 0.75 | チャート |
| 7 | II区H39 | 2.68 | (2.14) | 0.38 | 1.0 | 〃 |
| 8 | II区H39 | 2.04 | 2.02 | 0.55 | 0.85 | 〃 |
| 9 | I区H43 | (2.25) | 1.75 | 0.38 | 0.68 | 〃 |
| 10 | I区I住 | 3.04 | 2.0 | 0.41 | 1.43 | 〃 |
| 11 | I区J39 | 2.69 | (2.05) | 0.65 | 2.19 | 〃 |

| 番号 | 出土位置 | 計測値〔長・幅・厚・重〕 | | | | 石質 |
|----|--------|--------------|--------|------|------|------|
| 12 | I区J27 | (2.8) | 2.27 | 0.45 | 1.77 | チャート |
| 13 | II区G18 | 2.04 | 2.03 | 0.65 | 1.50 | 〃 |
| 14 | I区4住 | 1.86 | 1.56 | 0.61 | 1.52 | 〃 |
| 15 | I区 | (2.7) | 1.06 | 0.59 | 1.43 | 〃 |
| 16 | I区 | (3.35) | 1.56 | 0.6 | 2.38 | 〃 |
| 17 | I区H38 | (2.74) | 1.31 | 0.4 | 0.89 | 〃 |
| 18 | I区A36 | 2.41 | (1.45) | 0.52 | 1.61 | 〃 |
| 19 | 表採 | 1.45 | 1.3 | 0.3 | 0.30 | 〃 |
| 20 | 〃 | 1.5 | 1.16 | 0.41 | 0.57 | 〃 |
| 21 | 〃 | 1.86 | (1.25) | 0.37 | 0.47 | 〃 |
| 22 | 〃 | 4.16 | 2.41 | 0.63 | 6.0 | 〃 |
| 23 | 〃 | 1.8 | 1.04 | 0.36 | 0.48 | 頁岩 |

IV 検出された遺構と遺物



第79図 石 鏃

岩が用いられる。

石鏃 (第80図1)

1は先端部を欠損する石鏃で、つまみ部をもち、鏃部をやや細身に調整している。

石匙 (第80図2～5)

いずれも横型石匙で、石質は頁岩である。

打製石器 (第80図6～11)

刃部がわずかに幅広となる短冊型を呈するものが多いが、側縁部に抉りの入る分銅型も少数認められる。また、片面に自然面を残すものも多く出土している。石質は安山岩、頁岩が主である。

凹石 (第81図～第84図)

両面に集合打痕による凹穴を複数個もつ。

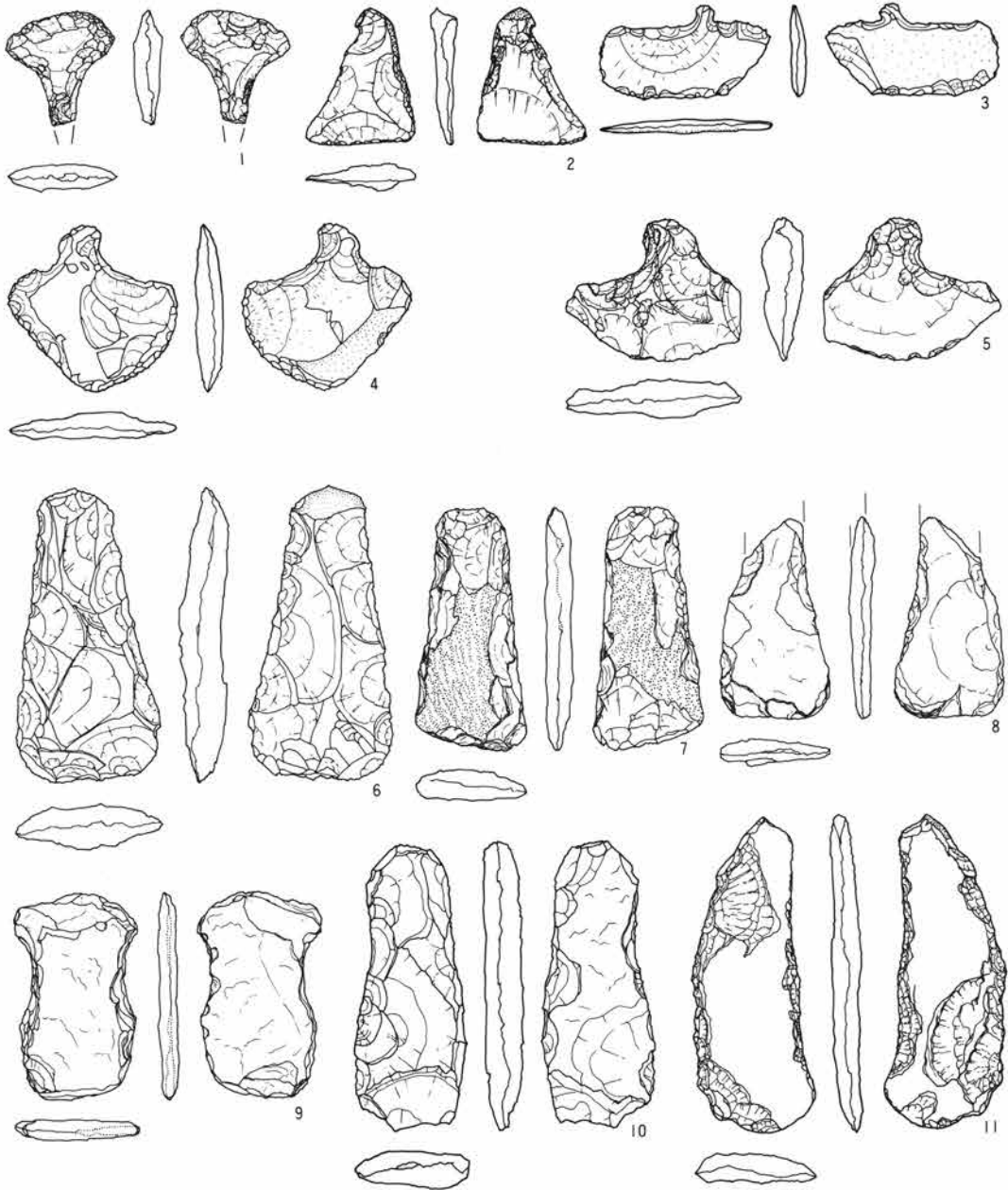
多孔石 (第86図)

縁辺部を一部欠くものの長さ80cm、幅45cm、厚さ25cmと大型である。凹穴は円錐状を呈し、片

面に30ヶ所以上、もう一方の面に60ヶ所以上認められる。第85図についても同類と考えられる。

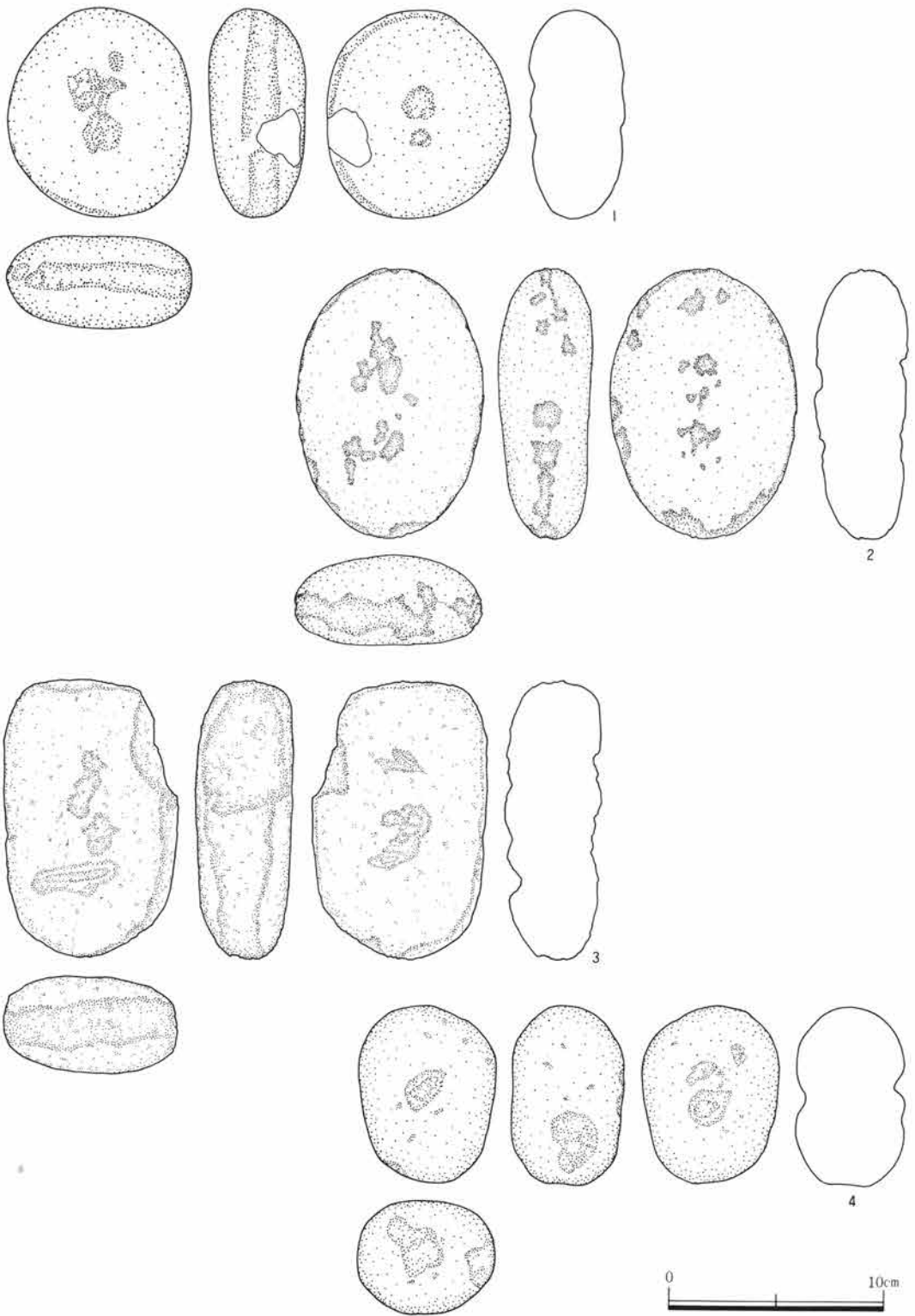
石皿 (第87図、第88図)

20点以上出土しているが、いずれも欠損品である。形態は、縁辺部に低い陵をもつもの (第87図) と縁辺部が高く直立するもの (第88図4、5) がある。底面に凹穴の付される例もある。

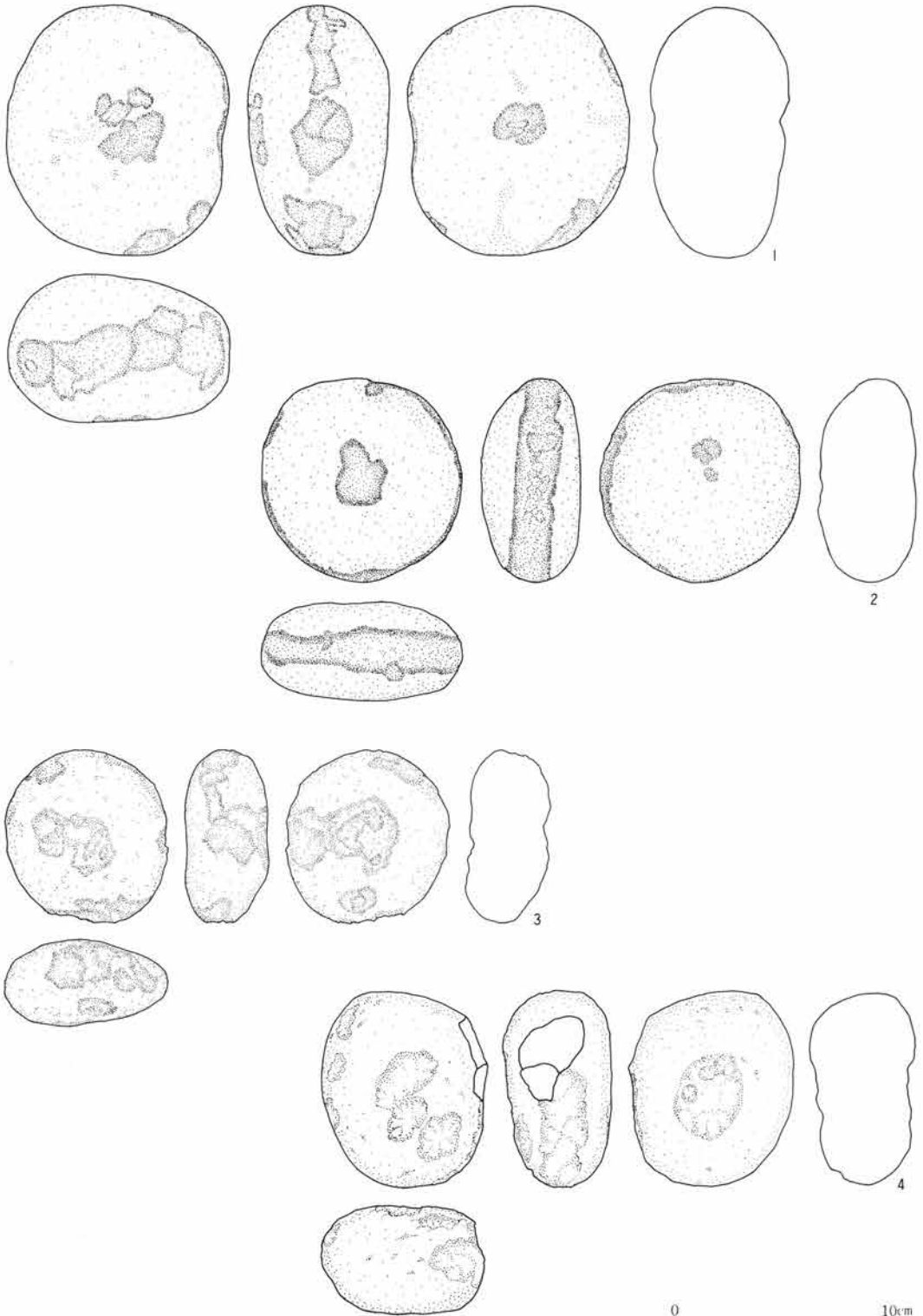


第80図 打製石器

IV 検出された遺構と遺物

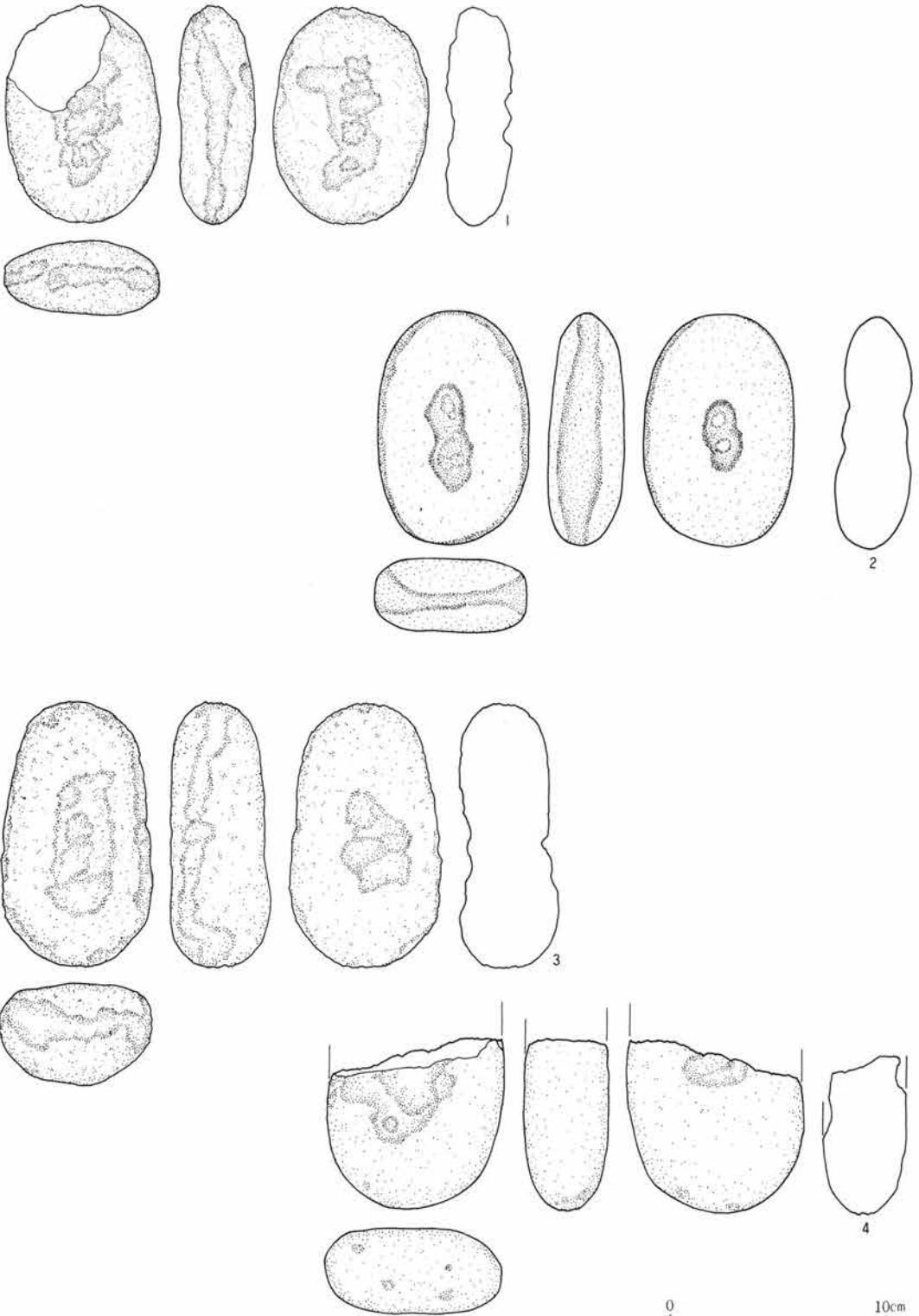


第81図 凹石

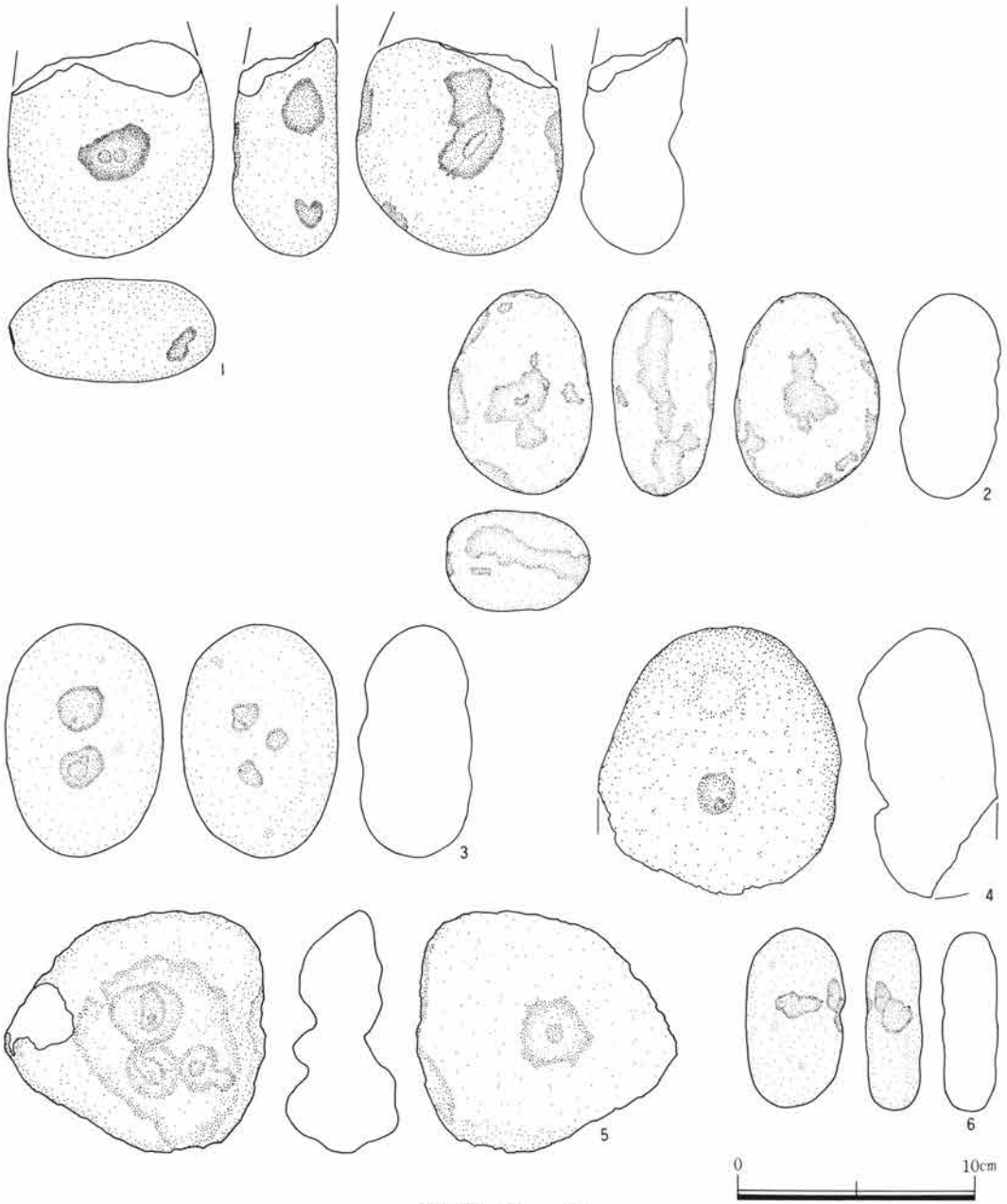


第82図 凹石

IV 検出された遺構と遺物

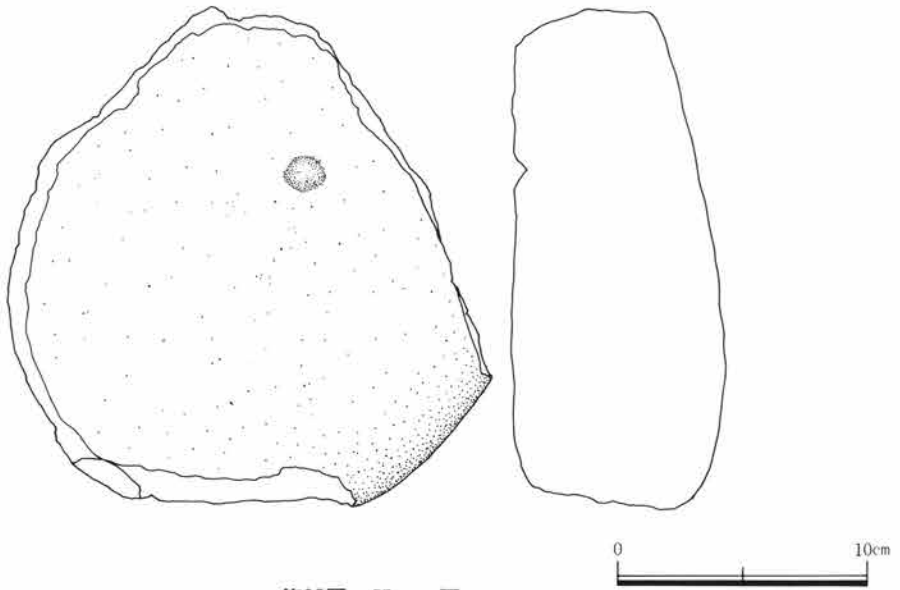


第83図 凹石



第84図 凹石

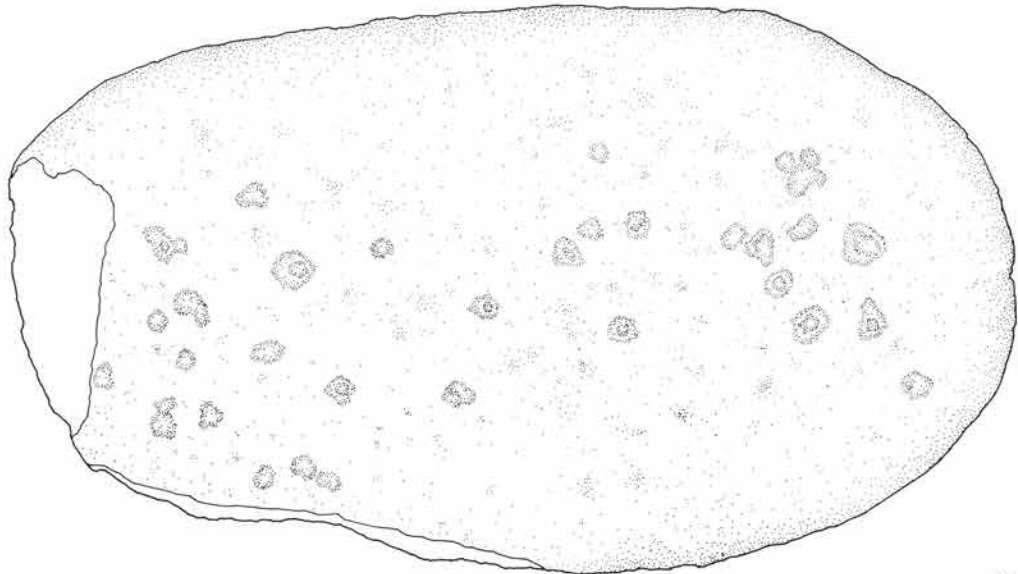
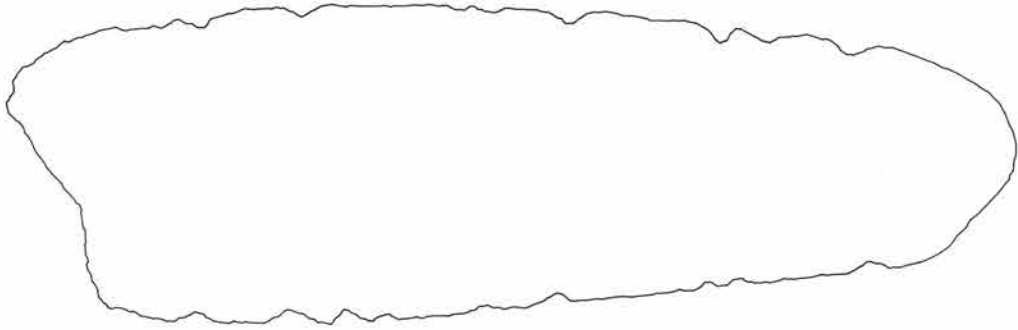
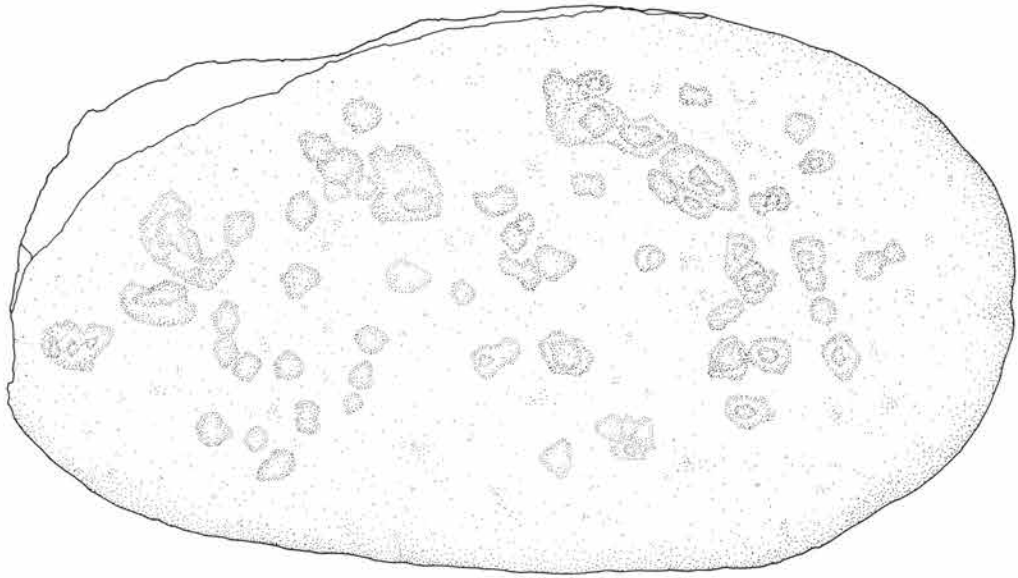
IV 検出された遺構と遺物



第85図 凹 石

凹石・多孔石計測表

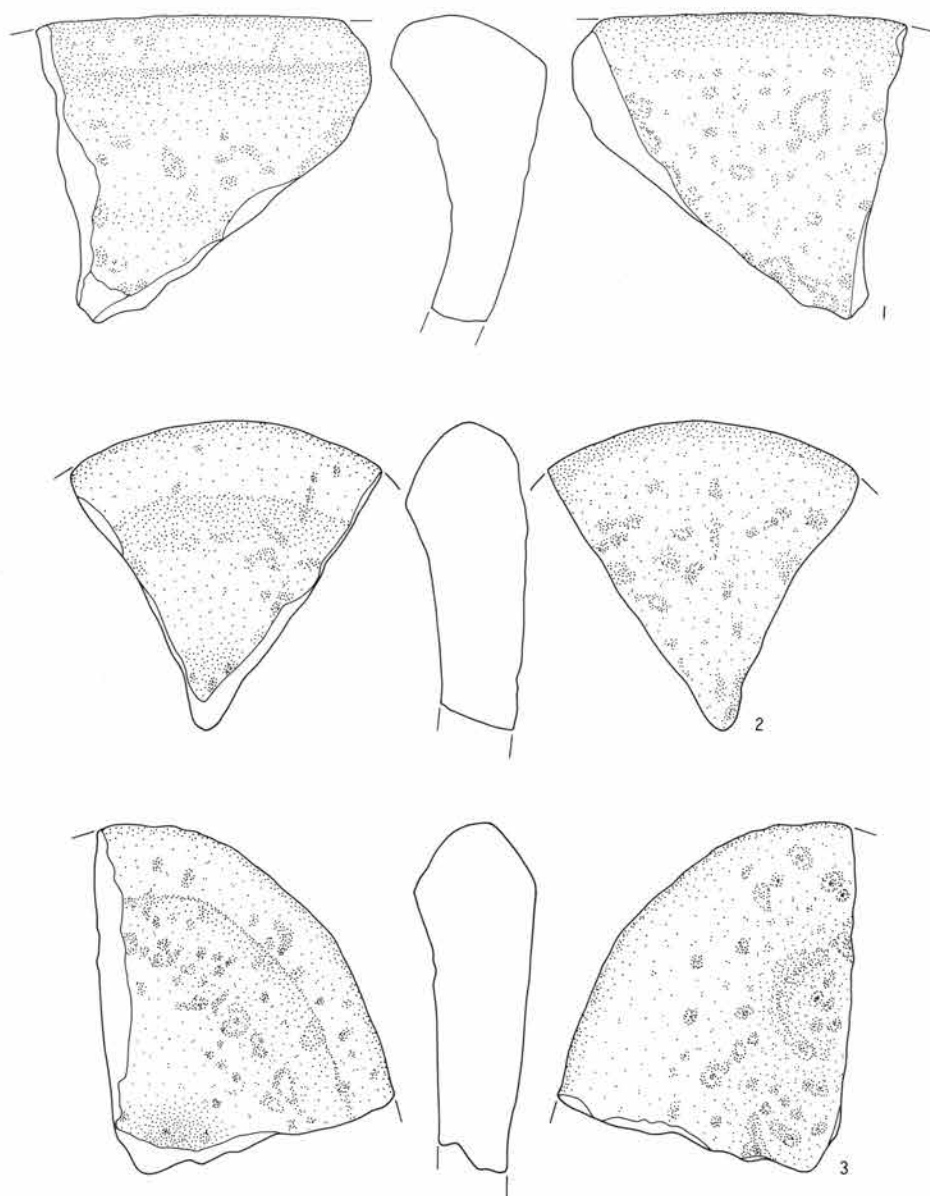
| 番 号 | 長 cm | 幅 cm | 重量 g | 石 材 | 番 号 | 長 m | 幅 cm | 重量 g | 石 材 |
|-------|------|------|------|-----|-------|--------|--------|--------|-----|
| 別図 1 | 9.7 | 8.6 | 525 | 安山岩 | 83図 3 | 12.2 | 7.0 | 521 | 安山岩 |
| " 2 | 12.8 | 8.1 | 608 | " | " | (7.8) | 7.8 | (395) | " |
| " 3 | 12.5 | 8.8 | 663 | " | 84図 1 | (9.0) | 8.7 | (540) | " |
| " 4 | 8.5 | 6.1 | 271 | " | " 2 | 8.6 | 6.1 | 270 | " |
| 82図 1 | 11.4 | 10.0 | 525 | " | " 3 | 9.8 | 6.7 | 491 | " |
| " 2 | 9.2 | 9.0 | 600 | " | " 4 | (11.0) | 10.0 | (560) | " |
| " 3 | 7.9 | 7.5 | 299 | " | " 5 | 10.0 | 11.0 | 571 | " |
| " 4 | 9.0 | 7.7 | 451 | " | " 6 | 7.4 | 4.2 | 96.0 | " |
| 83図 1 | 10.0 | 6.6 | 337 | " | 85図 | (19.2) | (17.8) | 4900 | " |
| " 2 | 10.7 | 7.0 | 389 | " | 86図 | 80.0 | 45.0 | 16.3kg | " |



第86図 多孔石

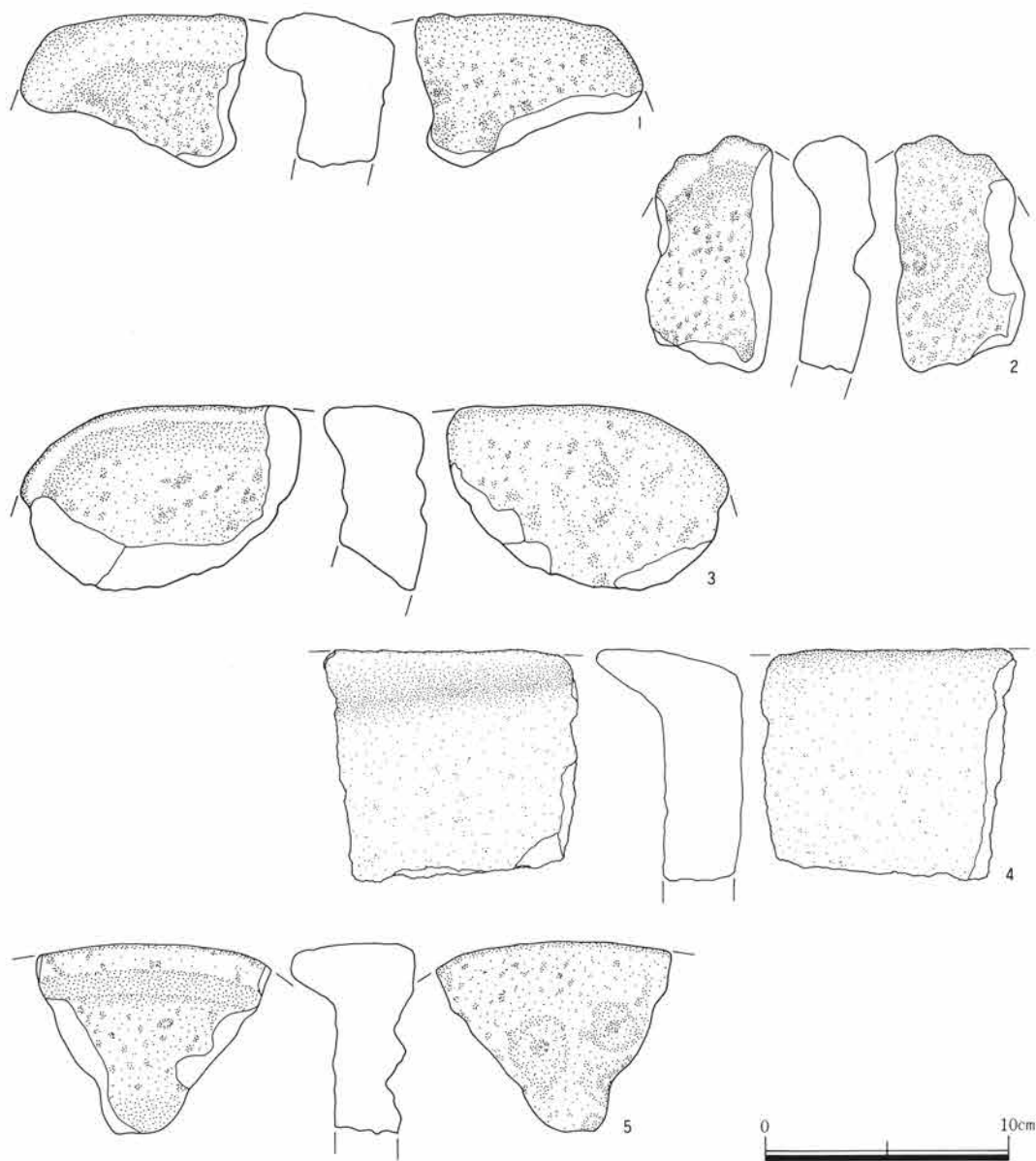


IV 検出された遺構と遺物



第87図 石 皿





第88図 石 皿

IV. 検出された遺構と遺物

2 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属する遺構は、I区中央部北側に7基の土壌がローム上面において検出された。この内5基が重複関係にあり、他2基についてもこれらの土壌と近接しており、この部分に集中して分布する。また周辺には、焼土が濃密ではないものの広範囲に散布している。(第90図)

弥生1号土壌(第89図)

N-29グリッドに位置する。2号土壌を切って掘り込まれている。平面形は径120cm×110cmの楕円形プランを呈し、深さは10cmを測る。また土壌西側の壁の一部には焼土が散布するとともに、灰もわずかながら認められる。遺物は壺(第91図7・8)、甕(第91図2)が出土している。

弥生2号土壌(第89図)

1号土壌に切られる。径104cm、深さ40cmを測る。遺物は弥生土器の小片が数点出土している。

弥生3号土壌(第89図)

0-29グリッドに位置し、4号・5号土壌に切られる。径105cm、深さ12cmの楕円形を呈する。

弥生4号(第89図)

3号・5号土壌を切って掘り込まれる。口径135cm×104cm、深さ30cmの楕円形を呈する。遺物は(第91図4・11)、甕(第91図5・9)等が出土している。

弥生5号土壌(第89図)

4号土壌に切られる。短径115cm、深さ14cmの楕円形プランを呈する。

弥生6号土壌(第89図)

0-28グリッドに位置する。径73cm、深さ22cmの円形プランを呈する。

弥生7号土壌(第89図)

N-29グリッドに位置する。径150cm×95cm、深さ30cmの楕円形プランを呈する。

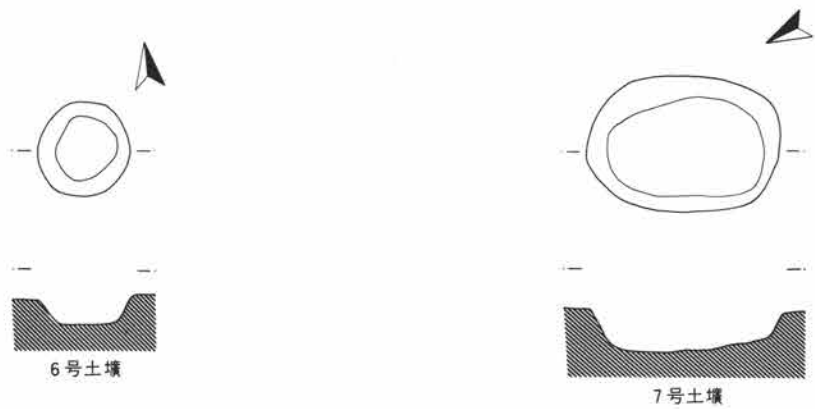
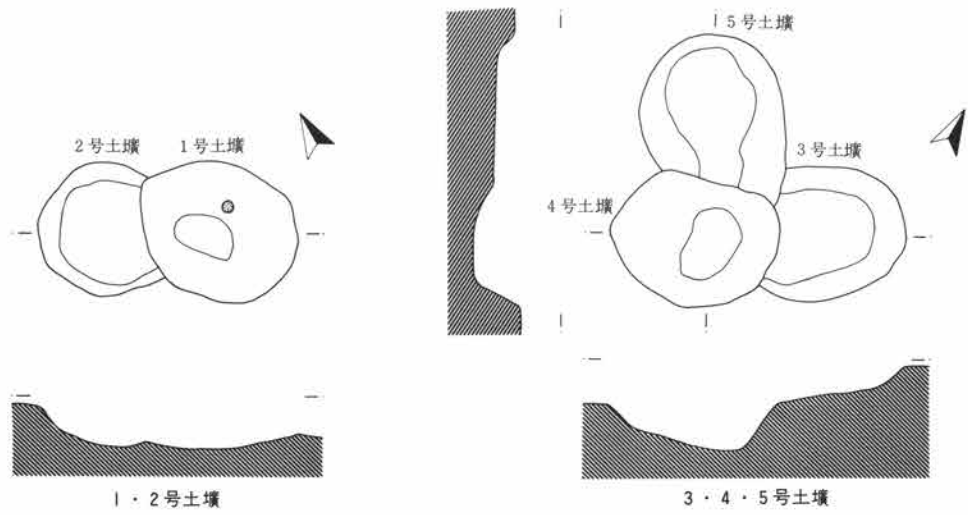
弥生土器観察表

| 番号 | 器種 | 出土位置 | 器形・文様の特徴 | ①色調 ②胎土 ③焼成 |
|----|------|-------|---|------------------------------|
| 1 | 筒形土器 | L-19G | 口縁が直立し、口唇部は内側に面をもち先端部はやや尖り気味になる。文様は変形工字文による構成をとり、縄文はLR横位である。器内面には浅い条痕が施される。 | ①褐色 ②1mm前後の砂粒を含む。胎土は密である。③良好 |
| 2 | 筒形土器 | C-19G | 筒形土器の胴部破片と思われる。変形工字文による文様構成をとり、縄文はLR縦位である。 | ①暗褐色 ②砂粒を含み胎土は密である。③良好 |
| 3 | 筒形土器 | H-38G | 変形工字文を主とした文様構成をもつ。縄文はLR横位である。胎土、沈線、縄文等2と類似し同一個体と観察される。 | ①暗褐色 ②砂粒を含み胎土は密である。③良好 |
| 4 | 壺? | 弥-4土 | 壺形土器の口縁部分と思われる。口縁はやや内湾気味に立ち上り、口唇部は平坦面をもつ。縄文は1段L横位が口縁直下から施される。 | ①褐色 ②砂粒を含み胎土は密である。③良好 |
| 5 | 甕 | 弥-4土 | 口縁部片。折り返し口縁を呈し、口縁部にはLR横位が施される。条走向にはやや乱れがある。 | ①褐色 ②1~2mmの礫を多く含む。③良好 |

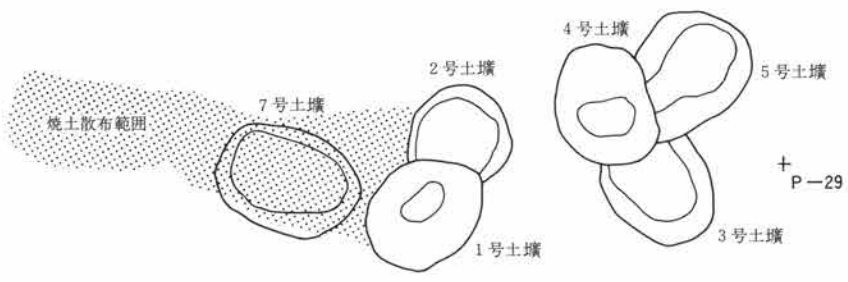
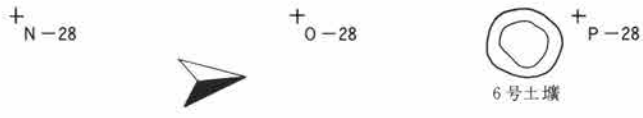
弥生土器観察表

| 番号 | 器種 | 出土位置 | 器形・文様の特徴 | ①色調 ②胎土 ③焼成 |
|----|-------|-------|---|-------------------------|
| 6 | 壺 | 弥一2土 | 壺形土器の頸部と思われる。器面にはL横位が施される。 | ①褐色 ②2mm前後の礫を含む。③良好 |
| 7 | 壺 | 弥一1土 | 肩部には沈線による不規則な横走縄文が11条施される。また胴部には同種沈線による重四角文が施され、その内側には円文が配される。なお、これら沈線による文様以外の部分には1段Lによる充填縄文が施される。施文方位は不規則であり条走向には乱れが生じている。 | ①明褐色 ②2mm前後の礫を少量含む。③良好 |
| 8 | 壺 | 弥一1土 | 胴部片。2条の沈線をもつ円文が配され、縄文は1段Lが施される。施文方位は不規則であり、条走向に乱れがある。 | ①暗褐色 ②砂粒を含む ③良好 |
| 9 | 甕 | 弥一4土 | 肩部片。肩部は無文帯となり、頸部にはLR横位が施される。 | ①明褐色 ②砂粒を含む ③良好 |
| 10 | 壺 | I-21G | 肩部片。沈線による横走縄文および曲縄文が施される。縄文はみられない。器面にはへら削りに類似する整形痕が認められる。 | ①暗褐色 ②砂粒を含む ③良好 |
| 11 | 壺 | 弥一4土 | 沈線による区画内に刺突文をもつ円形の貼付文が配される。縄文はLRが用いられ斜位施文により条が縦走する。 | ①暗褐色 ②1mm前後の砂礫を含む ③良好 |
| 12 | 壺? | J-18G | 沈線による重四角文が配され、地文には細かい条痕が施される。 | ①灰褐色 ②1~2mmの礫を少量含む ③良好 |
| 13 | 筒形土器? | D-19G | 沈線による区画文(変形工字文の一部か?)が施され、縄文は1段L横位が用いられる。 | ①暗褐色 ②砂粒を含む ③良好 |
| 14 | 壺 | 弥一2土 | 胴部片。1段L横位が施される他、粗く不規則な沈線がみられる。また器面には赤色顔料の塗彩された痕跡が認められる。 | ①暗褐色 ②砂粒を含む ③良好 |
| 15 | 甕 | K-28G | 胴部片。連繋三角文が施され、連繋部には刺突状の沈線文が配される。三角文内には細かいLR横位の充填縄文が施される。 | ①灰褐色 ②1~2mmの礫を含む ③良好 |
| 16 | 甕 | B-37G | 右傾する細かな条痕が全面に施される。また一部にはコンパス文状の弧縄文がみられる。器内面にはミガキが行なわれる。 | ①暗褐色 ②砂粒を含む ③良好 |
| 17 | 甕 | I-72G | 粗い条痕が施される。 | ①灰褐色 ②1~2mmの砂礫を少量含む ③良好 |
| 18 | 甕 | 弥一2土 | 粗い条痕が施される。 | ①灰褐色 ②1~2mmの砂礫を多く含む ③良好 |
| 19 | — | 弥一4土 | 底面のみ接合部から剥落する。底面には木葉痕が認められる。 | ①褐色 ②1~2mmの砂礫を含む。 ③良好 |
| 20 | 甕 | B-38G | 横走する細かな条痕が施される。器内面はよく磨かれ平滑である。 | ①灰褐色 ②1~2mmの砂礫を少量含む ③良好 |
| 21 | 甕 | 弥一1土 | 胴部片。横走する細かな条痕が施される。また器内面にも横走する条痕がみられる。 | ①褐色 ②1~2mmの砂礫を含む ③良好 |

IV 検出された遺構と遺物

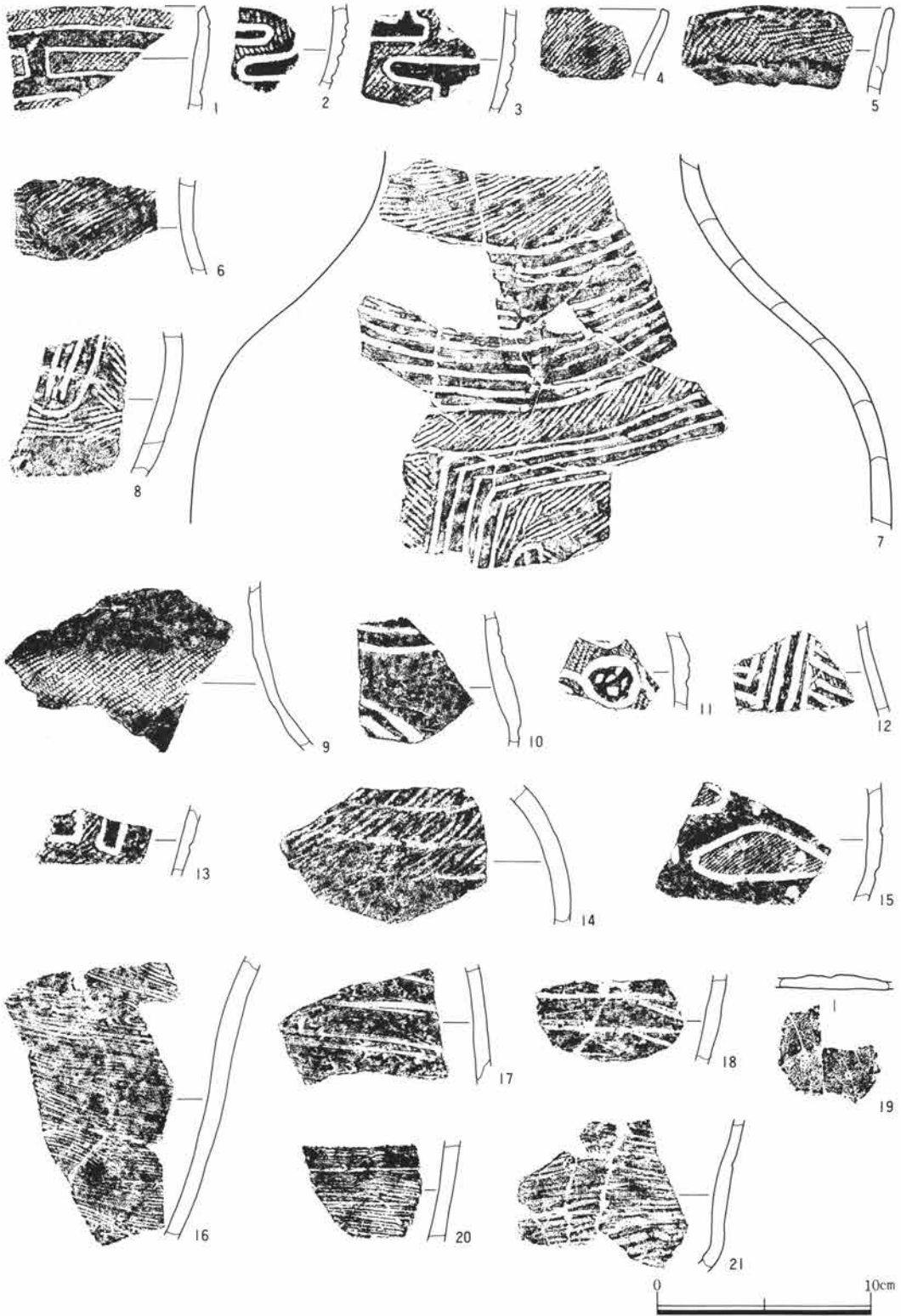


第89図 I区弥生時代土壌実測図



第90図 弥生時代土壌位置図





第91図 弥生土器

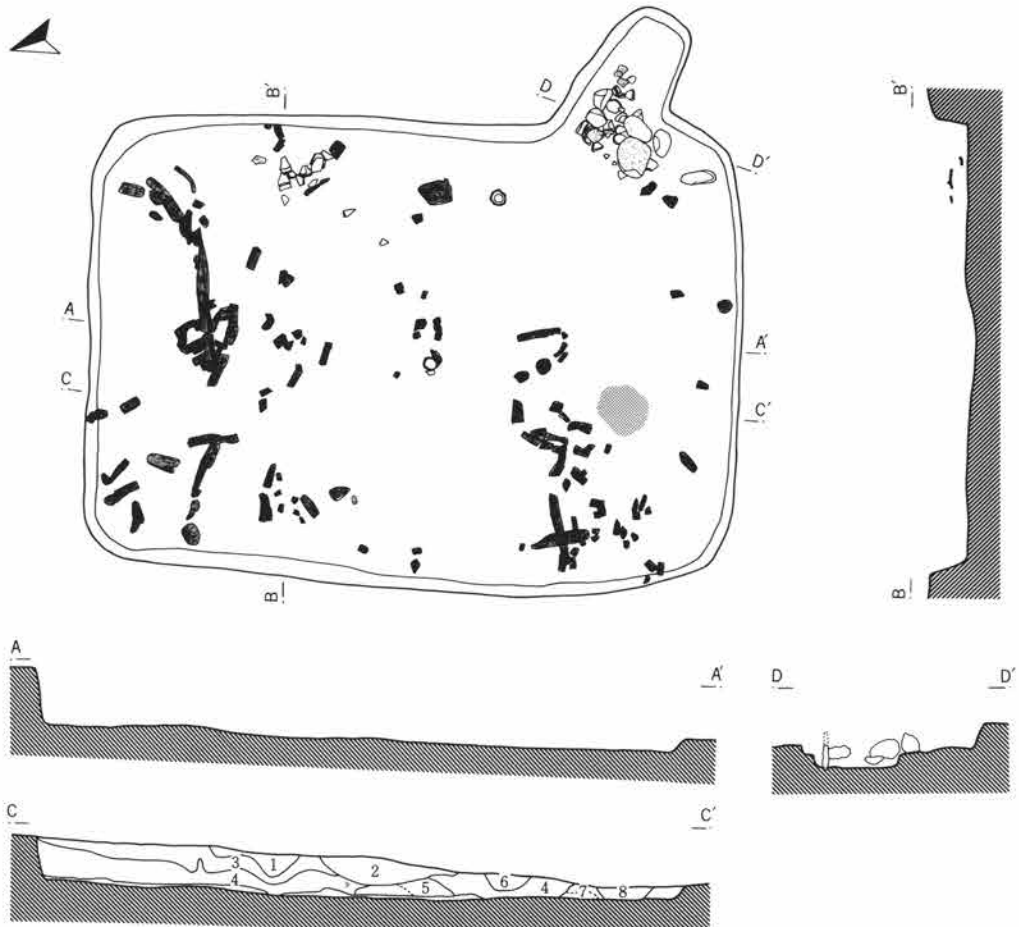
Ⅳ 検出された遺構と遺物

3. 平安時代の遺構と遺物

Ⅱ区1号住居（第92図）

位置 南斜面に立置し、F・G-38・39グリッドに位置する。

平面形 長辺5m、短辺3.5mの長方形プランを呈し、コーナーはやや丸味をもつ。カマドは東壁に構築され、南側に偏在する。床面積は17.7㎡を測る。



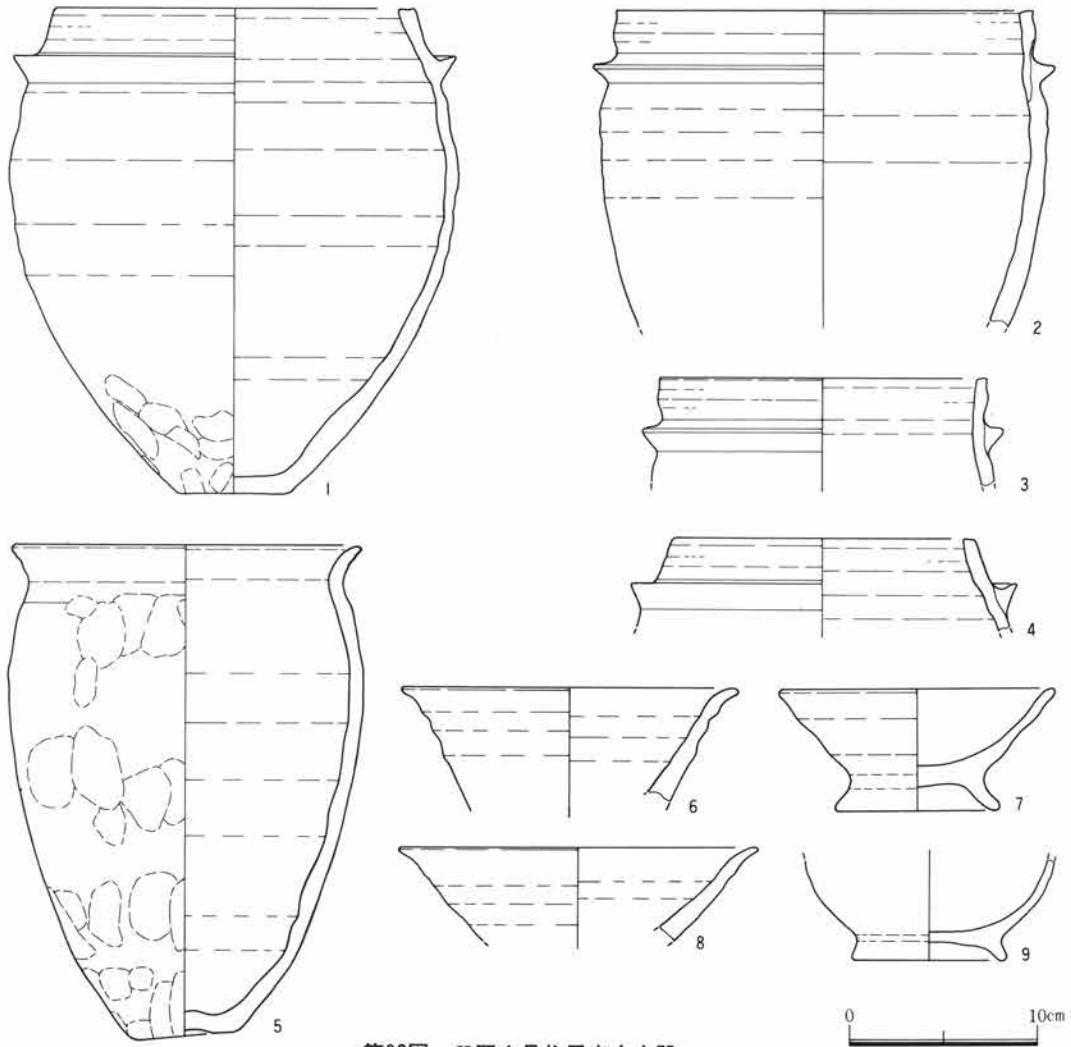
- 1 灰褐色土層 バミスが全体的に含まれ炭化物も少量みられる、粘性なく、砂質。
- 2 灰褐色土層 1と同様であるが、3の土が混入しており、色調がやや暗くなる。
- 3 黒色土層 バミスが全体的に含まれ、土質粘性に乏しく、砂質。
- 4 暗褐色土層 バミス及び炭化物が含まれ、焼土が若干みられる、砂質であるが、上層に比し若干粘性あり。
- 5 暗褐色土層 4と同様の土であるが、焼土が多く含まれている。
- 6 灰褐色土層
- 7 焼土が多く含まれる層 他にバミス、炭化物もみられる、土質、砂質である。
- 8 暗褐色土層 バミス若干含まれる砂質の層。
- 9 ローム（ソフト）を多く含む層、炭化物も含まれ、土質はしまりに乏しい。

第92図 Ⅱ区1号住居平面図



IV 検出された遺構と遺物

- 壁** ほぼ垂直に立ち上る。残存壁高は北壁部で45cm、東・西壁部で30cm、南壁部で10cmを測る。
- 床** 床面はほぼ水平であるが、多少起伏をもつ。また床面の状態は住居中央部からカマド付近にかけて硬く良好な面が検出された。
- 柱 穴** 床面の精査および床面下の調査を実施したが、認められなかった。
- カマド** 東壁南東コーナー寄りに構築される。残存状態は悪く、ほとんど平夷されており天井部は全く残っていない。袖部には礫が用いられ、焚口部は幅70cm、奥行110cmを測る。
- 周 溝** 認められない。
- その他** 床面上には炭化材が検出され、また覆土中にも焼土が多く含まれており、焼失家屋と認められる。



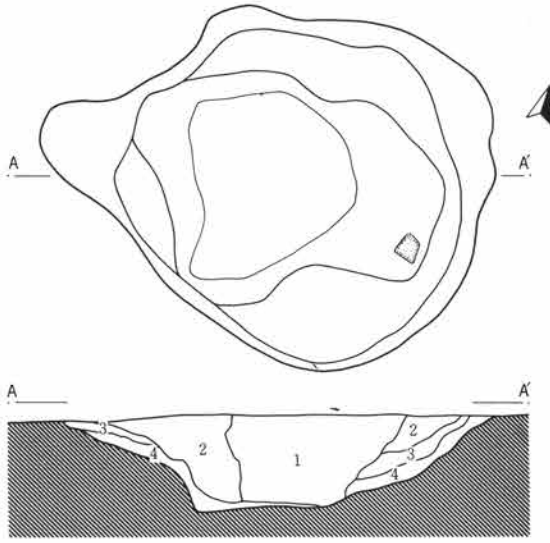
第93図 II区1号住居出土土器

IV 検出された遺構と遺物

II区1号住居出土土器観察表

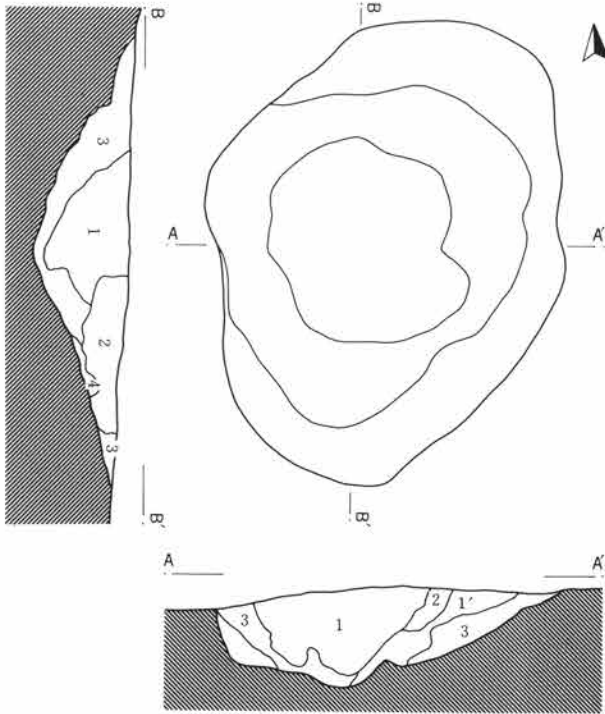
| 遺物番号 | 器種 | 法 量 (cm) 口径 底径 器高 | | | 器形および成・整形の特徴 | ①色調 ②焼成・③残存 ④胎土 |
|------|------------|----------------------|-----|------|---|--|
| 1 | 羽釜 | 19.1 | 5.9 | 25.6 | カマド 胴部は湾曲ぎみにふくらみをもち、口縁部に向 って内傾ぎみに立ち上る。胴部上半から口縁部 にかけては横ナデ、胴部下半には粗いへら削り が行なわれる。口唇部は平坦面をもつ。鐏は断 面三角形を呈しやや上向きで貼付は丁寧である。 | ①褐色 ②良好 ③1/4 ④砂礫、石英粒を含むが胎 土は密である。 |
| 2 | 羽釜 | 22.2 | — | — | 床 面 胴部はわずかにふくらみをもち、口縁部はやや 内湾ぎみに立ち上る。口唇部は平坦面をもちわ ずかに内傾する。器面は横ナデが行なわれる。 鐏は断面三角形を呈し器面に垂直に貼り付けら れる。なお貼付は丁寧でしっかりしている。 | ①褐色 ②良好 ③口 縁部1/2 ④砂礫、石英 粒を含むが胎土は密であ る。 |
| 3 | 羽釜 (推定) | 17.5 | — | — | カマド 口縁部はわずかに開きぎみに立ち上り、外面に は鐏を貼付した際生じた凹面によりやや湾曲ぎ みになる。口唇部には平坦面をもつ。鐏は断面三 角形を呈し先端部はやや丸味をもつ。鐏は断面 三角形を呈し先端部はやや丸味をもつ。貼付は 丁寧で上向きである。 | ①褐色 ②良好 ③口縁 部1/6 ④砂礫、石英粒 を含むが、胎土は密であ る。 |
| 4 | 羽釜 (推定) | 16.0 | — | — | 覆 土 口縁部は内傾ぎみに立ち上り、口唇部にかけて わずかながら器肉が厚くなる。口唇部は外側に 面をもつ。鐏は断面三角形を呈し、先端部はや や尖りぎみであり、上向きに貼り付けられる。 貼付は丁寧である。 | ①器内外面は黒褐色を呈 し、器肉は褐色である。 ②良好 ③口縁部1/6 ④砂礫、石英粒を含む。 |
| 5 | 甕 | 18.5 | 5.5 | 26.0 | 床 面 カマド 口縁部および胴部上半に最大径をもつ。胴部は ふくらみをもち、口縁部はくの字状に外反する。 口縁部は横ナデ。胴部は底部方向のへら削りが 行なわれる。器内面には、輪積痕が認められ、 底部中央はややくぼんでいる。 | ①褐色 ②良好 ③1/2 ④砂礫、石英粒を含む。 |
| 6 | 杯 | 18.0 | — | — | 覆 土 胴部は直線的に立ち上り、口唇部は外反する。 胴部にはロクロ目が明瞭に残り、右回転である。 | ①褐色 ②良好 ③口縁 部1/4 ④砂礫、石英粒 をわずかに含む。胎土は 密である。 |
| 7 | 壺 (高台部) | 14.7 | 6.4 | 8.8 | 床 胴部は直線的に立ち上り、口唇部は丸味をもつ。 底部はやや肉厚で、底面には回転糸切痕(回転 方向不明)が残る。高台は外側に強く張り出し 端部は丸味をもつ。 | ①褐色 ②良好 ③1/2 ④砂礫、石英粒を含む。 |
| 8 | 杯 | 19.2 | — | — | カマド 胴部は開きぎみに直線的に立ち上り、口唇部は 外反する。胴部にはロクロ目が明瞭に残り、右 回転である。 | ①褐色 ②良好 ③口縁 部1/6 ④砂礫を含む が、胎土は密である。 |
| 9 | 壺 (高台部) | — | — | 8.0 | 床 胴部は湾曲ぎみに立ち上り、底面には回転糸切 痕(回転方向不明)が残る。高台は外側に張り 出しぎみで、貼付はしっかりしている。端部は 丸味をもつ。 | ①褐色 ②良好 ③口縁 部欠損 ④砂礫、石英粒 を含む。 |

IV 検出された遺構と遺物



I 区No. 1

- 1 黄色味の強い黄褐色土、粘性がなくバサバサしている。
- 2 黒褐色土、浮石を多量に含み、1が少量、斑点状に入る。
- 3 黄褐色土、粘性がある。
- 4 黄褐色土、3より黄色味が強い



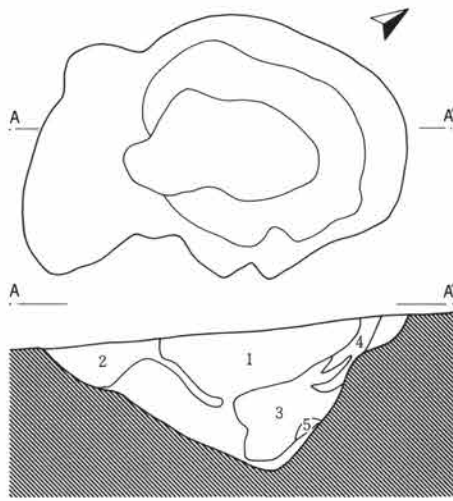
I 区No. 2

- 1 ローム、比較的しまっており、硬質。
- 1' 褐色土層、1と同様なロームの層であるが、部分的に2若しくは3層が混入する。
- 2 暗褐色土層、土質粘性に乏しいが硬質である。黒色土の硬いブロック状のものが全体的に含まれ、ロームも混入する。
- 3 暗褐色土層、土質、色調及び黒色土のブロック状のものが含まれる2と同様であるがロームの量が増す。
- 4 褐色土層、ロームが多量に含まれる。土質しまりに乏しく軟弱。

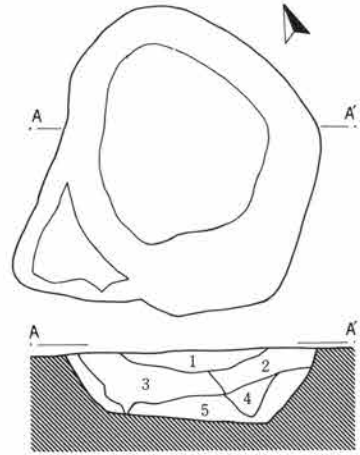


第94図 風倒木痕

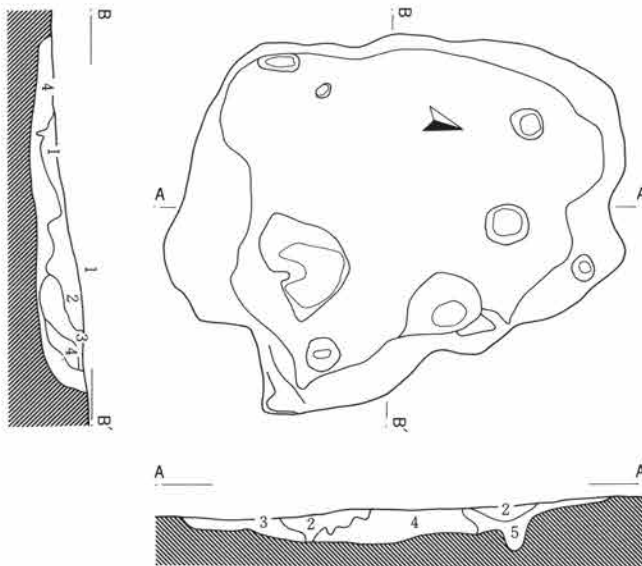
IV 検出された遺構と遺物



- 1 ハードロームよごれている。
- 2 黒褐色土（土壌か？）
- 3 ソフトローム、ハードと黒褐色土の混土。
- 4 黒バンド、ロームブロック多く含む。
- 5 黒色土、ソフト



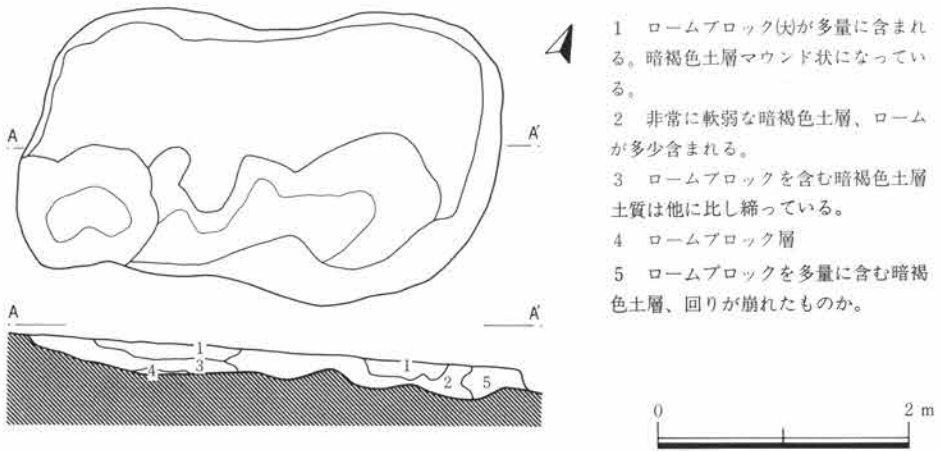
- 1 ロームマウンド
- 2 パミス、ロームブロックを含む暗褐色土層
- 3 パミスを多く含む褐色土層、土質ややしまっている
- 4 ロームブロックを含む他、黒色土も混入する暗褐色土層
- 5 パミスを含む褐色土層



- 1 ロームブロック（小）を多量に含む暗褐色土層、土質均一ではないが、しまりに欠け軟弱。
- 2 ローム及びロームブロックを含む黒色土層、1に比ししまっているが、よくはない。
- 3 ロームブロックを含む非常に軟弱な暗褐色土層。
- 4 ロームがブロック状に層をなす暗褐色土層。
- 5 4層と同様な状態であるが、ロームブロックの密度が高い層。



第95図 風倒木痕



第96図 風倒木痕

4. 風倒木痕

風倒木痕は、I区で5ヶ所、II区で4ヶ所、III区で1ヶ所計10ヶ所で確認された。いずれもローム層上面で検出され、黒色土（もしくは黒褐色土）の落ち込み中にロームマウンドが存在する。この内、I区では1号住居および4号住居と重複するものがあり、1号住居では風倒木痕上に住居が構築され、4号住居では風倒木により住居の一部が壊されている。他の3基は単独であり、第94図にある2基について調査を行なった。I区No.1は、2号住居の東約12mの位置に存在する。このNo.1の北5mにはもう1基風倒木痕が認められている。I区No.2は、1号住居の東8m、9号土壌の北側に接して検出されている。9号土壌との時間的關係については不明である。No.1、No.2風倒木痕とも時期については確定できない。

II区では第95図、第96図に示した4基が検出された。No.2は3号土壌の北5mの位置に存在し、No.3は方形竪穴遺構および29号土壌間に、No.4は26号土壌の南側に接して検出されている。この4基の風倒木痕は、II区西側にみられる土壌群に比較的接して存在する。しかし、各風倒木痕の時期については確定できる情報がなく不明である。26号土壌に接するNo.4についてもその新旧関係は把握されていない。

V 成果と問題点

1 竪穴住居

調査により5軒の縄文時代前期に属する住居が検出された。各住居間には重複関係はなく、散在的な分布を示す。時期的にみると、住居埋没土からは黒浜式・諸磯a式・諸磯b式土器が混在して出土するが、埋没土器もしくは床面上で検出された土器から判断していずれも諸磯a式期に属するものといえる。

次に、これら5軒の住居についてその形態を比較してみると、各住居間に極めて強い類似性・規格性が認められる。ここでは、住居形態について平面形、柱穴の配置、炉の位置を主として比較し分類してみたい。

a. 平面形について

平面形I（第97図1、2、3）

長方形を呈する。コーナーは丸みを帯び、各辺もやや湾曲ぎみである。長軸は南北方向をとる。1（I区1号住居）および2（I区2号住居）が該当する。なお、3（II区3号住居）は北東部のみの調査であるが、この部分の平面形が1、2と相似形であることから、やはり同類に属するものとしておく。

平面形II（第97図4、5）

方形を呈する。コーナーは丸みを帯び、わずかながら梯形となる。4（I区4号住居）、5（II区2号住居）がこれに該当する。この2軒の住居の平面形を照合するとほとんど一致するほど類似している。

b. 柱穴について

次に柱穴の配置についてみていきたい。これについては3種類の柱穴配置が認められる。

柱穴配置A（第97図1、2）

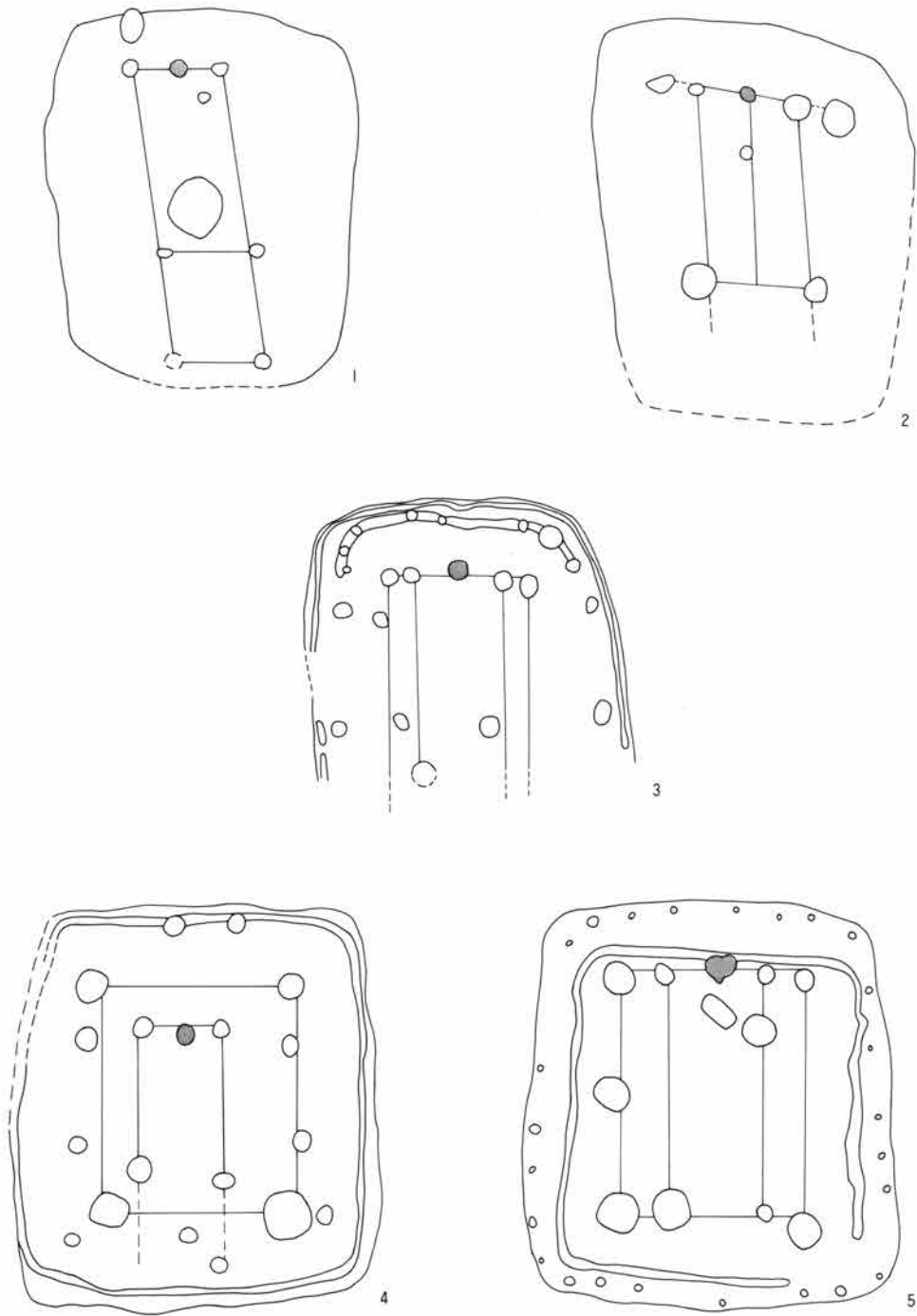
5本柱を基本とする。各柱穴は直交せず、配置としては平行四辺形に歪んでいる。1が該当する。また2についても南端部の柱穴の存在が不明であるが、1との比較からこの類に属するものと考えられる。

柱穴配置B（第97図4、5）

4本柱を基本とする。各柱穴は直交し、方形の配置となる。4（I区4号住居）、5（II区2号住居）にこれに類する柱穴配置が認められる。

柱穴配置C（第97図3、4、5）

各柱穴は直交し、長方形の配置をとる。柱穴数は確定できないが4本ないし6本となろう。柱穴の配置が直交する点は柱穴配置Bと類似するが、配置の規模からみると柱穴配置Aとの共通性も看取される。4（I区4号住居）、5（II区2号住居）および3（II区3号住居）にこの配置が認められる。



第97図 縄文時代前期住居平面図

c. 炉（埋設土器）の位置

炉（埋設土器）の設定は埋設土器を伴う。いずれの住居にも共通し、住居北側（もしくは北東側）に偏在し、さらに柱穴間中央に配置している。このことは、各住居の平面形および柱穴配置の相違にかかわらず貫徹されている。

d. 平面形と柱穴配置の関係

次に平面形Ⅰ、Ⅱと柱穴配置A、B、Cから各住居の関連をみていきたい。

Ⅰ-Aに属する住居（第97図1、2）

1（Ⅰ区1号住居）がこれにあたる。2（Ⅰ区2号住居）は南側において不明な部分があるが確認された平面形、柱穴配置とも1に全くといってよいほど一致することからやはり同類と判断される。

Ⅰ-Cに属する住居（第97図3）

住居南西部が未調査であるが、3（Ⅱ区3号住居）がこれに該当しよう。

Ⅱ-Bに属する住居（第97図4、5）

4（Ⅰ区4号住居）、5（Ⅱ区2号住居）が該当する。両住居は前述したように平面形、柱穴配置とも全くといってよいほど一致する。

また、両住居にはこの他柱穴配置Cとした柱穴が存在する。配置の規模は両者とも同様であるものの、住居における位置関係に差異が認められ、4（Ⅰ区4号住居）では柱穴配置Bの対角線上内側に、5（Ⅱ区2号住居）では柱穴配置Bの同軸線上に設定される。この位置関係の相違は炉の位置にも差異を生じさせている。すなわち、4では炉が設定される側の柱穴位置の移動に伴い炉の移動も推定されるのに対し、5では炉の設定される側の柱穴が水平方向にのみの移動のため炉の位置は基本的に動かず、つくり替えが行なわれている。このような炉のあり方からして、柱穴配置Cが柱穴配置Bに伴うものではないことを示唆し、さらには平面形Ⅱに付属するものではないといえる。おそらく平面形Ⅰと関連するものとみられ、このことから、平面ⅡはⅠの拡張形態との推定が可能である。また、Ⅱ区2号住居における炉内埋設土器のあり方からすると、継続的使用、拡張とみられる。

e. まとめ

1. Ⅰ-Aに属する住居、Ⅱ-Bに属する住居はそれぞれに認められる極めて強い規格性からして、それぞれ同時期に営まれたものと考えられる。
2. 平面形Ⅱは、平面Ⅰの拡張住居と考えられるが、このことはⅡ区2号住居の炉内埋設土器のあり方をあわせみると単なる時間的關係では理解できない。
3. 両形態の住居の關係については、県内における同時期の住居形態のあり方を通じて理解されると考えられる。

2 土 壙

検出された土壙について断面形を主として比較すると、次の3形態に分類される。

- I 底径より口径が大きい。逆梯形断面を呈する。もしくは筒形を呈する。なお深さは確認状況により深浅があり、一様ではない。また平面形も円形、楕円形等が含まれる。
- II 口径より底径が大きい。フラスコ状土壙を呈する。
- III 溝状土壙

形態別土壙数は、Iが60基、IIが27基、IIIが2基となる。次に各土壙を出土遺物からみると、諸磯a式期ではIが8基、IIが12基、諸磯b式期ではIが13基、IIが6基、加曾利E式期では、Iが3基となる。

土壙についてその用途を確定することは難しいが、フラスコ状土壙よりクルミの炭化物が出土している例もあり、IIとした土壙については食料貯蔵施設として考えられる。IIIの溝状土壙は陥穴と理解されるが、出土遺物がなく所属時期は確定し得ないが、周辺の遺構もしくは遺物のあり方からみて諸磯式期に存在した可能性が高いであろう。

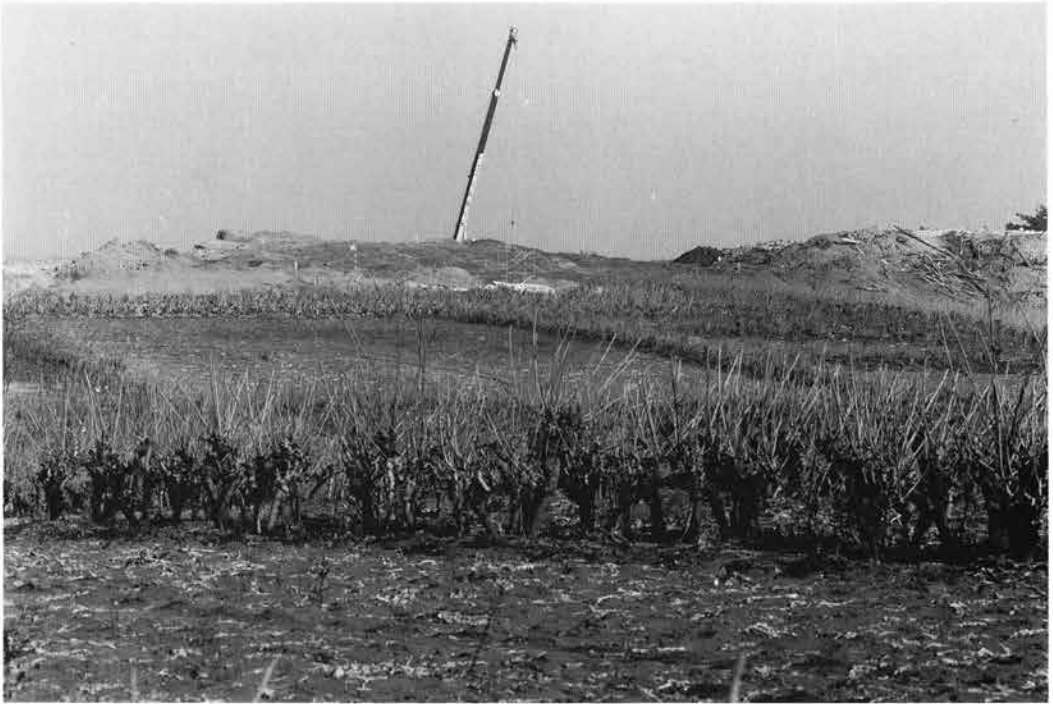
土壙は、住居周辺に分布している。住居とほぼ同時期の諸磯a式期の土壙をとり上げてみてもこの傾向はかわらず、住居周囲に集中的に存在する。貯蔵用と考えられるフラスコ状土壙の分布をみても同様であり、各住居に伴うように分布する。なお、60基と最も多く検出されたIとした土壙についても住居周辺に分布していることから、用途については不明確であるものの、やはり、住居に伴うものとして存在するものとみられる。

なお、I区1号住居および2号住居については、その周辺に存在する土壙が数少ないことが目につく。このことは、貯蔵用施設としての土壙が、各々の住居に接して設けられるのか、もしくはある集落に一定の場所が設定されるのかという問題も含め、今後の課題としたい。

参考文献

- 埼玉県庄和町教育委員会『米島貝塚』 昭和40年
 西村正衛「茨城県稲敷郡貝ヶ窪貝塚」 学術研究15 昭和41
 山内清男『日本先史土器図譜』 昭和42年
 村田文夫「関東地方における縄文前期の竪穴住居について」 考古学雑誌53-3 昭和42年
 群馬県教育委員会『群馬県遺跡台帳』I (東毛編) 昭和46年
 名久井文明「青森県芦野遺跡の土器群について」 考古学雑誌57-2 昭和46年
 岡野隆男『本牧緑ヶ丘 平台貝塚』 昭和48年
 房総考古資料刊行会『飯山満東遺跡』 昭和50年
 山内清男『日本先史土器の縄紋』 昭和54年

写 真 图 版



遺跡遠景



調査風景

PL 2



I区 グリッド調査



II区 グリッド調査



I区1号住居 遺物出土状態



同上住居 埋設土器No.2 出土状態

PL 4

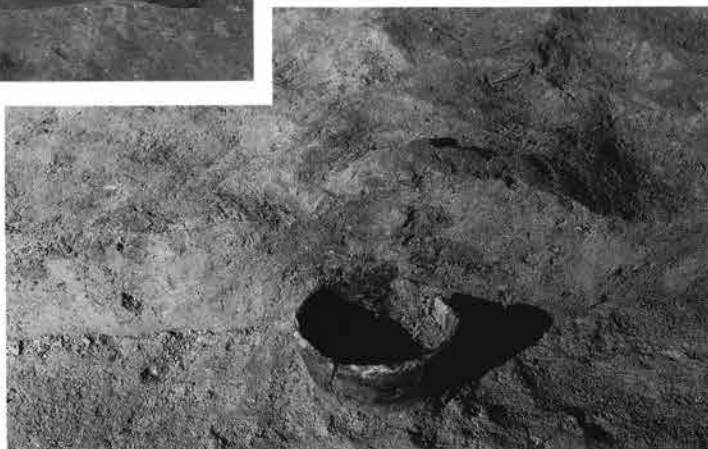


I 区 2 号 住 居



同上住居
埋設土器No. 1
出土状態

同上住居
埋設土器No. 2
出土状態



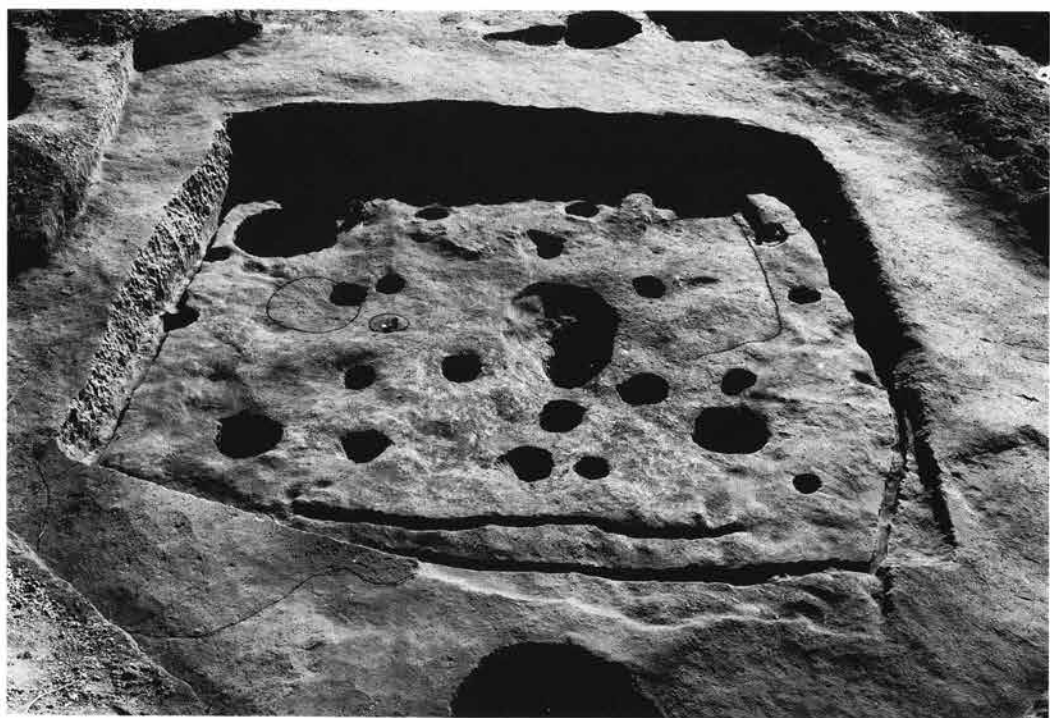


I 区 3 号 住 居

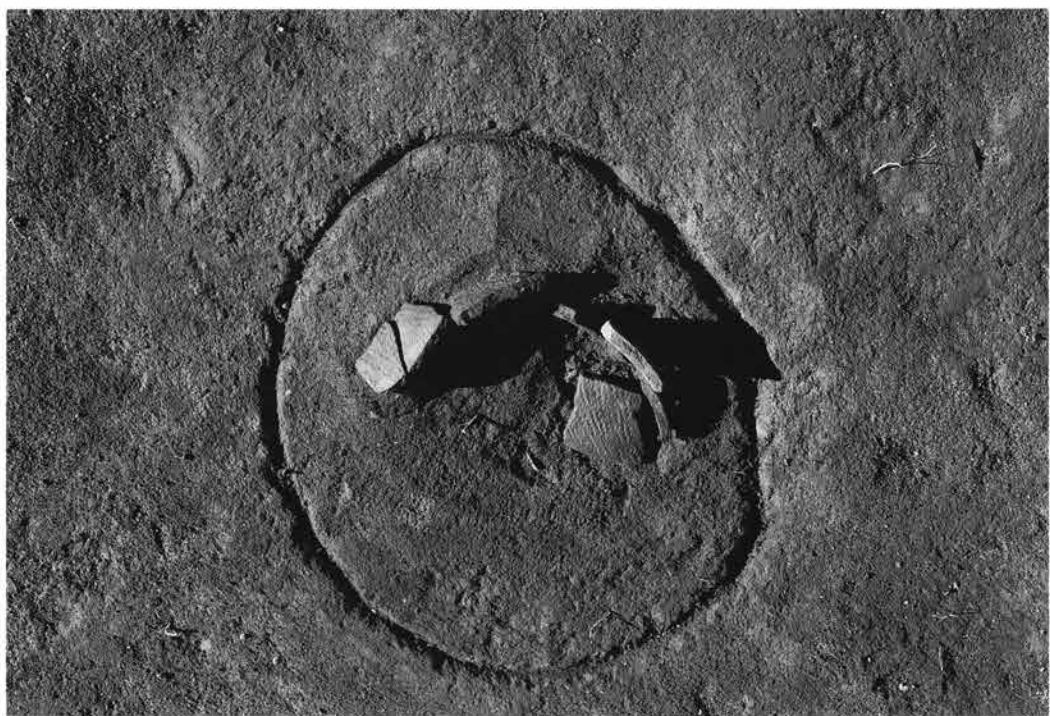


同上住居 土層断面

PL 6



I 区 4 号 住 居



同 上 住 居 炉



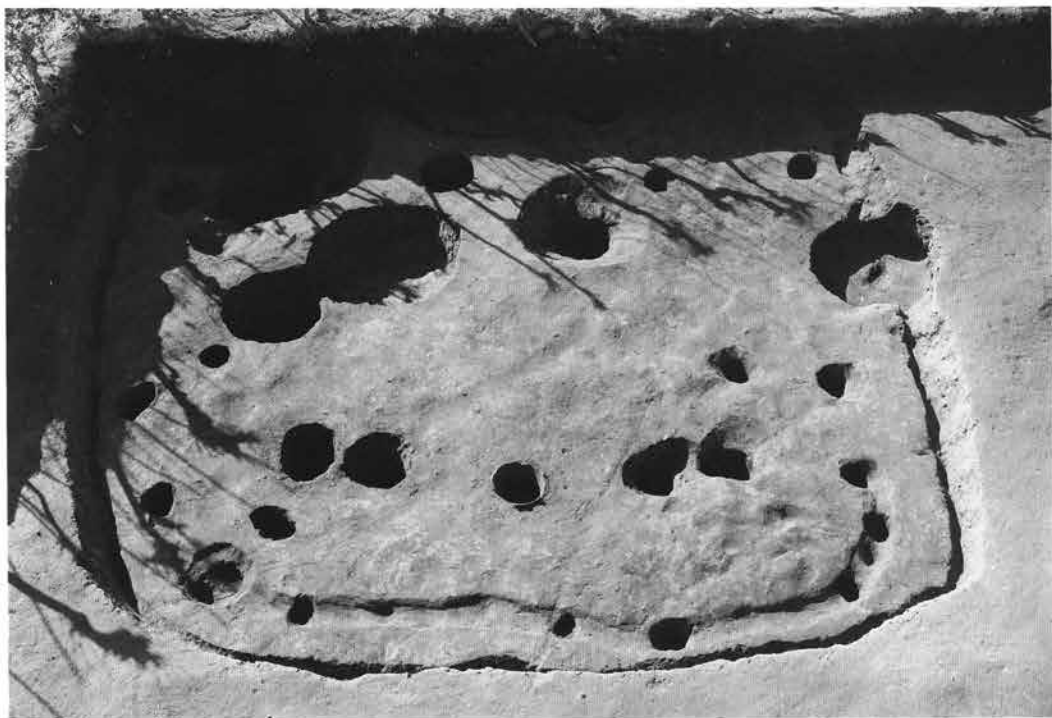
II 区 2 号 住 居



同上住居埋設土器

No. 1、No. 2 出土状態





II 区 3 号 住 居



同 上 住 居 炉 (埋 設 土 器)



1号土壤



2号土壤



3号土壤



4·5号土壤



6号土壤



7号土壤



10号土壤



11号土壤

PL10



12·13号土壤



15号土壤



16号土壤



17·18号土壤



19号土壤



20号土壤



23号土壤



27号土壤

I 区 土 壤



28号土壤



29号土壤



30号土壤



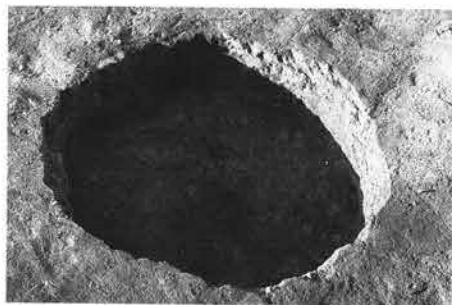
31号土壤



33号土壤



34号土壤



35号土壤



36号土壤

PL12



37号土壤



38号土壤



39号土壤



40号土壤



41号土壤



46号土壤

I 区 土 壤



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑



6号土坑



8号土坑



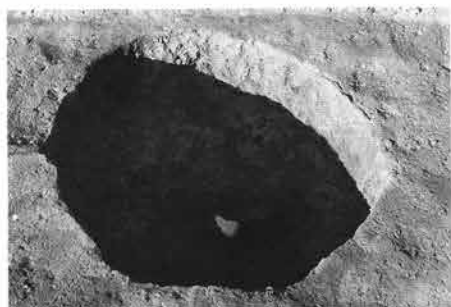
9·10号土坑



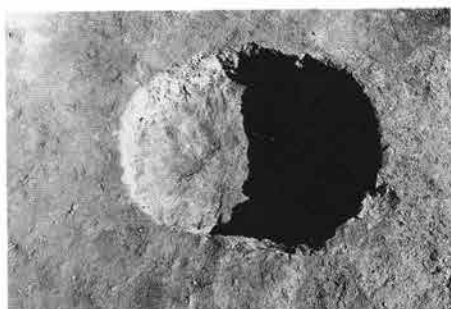
14号土坑

II 区 土 坑

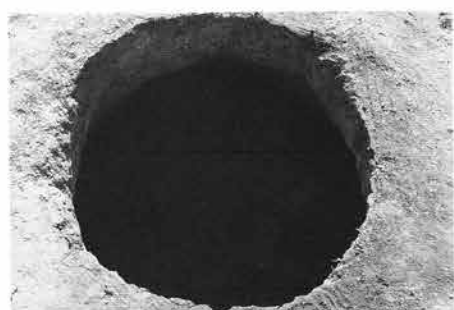
PL14



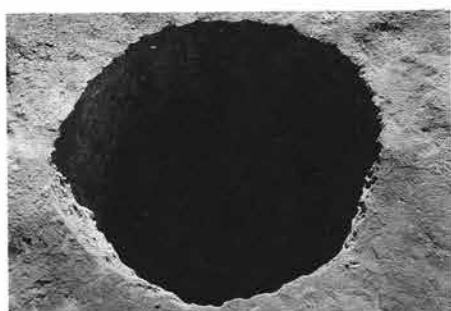
28号土坑



21号土坑



22号土坑



24号土坑



29号土坑



30·32号土坑



31号土坑



方形竖穴遺構

II 区 土 坑

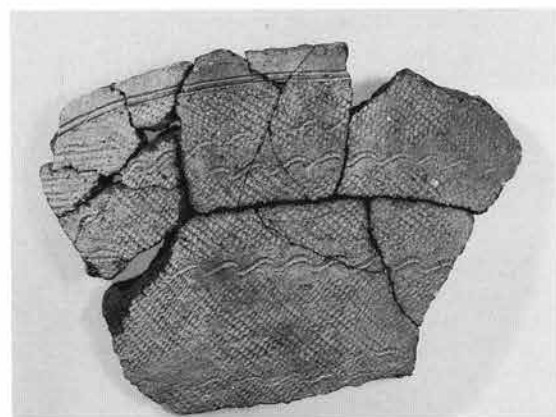
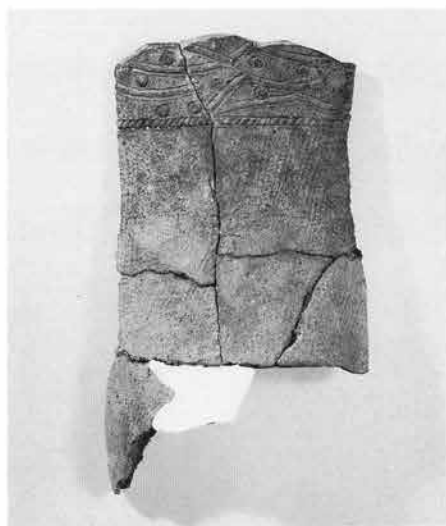


I 区 1 号住居出土土器

PL16



I区1号住居出土土器



I区2号住居出土土器



I区2号住居出土土器

PL18



I 区 2 号住居出土土器

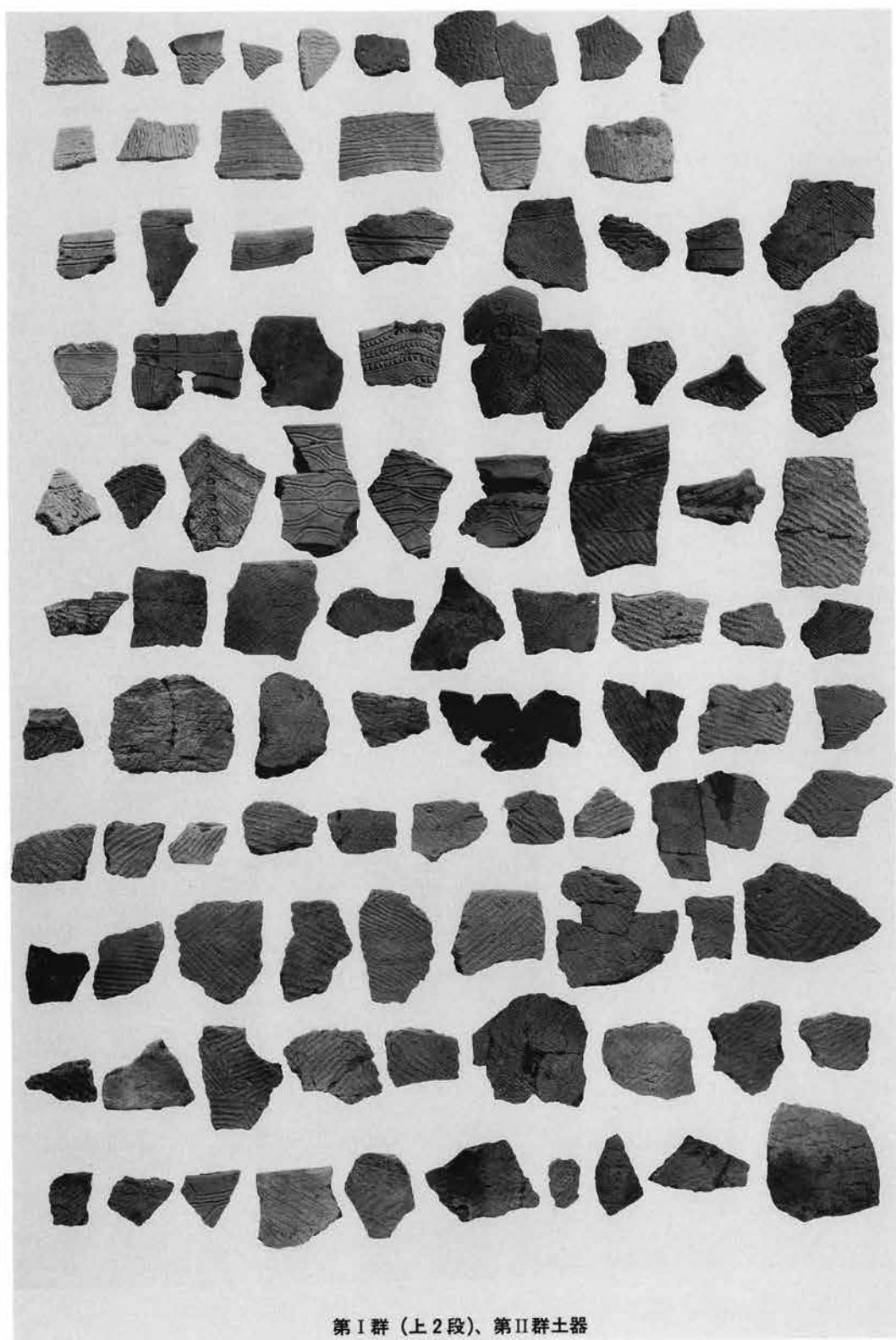


I 区 4 号住居出土土器

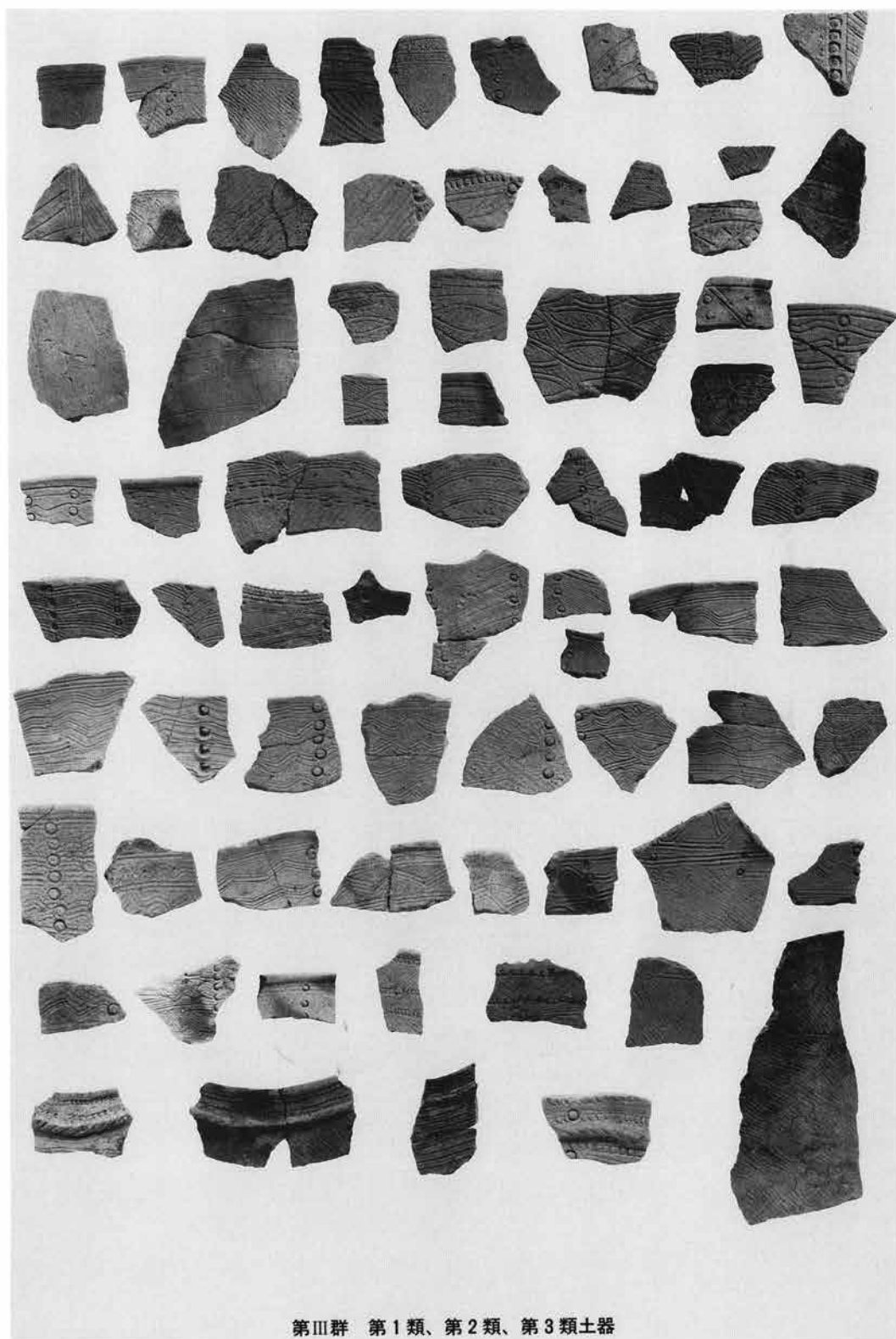


II区29号土坑出土土器

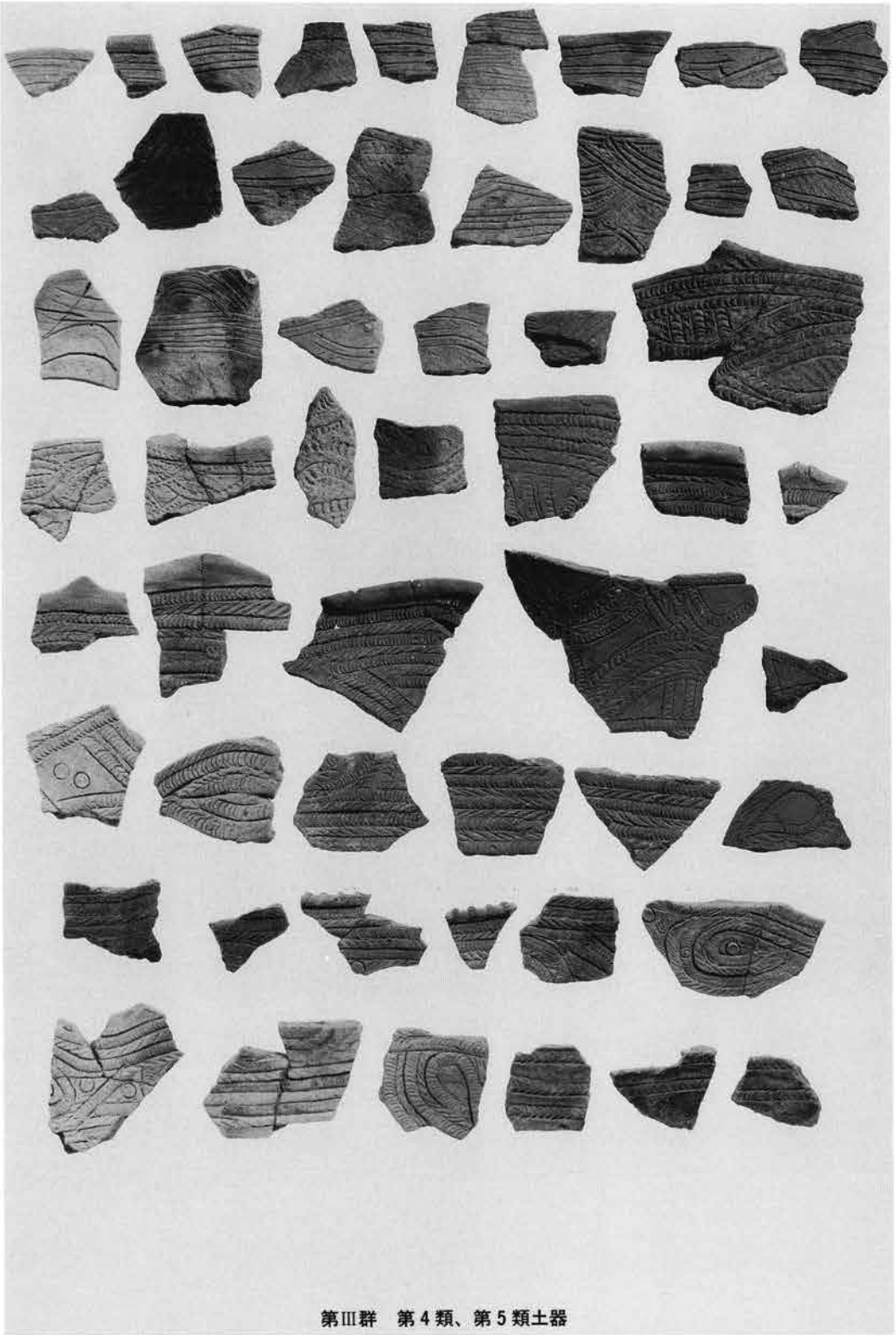
PL20

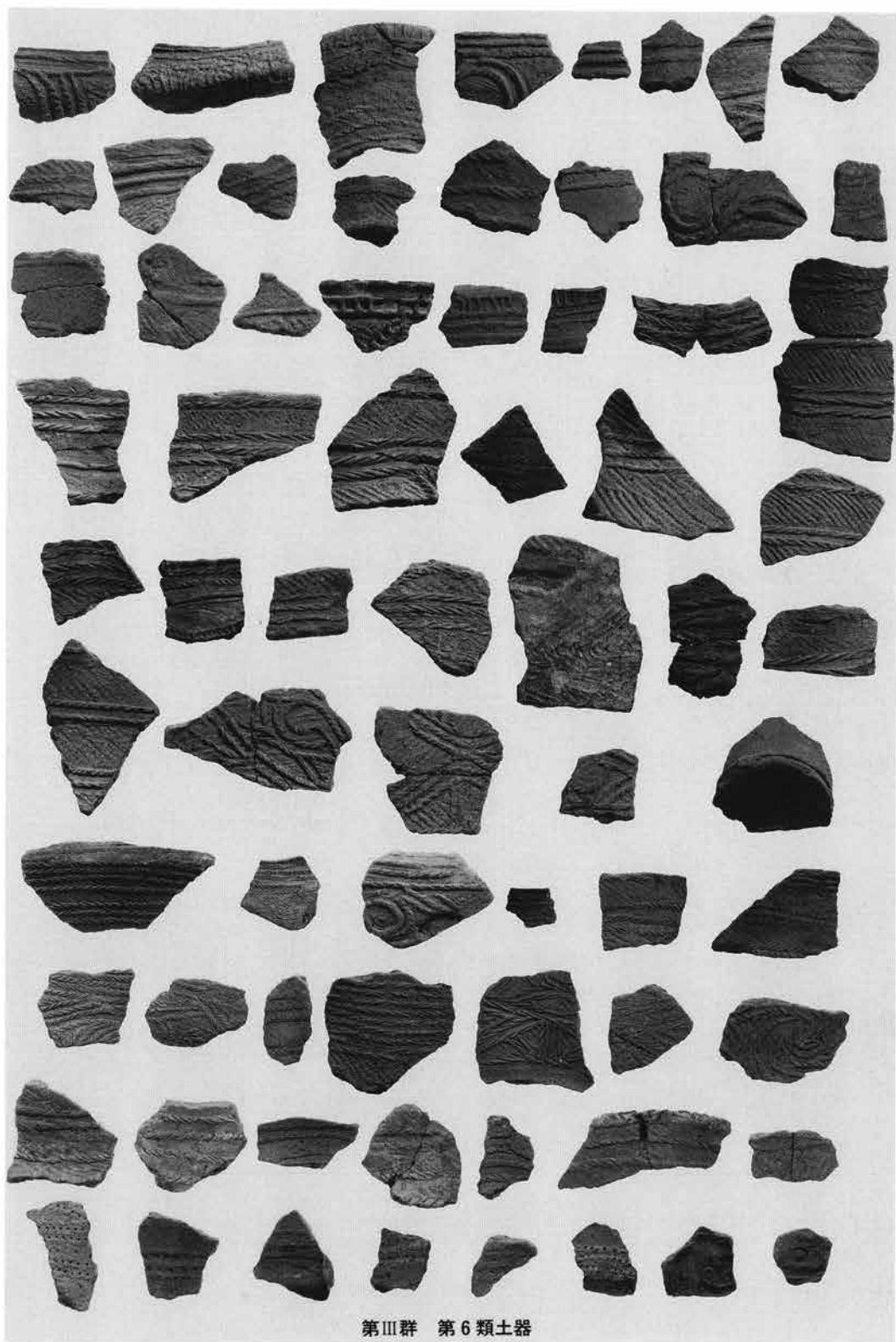


第I群(上2段)、第II群土器



第Ⅲ群 第1類、第2類、第3類土器

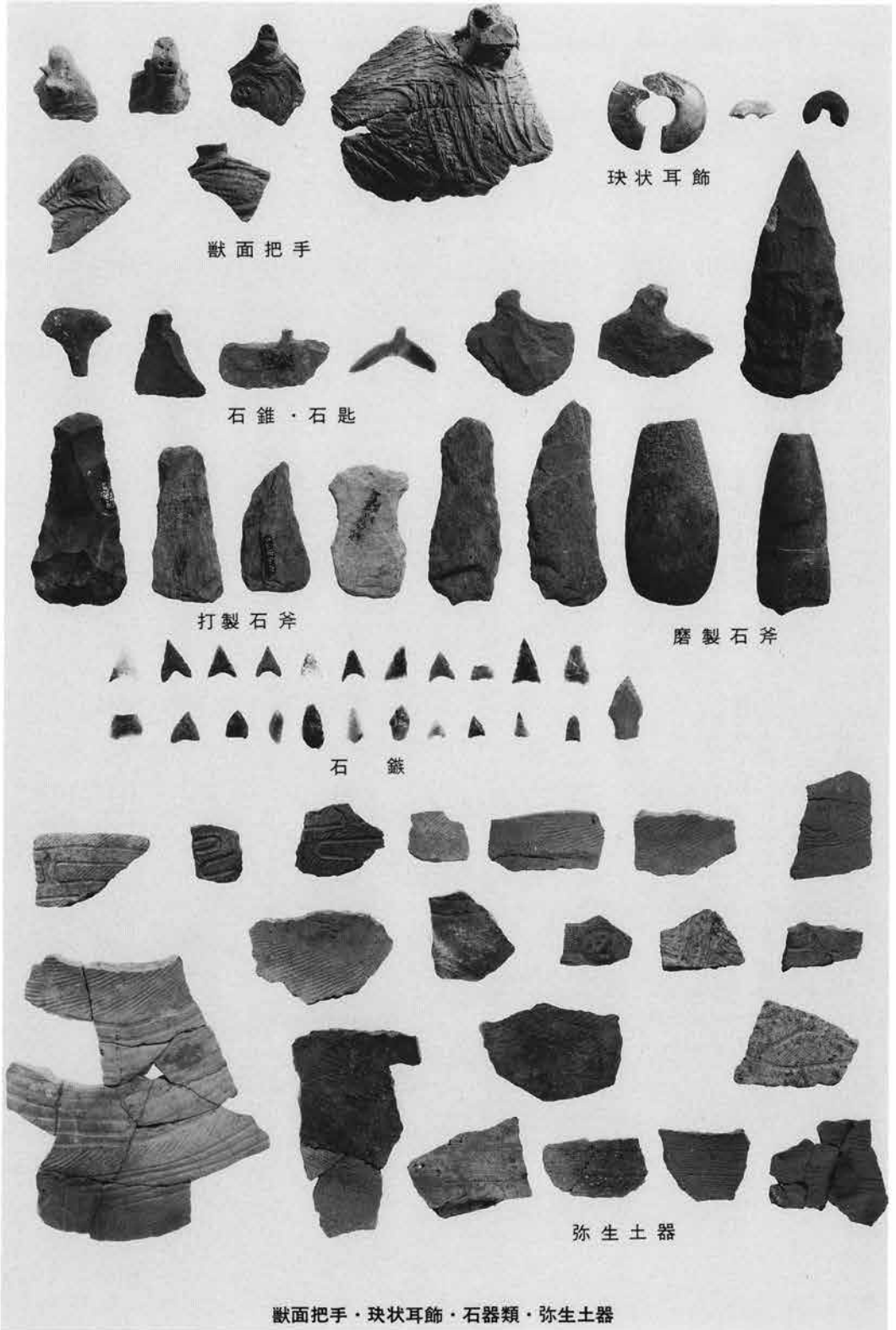




第Ⅲ群 第6類土器



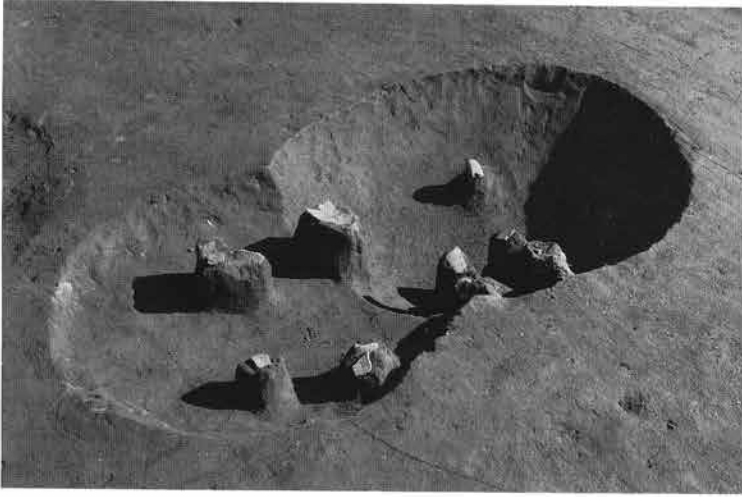
第IV群、第V群土器



獸面把手・玦状耳飾・石器類・弥生土器



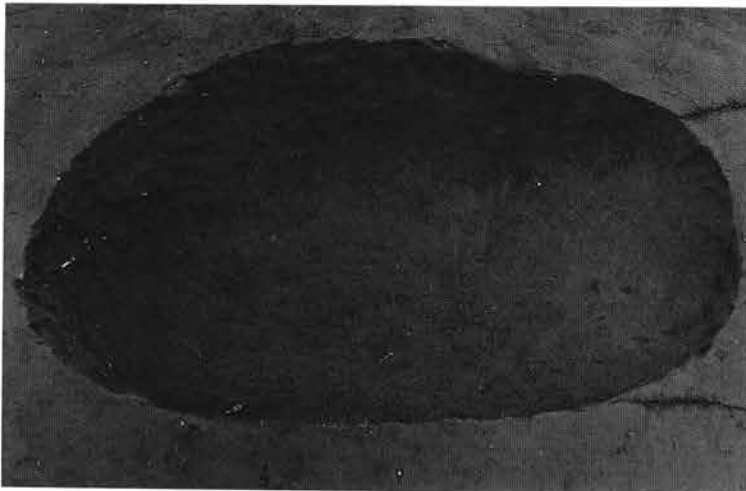
石皿・凹石・多孔石



1号、2号土壇



3号、4号、5号土壇



7号土壇

弥生時代土壇



Ⅱ区1号住居



同上住居 カマド



II区1号住居出土土器

清水山遺跡

群馬県立波良瀬養護学校建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年3月9日 印刷

昭和60年3月14日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橘村下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社

